THE CENTRAL REVIEW

中央公論

五月號

第三十年第五號　第三百七十號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

■第一流評論家の代表的評論集■

現代評論選集

特装美本——定價參拾五錢——郵送料四錢

第三編

御風論集

相馬御風著

新思想新文藝の急先鋒として、あらゆる新しきもの、創造者として、現下最も華々しき活動をなしつゝあるものは我が御風氏である。春風吹き至つて百花乃ち爛漫たるが如く、氏が敏感と鋭才とは、随處に「新」を花吹かす。最も創造的な評論家たる氏が、其の半生の所産の中より、自ら選んでその精英を拔きたる此の篇は、實に新生命の啓示たり斯生活の福音たるものである。「生を味ふ心」以下、「路傍のベンチより」に至る十二篇、いづれか三誦に値せぬものがあらう。

第四編 ●

阿部次郎論集

阿部次郎著

思索飽く迄も深邃にして態度飽く迄も慎重。我が新しき論壇の人々の中最も哲學者らしき風格を有するは阿部次郎氏である。又嚴肅なる自己解剖者として、熱烈なる修道者として、我等が求めて止まざる何物かを用意しつゝある人として、最も豫言者的色彩の著しきも氏である。本書は、「眞實の愛慕」以下「愛と憎」に至る十四篇、氏が從來公にし來れる論文の一切の中より、その最も權威あるもののみを蒐めたもの、思想壇の新星は此一卷にその光輝を盡くしてゐる。

■第一編 王堂論集 田中王堂

■第二編 片上伸論集 片上

近刊

■泡鳴論集 岩野泡鳴

■中澤臨川論集 中澤臨川

東京市牛込區
矢來町中の丸

新潮社

電話番町二二二三番
振替東京一七四二番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は掲載謝絶す

（前付の二）

代表的 名作選集

第十一編 何處へ 正宗白鳥作

自然主義藝術の傑作數多きが中に、白鳥の代表作『何處へ』の如く深刻を極めたるはあらず。戀に醉へず、名に醉へず、あらゆるものに興味を失ひて而も尙何物をか求めて止む能はざる心境を描く、これ實に明治末年に於て我靑年界に瀰漫せる虛無思想懷疑思想を具象せるもの、文明史的意義に富める一名作にして、亦作者の名を千載に活かすの傑作也。

島村抱月
生田長江
相馬御風
中澤臨川
共編

■羽二重表紙
■特製極美本
■一册參拾錢
■郵送料四錢

東京市牛込區矢來町三番地
新潮社

第十二編 今戸心中 廣津柳浪作

所謂深刻小說を以て明治の文壇に一時期を劃したる柳浪氏の代表作『今戸心中』は、其の名に憧れて未だ其の眞價を見るを得ざるを憾みとなす人々の爲に、新裝を凝らして出でたり。戀を失へる一娼婦が、心にもあらぬ男と情死するの徑路を描き、凄艶の筆、深刻の想、一代を風靡せるもの、まことに我が狹斜文學の粹にして、亦情死文學に冠たるものなり。

- 第一編 牛肉と馬鈴薯 (附)欺かざるの記 國木田獨步
- 第二編 坊ちやん 夏目漱石
- 第三編 蒲團 田山花袋
- 第四編 透谷選集 北村透谷
- 第五編 第六編 春(上下二册) 島崎藤村
- 第七編 わが袖の記 高山樗牛 たけくらべ 樋口一葉
- 第八編 爛れ 德田秋聲
- 第九編 平凡 二葉亭
- 第十編 高野聖 泉鏡花

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文藝委員會編纂の

高野斑山氏
大竹紫葉氏 共編

(大好評)

俚謠集拾遺

菊判上製全一冊
裝幀艶麗七度刷
二版組五五〇頁

金壹圓五十錢
送料金拾貳錢

本書は昨秋上梓せられたる文藝委員會編纂の『俚謠集』に缺く**一府十三縣**の**俚謠**其他**全國**に通じて**一般的**のもの及び**官選**の故を以て遺憾ながら**割愛**せられし**至絕**にして而も**眞摯**『椿尾の石屋さんと馴染んで袂移しに地藏もろた』新潟縣佐渡郡——『甚句』——の如き虛飾なき野の**愛の歌**を收錄したまゝ共の**曲調の美**をも樂譜もて併せ收め**新に**各地に亘りての**童謠**を蒐集類別し猶附錄として**明治年間流行唄**百有余種幾千首を**編年的**に採錄せり。蓋し官選俚謠集の美しき**自然詩**たるに對して**民選**の本集は**生々**しくも野の句の漂へる**人情詩の精華**と云ふ可く、須く**春宵の低唱**には一卷無かる可からず。

「**俚謠集姉妹篇出づ**

東京日本橋數寄屋町九
振替口座東京二三七一番
電話本局五三三一番

六合館

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

日賣切

…人の哲學と文藝

三版

オイケン、ベルグソンによりて創造覺醒の第一歩に入りたる我思想界は印度大詩聖大哲人タゴールによりて欣求菩提の究竟裡に法悦光耀の生活と哲理とを發見せざるべからず。本書は實に彼の神幽なる哲學と純眞の文藝と崇敬の生活とを系統的歷史的に批判し紹介したる者。更に研究資料として戯曲『暗室の王』『郵便局』『チトラ』詩『園丁』『新月』等も加へたれば此の一書以てタゴールの全體を如實に窺ふ事を得。蓋しタゴール研究の權威たるを失はず。將に來朝せんとする大豫言者を迎ふるの準備として敢て本書を江湖に薦む。

…製美本全壹冊
價金 貳拾八錢
…稅金八錢

最新刊

上司小劍氏著

小ひさき窓より

四六判上製美本
正價七拾五錢 郵稅八錢

時事新報評…「蜘蛛と蟬と蝶と」以下「開帳」に至る六拾貳篇の感想錄を收む著者の纖細にして犀利なる觀察は如何なる裏面にも滲透し透徹せざる事無く而も云ふ可らざる機智と諷刺の底に現世相の矛盾破綻を抉剔して餘蘊無く且つ刹那的の著者の感想なり思索なりは一として其時と所とにくつきりと當嵌らざるはなし羞恥と謙讓とデリカシイとに富む佛蘭西式の感想錄は我國に於ては將に本書に依りて代表さると謂ふも不可なかるべし

…區…七…

大同館發行

振替貯金口座 東京八七貳番

The Best Fan Motor

TRADE (B.K) MARK

兩羽電氣扇



是眞ニ模範的國産品

（我國唯一の特許扇風機外國品に比して毫も遜色なし）

東京大正博覽會に於て多數扇風機出品者ありたれども受賞の榮譽を負ひたるは獨り弊商會製品あるのみ



Desk and Bracket F

12 inches and 16 in

特

一、構造　堅牢にして永年使用に堪ゆ

一、体裁　優美高尚にして室內裝飾に適す

色

一、應用　自在にして調節自由に强弱を變ずることを得

一、種類　十二吋羽根、十六吋羽根、交流用、直流用普通形及び自働回轉式兩羽根付き等數種あり

在庫豊富

豫約及多數御注文に對しては特に割引仕候、御申越次第目錄進呈可仕候

サンデン電氣商會本店

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
電話新橋二四二二番
振替口座東京一八四七三番

支店

東京市日本橋區吳服町十八番地　電話本局一九五六番

大阪市東區心齋橋筋博勞町南入　電話南二二〇五番振替口座大阪七三四四番

横濱市吉田町一丁目二十九番地電話一九三一番

電氣器具材料製造販賣

泰西雄篇
全譯縮刷

植竹文庫

●好評嘖々

■アルツイバシエヴ作
■武林無想庵譯
四版
第一編 **サニン**
定價九十五錢
郵税八錢

讀賣新聞評 サニン(武林無想庵氏譯)アルツイバーセフの傑作「サニン」の飜譯である原著者が多年心血を絞り得たこの勞作の効果が惜しくも露文壇に於て發賣禁止の厄に會つた程人間自然の性情、性慾を忌憚なく描破し盡した一代の傑作である事は慶賀す可き事である。氏の譯この間の機微な消息を遺憾なく流露し得てその内容よく生動し、宛ら原作の情調に接するの觀がある。

■ロンブロゾォ作
■辻潤譯
三版
第二編 **天才論**
定價九十錢
郵税八錢

萬朝報評 天才論(辻潤譯)何人も一讀すべきロンブロゾーの L. Nomo di Geni(1889)の飜譯なり、此書は天才の特徴、天才の起因、狂天才、綜合天才の變質的特徴の四章より成りワイニンゲルの著と共にその如何に天才研究の典據たるかは人のよく知る所、譯文十分なる良心と知識とよき文章とを以て成し遂げられ、愉快に此大著を譯了せしむるは喜ぶべし。

■ドストイエフスキー作
■生田長江
生田春月共譯
三版
第三編 **罪と罰**
定價一圓四十錢
郵税八錢

萬朝報評 罪と罰(生田長江 同春月譯)現下の英國騷壇はドストエフスキーを三十年間讀まざる事を以て非常の遺憾とせり、併も斯くの如き英國によつてすら本書はモーリス、ベアリングをして「罪と罰」の一編は今改めて何等說く必要なしと言はしめたる程の名編なり、(中略)今やブランデス、ニイチエ等の大思想家を驚かしたるも亦本書なり、兩生田氏(殊に春月氏)の多大の苦心により、別に此完譯を得たるは文壇の爲のみならず廣く思想界の爲に喜ぶべし。

■トルストイ作
■相馬御風
相馬泰三共譯
新刊
第四編 **復活**
定價一圓八十錢
郵税八錢

三千部限
特價一圓五十錢

トルストイが晩年の大作にして、翁一代の思想と、經驗と、知識をコンデンスして此書に收めてあると云はれてゐる、故に復活を翁の他の二大傑作に比するに量に於て「戰爭と平和」の二分の一「アンナカレニナ」の二分の一に過ぎないが共合蓄の量に於て此二大傑作を合せたるものよりも遙に多し。殆ど近代の一代聖典と云ふ事が出來ると迄に言はれてゐる。

近刊

■第七編
第八編■
トルストイ作
島村抱月
鈴木悅共譯
戰爭と平和
全二冊
定價未定

發行所 東京神田佐久間町四ノ三十 **植竹書院** (振替東京一二九五三 電話下谷三四一九)

に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

一 當會社は拂濟保險の便法を設けあり

古河家經營

博愛生命

社長 男爵 中島久萬吉
專務取締役 小原元美
專務取締役 鈴木市之助
常任監査役 安達仁造

本店 東京市日本橋區本町四丁目十五、十六番地
電長本局一八五六、五一五〇、一三八七番
振替貯金口座東京一七一七番
支店 大阪市東區本町一ノ一二三（電長本局二三一一番

一 當會社は低利なる金融機關の設あり

一 當會社は被保險者の年齢範圍最も廣く滿九年七箇月以上滿六十年六箇月迄契約す

一 當會社の保險金支拂は最も迅速なり是れ保險契約の目的を遂行せんが爲なり

用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

中央公論第卅年五月號目次

▲公論

祥雲天地に滿つ
總選擧後の新政局を論ず……社論……一
特別議會と諸問題
歐洲戰爭と本邦經濟社會の將來……法學博士 堀江歸一……一八
近時流行の非醫學的治療法を排す……醫學博士 文學博士 富士川游……三二
歐洲動亂史論……東大教授 吉野作造……三八
初めて議政壇上に立つに方つて
◎根本志望の一端を……小山東助……七五
◎予の微力を效さんとする諸問題……古谷久綱……七七
◎外に在るよりは内に在りて……内務次官 下岡忠治……七九
◎農村問題と其他……大芝惣吉……八〇
◎選擧權擴張と外交問題……小山松壽……八一
◎憲政の運用と政治の高調……犬塚勝太郎……八二
◎權利自由の確保、法律制度の改善……法學博士 大場茂馬……八三
◎憲法、産業、文教、衛生……杉山四五郎……八四
◎多數党の監督と批評……大隈信常……八六
◎須らく誠實たるべし……鳩山一郎……八七
◎實行の伴はざる空論を排す……大藏次官 濱口雄幸……八八

▲説苑

A辯護士の取扱ひたる「犯罪ロオマンス」……松崎天民……一





街路の装飾品としての東京の女と大阪の女……清水庸三……二七

蜜蜂の話……岩野泡鳴……二四

「タゴールの研究」

◎タゴール所感……木村泰賢……五四
◎讃歌の詩人タゴール……中澤臨川……五九
◎タゴールの哲學の究竟……吉田絃二郎……六二
◎散文詩家としてのタゴール……野口米次郎……六八
◎佛基兩教の接觸とタゴール……三浦關造……七〇
◎タゴールの道徳觀……三井甲之……七四
◎タゴールとウパニシャット……文學博士 井上哲次郎……七六
◎タゴールの案内者として……木村龍寛……八〇

「秋山定輔論」

◎秋山定輔論……文學博士 三宅雪嶺……八五
◎誤解せられたる秋山君……長島隆二……八八
◎秋山定輔氏……松井柏軒……九〇
◎見捨てられた秋山……匿名氏……九一
◎東洋流の智慧者……早川鐵治……九三
◎秋山の眞骨頭……仲小路廉……九六
◎學生時代の秋山君……床次竹二郎……九八
◎逆境に屈せぬ秋山……男爵 後藤新平……九九

▲評論

新文明の道程……中澤臨川……一〇一

《創作》

天平時代（戯曲）……吉井勇……一

破談（小説）……徳田秋聲……四三


營業品概目
○懐中時計　各種
○掛置時計　各種
○ダイヤモンド並ニ各寶石
○指環手釦並ニ各種携帯品
○貴金屬美術工藝品製作
東京市京橋區八官町
小林時計商店
電話新橋 二一〇三 二一〇四
振替口座 七八〇七

WÜRTTEMBERGER



Portrait

瑞氣天地に滿つ

回顧すれば一昨々年明治天皇遽かに御登遐あらせられ愁雲天地を蔽へること實に一年、諒闇の期も漸く明き去り再び曇りなき春光を眺めんとするに際し、復た昭憲皇太后の大喪に遭ひ六千萬の蒼生ためにに又た生氣を失するの觀あり、然るに玆に前後四箇年を經て第二諒闇の期も過ぎ天日再び輝き生民蘇生の思あり、加ふるに大禮使官制の發表と共に其職員の任命も定まり、鋭意準備に着手し、將さに今秋を以て即位の御大典を擧行せられんとす、由來久しく愁雲に鎖されたる大正の御世も是より大に開展し活氣を加へ來るべく、內外國政の上にも幸運の多からんことは吾々臣民の專ら祈念する處たらずんばならず。

我日本に於ては瑞氣天地に滿ち上下歡喜の中に即位の大典を擧られんとするに際し歐洲の天地は尙ほ戰雲漠々として生民は硝烟彈雨の間に彷徨し、平和の曙光に接する猶ほ前途遼遠の感あるは吾人の甚だ遺憾とする處たらざるを得ず、若し本年末を以て平和克復の期に入るべしとするも、御大禮に際しては未だ戰時狀態を脫するに至らざるべく、從つて祝意を奉表する爲めに列國元首より派遣さるべき代表者中に二三の著るしき缺員あるべきは免れざることとなるべし、即ち來るべき　陛下の御即位式は我邦のみに就て云へば祥瑞に滿ちたる泰平の裡に擧行せらるべきも、之を世界的に考ゆれば軍國多事中に擧行せらるゝものと云はざるべからず。

軍國の即位式は我邦に取りては最も緣起宜し、我皇祖　神武天皇の大和橿原宮に位に即かせられしも中原平定未だ成らず兵馬倥偬の間に在り、明治天皇亦た國步艱難の中に踐祚の式を擧させられたり、而して　今上陛下亦た世界兵亂の最中に大禮を行はせられんとするは豈に帝國の世界的大發展を暗示するものにあらずや、吾人は前途を眺め國民的希望の自ら內に洋々たるを禁ずる能はず。

中央公論



五月號
第三十年第五號
第三百十七號

總選擧後の新政局を論ず

（一）政界の安定に滿足す

明治二十五年の總選擧以來未曾有の紛擾を釀もし又た政局一定の上に多大の豫期を孕める今次の總選擧も遂に決定的結果を齎らして終了を告げしは吾人の頗る滿足する處ならずんばあらず、若しも吾人の希望を有體に吐露せしめんか吾人は世界の戰局未だ收まらず重大なる日支交涉の最中に當り總選擧の紛擾を見るに至れる成行を遺憾とせざるを得ず、昨秋の軍國議會に於て何故に大隈首相及び閣僚は擧國一致の態度に出でず寧ろ却て在野各派の反抗を挑發するが如きの言動ありしかは吾人の今に之を解するに苦しむ處にして、而して秋の臨時議會に隱忍して擧國一致の態度に出でし衆議院の多數黨が十二月の本

の決定的にして政局の安定を觀んことは國民一般の希望なりしなり、何となれば與黨及び反對黨の差、明確ならずして選擧後尚ほ內政の根蒂不安ならんには對外の關係上國家の不利最も甚だしかるべかりしを以てなり、之を各人の私情に訴へんには政府及び與黨は大勝利に狂喜し、反對各派は一大失望に陷るを免れず、而して中立者たり傍觀者たるもの中に在りても多くは政派もしくは政治家に對する贔負の感念なき能はずして或は政府黨の勝利を祝し又は在野黨の失敗を奮慨するなきことを得ずと雖も、何人も一たび高處に立ちて今の政局に對せば兎に角數箇月の久しきに亘り紛擾を極め不安の狀態に在りし我內政の根蒂一定し當分動搖の恐なきに至れるは孰れも之を國家の爲め慶賀せざるを得ざるべし、吾人は此の高き廣き意味に於て今次の總選擧の結果に對し大に滿足を表するものなり。

今や大隈內閣は絕對多數黨與の基礎の上に立つ、其の外に對する國政を料理するに當り毫も後顧の憂ある可らず、從來往々現內閣の外交は內交の動機より出づと疑はれたれども今後に於ては更に斯の如き嫌疑を惹くが如きの措置ある可らず、專心一意目下懸案たる日支交涉の完結を圖り且つ將來に近かんとする世界戰局の終末に對し帝國が國際上當然占むべき地步を占め得て遺憾なきを期せんことを要す、吾人は此點より觀れば現內閣の責任は總選擧の結果により從前に比較し更に一層の重大を加へたるを指摘せざるを得ず、內閣の諸公必ずや其責任を自覺し至誠奉公の道を盡すに於て遺漏なからんことは國民

一般の切に要望する所なりと謂はざる可らず。

吾人は更に**總選擧の結果に就き研究する所なかるべからず**、政府當局及び與黨間に於ては當初より頗る樂觀的觀察をなし其大勝を豫期せしが、反對黨方面に於ても亦た樂觀的態度を持し夢にも大敗を招くべしとは思はざりし耳ならず、最も公平の脚地に立ち且つ選擧の事情に精通せる衆議院事務局に於ても亦た與黨各派と其反對各派とは殆んど互角の形勢に終るべしとの觀察を爲せしが如し、然るに開票の結果は意外にも全然政府當局及び與黨本部の豫想せしが如く、大隈内閣は一朝にして我帝國議會ありてより未曾有の多數を基礎とするに至れるに付ては必ずや此間深き理由なくんばあらず、與黨一味は現内閣の大なる信用正さに大多數を制し得たりとなし政友會一派は其大敗を以て政府の不當干涉に歸せんとするものゝ如し、吾人を以て之を觀るに大隈内閣が大體に尙ほ國民の信望を繫ぎつゝあるは爭はれぬ事實なれども、其制し得たる大多數は即ち國民信用の程度の表現なりと云ふに至りては吾人の容易に首肯し能はざる所たり、政友會が其大敗を以て官權干涉に歸するは一理なきに非ず、若しも大浦内相の下に總選擧に從事するに際し政友會が初より大干涉の來るべきを豫期せざりしならば是れ餘りに愚なり、大浦子と警察政治は離るべからざるものにして、警察政治を取除らば大浦子の長所半ば以上を減ずべければなり、大隈首相及び加藤外相等が議會解散を見越し大浦子を内相の椅子に据へしは彼れが獨特の技倆を總選擧の爲に振はしめんとするに外ならず、然らずは大石氏の退隱を促すほどの危險を犯し强て之を決行するの理由ある可らず、政友會側に於て後日の爲め、即ち今次行はれたる如き官權濫用の重ねて繰返

へさるゝなからんが爲め、言換ゆれは政界廓淸の爲めに、政府干渉の事實を調査し之を世間に發表し以て國民の注意を促さんと欲せば是れ決して無用の業に非ざるべしと雖も、初めより干渉の來るべきを覺悟して十分之に備ゆる處なかりしは一大油斷にして、若しも之が爲めに大敗を招けりとせば自業自得のみ復た誰をか咎めん、選擧は平和の戰爭なり政府の策戰頗る巧妙にして着々功を奏したるは爭ふ可らず、然れども政友會の大敗を以て一に之を政府干渉の結果なりと云ふは非なり、若しも干渉なかりしならば其打擊の程度今日の如く甚しからざりしなるべきも、小數黨たることに於ては恐らくは擇ふ處なかりしなるべし、兎に角多數黨の横暴と山本内閣末路の汚名とは政友會の信用を損害せしこと夥だしく、海軍腐敗事件の責を政友會に歸するが如きは頗る不道理なるに相違なきも、往昔は天變地異を以て直に當路の不德に歸したることさへあり、群衆心理の作用は遂に政友會をしてシーメンス事件の責任の一半を負はるゝに至りしなり、政友會側に取り唯一の賴みは其選擧地盤の鞏固なることに在りしも一般の大不人氣は終に地盤を保持すこと亦た困難となれり、況んや政府は縱横に奇策を弄して政友會地盤の崩壞に努めたるをや、別語之を云へば現内閣の大勝利は寧ろ其信用の偉大なるに由ると云はんより却て政友會の甚だしき不人氣に由れりと云ふを至當とせん、此不人氣に乘じ干渉の奇策を試みるあり、政府黨は到る處多數黨を突破し崩壞し粉碎し終に大々的凱歌を奏するに至れる亦た怪むを須ゐざるなり。

(二) 大隈伯一種の人氣

然れども今回の政府黨の大勝利を論ずるに當り首相大隈伯の個人的人氣を認識せざるに於ては決して

事實に忠なるものと云ふ可らず、大隈伯の偉大なる人氣は政友會の甚だしき不人氣と宛も反比例を爲すものに似たり、選擧場の論戰に際し政友會は現内閣の内治外交あらゆる失敗を指摘し國務を斯の如き内閣に依託するの危險を說き、政府は日支交涉の最中に内閣交迭の甚だ不利益なると政友會の横暴其他の失態を論じて國民を戒しむる處ありしが、有權者輩が投票を爲す瞬間に當り其の頭腦中に存せし唯一の思想は人氣好き大隈老爺が日本帝國の總理大臣たりと云ふことと是れなり、世の識者は多くは大隈伯を以て一代の法螺吹きと爲し無責任なる煽動政治家と爲し唯だ老ひて益々巧智ならず頗る稚氣を帶ふるの一事以て愛すべしとなすのみ、然れども一般の世人は然らず伯を視るに世界的偉人を以てし、宗教家は彼を以て俗界に於ける道德の權化と做し、株屋、銀行家、實業家等は彼を以て金儲けの守本尊と做し、少年は彼を以て一生の理想と爲し、老人は彼に肖りて老いて益々壯ならんことを希ふ、而して彼を繞圍する群小政客は其大傘下に立ち一時の風雨を凌がんとする外、稍々永久の名利の儲事にあり付かんことを期するに似たり、之を譬へは大隈伯は活ける善光寺如來なり、其世の渇仰を惹き賑かに人氣を煽揚するの能力に至りては實に釋迦自作の一尺五寸の黄金佛以上にあり、而して該黄金佛が多年浪花堀江の泥中に埋れし如く大隈伯亦た多年早稻田の泥中に半沒の狀態にありしが、偶然にも堀出されて内閣の首班を占め今の時めく身となりしは實に何かの因緣に由ることとなるべし。

因緣と云ふが如き神秘の問題は別事として吾人は大隈伯の今日の人氣を以て時代を理解すべき一の關鍵なりと思惟す、大隈伯が今の時代に於て當然人氣を博すべき所以を解せざるものは即ち時勢を解せざ

るものなり、之を換言せば吾人は我日本も今や一の平民的衆俗的時代に入れるを記憶せざるべからずして、伊藤西園寺又は桂の一種高貴なる教導的政治の時已に去りて阿世的凡俗的大隈新派の一期節に入れり、是れ明治の時代移りて大正時代に入りしより來るべき自然の變遷にして、宛も北米合衆國に於て華盛頓、ハミルトン、アダムスの理想的共和政治一轉してヂエフエソン、ヂャックソンの衆俗的機會政治の時代に入りしが如し、米國人民は華盛頓、佛蘭倫等建國名士の想像せし如く賢明ならざりき、日本人民も亦た伊藤公等が想像せし如くに賢明ならず彼等も亦終に一時は煽動政治家の舞臺に供せらるべき運命の下に立てるなり、ブライス氏其名著なる『米國共和政治』中に論じて曰く米國は概して政治の困難を輕視し常識ある凡人の能力を重視す、偉なるかな平等主義の恩惠や、然れども平等の美名の下に如何に多くの愚擧亂行が行はれるぞと、吾人は我國情の大に米國と相違し且つ政治組織の同じからざる等に鑑み、我邦の近き前途は必ずしもヂャックソン大統領當時の米國政治の亂雜紛擾を現出すべしとは思惟せず、然れども衆愚政治の徵候は已に明かに目前にあり、而して今後この傾向の益々顯著なるべきことは到底避くべからざるべし。

今や世人擧げて政友會の横暴を論し其妥協政治の愚を指摘して止まず、然りと雖も政友會が久しく政權に參加したる結果として閥族官僚の勢力を打破し政黨の價値を騰上し大に輿論政治の時機を促がせしは爭ふべからず、唯だ絕對多數を制するの必要より黨員を纒むるに專念し輿論代表の機關たる新聞と宛も絕緣の狀態に陷りしに氣付かざりしは一大不覺なりと云はざる可らず、大凡代議政體の下にありては

多數黨の橫暴は免るべからず、小數黨は必ず多數黨の橫暴を叫ぶ、但し全國の代表的新聞紙を擧げて小數黨の味方たるに至らしめしが故に橫暴呼りは小數黨の聲に止まらずして全國民の唱和となり、終に政友會今次の大敗の因と爲れり、別語之を云へば政友會は新聞紙を餘りに馬鹿にせり故に新聞紙より仇敵視せらるゝに至れるなり、素より多年政權に參與したる結果として惡政を贊襄したる跡あり黨情に左右せられ政道を誤りしことも少しとせず、然れども日露戰役以後國家の經營に參加し國政の運轉を圓滑ならしめたる功の沒すべからざるものあり、殊に況んや最近山本內閣の下に於て行政財政の整理を斷行し、減稅を決行し、多大の剩餘金を生じて以て昨秋以來の軍事費に事欠くことなからしめしが如き一大善政と云ふを妨げず、然れども世人は此を記憶せずして却て政友會の橫暴を叫喚せり、是れ明かに此間彼等が非政友感情に支配せられたる群衆心理の作用を認むべきに非ずや、即ち政友會が多年黨勢の擴張に熱中して却て輿論の開拓を忘却したる祟咀は覿面に輿論の大反抗となりて顯はれ來れり、政友會の領袖輩亦た時代を誤解したるの責を免るべからざるなり。

斯の如く政友會が妥協政治を事とし黨勢の擴張に努め陽々然として天下の大政黨を以て任ずるに際し、早稻田の一方に退隱せる大隈伯は何を爲しつゝありしか、彼は自ら稱して政界の失敗者なりと云へり、且つ彼に取り政界の事最も非なるに際しては彼は敎育事業に沒頭するものゝ如く早稻田大學及び日本女子大學校の資金募集の爲め幾度か大名旅行を試みしことあり、同時に早稻田の大隈邸は內外賓客に向ひ開放せられ、歐米の珍客あり、宗敎家の團體あり、海外よりの母國觀光團あり、日米問題の協議會

して知られしが、山本内閣の崩壊後淸浦内閣の流産するや伯は突如として政界の主人公として現出せり、彼の出現は一大意外事として一般に迎へられ、之を計劃せし策士中には一時政界の消防役として大隈を出だせるに過ぎずと云ふものあれども、一たび主人公となれる伯は其位置漸く堅固ならんとして殊に總選擧後に至り隈閣の前途は洋々春海の觀あり、蓋し是も毫も怪むべき成行に非ず大隈伯が多年民間にありて涵養せし平民的一般的人氣は今將さに其果實を結べるなり、世の識者もし過去の大隈を以て俗に媚び、駄法螺を吹き、人氣取を主とする煽動政治家と做すものあらば吾人は斯の批評は伯半面の眞相を穿得て誤らずと云ふを躊躇せず、同時に吾人は伯がよく時勢を解し身を處するに時の要望に適應し以て一代の人氣男となれる智慮を稱せずんばあらず、之を詩人に譬へんか伊藤西園寺を以て李白杜子美に比すべくんば大隈は以て白樂天に比すべし、白や李の高逸不羈なく杜の雄渾蒼勁なく、遙かに下りて通俗的なり而かも流麗安詳、其詩一篇出づる毎に士人傳誦、詩名の盛なる前古未曾有と傳ふ、彼が詩を作る毎に一老嫗をして解せしむ解すれば則ち之を錄し解せざれば又た之を改易すと流說されしも其事無根なりしとするも以て用意の存する所を伺ふに足れり、大隈伯が私邸を開放して多方の客に接し駄法螺を吹散らして世間の人氣を收むるに汲々たりしは白樂天の詩を作りしと比し遙に卑俗的なりしも、兩者の間一種の類以點なきに非ず。

（三） 外交は現閣の死活問題

世間に媚ひ衆俗の人氣に投ぜんと努むるは自尊心ある政治家の頗る屑とせざる所なるに相違なきも、亦是れ時勢の止むを得ざる要求にして多少之に應ずるの態度を取るは一種の權道として幾分恕する所なかるべからず、明治時代にありては政界の游泳者は一般に薩長の權門を叩くを常とし最近に至りても苟も政治家たらんものは頽齡の元老に叩頭せざるべからず、もしも隨時參詣の禮を怠るに於ては忽ち其祟咀を受く、同しく是れ權道なり、小數の老人に叩頭すると多數の群衆に向ひ車窓演說を試みると果して、何の選む處かある、若し彼を卑屈なりとせば是も卑屈なり、自尊心ある政治家に取り不本意のことたるに於て兩者共に一なり、もし一を權道恕すべしとせば他も亦權道恕せざる可らず、而して大隈伯一派の如く一般の人氣を煽ると同時に元老の氣嫌を取り、座頭按摩の如く上を揉み下を揉む亦た可ならざるに非ず、要は外に斯の如き權道を行ふと同時に內には奉公の至誠を持し上下の信賴を繫ぎ以て國政料理の經綸を全ふせんことに在り、若しも不幸にして經綸なく至誠なく唯た人氣取に專念するに過ぎずとせば是れ純粹なる煽動政治家のみ決して永く國家の運命を托すべき人に非ず、大隈伯は煽動家と云ふべき半面の事業に於ては已に十二分の成功を收めたり、伯が果して至誠を披瀝し經綸を完ふし克く上下の信倚に應ふる所あるや否やは實に係りて今後の問題に屬す。

今や日支交涉は已に四閱月に垂んとし、政府の豫期に後るゝこと甚だしく、而して前途を逆賭すれば其何の日に終了すべきを知る可らず、彼我代表者の間已に二十餘回の會見を經て支那政府の態度益々頑

に六箇月を費やせりと、即ち極東百年の平和に關係ある今の日支懸案を解決せん爲めに已に四箇月を費やし更に數箇月を費やすことあるも强ゐて異とするに足らずと雖も、ランスダンオン卿やサーエドワード・グレイ氏は加藤男の如く永き月日の間國中の人心を極めて緊張せる心配の下に置かず、事成るの日に於て初めて國人は其成績を批評するも、其未だ成らざるに先だち數月に亘り世人をして戰々兢々の思あらしめず、我外務當局は曰く外交の事は凡て秘密を貴ぶと然り若しも秘密を貴ぶとせば獨り交渉の案件のみならず交渉の經過も亦た秘密に附するの必要なからずや、然るに交渉の經過に至りて初めより悉く之を開放し寧ろ當局は殊に其報道を大袈裟にして世人の注意を深甚ならしめんと努めしかの疑なき能はず、曰く今回の會見に於て已に第何箇條を議了せり、次の會見には必ず大に進行を見るべし、曰く何曰く何、兎に角總選擧の最中にも國民は一方に日支交渉なる大事件の經過中なることを忘れざるべく十二分の注意を受けたり、且つ守備隊の交迭の如きも從來何等の注意を惹起すに至らざりしに關はらず今回に限り甚だ仰山に之を吹聽し一時は世人をして開戰の近きを思はしめ又た支那人をして我態度の恐喝的に似たるを怪ましめたるは果して何等の理由、何等の必要に出でしや、若しも外交の關係以外他に斯の如き方略を取るの必要ありしとせば措く、若し之を外交の一端とせば頗る拙劣の手段と云ふべく恐ら

く此れが爲め帝國の眞意を支那及び他の外國に誤解せられしこと決して少なからざるべし、エドワード・グレイの亞流を以て任ずる我當局の手並としては頗る感心の出來ざる事共なり、然れども往事を追ふは詮なし吾人の囑望は今後にあり、現内閣の諸公は總選擧の結果に歡喜雀躍して止むべきに非ず、宜しく緊褌一番支那懸案の解決を全ふして以て國民の信頼に辜負せざらんことを期せざる可らず、其要は吾人が繰返へし論じたる如く、一方に我邦の正當なる要求を貫徹すると同時に支那人民の歡心を繋ぎ又列國の間に我が信義を維持せんことに在り、此三者中其一を缺くが如くんば成功も眞の成功にあらず、當局に於ては必ず共邊の注意あるべきも、鹿を逐ふもの山を見ず、是れ吾人が特記して反省を促さんとする所以なり。

（四）政友會の今後如何

多年絕對多數を擁し傲然天下を睥睨せし政友會が一躍にして其黨與の一半を失ひ少數黨の地位に落ちしは政界の一大變なり、此變に處し政友會が果して如何の態度に出でんとするかは最も興味ある一問題たらずんばあらず、多數黨たるを以て殆んど唯一の存在理由となせし政友會に取りては此回の大打擊は實に非常の大打擊にして、其議院に於ける作戰上に一大齟齬を生じたるは言を待たず、從つて黨內一般に失意落膽の氣に滿てるは想像に餘あり、然れども吾人を以て之を觀れば政友會が何時かは少數黨に落つべき運命の下にありしとせば今次の大敗は寧ろ該黨に取り起死回生の好機會たるべし、少小の相違を以て少數黨に落ちたらんには未練の觀念も生ずることあるべしと雖も今や男らしく大敗を自覺し其敗因を

たる厄を免るゝに至りたれば、須らく此際大に隱忍自重し少數黨たるに屈せず前途堅實の發達を期せざるべからず、速に多數を回復せんとして小策を弄し若しくは敗戰の欝憤を晴さんと欲して輕擧暴動するが如きは策の最も拙なるものなり、素より日支交渉、選擧干渉、責任支出等の重要問題に關しては質問辨難以て大に政府の反省を促すべきも、駄辨を弄し世間の物笑となるが如きは最も謹愼するを要す、殊に少數黨として衆議院内の靜肅を保ち自ら威嚴を持するに努めば世間の信用と同情を回復すること意外に速かなるものあるべし、更に政友會として大に努むべきは新聞雜誌との連絡を密にすることに在り、從來とても努めざるに非ざりしならんも、大隈伯一派の費やしたる大なる努力に及ばざりしや遙かに遠し、但し從來大隈伯一派が猥りに無責任の言論を爲し一時の人氣を集むるに成功したれども其一たび責任の地位に立つや乍ち前日の放言に咀はれ今尙ほ多大の苦痛を嘗めつゝあるは以て戒めとすべし、吾人は政友會に對し形式に於て早稻田の大風呂敷に傚へと云ふものに非ず、然れども大體に於て輿論を尊重し新聞雜誌の記事主張に謹聽するの一事に付ては今後大に從來の方針を一變するの必要あるべし、

最後に今の政局が此より如何に開展すべきかは何人も知らんと欲する處にして何人も知ること能はざるものたり、只た變化を來すべき各種の事情に付て觀れは日支交渉の如きは正さに其一と云ふべく、若

し此交陟にして果して首尾よく結了するを得ば現内閣の位置は一層の強固を加ふるに至るべし、但し萬一不幸にして交陟大に行悩むことあらんも來る特別議會だけは與黨多數の結果恐らく無事に經過するを得べく、將に來らんとする御大禮に對しても此際猥りに政變を惹き起すが如きは國民一般の希望に反せり、但し年末の本議會に臨み歐洲講和問題の喧囂と相待ち政界復た如何の波濤を洶湧し來らんも計られずして、政府の與黨狂喜して放縱なるを許さざると同時に其反對に立つ小數各派亦た漫に失望するの要なし、政界には必ず豫期せざるの變あるべきを豫期して可なり。四月十六日稿

特別議會と諸問題

絶大多數を制する大隈内閣は來るべき特別議會に臨み宛も駿馬に鞭ち大道を疾驅するの慨あるべし、然れども議會は競馬場に非ずして討論場たり、少數各派は必ずや各種の問題を提起し政府の答辨を求め或は反省を促し以て當局の非違を正すことあるべし。議場の勝敗は必ずしも目的とするを要せず、投票の數に負けても議論に於て勝つと云ふことあり、正論公議を發揮して國論を指導すること多くは少數黨の双肩に係れり。

議會の前途を眺むれば其の注意を要する各種の問題少なからざる中に就き日支交事件、責任支出問題、及び選擧干陟問題の如き最も重大のものなるべし、日支交陟は最近に至り一大蹉跌を爲せしものゝ如く

[illegible]を生じたる

が如きは、以て我外交の成功と見做すを得べきか、外交の成行は事凡て秘密に附せられ外間の伺見するを許されざるが故に容易に斷言すべからずと雖も、吾人は我當局の取來りし手段方法に付き大に疑なきこと能はず、日支外交は素と極東の問題に屬し歐米諸國の直接容喙すべき性質のものに非ずと云ふも實際は必しも然らず、日支間の問題を議せんには先づ以て我邦は英、露、佛、米等に對し意志を疎通し置くの必要あり、如何となれば支那自身獨り我邦のみを相手として交渉する能はず却て終始其背後の歐米を顧念すればなり、試みに思へ歐米との疎通能く始めより行渡り居りたらんには今次の交渉も恐らくは今日の行惱みを見るが如きことなかりしなるべし、假令今日無理往生に克く我が主張を十分に貫徹し得たりとするも、若し誤りて支那人心を離反せしめ、歐米の輿論を敵とするにも至らんか、自ら支那經營の前途に向つて多大の禍根を遺留するに至るべし、我當局は眼前の功名手柄にのみ着目して百年の大計を忘る可らざるなり、責任支出に關しては當局は辨して其先例多きを云ひ孰れの内閣も殆んど責任支出を爲さゞりしはなく、獨り大隈内閣のみを責むるの理由なきを云ふ、然れども今次責任支出問題の大に世間の注意を喚起するに至れる所以のものは僅々數月間に於て其件數の甚だ多きこと、其中の或るもの丶如き（即ち米價調節）責任支出の問題を別とするも、時局救濟の政策としても頗る奇怪なる

ものなること及び現内閣員中に一木博士の如き憲法學者ありて其在野中に盛に任責支出の違憲なることを唱道したることある等の理由に因れり、元來責任支出は其性質上違憲なるべし、然れども從來も止むを得ずとして之を許容したる所以のものは事實に止むを得ずして且議會閉會中院議に附するの機會なきに因れり、然れども責任支出を許すは行政上百弊の因たること明白にして、之を停止せんと欲せば臨時議會の召集を容易ならしめ、又た其召集を餘儀なくせしむるの外ある可からず、吾人は善後策に付き此際十分の考慮を回らすの必要あるを思ふと同時に、今次已に問題たらんとす責任支出各事件に付き、殊に米價調節と云ふが如き政策上最も議論の餘地ある事件に付ては、我上下兩院は必ず儼正なる批評の態度を執るべきを疑はず、蓋し之が事後承諾案を特別議會に提出せず本議會まで延期せんとする當局最初の考案は恐らくは放棄せられざるを得ざるべし。

選擧干陟問題に付ては恐らくは今期議會中最大の激戰を見るなるべし、之を以て政友會が大敗の腹癒せに試みる政府攻擊と見做さば其迄なれども、今次の總選擧に於ては近年になき隱微巧妙の干陟行なはれたるは疑ふ可らざるに似たり、現に全國の視聽を集中したる石川縣に於て選擧干陟の爲めに巡査の刑に處せられたる耳ならず、縣廳警務部の主任某亦起訴せられて拘引の身となれるあり、而して知事某も亦た病に托して其職を辭せり、是最も著明なる事例なるも、恐らく此外幾多の事例あるべし、抑々選擧界の廓淸は憲政運用の唯一の保證にして、若し一たび官權の干陟を許容するに於ては政府の信任を問ふべき爲めの解散は無意義となり、我政界は永久官僚萬能の域を脫すること能はざるべし、故に吾人は今次

の選擧干渉問題の最も誠實に、最も熱心に研究せられんことを希望し、問題の發展上如何なる方面に向つても責任の及ぶ限り追究せられんことを期待するものなり。

増師問題亦た重要問題たるを失はざるべしと雖も既に多數與黨の贊成を得べきこと明白にして、多年の懸案にして政界の暗礁たりし此問題も多くの面倒を見ずして終に落着するを得べきなり。

今次の特別議會は勿論無事に結了すべしと雖も中間自ら猛烈の論戰を見べきは想像に難からず、吾人は衆議院の少數黨に向ひ正論公議以て能く少數黨たるの面目をば發揮すべきことを希望し貴族院に對しては其必ず中庸穩正の態度を失はず敢然非違を指摘して政道の公平を持するの擧に出でんことを信頼せずんばあらず。

歐洲戰爭と本邦經濟社會の將來

法學博士　堀江歸一

（一）

歐洲戰爭は開戰以來既に九箇月の永きに及ぶと雖も、海陸何れの戰鬪も未だ對手國の命運に致命傷を與ふるに足らず、近頃英國が聯合諸國と協力して、獨逸に對する封鎖を嚴にし、中立國より獨逸に輸送せらるゝ物資の供給を絶ちて以て經濟上より獨逸を壓迫せんとする政策も今後如何なる時に至つて効果を奏するか、豫測に苦しむものあり。英佛露三國の大藏大臣が今春以來相會合して、三國の財力を鞏固にし、又物資供給の關係を疏通して、以て持久戰に堪ゆるの計畫を講じつゝあるもの必ずしも謂れなしとす可からず。斯の如く歐洲戰爭が久しきに亘つて、終熄せず、交戰諸國が戰鬪に從事するに於ては、其經濟社會に及ぼす影響の大なるは勿論にして、國際經濟の圈内に居る我國の如き固より其影響の波及するを免がる可きに非ず。然らば我國は既往に於て歐洲戰爭の爲めに、如何なる影響を經濟社會に蒙り、又將來蒙らんとするか、抑も亦是等の影響は、我國商工業に於ける景氣の盛衰と如何なる關係を有するや、此に我國經濟社會の將來に於て、重要の問題を以て目す可きものなり。

我國の經濟社會が多年不景氣の狀態に沈淪し、今日に至つて、尚ほ挽回の機運に接する能はざるは、既に

に於ける我國經濟上の疲弊に發するものと認めざる可からず。我國が國の全力を擧げて、彼の如き大戰爭に從ひ、戰後何等の償金を得ずして、却て多額の債務と租税の負擔とを遺し、而して軍備の擴張其他の計畫に多額の經費を要し、毫も國力を休養せざるに於ては經濟社會の不景氣に沈むは當然の數なるのみ。唯國民が戰後直に此疲弊を感ぜざりしは、畢竟戰爭中に募集せられたる外債の收入あり、政府は之を處分して、財政を膨脹せしめ、又時に之を利用して、內國の金融を緩和せしめ、以て商工業の景氣を刺衝し、其後屢次外債の發行に次ぐに、外債を以てし、當然到來す可き勢を他日に遷延せしめたるが故を以てなり。隨て近年外債の募集意の如く爲らず、輸入超過と外債元利支拂との決濟に依て、我國は何時外國に多額の正貨を取付けられ、爲めに一旦騰貴したる物價に急劇の低落を來すや、將た又膨脹したる信用に過度の收縮を生ずるや、足し、一方に金利騰貴して、金融窮縮し、有價證劵の市價低落して、新事業の發達を妨げ、世間を擧げて、不景氣を嘆ずるに至らしめたるもの決して偶然に非ず。加ふるに外貨の輸入、財政の膨脹は相重なりて、物價の騰貴を助長し、其情勢の容易に消滅せずして、國民の生活を壓迫して已まざりしに於てをや。

要するに我國積年の不景氣は日露戰後直に殺到す可かりしものが政府の外債政策に依て、後日まで遷延せられ、外債の跡を絕ち、又其効果の漸く微弱と爲るに隨て、實現したるものに外ならず。隨て從來官民の間に、不景氣挽回の所說唱へられたること一再に止まらざりしが、吾輩は姑息の小策は却て經濟社會の自然に歸嚮す可き趨勢を挫折し、患害を後に貽すものとして、之に反對し、眞實景氣の恢復を求めんとするには(一)政府自ら非募債主義を勵行し、外債に依賴して、財政を處理し來れる慣用手段を廢棄すること、(二)經

費を節約し、租稅を輕減し、以て財政上より國民生活に加ふる壓迫を除くこと、(三)輸出貿易振興に必要なる政策を施し、外國に負ふ債務は輸出超過に依て決濟するに至らしむることの必要を論述したり。固より是等の政策を取らんか、一時過渡の時期に於て、通貨の收縮を招き、爲めに不景氣の勢を甚だしからしむることなきを保せずと雖も、其以後に於ては、經濟上の關係漸く舊に復し、之れを健全ならしむるを得るを以て、一時の困難の如き、之に堪ゆるの外に道を存せざるなり。

昨年四月大隈內閣組織せらるゝや、新內閣は財政整理、經濟振興に關する數箇條の政綱を示し、而して其一條として、非募債主義を厲行し、通貨を收縮して、物價の低落を謀り、以て輸出入貿易の均衡を期することを聲明したり。大隈內閣は當時我國財政の信用の外國市場に於て著しく失墜し、募債を行はんとするも、到底行はれ難き事情に顧みて、非募債主義を取るの已むを得ざるに至れるものなるか、將た又眞實財政を整理するには、此主義に據るの外なしとし、確乎たる信念を以て、新方針に就かんとしたるものなるか、局外者に於て之を忖度する能はず、他日の行藏に依て檢するの外なしと雖も、兎に角政府が種々の困難を排して非募債主義を厲行せんとするの決意を爲したるは財政意見の一進歩とせざる可からず。政府が財政上に此消極方針を以て臨むと共に、經濟政策上の施設を誤まらざるに於ては、多年不景氣に沈淪したる我國の經濟社會も漸を以て其面目を一新し、好景氣を迎ふるを得ることある可しと想像せられたり。然も斯る財政方針未だ其緖に就かざるに當り、歐洲戰爭破裂して、我國經濟社會に意想外の變動を及ぼし、今や經濟上の景氣は政府の財政方針よりも、寧ろ歐洲戰爭の影響に依て支配せられんとするの狀あり。然らば歐洲戰爭は我國の經濟社會に對して、禍害を及ぼすや、或は福祉を與ふるや。

(二)

歐洲戰爭が現に我國に及ぼしつゝある影響は貿易上

關係を見るに、歐洲諸國に對しては、輸入超過の地位に立ち、米國並に東洋諸國に對しては輸出超過の地位に居るを常とす。故に昨年開戰以來歐洲交戰諸國の市場動搖し、加ふるに船舶の不足、印度洋に於ける獨逸軍艦の出沒等に依て、運賃保險料の昂騰を來すや、歐洲諸國の我國に對する商品輸出は甚だ困難と爲り、我國の輸入貿易は爲めに著しく減少するに至れり。而して一方に我國の輸出市場たる米國も歐洲諸國の資金回收、歐洲に對する輸出貿易の減退に依て、一時不振の狀に陷り、支那も亦外國借欵の不可能と爲れる結果、從來の景氣を維持するに難く、兩國共に日本の商品を需要する實力を減却することゝ爲れり。然れども之を全體に就て見るに、輸出の減少したるよりも、輸入の減少したること更に甚だしく、其結果として一昨年まで年に巨額の輸入超過を免がれざりし我國の貿易は昨年に於て出入略ぼ相平均し、本年に入りても、依然此

前に倍徙するの勢を以て增進し、爲めに輸出入の均衡を得るか、又たは輸出超過の狀態に到達したりとせんか、我國經濟社會の爲めに大に慶賀す可く之を直に好景氣の前提とするを得べし。唯昨年來の貿易に於ける如く輸出入共に減少し、而して輸入の減少が輸出の減少に比較して、一層其甚だしきを致したる爲めに出入相均衡するを得たるの故を以てしては、直に之を以て我國に好景氣を誘導するの原因とす可からず。然も從來我國が對外債務決濟の點に於て、困惑したる所以のもの現に外債の元利金として巨額の支拂を外國に爲す可きの地位に居りながら、之に加重して輸入超過の決濟を爲さゞる可からざるが爲に外ならざりき。然らば今、昨年來の如き貿易の狀態聊か從來と趣を異にし、輸入超過を脫するを得たる以上は、對外債務を加重したる一原因は自ら除却せられたるものと見る可く、此點に於て經濟社會を安んぜしむるを得たるが如し。

更に我國對外債務の決濟に就て考量するの價値あるは昨年來我國官民が聯合諸國殊に露國に對して、種々の軍需品を賣却したるの事實にして、其金額は昨年末に於て既に九千萬圓に上れりと稱せらる。而して斯る取引の生ずるや其代價は倫敦市場に於て、彼我の間に授受せられたるが故に、軍需品の賣却高多きに隨て、我國の在外正貨は自ら增加し、以て日本銀行の正貨準備を擁護するを得ることゝ爲れり。歐洲開戰以來政府は在外正貨を重要視し、正貨支拂の已むを得ざるものある場合には日本銀行の內地に有する正貨準備を以て、之に充つるも、在外正貨を減却することを避くるの方針に出でたりと聞く。此方針の當を得たるものなるや否やに就ては議す可きの點ありと雖も、之を他日に讓り、兎に角上記の如く特殊の原因に依て、在外正貨增加し、一方に貿易上の關係亦一新せられたりとすれば、我國は假令ひ歐洲戰爭が今後容易に終熄せざるも、始め國民の最も憂慮したる在外正貨の維持若しくは對外債務の決濟に就て、深く介意するを要せず國民に多少の安心を與へたるものとす可きが如し。

斯の如く歐洲戰爭は貿易上並に正貨支拂の關係に於て、偶然に我國に有利なる影響を與ふるを得たり。而して內國金融の狀況を見るに、近年新事業の發起せらるゝもの殆ど其跡を絕ちて、資金に對する新需要甚だ少なく、一方に國庫は多額の剩餘金を擁し、昨年來大藏省證劵の發行に依て、民間市場の資金を吸收すること絕無と爲れるの結果、金融著しく緩慢を告げ、遂に過日京阪兩市の銀行をして預金利子を引下ぐるに至らしめたる次第なり、既に金利步合低く、金融の緩慢なる以上は、株式市場が活氣を呈するは自然の勢にして、近年低落を重ねたる諸株式の市價は漸く上進し來り、又近年著しく下落して、地方農民を苦しめたる米價も昨年末以來騰貴して、地方民に多少の生色あるを得せしめたるが如し。

（三）

玆に於てか、一部の論者は是等の事實を根據として我國積年の不景氣時代は既に經過し、今後好景氣の境

に趨く可きことを唱ふるが如く、現に農商務省は先頃意見書樣のものを新聞紙上に公表して、我國に好景氣を齎す可き種々の事情を列擧説明したり。然れども吾輩を以て見るに、我國經濟社會の將來は斯る簡單なる事情を以て之を推斷し得べきに非ず。更に眼界を大にして思索す可きもの少なからざることを信ずる者なり。

第一、昨年中の我國貿易が出入略ぼ相均衡するの狀態を示せるは主として歐洲戰爭に基く偶然の事情の然らしめたるものゝみ。米國の經濟社會にして景氣を恢復せんか、其我國に取つて、好箇の輸出市場たるは、依然として舊の如く爲るを得べしと雖も、我國が戰時歐洲交戰國の經濟的能力に於ける缺陷に乘じて、一時太平洋沿岸並に印度方面に擴張したる商品の販路の如き、歐洲戰後に於て、果して能く之を維持するを得るの望あるか。我國商工業者の努力如何に依て、其全部を歐洲競爭者の爲めに奪還せられざるを得るとするも尙ほ彼等の競爭熾烈なるに隨て、販路の維持困難なるに至るは、論を俟たず。彼の軍需品の輸出に依て、貿易上に有利なる地位に立つを得たるが如き、平和の恢復と共に、忽にして消散する事實なるのみ。

歐洲戰爭中、交戰國の輸出貿易減退して、我國輸出入の均衡を維持するに資するを得たるが如き、同じく一時的事相なるのみ。今日歐洲交戰國殊に獨墺兩國より輸入の杜絶したる結果、內國市場に於て或る種の物資の供給著しく減少し、需要者を苦しむるもの少なしとせず。一封度の石炭酸を購ふにも、一箇の檢溫器を買ふにも供給不足の結果、異常の高價を支拂ふが如き事實は吾人の日常目擊する所ならずや。人造染料の輸入杜絶して、內地製藍業の復活を告げんとするが如き亦吾人の聞く所ならずや。然も戰後に於て斯る物資の輸入を抑制し、以て輸入超過の大勢を再現せしめざらんとするには、今日戰爭の爲めに是等の輸入の杜絶しつゝある際に於て、我國の事業家自ら代用品を製造し、以て、內地に於ける供給を豐富ならしむるを必要とす可し。近來我國に於て化學工藝の事業を創設す可しと

云ふ所論に接するは、即ち此必要に應ずの趣意なる可しと雖も、未だ資本家が大なる資本を斯業の發起經營に投じたるの事實を知らず、政府亦民間事業家を誘導して、斯る新事業に當らしむるの計畫に着手せず。然らば歐洲戰時に於ける輸入貿易の減退は戰爭に伴ふ一時的事相たるに止まり、戰後我國民の必要とし、而して內國に於て供給の豐富ならざる貨物は依然外國より輸入せらるゝの道理にして、戰時特殊の原因に依て、在外正貨の增加したる事實は却て、戰後に於ける輸入を增進せしむる種子たるや、未だ知る可からざるなり。

第二、昨年來內國市場の金融頗る緩慢にして、現に諸株式の市價上進しつゝあるは、顯著なる事實なり。然れども斯る趨勢は果して今後久しきを通じて、持續せらる可きや否や。抑も亦金融の當業者自ら金融現下の趨勢に大なる信用を懐きつゝありや否や。財政と金融との關係を考ふるに、昨年來政府が一の短期證券を發行せずして、歲計を處理するを得たるは、國庫に大なる剩餘金を存したるの故を以てなり。然も剩餘金は昨年中の軍事費を始め政府の責任支出に依て、其大部分を失ひ、政府は近く大藏省證券を發行するの必要に接しつゝあり。今後民間に於て資金の需要の增加すると相俟つて、金融緩慢の狀況に異變を來す可きは、疑を容れず。既に前途に此種の疑惑の存するものある以上は、過日市中銀行が相協定して、預金利子の引下を行はんとするに當り、其或るものは最も熱心に之に反對し、結局一分の引下を行ふ可き豫定の內議を變更して、五厘の引下に止めたるが如き、已むを得ざるの數にして、斯の如きは當業者自ら金融緩慢の趨勢の永く持續せらる可きものに非ざることを認識したるの資料とす可し。果して金融が永く今日の趨勢を保つものとせんか、市中銀行の預金利子引下に先だち、或は之と前後して、日本銀行自ら金利步合を引下げ、以て一般の需ふ所を示す可きの道理なるに、日本銀行は今日に至るまで、依然舊來の金利步合を維持して、渝る所なし。日本銀行が金利步合を上下するや、其處置甚だ遲鈍にして、民間金融の大勢と相背馳するもの多しと雖

も、今回の如く既に市中銀行の預金利子引下ありて、尙ほ日本銀行が金利步合の改正を行はざるは、其當局者の間に金融將來の趨勢に疑を懷きつゝあるの結果とせざる可からず。然らば今日金融に一時的緩慢の狀あるも、商工業者が之に促されて、輕佻の態度に出でんか、他日金融狀態の一變と共に窮地に陷る可きは勿論にして、今日の金融狀態は必ずしも我國に於ける商工業景氣恢復の前提とする能はざるなり。

（四）

歐洲戰後に於ける交戰諸國の經濟社會には如何なる變動を生じ、如何なる餘波を我國に及ぼすに至る可きか。是れ範圍の最も廣汎なる問題にして、戰時の今日に於て、確乎たる斷案を下すに難きものありと雖も、戰時を通じて、各國に發生しつゝある幾多の事實は戰後諸國の經濟社會の嚮ふ可き運命を暗示するものと見るを得べし。而して吾儕の見る所を以てするに、今回の歐洲戰爭の後に於て交戰國の經濟社會に生ず可き狀態は從來の戰爭後に於て生じたる狀態と大に趣の異なる可きものあることを疑はず。

第一、從來國際間に戰爭の行はるゝや、戰後交戰國殊に戰捷國の經濟社會に大なる刺戟を與へ、商工業の好景氣を促して、他の諸國にも其の利益を頒つを常としたり。普佛戰後に於ける獨逸、日淸戰後に於ける日本の如き即ち此適例を以て見る可きものなり。然も斯の如き變動を惹起したるは、戰敗國より戰捷國に向つて、多額の償金支拂はれ、戰捷國は此償金を各種の支拂に供用して、內外市場に物資の需要を增加したるを以てなり。今回の歐洲戰後に於て、交戰國間に巨額なる償金の授受せらるゝを望むを得るや否や。此のことたる、獨墺兩國が聯合諸國に對して、如何なる狀態の下に、講和條約を締結するに至るやの問題に依て決定せらるゝものとす可く、戰局の進行現時の如く、獨逸が毫も國內主要の地點を敵國に侵さるゝに至らずして、講和の成立を告げんか、獨逸たるもの決して償金の負擔を受諾せざると同時に、聯合諸國亦之を要請する能はざる可し。又假に獨逸が今後行はる可き大會戰に敗

北して、償金を支拂ふとするも、獨逸現時の國力より打算するに、普佛戰後佛蘭西が專ら內國に公債を發行し、斯くて得たる收入を以て、償金の支拂に充てたるが如きは望む可からざる所にして、恰も支那が北淸事變後關係諸國に償金を支拂ひたる場合と同じく、獨逸の公債を聯合諸國に交付するの外に道なかる可く、聯合諸國たるもの、戰敗國の公債を收受したるの故を以て特に之を生產資本として活用し、商工業の活躍に資する能はざる可し。

第二、歐洲戰後に於ては、交戰諸國の金利步合は戰時と異ならざる高步に居り、永く諸國の金融をして緊縮せしむ可し。交戰諸國が今日に至るまで、戰時財政を維持する收入として、專ら依賴しつゝある公債にして、思ふに今後に於ても公債の發行せらるゝも少なからざる可し。而して諸國が公債を發行するや、何れも戰時の必要に促されて、之に高率の利子を付し、英國は三分五厘、獨逸露西亞は五分の利子としたり。是等の利率は諸國が平生公債の標準利率とするものに比較すれば、一分以上の高率に居るものなり。諸國が戰後急速に斯る高利の公債を整理して、之を低利の公債に借換ふるを得れば、財政上好都合なりと雖も、各國金融上の狀態は容易に此便宜手段の行はるゝを許すものに非ず、現に諸國が是等の公債を發行するや、發行價格を額面以下に置き、而して發行後其發行價格を維持するに困難を感じつゝあるの狀に徵するも、借換の容易ならざるを知るを得べく、戰後斯る高利の公債の市場に殘存する以上は、自ら一般金利步合の標準點を高からしむるは論を俟たざるなり。

歐洲交戰國の中央銀行にして、開戰後能く兌換制度を維持するは、一の英蘭銀行あるのみ。他の諸國の中央銀行は開戰と相前後して、何れも兌換を停止し、財政上或は金融上の便宜を擧ぐる爲めに、多額の不換紙幣を發行しつゝあり。是等中央銀行が永く不換紙幣の流通に甘んずれば可なり。然も不換紙幣が殊に其增發せられたる場合に於て、流通價格に低落を來し、流通上百の弊害あつて、一の利益の之に伴はざるは、從來

り云ふも、戰後速に不換紙幣を整理して、兌換制度を復興せんとし、此關係より更に金利步合の上進、金融の緊縮を促さゞれば已まず。

今回の戰爭に於て、交戰諸國が早く兌換制度の運用を停止したるは、紙幣の增發に依て、正貨が海外に散逸し、正貨準備の減損を招くことを恐れたるが故なり。隨て開戰以來諸國中央銀行の正貨準備は敢て減少するに至らず、或る程度に於て、正貨準備を擁護するを得たり。思ふに諸國は今回の戰爭に當て、平生中央銀行の正貨準備を豐富ならしむることの戰時經濟處理の上に於て、至大の効果ある事實に就て、一箇の貨物教訓を得たるの道理なるを以て、正貨準備擁護の熱度は戰後に於て益々熾烈なるものと斷定せざる可からず。彼の英蘭銀行の如き、正貨の出入、正貨準備の增減を律するに當り、金利步合高低の外に、何等人爲的干涉を施さず、倫敦をして世界に於ける唯一無二の自由金市場

奈陀に英蘭銀行の正貨準備預託所を開設したる以外に正貨準備の擁護に就て、力を致さゞりしが如くに解せられたるが、近時傳聞する所に據れば、英蘭銀行は正貨兌換の要求に應じて、金貨を拂渡すに當り、量目の完全なるものを以てせず、其削減せられたるものを以てし、間接に正貨準備擁護の手段を講じつゝありと云ふ。英國貨幣法の規定する金貨の通用最輕量目は法定の純量より約一千分の七を減じたる割合に當るが故に斯く金貨を外國に輸送せんとする者が通用最輕量目に近き程度まで量目の減損したる金貨を以て、拂渡さるるに於ては、爲替相場が異常の程度に變動する時に非ざれば、金貨の輸送を行はざるに至る可く、斯くて正貨準備を擁護するに至るものなり。平生四弗八十六七仙の邊を上下する紐育宛參着爲替相場が近來四弗八十二仙と云ふが如き、異例の相場を現出しつゝあるは、畢竟如上英蘭銀行の小策に基くものと解せざる可から

ず。金の自由市場たる英國に於て、英蘭銀行の爲す所既に斯の如きを見るも、各國が戰時に於ては勿論戰後に於ても、中央銀行の金貨準備を維持し、充實し、保全するに努力を致すは明白の事實にして、是れ亦戰後に於て、各國の金利步合を高度に維持せしむるの一原因たらざるを得ず。

第三、歐洲戰後に於て、國際金融の關係は如何なる新狀態の下に支配せらる可きか。從來歐洲諸國は少なくとも强國間に於ける平和の關係の持續せらる可き信念を懷き、其內國に於ける資本の供給豐富なるものは其供給の寡少なる國に向つて、資本を放下することを辭せざりき。斯くて資本は國際間に於ける利子步合の高低に應じ、其低き所を去つて、其高き所に赴くを常とし、而して外國より資本の供給を受くる國は其利子の低步なることに依て、利益を受くるものと解せられたり。唯此潮流に對して、聊か制限を加ふるの必要を認めたるものは、即ち獨逸なりき。蓋し千九百十一年九月モロッコ問題に關聯して、佛獨兩國の間に外交上の紛議を醸し、干戈に訴へて、事を解決せざる可からざるの狀を示すや、佛國資本家にして平生獨逸に資本を放下しつゝある者は開戰後の損失を恐れたるが爲めか、將た又自國政府の意を承けて、獨逸を苦しむるの目的に出でたるものなるか、盛に獨逸より資金を回收し、爲めに伯林金融市場を恐慌の狀態に陷らしめたり。當時獨逸政府の諮問を受けたる伯林大銀行の代表者が獨逸現時の國力を以てしては到底佛蘭西に對して戰爭の開始せられたる曉に、之に堪ゆる金融上の準備を有せざることを答申し、結局政府を動かして、外交上の方針を一變するに至らしめたりと傳唱せらる。獨逸が外資の輸入を恐れ、之に制限を加へんとする一方に、帝國銀行の正貨準備を增殖したるは、即ち當然の實驗に感奮したるものなるが如し。

更に之を資本輸出國の立脚地より考ふるに、平生金利步合の高率なる他國に資本を輸出するときは、之に依て大なる利益を收むるの望ありと雖も、一朝事變の勃發したる曉に、自國の必要に應じて、能く之を內國

に回收するを得るや否や。今回歐洲戰爭破裂の前に於て、諸國が外國より資金を回收したる程度の如何は他日の調査を待たざれば、之を知る能はずと雖も、開戰前後諸國が盡く株式取引所を閉鎖して、有價證券の投賣せらるゝことを防ぎたるに加ふるに、海上の交通危險と爲れるに於ては、資金の回收意の如くならざるや論を俟たず。國際間に於ける資本移動の自由は平和の關係持續して、始めて圓滑なるを期す可く、其關係の持續に危險ありとすれば、諸國は必ず資本の輸出を制限す可く、資本家亦其輸出を恐れて、之に躊躇せざるを得ざる可し。況や歐洲戰後交戰諸國は內國に於て戰時破壞せられたる事業を復舊するに忙はしく、到底外國に資本を輸出するの餘力充分ならざるに於てをや。此點に就て、歐洲諸國が他日如何なる立法を制定せんとするや、遽に想像する能はずと雖も、英國の如き戰爭進行中、資金の供給を豐富ならしむる爲め、本年一月資本放下制限令なるものを制定し、英國內に行はるる企業に必要なる資金を醵集する場合には政府の認可を要し、帝國の海外領土に行はるゝ企業に必要なる資金は絕對必要のものゝ外、其醵集を許可せられず、而して外國に行はるゝ企業に必要なる資金は醵集することを許可せられざるものとしたり。資本を外國に輸出し、其收益を以て對外債務を決濟するは、英國經濟政策上、重要視せらるゝ所なるに拘はらず、英國が突如斯る制令を設けたるは、要するに之れに依て資本の外國に散逸して、內國に於ける供給を寡少ならしむるの弊害を矯むるの必要に出でたるものと見る可し。唯今日に於て一箇の問題とす可きは、此種の制限は單に歐洲戰時に限つて、適用せらるゝものに非ずして、戰後に於ても、資本の海外輸出を制限するの趣意を以て、適用せらるゝの狀あるの一事にして此事たる、我國に取つて利害の關係、重大ならざるを得ず。歐洲殊に英國の事變の起れる場合に、英國が我國に放下したる資本を回收し、又其回收を便宜ならしむる爲めに、倫敦市場に在る日本公債を內國に送致せざるやは一箇の問題なりしが、幸に今日に至るまで、此種の事實に接せ

ざるを得たり。然も資本放下制限令の下に、外國に資本の輸出せらるゝに當て、制限の加へらるゝものあらんか、我國が外國資本供給の杜絶に依て苦痛を感ずるの恐は戰後に於て必ず實現するものと考へざるを得ず。

第四、歐洲諸國は從來國際間に於ける資本移動の自由を認めたるが如く、貨物の移動をも亦自由に付せんとしたり。最も大膽に此主義の認めらるゝは英國の關税政策にして、財政上の必要より十數點の輸入品に課税するの外、何等輸入貿易に税法上の束縛を加へず、國民の給養に必要なる食料品も、國民産業に缺く可からざる原料品も總て外國の輸入を仰ぐを辭せざりき。歐洲大陸諸國に至つては、之と主義の異なれる關税政策の行はるゝを見ると雖も、其輸入を制限するは、內國農業を保護するの見地より食料品其他農産物の輸入を制限することに重きを置き、他の必要品にして外國の供給を仰ぐもの少なからざりき。而して今回の如き大戰亂に會し、斯く平生外國より供給を受けたる物資の供給杜絶するや、內國に之に應ず可き代用品の存せざる爲めに、現實に供給の不足を來して、諸國民の困惑する所少なからざりしは明白の事實にして、彼の英國の如き優勢なる海軍を以て、海上權を掌握し、米國并に自國の殖民地より物資の供給を受くるに、何等の困難を訴へざる國なるに拘はらず、尙ほ八月并に九月の兩月間に於ては、運賃保險料等の昂騰に依て、輸入品の代價に騰貴を告げ、國民の生活を壓迫するもの少なからざりき。其後食料品供給の狀態は舊に復したりと雖も、彼の染料の如き當面の敵國たる獨逸より供給を受くる貨物に至つては、一時市場に拂底し、遂に政府をして民間當業者に補助金を交附して、其製造に當らしむることゝ爲れり。

戰時確實に海上權を掌握する英國に於て、貨物供給上に違算を生ずること斯の如きものありとすれば、海上權を敵國に委し、且つ有力なる與國を有せざるのみならず、平生食料の供給を仰ぐ露國を敵手としたる獨逸が食料品供給の不足に脅され、種々の小策を施して

武力に訴へ、又武力を動かして、難を國際間に釋せんとする以上は、食料品の供給に就て、外國に對して獨立するの必要あるは勿論にして、戰後に於て獨逸が農業保護の主義を關稅政策上に發揮するに至るは、之を想像するに難からず。英國の如き如何にして、戰爭の初期に於て、必然生ずる輸入品代價の暴騰を抑制す可きや一箇の問題たると共に、戰時外國の供給杜絕に乘じて起りたる事業が戰後外國の競爭を蒙らんとするに當り、如何なる手段に依て、其存立を全うせしむ可きやも他の一問題たるを失はず。故チエムバーレン氏の遺したる關稅改革運動は或は戰後に於て、意外の活躍を爲すことなきや。

以上孰れの方面より見るも、歐洲戰後に於ける經濟社會の變動にして、我國に利益を齎すもの少なきは、吾輩の今日に於て敢て斷言するに躊躇せざる所なり。世界多數の國が戰爭に關係して、富の一大破壞を爲し

は吾輩を以て、徒に世界經濟の將來を悲觀し、戰後に於ける人心の興奮を挫折するの罪を咎むるやも知る可からず。然も吾輩は今日有する知識と材料とに基ひて如上の結論に到達せざるを得ざるものにして、之を公にし以て架空の樂觀說に動かさるゝの弊を制止するの却て有用なるを信ずるに遲疑せざるなり。(四月十三日執筆)

今時流行の非醫學的治療法を排す

醫學博士 文學博士 富士川游

一體病氣の治療と云ふことは學問の順序から云ふと逆になつて居る。逆になつて居ると云ふのは、本來ならば解剖から生理、病理と云ふ風に進んで來て、それから治療と云ふことにならなければならぬのである。處がそれが反對に、初めに世の中に病氣の治療といふものがあつて、それから後に解剖、生理、病理等の學問が出て來たのである。けれども之は巳むを得ぬことで、人間が出來ると云ふと先づ病氣が出來るから、其病氣を直さなければならぬ必要が第一に起る、それから、病氣の種類が段々增して、複雜となつて來るについては解剖とか生理とか病理とかいふやうな種々の學問の力で、十分に病氣の本性を知らなければならなくなる。だから、初めには知識を得んとして治療のことを研究したものではなくて、苦惱を去るといふ實際上の必要からして治療は出で來つたものである。先づ極く初めの狀態になると人間が怪我をする。爭鬪をして怪我をする、獸類と戰つて怪我をする、過つて怪我をする。又毒に當る。毒草を喰つて中毒を起す。日に當つて日射病を起す。又風雨寒濕に中つてリウマチスを起すと云ふやうな事實が初めにある。そしてそれを直すの方法も經驗的に單一なものである。それが少し進むと云ふと、疾病が起るには何か原因があるべきものと云ふ事に氣がつく、其原因を探るについてはいろ〳〵の思考が費される。然し疫病などゝ云ふ、時として大多數の人間を一時に殺して了ふやうな恐ろしいものがあらはるゝ爲めに、初めにはどうしても神秘的の威力あるものゝ所爲に歸することになる。現に何處の國でも昔は病氣を以て惡魔の所爲、神佛の所爲として居つ

には何をやればよいと云ふやうな事が追々に分つて、藥と云ふものが出來るのであるが、その中でも先づ外科の治療が初めに起るもので、我邦でも藥をつけるとか、鍼を用ふるとか云ふやう事が一番先きに起つた。之は固より神代にもあつた。それから漸次に哲學的の醫學が起つて、それが進歩して遂に今日に至つた。今日の時代になると醫學が餘程進歩して居て、哲學的の基礎より離れて、自然科學の基礎の上に立てる時代である。それで今日の知識では、人體の生活の機能を説明することが大分委しくなり、人體の機能は理學及び化學の規則に從ふものであることが明かに分つた。夫れ故に病氣と云つて居る場合でも、同じく身體の機能であつて、病氣と云ふものが別に離れてあるのではない。「病氣は健康の反對也」などと思ふものもあるけれども、さうぢやない。同じ機能の一つの端が健康で、他の端が病氣である。詰り同じ機能の正規的(ノルマル)なのを健のやうに思つて居つた。今でもさういふやうに考へて居る人もあるが、病氣は外から入る所の物體ではなくして、外から何か身體を侵すものがあるために、身體の細胞が、これに對して反應を起し、その反應の狀態が病氣と云ふものになつて現はれるのである。例へば寒いとか、暑いとか、或は不良の食物とかいふやうな物が、身體に入つて細胞を刺戟すると、細胞がこれに對して反應する、それが病氣となるのである。夫れ故に今日の進んだ醫學で云ふと、病氣を直すには身體の機能を當り前にすることを力むるのである、自然の機能を害する原因を除いてやるか、或は自然の機能を助けて、これを害する物に打ち勝つやうにしてやるのが治療の本旨である、言ひ換ゆれば、人體の自然の機能が正當にずつとやつて行くやうにする爲めに、消極的にその害をするものを除くか。若くは積極的に細胞の機能を強くするか、どつちかすればよい譯である。今日

の醫學の治療の仕方はこれを主義とするのである。西洋の醫祖ヒポクラテスの言葉に「醫者は自然の臣僕也」とあるが、全く其通りである。種々の藥品を用ふるも諸種の理學的療法を施すも、皆自然の機能を幇助し、又はこれを增進することを期するのである。例へば一つの黴菌が身體に入る。さうすると細胞が其黴菌に抵抗する爲めに、炎症を起し、熱を起す。炎症を起し、熱を起せば黴菌を殺すに都合がよい。其場合に熱の出たのを病氣と云ふが、然し其熱を起さぬと黴菌を殺すことが出來ぬのである。だから此熱は無暗に下げる譯には行かぬ。腸窒扶斯の時などに醫者が熱のあるのを傍觀して居る、只傍觀するのではない、監視して居る。之は全く其爲めで、詰り熱は身體の害物に對する機能で、其爲めに黴菌を殺して居るのである。夫れ故に或程度まではそれを傍觀して居るのが本當の治療である。又怪我をした場合に、疵口から黴が入つて熱が起る。之は中毒である、毒の爲めに熱が起るのであるからこの場合には其熱を減らさなくてはならぬ。この目的に解熱藥といふものが用ひられる。同じ熱でも、之は身體の自然の機能、之れは中毒の爲めと分けなくてはならぬ。之を分けるには正式に解剖、生理、病理などの一定の學問を履んでやらなければ到底分る譯のものでない。たとへば腹が痛い、熱があるといつても其原因は無數にあるから、之を鑑別せねばならぬ。素人と醫者との違ふ所はそこにある。治療に際して正確の診斷を要する點もそこにある。何でも一つの療法で萬病が直るのは素人療治得意の壇場で、素人療治は全く萬能の觀がある、これが間違の頂上である。殊に此頃流行のいろ〳〵の非醫學的療法、抵抗療法とか、靜座法とか腹式呼吸とか云ふものは、其の根本たるべき解剖、生理等の理論に誤謬がある。素人は一寸耳を傾けるかも知れぬが、少しく醫學の知識あるものより見れば捧腹すべきことばかりである。素人療治の所謂人體の機能とか自然に協ふとか云ふとは、之を聞て見ると極く單純な事で、決して解剖、病理、生理などの學理に根據を置いたものでないのである。西洋でも、殊に獨逸な

作つて盛んに活動をして居る。其云ふ所によると、病氣は自然の良能で直せるものであるから、今日の醫者のやつて居ることは迂遠である。間違つて居る。藥品は入らぬ、水とか、空氣とか、食物とか云ふもので十分に直せると云ふのである。之は今日我國で行はれて居るいろ／＼の素人療法よりは進んだものがあるが、その自然の良能によると云ふことは間違でないとしても、其所謂自然の良能と云ふものは如何なるもので、之を助けるためにはどうすればよいかと云ふ事になると、どうしても解剖、生理、病理等の學說を明かにした上でなければ、決して正當に行はれ得べきでない。只飯を食へば腹が膨るゝと云ふやうな事を、自然の良能と云ふやうなことでは、決して本當の治療が出來るものでない。獨逸の自然醫は普通の醫者を貶して學校(スクール)醫(アルツト)と云つて居る。けれども其人等のやつて居る所を見ると一向に診斷をしない。病氣の診斷即ち病氣が如

い。然し醫者の診斷の能力にも素より一定の限りがある。殊に多數の醫者は良醫ばかりでない。從つて診斷の正確でなく、治療に當を得ないものも尠なくない。それが爲に、治療を罷めて放つて置いて却て直る場合がある。又醫者を變更して、藪醫者に罹つて却て直ることもある。然し之れは醫學の罪ではない、畢竟醫學をやつて居る醫者の罪で、それを擧げて今日の醫學を罪することは出來ぬ。又た醫者の知識の足らぬ爲めに、治療の方法が自然の良能を妨げて却つて病氣をわるくすることがある。狂句にも「醫者殿の不自由な里の賀振舞」といひ、又病に臨んで藥を用ひざるは尙ほ中醫を得るに勝れりなど云ふ語もある。之は實際あることで醫者の技術がまだ下手な際に免れぬ現象である。然し之を以て直ちに非醫者の技術を推稱するのは大變な間違である。我邦の非醫者でも、獨逸の自然醫でも、彼等の方法は一つの療法で萬病が直る。例へば紅療治、

催眠術、腹式呼吸、靜座法、抵抗療法、菜食療法など云ふものは、それをやると何病氣でも直ると云ふやうな事を云ふ。こんな事は決してあるべき筈のものでない。又一つ不思議な事はどう云ふ關係か分らぬが、非醫者にかゝつた時は、結果のわるい時の事は云はずによい方ばかりを云ふ。醫者にかゝつた時は其れとは反對に、よい時は云はずにわるい時ばかりを云ふことが多い。之は多分一方は醫者にかゝれば屹度直ると思つたのが直らなかつた爲めに其怨を云ふのに反して、一方は詰らぬ事をやつたと云ふ事を耻ぢる爲めに隱すのかも知れぬと思ふ。

我國の狀態で憂ふべきことは中等以上の學識、地位、名望のある人々が、非醫者にかゝり易い事である。私の知つて居る限りに於ても、學者、政治家、軍人等の錚々たる人にして、紅療治だの、氣合術だのにかゝつて居るものが可なりに多い。全體醫者の技術が下手な爲めに、本當の診斷が出來ず、從つて本當の治療も出來ず、爲めに却つて何もしない場合の方が効能のある場合がいくらもあることは、前に言つた通で、非醫者のは、恰度何もしないのと同じ事なのであつて、非醫者で直るのは、詰り何もしない時に直つたのと同じ理窟になる。勿論、一定の方法で直ると病人が信ずれば其信念より來る効能も無論あるけれども、これは固より精神的の苦痛で、肉體の病氣が直ると云ふ場合は極めて尠ないのである。詰り非醫者のやることは、方法そのものは藥にもならぬ代りに毒にもならぬのである。但しその爲に本當の治療を施すの時機を失ふといふことが弊害の大なるものである。若し彼等が、普通の醫者が用ふるやうな、時として毒にもなるやうな藥物でも用ゐたら、それこそゴロ／＼人を殺すに極まつて居る。何故我國の中流以上の社會にこんな不合理な非醫者の治療などが流行るかと云ふに、其主もなる原因は、我國の人士の知識に缺陷がある爲と余は思ふ。例へば、法律家は法律の外に何にも知らず、工業家は工業の外に何にも知らず、醫者は醫學の外に何にも知らず、と云ふやうな風で、我邦の人には自分の專門の事

以外には殆んど何等の教養がないものが今日多數である、殊に身體に關する知識は總ての階級に著しく缺如して居つて、自分の胃がどうなつて居るか、腸がどうなつて居るか、腦がどうなつて居るか一向に知らないものがある。詰り身體の事に關して殆んど常識さへも有つて居らぬ有樣であるから、非醫者の云ふ事でも判斷が出來ずに乘り込むのである。之は今日の教育の缺陷を非醫者流行の一事に暴露したものとも云へる。責めて今日の中學程度の知識でもあれば、非醫者に惑はされることも少からうが、今の四十以上の人には身體の事に關して全然何等の知識もないものが多い。其結果病氣にでも罹ると、いろ／＼の迷が出て煩悶が出て、何でもよいからやつて見ようと云ふやうな氣になる。非醫者は即ち其虚に乘じて自己免許の萬能療法を述べ立てるのである。我々から見ると治療に對する我國の精神狀態は明かに一種の百鬼夜行の圖であつて、我國文明の缺陷、不體裁が最もよく此の一事にあらはれて居ると思ふ。どうか一日も早く醫學上の知識を普及さして、今日の如き憂ふべき非醫學的な治療法などを無くしたいものと思ふ。（四月十一日述）

次號の公論欄には
ナショナリズム……田中王堂
と題する長篇論文を掲げらるべし

歐洲動亂史論（五）

吉野作造

伊太利の起否

▽伊太利の態度

今度の戰爭で一番妙な地位に立つて居るものは伊太利である。從つて伊太利の態度は最も世間の注目を惹いて居る。彼は三國同盟の一員として戰爭開始當時は獨墺の爲めに起つかも知れないと思はれて居つたが、今日では最早や斯く考ふるものは一人もない。國内に於て主戰論が盛んであると云はれては居るが、それがどつちの爲めに戰ふのかと云へば無論英佛の味方としてである。最近、才色兼備の譽高く羅馬の王室にも覺めでたしと稱せらるゝ伊太利名門の婦人を妻として、同地の社交界にも少からぬ勢力を有する獨逸帝國の前宰相ビユーロー公が、新に任を駐伊大使にうけ、來りて頻りに其辣腕を揮つて居るさうだけれども、伊太利が獨墺側の味方として起つだらうと云ふ事は斯くても最早や問題にはならないやうだ。同國が英佛の側に好意を有して居るとは今や一點の疑も容れぬのである。けれども伊が果して兵器を執つてまで英佛に加擔するだらうかどうか、假りに加擔することゝありとすれば其の起つの時期如何は今の所甚だ漠然として居る。然ら

世間では、伊太利の首鼠兩端の態度を執つて居るのは、兩交戰團體間の形勢を觀望して居るのであつて、最も自分に都合の好い潮合を見て洞ヶ峠を下らんと欲するのであらうと云ふ風に見て居る者もある。けれども予の考ではどうもさうではないやうだ。その故は伊太利が此上何時までも中立の態度を續けて居るといふ事は、決して同國にとつて利益とする所ではないからである、伊太利が獨墺に對しては三國同盟の表て向きの義理に背き、英佛兩國に對しては最近十數年來の親誼を顧みず、双方に向つて援けるでもない援けぬでもない煑え切らぬ態度を取つて居るのは、將來世界に於ける自國の地位を全然孤立ならしむる倶あるものであつて、後害實に測るべからざるものがある。さればこそ民間に於て主戰論が非常に盛んなのであらう。後にも說くが如く、同國の平和主義の新聞ですら主戰論を鼓吹して居るものがある位だ。而してそれにも拘らずではあるまいか。此等の點を予は之より本號に於て研究せんと欲するのである。

三國同盟の內容は今日尙不明である。從つて同盟條約上の義務として、伊國は今度の戰爭に對し如何なる態度を採るべきであるかと云ふことはよく分らない。或人は獨墺兩國の双方若くは其一方が、第三國より攻擊を受けたる場合に於てのみ伊國は之を援くるの義務がある。換言すれば獨墺が進んで攻擊的戰爭をなす場合には伊に援助の義務が無いと解し、以て伊國今日の態度を說明し得たりとするものがある。假りに同盟條約の文字上の解釋が右の如しとすれば、今度の戰爭が獨墺にとつて單純な防禦的の戰爭でない限り、伊太利は法律上援助の義務が無いに相違ない。けれども眞實同盟の誼を深くして居るものならば、徒らに文字の末に拘泥し、乾燥な法律的解說を楯として、危急存亡の淵に立てる友邦の困難をばあの儘座視するといふこと

は出來やうか。假令國と國との間柄は個人間の道德觀念で律することは出來ないとしても、本當に仲のいゝ間柄なら、此際伊國は必ずや一臂の勞を獨墺に捧ぐべき場合であるまいか。而かも之を敢て爲さず、徒らに文字の末に拘泥して援助の道德的義務を辭するとすれば、是れ畢竟世の歷史家も既に屢々說きしが如く、伊國は今や獨墺と親まずして寧ろ英佛と親善の關係に立つて居るからであらう。

元來伊國は英國とは昔から親しい關係にある。此事は深く究むるまでも無い。佛國とは十九世紀の後半段々仲が惡くなつて、其爲めに獨逸の誘ひに應じて三國同盟に入つたのであるが、併し近年は再び之に接近して來て居る。殊に二十世紀に入つてからは、伊佛反目の古い原因は段々に消滅し、一九〇四年佛國大統領ルーベーの伊國王室に公式の訪問をなすに及んで、兩國親善の關係は其の絕頂に達した。此時ルーベーの伊國訪問は羅馬法皇廳の激烈な反對に逢ひ、遂に佛國は其爲め法皇廳から國交斷絕を宣言されたことは人の知る所である。法皇廳が伊太利王室と反目し、伊國王室に禮訪を致すは則ち法皇廳に對する敵意の表示なりと爲して、多年法皇廳と交親ある國家の元首に、伊國王室往訪の禁を强ゐ來りしことは、今更事新らしく茲に之を說かぬ。只吾人は佛國の政府が斯くの如き重大なる犧牲を拂つてまで伊國の宮廷に敬意を表したといふ事は、此の兩國が此時如何に親密の關係にあつたかを明に語るものである事を了解し得れば足れりとする。且つ又是より先き一九〇二年六月二十八日三國同盟の條約が更新せらるゝに方つて、伊國は特に佛國に向つて「伊國は同盟國の一つが他より侵擊せらるゝ場合には、其一國に對し同盟の義務を盡すべしと雖も、同盟の一國より佛國が攻擊さるゝ場合には、伊國は其一國を援けざるべし」と宣言したとさへ傳へられて居る。果して然らば三國同盟に基く伊國の援助關係と云ふものは佛國に對しては最早適用がないと云つてよい。人或は「佛國を攻擊さるゝ場合」と云ふ文字を取り、佛國の攻擊者たる場合と被攻擊者たる場合とを區別し、後者の

の主意なりと論ぜんとする者もある。併し斯くの如き區別を爲すは學者机上の空論であつて、實際上どつちが攻擊者であるかと云ふ事は容易に論定することは出來ないものである。個人の爭でも、甲が溫厚なる乙に向つて罵詈讒謗を逞うし、遂に乙の怒を挑發して喧嘩となつた場合に、此喧嘩の始め手は乙であると云つて甲は被攻擊者たるの利益ある地位を占むる譯には行くまい。「佛國が攻擊さる場合」と書いてあるのは、只文字の綾であつて、實際に於ては伊國は絕對に佛國とは干戈の間に見えないと云ふ約束をしたものと見てよい。此の事はなほ翌七月三日、外相デルカッセの下院に於て爲せる答辯に依つて明かとなつた。曰く伊太利の政策は、彼が三國同盟の一員たるの故を以て、毫も直接間接佛國に對抗せんとするものでない。如何なる場合に於ても、如何なる形式に於ても、伊太利は佛國に對する攻擊の道具となることはなからう。デルカッセはを立て直すに最も盡力した外交家である。其外世間にはまだ公表されて居ないやうであるけれども、對岸のトリポリーについてはその頃伊佛の間に秘密の協約が成立し、以て伊國が三國同盟に入るの原因となつた伊佛兩國の反感は、玆に全く一掃されたと云はれて居つたではないか。この事は後にまた說くが、要するに近年に於ける佛伊の親睦は、歐洲の外交界に於て最早爭ふべからざる一大事實であつたのである。

之に反して肝腎の同盟國たる獨墺に對しては、伊國は決して親善の關係には立つて居ない。墺國と伊國とが歷史的に甚だ仲のわるい關係に在ると云ふ事は、今更ら云ふを俟たない。後にも說くが如く、伊人は墺國からは古來隨分イヂメられたのである。今日でも墺洪國領內の伊太利民族に對して墺國政府の加ふる政策は常に伊國人の憤慨して已まざる所である。されば伊の墺に對して有する宿怨は實に根柢の深いものがあると

云つてよい。獨逸に對しては歷史的には何にも反感と云ふものはなかつたが、近年段々仲がわるくなつて來た。一つには獨逸が三國同盟と云ふものを近來餘りに自國の野心を遂ぐるに利用せんとしたと云ふ事もあらうが、モ一つは彼のトリポリーの戰爭に於て、獨逸が陰に陽に土國を援けて伊國を抑ふるの方針をとつた事が原因だらう。其上伊が段々英佛と親善の關係を深うするに連れて、自ら獨逸を厭ふやうになるのは亦已むを得ない。それで近來は獨逸に對する反感がなか／＼盛んである。之等の事はなほ後に詳く說かう。

斯く考へて見ると、三國同盟の條約は、伊國に取つては今日殆んど一片の空文に過ぎないものとなつた。國民全體の感情は已に疾うの昔に獨墺を離れて英佛に着いて居つたと見てよろしい。されば墺塞危機切迫の當時、政府部內に於ては當時の外相は親獨主義者として知られたサン、ヂリアノ侯なりしに拘らず、獨墺と相呼應して起つべきや否やは、始めから問題とならず直に嚴正中立を宣言することに一決したと傳へられてある。而かも民間に於ては當初から獨墺側を援けると云ふ考の毫頭無かつた事は最も明白である。されば八月七日獨逸政府より「獨墺に味方すべきや否や」の最後の決答を促された時にも、伊國政府は「飽くまで嚴正中立を維持する旨を聲明する」の外他に途が無かつた。況んや十月十六日サンヂリアノ侯死して新に親英派のソンニノ氏外相の印綬を帶ぶるに及び、政府部內までが著しく三國協商側に傾いたといはるゝに於てをや。

政府の方針としては兎も角も嚴正中立である。けれども民間では此際英佛に味方して獨墺に當り、殊に此機會を利用して、多年の懸案たる伊人在住の墺洪領地方の合併を決行すべきことを主張するものが中々に多い。民間の主戰論は今日益々盛んのやうであるが、開戰當時は既に如何に盛んであつたかと云ふ事は、同國に發行する有名なる平和運動の雜誌「國際的生活（ヴイタ・インテルナチオナーレ）」までが次のやうな排獨墺的意味の論文を掲げた事によつても分る。曰く

帝は、遂に主戰黨の壓迫する所となつた。……獨逸の露國及び佛國に送れる最後通牒も亦、其の暴戾の程度に於て墺國のそれに讓らない……以上獨墺の行動は、露國の軍備擴張の事業未だ完成せざるに乘じ、殊更に戰を挑んで私利を計らんとするものである。……伊國は塞國に對する最後通牒及び其後の出來事につき、同盟國の何れの一方よりも何等の相談を受けない。從つて伊國は德義上彼等に味方をしなければならぬ義務を負はぬ。三國同盟設定の本旨は專ら平和の機關たるに存し、侵略の目的の爲めでない。加之伊國の巴爾幹に於ける利害關係は、正に墺國のそれと相反して居る。吾人は現狀の維持を欲する。獨墺はスラヴ諸國の發達と其獨立とを恐れ、之を打破せんとして已まないのである。(一九一四年九月「英國評論之評論」より)

然らば問ふ、**排獨墺乃至主戰論が斯くの如く盛**であるのに、**何故政府が意を決して起たないか**。之が一つの大疑問である。或人は經濟上及び軍事上の準備が不十分であるからだと云ふ。同國の經濟財政狀態が近年著しき進步を遂げた事は世人の認むる所だけれども其の眞の實力の程度に至ては今日尚一の疑問たるを失ふまい。又或る人は伊國は中立國たるに依つて至大の經濟的利益を享受して居るからだといふ。併し中立國たることが夫程伊國の利益ならば、主戰論のみがあんなに盛んに主張せらるゝ譯が分らない。又或る人は伊國は戰爭に參加しなくとも或る一定の利益は得られ又參加したからとてそれ以上の旨い事は出來ぬといふ之は餘りに穿ち過ぎた說だ。伊國はトレンチノ以外に更に大に領土を擴張し得るの見込ありやは疑あるけれども、之とて戰爭に參加することなくして容易に得らるゝか如何かは問題である。予の考ふる所に依れば、伊國の中立維持は決して伊國の利益ではない。夫にも拘らず伊がオメ／＼奮躍の機會を捉へ得ずして居るには、他に何等か重大の理由ありと觀なければならぬ。而して予はこの主たる原因を尋ねて、遂に同國多數の人民の上に精神的に大勢力を有つて居る法王廳か何處

までも伊國の戰鬪參加を希望せざるの事情に在ると揣摩するに至つた。元より之は予の一個の私見であるが何故斯く考ふるかと云ふ事は、尙之から段々と說いて見ようと思ふ。

▽伊太利と三國同盟

前にも述べた通り、伊國の三國同盟に入つて居るのは本來甚だ不自然である。先づ獨逸との關係を見るに獨と伊とは、經濟上からも政治上からも本來互に其利害關係を密にして居ると云ふ譯ではなかつた。今日も大體同樣である。勿論別に利害關係を異にして居ると云ふ程の事もなかつたが、同盟を結ぶ程の親密の關係と云ふものは實は全く無かつたのである。若し夫墺國との關係に至つては、十九世紀の前半殊に、彼の保守專制の笞が絕えず伊國の自由運動者を苦しめたと云ふ歷史に富んで居る。否自由統一の運動者のみではない北部在住の伊太利民族一般は實に墺國の壓制の下に苦しめられたのである。殊にロンバルヂーやヴエニチヤに於ける墺國官吏の殘酷なる所行は、今日でも尙伊國人の腦裏に鮮かなる記憶を印して居る。されば伊太利の獨立運動の一つの目的は實は墺國の羈絆を脫せんとするにあつた。かくて伊國人は墺國に對して怨みこそあれ、何等進んで相親しむべき理由はなかつた。である。又兩國の經濟關係を見ても何等一致調和の點がなかつたのみならず、伊國人の國民的理想とも見るべき所謂「イタリア・イルレデンタ」の運動は、更に著しく兩者を阻隔するの種となつて居る。「イタリア・イルレデンタ」とは「受け戾されざる伊太利」といふ字義を有し、現に伊國の領外に在りて而かも伊太利民族の主として在住する地方、例へば今度の戰爭でも問題になつて居るトレンチノや又はトリエスト附近の沿海地方の如きを、伊太利王國の主權の下に包容せんことを目的とする、謂はゞ大伊太利主義とでも云ふべき思想乃至運動である。此等の地方は本來統一せられたる伊太利の一部たるべきものである。夫れが領外に離れて居るのは不都合だから何れ其中伊國に受け戾さなければ

ども、思想としては人民の全般に行き渡り、いはゞ國民的の理想と云つてもよい。斯くの如き理想が國民全體の間に行き渡つて居るとすれば、墺國と伊國とは平生互に警戒すべき地位にあるは無論である。殊に伊太利北境の墺領トレンチノに至つては、伊國の軍略上から見て到底之を收めねばならぬものであつて、此方面には從來兩國の葛藤は屢々あつた。斯くて墺國と伊國とは今の所到底親善の關係に立つことは出來ないのである。而して斯くの如き國々が一個の同盟條約を締結して居ると云ふのは、どう見ても之は不自然な緣と云はなければならぬ。

　然らば何故に伊國が斯る不自然なる同盟を結んだかと云ふに、之は一に佛國を怖れたと云ふ事にある。此事は普通の歷史にも說いてあるから悉しくは玆に述べない。只一言話の順序として申せば、伊國は大體次の二つの事情からして佛國と非常に反目したのであつた。

ニア王朝が大體半島統一の事業を全うして、フロレンスに於て初めて統一的伊太利の王冠を戴いたのは一八六〇年である。けれども此時伊太利半島は未だ完全に統一されたのではない。何となれば當時羅馬法皇は佛國の保護の下に附近の土地を領有して自ら獨立の一國をなして居つたからである。此法皇領をも合併しなければ伊國の統一と云ふものは完成しないのであつた。而して之を完成するには佛國が羅馬市保護を名として駐屯せしめて居つた一隊の兵士を何とか處分しなければならぬ。然し佛國を敵として戰ふ事は當時實は伊國の得策とする所ではなかつた。のみならず伊國は又其統一の目的を遂行するについては隨分佛國に負ふ所が多かつたのである。那翁三世が墺國を押し除けて伊國に自家の勢力を張らんと欲して居つたのに乘じ、カヴールが巧みに彼に取入つて其援けを求めたのであるとはいへ、那翁三世は少からず力を入れて伊國の統一を

援けたのである。只彼は羅馬法皇領の滅亡だけは到底之を伊國に許さなかつた。斯くて伊國は怨を呑んで佛國兵の羅馬駐屯を默諾せなければならなかつたのである。伊國は陰忍して其機會の到るを待つて居つた。而して其機會は遂に一八七〇年の夏に到來した。即ち年の七月那翁三世は普魯士と開戰し、爲に羅馬駐屯の兵を引擧るの餘儀なきに至つた。九月二日セダンの敗報を得るに及んで、伊國王は初めて意を決し、七日軍隊に令して羅馬法皇領內に侵入せしめ、先づ軍略上の要所を占領し、九月十四日遂に羅馬市を包圍し、廿日目出度く占領を舉つた。此事は那翁三世の沒落後に至るまでいたく佛國の感觸を害した。佛國の舊教徒中には後日羅馬を伊國より奪回すべしと云ふやうな議論もあつた。無論今日ではそんな議論はない。伊國政府も亦羅馬の奪回を懸念するの心配も全然ない。けれども一八七〇年代に於ては伊國は之を懸念すべき理由があつたのである。之れ第一の理由。次に第二に伊國と佛國とはチュニスの問題に就て非常に感情の離反を來たした。

チュニスの問題はいはゞ伊國對岸の北亞弗利加に於ける伊佛の勢力爭ひと見てよろしい。國が近い丈けに亞弗利加の北岸に於ては伊國は當時すでに相當の經營をなし、又相當の勢力を有つて居つた。是れ固より云ふを俟たぬ。佛國も若干の移民を地方に送つて居つたのであるが、併し政府としては從來餘り顧みなかつたである。抑も佛國の亞弗利加北岸の經營はアルゼリアの占領を以て初まる。アルゼリアは十九世紀の初め頃は海賊の根據地として知られて居つた。其が佛國と交渉あるに至るのは一八二七年を以て初まる。此年佛國の領事アルゼリアに於て土民の凌辱を蒙つたと云ふ事件がある。此事件を口實として一八三〇年時の政府は此地に遠征軍を送つたのである。時の政府は暴政を以て名あるチャールス十世の政府である。五月十六日政府は憲法の條規を蹂躙して議會に解散を命じ、新たに總選擧を行ふ際、其總選擧に利用せんが爲めに三年前の領事凌辱事件に口實を藉りてアルゼリア遠征軍を派遣したのである。然るに豫期の如く捷報到らず、爲めに當初の目的とは反對に、却つて此事が選擧競爭上政府の不利益となつた事は人の知る所である。政府は軍隊の上陸と共に忽ちアルゼリアを占領し得るものと思つたのであつたが、土民はなか〳〵頑強で、一勝一敗長く方が附かず　約七年間は佛軍の方却つて屢々敗けて居つた。それより漸く段々に勢を盛り返して四四年頃から略ぼ占領の實が舉り、それから更に三年を經て一八四七年十二月初めて全く確實に佛國は占領台件を完うすることが出來た。當時佛國は內紛

[redacted]星霜を費やしたのである。其後佛は久しく亞弗利加の經營には手を擴げなかつたのである。今伊佛關係の問題となつた居るチュニスは此のアルゼリアの東隣に位する地方であるが、之も久しく佛國の顧みる所とならず、歐人としては主として伊太利民族の來住する所となつて居つた。是地勢から云つても然あるべき所である。一八七〇年代には伊國人の來住する者三萬を超え各所の都合には伊太利街ゝ多く出來、伊太利人の新聞紙行なども少からず設けられてあつた。去れば法律上は土耳其の領分であつたが、當時各國は皆此地を伊太利の勢力範圍と許して居つた。伊太利人中にはチュニス北岸のビセルタを伊國將來の軍港たらしむべしなど論ずるものさへあつた位である。然るに一八八一年其處へ突然佛國が入つて來た。而かも忽ち之を占領したのであるから、伊國は非常に憤慨したのである。尤も之はビスマルクの策略に乘せられたと今日では云はれて居る。その次第は先きにビスマルクは新興獨逸帝國の地位を確實鞏固ならしむる爲めに、一八七九年十月獨墺同盟を締結し、以て北は露國に當り、南は佛國に當ることにした。併し獨墺同盟の効力を十分に發揮せしめんが爲めには、尙伊國の力をも藉るを必要とする。於是彼は伊國の歡心を買はんが爲めに、密かに伊國首相に說き「佛國今やアルゼリアよりチュニスに手を出さんとして居るから、貴國先づ機先を制して其勢力範圍たるの承認を公に各國に求めては如何、其場合には我國は固より貴國の後援たるを辭せぬ」と勸めたとのことである。伊國はチュニスの自國の勢

[redacted]するまでもなからうと考へて、ビスマルクの勸告を容れなかつた。是に於てビスマルクは更に他の方法を工夫し、伊國の排佛心を挑發して我が味方に之を誘ふの手段をめぐらした。即ち老猾なる彼は英國を介し佛國に勸むるにチュニス占領の決行を以てした。昨日は伊太利に之をすゝめ、今日は佛國に同じ事をすゝめる。縱橫の奇策端倪すべからざるものあるが、此第二策は實に獨逸に取りて二重の利益を供するものであつた。即ち一には佛をして對外問題に意を轉じて獨乙に對する舊怨を忘れしめ、二には伊と佛との仲を惡くし伊をして佛の敵なる獨に依らしむるを得ることと處れである。扨て佛國は此勸告に接し好餌逸すべからずと爲し、陰に時機の到るを待ちつゝあつたが、偶、八一年三月下旬にいたり、チュニスの土民事に依りてアルゼリアに侵入したといふ事件が起つた。佛國乃ち之が討伐を名として四月下旬數萬の軍をチュニスに送つた。五月早くも之を保護國とするの宣言を發表した。是に於て伊國は果して非常に佛國の行動を憤り、且つチュニスの占領は則ち伊國の死命を制するもの、之を默視すべからずとの議論もあつて、兩國の關係は非常に緊張し、一時正に戰端を開かんとするの有樣に立ち至つた。こゝにビスマルクが乘じて巧みに伊國を誘ふたのである。且つ此際一片の風說ではあつたが、羅馬法王は此機會を利用し、佛國の援けを藉りて羅馬市の回復を計るべしとの報道もあつた。尤も之は後にビスマルクが言ひ觸らした流言に過ぎぬと云ふ說もあつたが、併し當時の羅馬法王は七八年に即位したレオ十三

世と云ふ近世稀なる政治家肌の偉人であつたから、建國間もなき伊太利としては、餘程之を怖るゝの理由があつたのである。之が爲に伊國がビスマルクの策略に乘つて、一八八三年一月獨墺兩國と祕密條約を訂して、所謂三國同盟に入つた直接の原因と云はれて居る。

斯う云ふやうな特別の事情があつて、伊國は不自然ながら獨墺と同盟の關係に入つたのである。同じく不自然な同盟でも、同盟に入つたと云ふ事の結果として、後には段々に親善の關係を開拓し、經濟上の利害の一致も發展すると云ふやうな事は、他に往々にして其例を見るのであるが、伊國對獨墺の間には不幸にして斯の關係も甚だ薄い。故に今日になつても引き續き此三國を連結さして置くべき理由と云ふものは依然として甚だ薄弱である。而して伊國をして強いて獨墺に結ばしめたものは、佛國の壓迫を恐るると云ふ事情の外には何にもないのであるが、然らば此佛國の壓迫を恐るゝと云ふ關係は、今日でも繼續して存在して居るかと云ふに、幸か不幸か斯の事情は今日全く消滅して了つた。して見れば今日では伊國の依然として三國同盟の一員たるの理由は殆んど無いと云つて可いのである。尙佛國と伊國とは近年相親近して、最早伊國が佛國を怖るゝの必要のなくなつたと云ふ事情は簡單ながら後に說かう。扨て伊國が佛國を怖るゝの事情の消滅した事は致し方がないとして、若し之と共に伊國と獨墺殊に墺國との歷史的反感も亦段々薄らげばまだしもよいのであるが、不幸にして此關係は今日に至るまで更に薄らがない。否却て近年に至つて益々其反感を深くして居る傾がある。其理由には色々ある。例へば羅馬占領以來伊國政府と羅馬法皇廳と相反目して居るの事情は、自ら天主教に熱中する墺國の官民を驅りて法皇廳に同情し伊國の政府に反感を懷かしめたるが如きも一つの理由である。中にも故の皇儲殿下の如きは熱心なる舊教徒として伊國を嫌ふこと夥しかつた。加之殿下の帝國主義的政策は自ら伊國の東方經略の方針と衝突し、彼は常に伊國に反抗するの策を執り、其軍備の計畫の如きも常に伊國を一方の假想敵として立てゝ居つた。少くとも伊國に於ては斯く認められて居つたのである。之も一つの理由たるを失はぬ。二十年此方、墺伊兩國がアドリアチック海方面に於て、政治經濟上の利害關係を異にするに至りしも亦看逃すことが出來ぬ。伊太利は始め專ら亞弗利加の經略に力を注いだのであるが、一八九六年アビシニア遠征の失敗以來は、更に眼をアドリアチック海方面に轉じた。之より伊は墺の利害と直接に衝突することゝなつたのである。伊太利が近年如何に東方海陸の防備に手を盡したか、墺が之に應じて如何に西南方面の軍備の充實に心を碎いだかを知る者は兩國最近の反感は到底昔日の比に非ることを了得するであらう。去の一九〇八年墺國當時の外相エーレンタールが、サンジヤク鐵道を提げて起つや、伊は獨と共にヒドク激昂したるが如きも、ツマリ這般の消息を語るものである。猶此第一の點即法皇廳と墺國との關係に就ては一言注意したき事がある。それは法皇廳では伊國を憎むの餘り、墺伊の接近を遺憾とし、常に三國同盟の破滅を希望し且計劃して居つた者もあるが（例へば先々代の法皇レオ十三世の下に國務卿を勸めたラムポーラの如き）、墺國人民は

敎の者は三國同盟破壞の政策を執ることを以て、法皇廳の爲めに甚だ遺憾なりとしたやうであつた。但し之は政治上の見解である。國民の感情から申せば、法皇廳が伊國の政府を敵視して居ると云ふ事は、大體に於て兩國の親善なる關係を沮害するの原因となつたことは疑ない。況んや墺領時代の壓制の記憶と大伊太利主義の要求とは、今日尙國民一般の腦裏に鮮明に畫かれてあるに於ては、此兩國に親善なる關係を恢復するといふことは到底近き將來には出來ないのである。去る一九一一年三月十七日、伊太利國の花々しき盛儀を整ひて建國五十年の祝を行つたとき、各國の議會は伊國の議會に向つて皆祝電を發したるに、獨り墺國の議會のみは、同盟國のよしみあるに拘らず、祝電の發送をしなかつた。是れ天主敎主義諸黨派の反抗を恐れたるに直接の原因を置くとはいへ、亦以て兩國の隔意ある所以を明に語るものであるまいか。

伊國と墺國との關係の極く古い事は暫らく措いて問はない。先づ十九世紀の初め頃の形勢から觀察するに、當時伊國民族は墺國のメッテルニッヒのお蔭で、非常に苦しんだのである。メッテルニッヒの對伊政策の根本は、伊太利全半島を墺國の支配の下に置かうとするにある。其爲めに彼は伊國の統一を欲しない。彼は自由の敵であつて、在來の權力に反抗する總ての運動に敵意を有つて居つた事は云ふ迄もない。彼は半島の住民全體に芽を吹いた國民的精神の勃興は極力之を抑へんとした。維納多の小國に分割せられ、而かもロンバルヂー、ヴエネチヤ兩國の王位は墺の皇室に歸し、ミラン、タスカニー、モデナー及びパルマーの如き亦悉く墺國皇族の君臨する所となつた。若しもサルヂニアの王が露國皇帝の援を以て斷然不同意を表することがなかつたならば、メッテルニッヒは恐らくハップスブルク家を盟主に戴く伊太利の聯邦を作つたであつたらう。斯くて墺國は半島に於て偉大なる勢力を振ひ、壓抑專制の政治を遠慮なく行つたのである。佛國革命時代に始まつた總ての改革事業は悉く廢止排斥せられた。ゼジュエットの如き反動的敎團は官憲の保護の下に復活した。敎育は敎會の手に歸した。些かでも自由主義の疑のある敎授は其れ丈の理由で其職を免ぜられた。言論出版の自由は非常の制限を蒙つた。自由愛國の志士は或は牢獄に投ぜられ或は國外に追放せられた。伊太利全土は密偵を以て充滿した。國内の旅行は嚴重に監視せられ、中にもロンバルヂー、ヴエネチヤの王國は、墺國の憲兵によりて最も嚴重に監視された。傳ふる所によれば、當時墺太利本國の所在の牢獄は、伊國の志士を以て充滿して居つたと云ふ事である。斯くの如き壓迫を加へたが故に、伊國人は公然と政治運動をなすを得ずして、段々に秘密の運動によつて其鬱憤を洩らさんとするに至つた。抑壓は失望を產み、失望は暴行を喚ぶ。伊國が今日仍ほ露國と共に世界に於て最も危險なる秘密團體の繁昌し、虛無黨的行動の策源地となつて居るのは、主として之が其

原因を爲すのである。マツチニーの如きは公然「墺國に對しては虛無黨的行動を執るべき」ことを說いて居るではないか。而して伊國人民の不平不滿は永く埋沒せらるゝを得ず、一度爆發するや遂に墺國の壓迫を斥くることゝなり、一八五九年並びに一八六六年の兩度に略ぼ墺國勢力を驅逐することに成功した。けれども過去の記憶は今日なほ伊國の子弟の心中から取り除く事は出來ない。何となれば今日の伊國人の父母若くは祖父母は、目のあたり墺國の壓迫の下に苦しんだ人々であるからである。斯くて伊國人は墺人に對しては先天的に憎惡の念を抱いて居るのである。

伊太利の國民は第十九世紀の半ばに於て半島上より墺國の勢力を大體驅逐し得たが、併し主として伊太利人の棲息して居る地方を悉く新王國に併せ得たのではない。所謂伊太利人地方にして今日尙墺國の領分に屬して居る所のものがある。卽ち伊國の北部に連る墺領チロールの南部、伊國人の所謂トレンチノ地方及び伊國の東北部より東の方に走れるアドリアチク海に面せる墺洪國の沿岸地方是である。伊國人は此等の地方を時機を見て伊國に合併せんことを希望して居るのである。トレンチノには伊國人の在住するもの三十八萬人に及び、全住民の約九割を占めて居る。言語は固より伊太利語のみが行はれて居る。アドリア沿岸地方はトリエスト附近の八割弱、フイーム附近の五割弱よりイストリアの四割、ダルマシアの一割に至る迄を通算すると合計四十萬の伊人が居る。此地方でもまた主として伊國語が行はれて居る。伊國人が此等の地方をも併合せずんば伊國統一の理想は未だ完成せるものと云ふ能はずと主張するのは一應の理由はある。況んや近年墺國はいろ／＼策略を廻らして、此等地方に於ける伊國人の勢力を抑ふるに腐心して居るに於ては、伊國の方では躍起となつて一日も早く此等の地方を回復せんとあせるのは寧ろ之を諒とすべき事情もある。一體伊太利民族の伊國以外に在住して居るのは、前記の二つの地方のみに止るのではない。其外に佛國では地中海沿岸の伊國西隣なるニース地方、瑞西では伊國の北部に連るチシノ州、又島では佛領コルシカ、英領マルタに少からず伊人が居る。然るに伊國人の中には、伊太利統一の完成といふ立場から、コルシカ、ニースを佛國より奪ひ、チシノ州を瑞西から取り、又マルタ島を英國より貰はうと云ふやうな議論を吐くものは唯の一人もない。所謂「イタリア・イルレデンタ」の運動の向ふ所は只墺洪國の領分に對してのみである。之は甚だ奇怪な話と云はねばならぬのであるが、其因て來る所を見るに、詰り一つには佛、英、瑞の領內にある伊人は頗る自由幸福の生活を營み、政治上、經濟上立派に發展して居るのに反して、墺洪領內の伊國同胞は虐待を受け、頗るミジメな生活を營まされて居ると云ふのと、も一つは、墺國が歷史的に伊國と反目して居ると云ふ事に歸するのであらう。要するに伊國人は今日、墺洪領內の伊民族在住地方に向つて、恰度大塞比亞主義と異曲同工の陰謀――程度の差はあるが――を廻らして居るといふべきである。從つて墺國も之を默過する譯には行かぬから、塞國人に對すると同じ態度を以て伊國人に臨まざるを得ない。從つて墺塞兩國民間に

墺洪國が今日現に其領内の伊太利民族に對して施す所の政策は、獨り其領内の伊太利民族のみならず、また伊國内の伊太利人をも憤慨せしめて居る。墺國は其領内の伊國人を目するに危險なる謀叛人を以てし、武力を以て之を抑壓するの方針を執り來つた事は、第十九世紀の初め以來今日に至るまで變らない。トレンチノ及びトリエスト、フユーム地方は、墺國から宛かも征服地の如き取扱を受けて居る。多くの兵營はアチラコチラに設けられた。而かも其中に居る軍人は主として非伊太利民族である。大體から觀察をすると、トレンチノにあつてはゼルマン民族を招來することによつて、又トリエスト、フユームの地方に於てはスラヴ民族を招來することによつて、伊太利民族の勢力を挫かんとするのが、墺國政府の政策らしい。此等の點については本年一月の「エヂンバラ評論」のアルガー・ソロルド氏の論文及本年二月の「英國隔週評論」のポリ

伊兩民族の反目關係を明かにしよう。

前述ぶる如く、墺洪國領に屬して而かも伊太利民族の在住する處は、南チロールの山地々方とアドリアチク海西岸の沿海地方とであるが、此兩地方は自ら少しく面目を異にする所あるが故に、之を別々に論ずるの必要がある。先づ沿海地方から說き始めんに、伊太利民族の行き渡つて居るのは、伊國に隣接するゴリッツア・グラヂスカより起り、トリエスト市、イストリア州を經てフユーム市を過ぎり、クロアシア西岸をかすり、更に南下してダルマシアに及んで居る。頗る復雜した部分から成つて居る。其中ゴリッツア・グラヂスカの兩市は伊太利民族とスラヴ民族と相半して居るが、前者にはスラヴ族多く、後者には海岸に近い丈に伊民族が多い。トリエスト市は伊太利民族七割七分を占め、スラヴ族は二割に過ぎぬ。ゼルマン族は只三分で而かも官吏銀行家が其大部分を占めて居る。而してスラヴ

族は専ら郊外の田舎に住む百姓で、市部の富有にして勢力ある智識階級は全然伊太利族の獨占する所なるが故に、同市は外見も實質も純然たる伊太利市街といつてよい。旅してこゝに來れば身の墺領内に在ることを忘るゝ位の所である。街の名も伊太利綴りで、話さるゝ言語も伊語たること云ふ迄もない。イストリア州には人口三十五萬の中伊民族の總計は十五萬に出でぬ。約四割に當るが、彼等は主に沿岸の諸都市に密集して居るが故に、カポヂストリア、パレンツオ、ロビニヨオ、ポーラ等の重要都市のみを取れば伊人の割合は八割を超ゆる。都會は全然伊太利市街である。從つてイストリア州の實力ある階級はスラブ族に非ずして伊太利族なりと云はざるを得ぬ。クロアシア沿岸はスラブ族多數を占むれども、フユーム附近は伊人在住者四割八分に達する。且つ言語文物は全然伊太利の支配を受けて居る。ダルマシアに至ると伊人の割合最も少く僅々一割に過ぎぬ。但し伊太利文明の大に普及して居ること丈は爭ふことを得ぬ。以上を總括して大體の觀察を下すに、沿岸の都會地方には伊太利優勢にして、ヒンターランドの田舍地方にはスラヴ族優勢である。近年墺洪國官憲の公にする統計には、都會地方に於ける伊太利民族の増加率は年々減じつゝありとの事なれども、之は正確ではない。何となれば官憲では「所謂」都會の範圍を廣くし、從來田舍であつたものをも加へたから、其爲めにスラヴ族の割合を増したのである。事實伊太利族は決して衰へつゝあらぬとの事である。少くとも都會地方に於ける實際の勢力としては伊民族の勢は墺洪國の壓迫に拘らず隆々として居るとの事である。

偖て之等の伊民族在住地方に對して墺洪國官憲は如何なる政策を執つて居るか。言ふ迄もなく抑壓政治を施して居る。政府は之等地方の伊民族を獅子身中の蟲と見て居るのである。而して墺洪國政府は一八四〇年代の後半、伊太利本國に於て民族的觀念の盛んになつた頃から段々露骨に壓迫を加ふる樣になつた。墺國政府がトリエストの都に二萬人のスラヴ民族を移植して

半島に於ける最後の領地ヴェネチャを失ふに及び、更に一層右の地方を警戒するの必要を感じ、それから盛んにスラヴ人を援け、よつて以て伊太利民族を制するの方針を執るに至つた。此方針は今日でも尚繼續して居る。であるから一九〇〇年から一九一〇年に至る十年間に、墺國南部に於けるスラヴ民族人口增加の割合は、イストリア北隣のカルニオラ州に於ては僅かに三分三厘に止まるのに、トリエスト市に於ては十三割の多きに及んで居る。何か公共の事業などに人夫の入用のある時には、政府は必らずスラヴ人を連れて來る。鐵道の工事に於ても、築港に於てもまた例へば政府監督の下に立つ所のロイド船會社の如きに於ても然りである。トリエスト市は墺國の漢堡と稱せられ、商業繁榮を極め、從つて人口增加も急激であるが、而かもスラヴ族と伊民族との割合に至ては、後者は聊か前者に壓倒されて居る氣味がある。前記の十年間に、伊人の增加した。獨り住民許りではない。官吏なども亦元と伊國人が大多數であつたが、近年は段々スラヴ人の侵略を蒙つて居る。一九一〇年の調査によると、國有鐵道役員八二八人の中で、伊人は僅かに七〇人、スラヴ人は七二八人を占めて居る。郵便役員三五八人の中伊人は九五人、スラヴ人は二四五人。稅關役員五〇〇人の中伊國人は一四六人に過ぎぬ。警察官吏六六一人の中伊國人一〇〇人に達しない。總計官吏が四千六百人あるが其中の三千七百即ち五分の四は、人口全體の二割に達せざるスラヴ人の占むる所となつて居る。若し夫れトリエスト附近の幾多の小伊太利都市に至つては殆んど伊民族の官吏を見ない。軍隊裁判所に於て伊人の使用せらるゝもの極めて少きことは云ふを俟たない。裁判所の用語も昔は伊國語のみであつたが廿年以來スラヴ語も亦用ひらるゝやうになつた。一九〇三年市はスラヴ語の法廷に於て用ひらるゝ事が規則に背く

と云つて抗議したけれども、時の大臣キョルバーは之を取上げなかつた。次に其れ教育の制度に於て伊民族が最も不公平なる取扱を受けて居ると云ふ事は極めて著しい事實である。住民の四分の三以上が伊民族であるのに、國立の普通教育を司る伊太利學校が未だ一つもない。伊人の學校にして政府の支持するものは、古い歴史を有する一商船學校と一高等商業學校のみである。ポーラー及びカポデストリアの中學校も、政府の補助を受くるが、此外にトリエスト及びトリエスト附近で政府の支持する學校と云ふものは一つもない。之を彼のクラカウに於て、波蘭人が僅に十萬人（即ちトリエスト地方の伊人の四分の一）の少數なるに拘らず、五つの中學校と二つの高等工業學校とが政府の支持する所たるに比すれば、實に霄壤の差がある。而かもトリエスト地方に於ける他の民族例へば獨逸人の如きは、人口僅かに二萬人に過ぎざるのに、政府の支持する所の中學校は六つの多きに及んで居る。ゴリッアに於ては僅かに四十六人の獨逸學生の爲めに八學級より成る中學校が設けられて居つたと云ふ事である。斯くの如き不公平なる取扱を受けて居つたから、伊人は非常に憤慨して、トリエストが中心となつて多年盛んな反抗運動が企てられて居つたのである。彼等は先づ政府の支持に倚らず、伊國人の子弟の爲めの獨立の學校を設けた。一九一一年の調査によれば、トリエストのみで此種の小學校は廿一に及び、生徒の數が一萬六千五百七十人の多きに達して居つた。其外幼稚園も八つ設けられ、中學校、高等工業學校も市の費用を以て、諸所に設けられ、此爲めに市は全歳出の六分の一を費すに至つて居つた。斯く伊民族は自分の力で政府の不當なる取扱に反抗して居るけれども、何分教育の最高監督權が政府の掌握する所であるから、教育上に大いに不便を感じて居る。例へば政府では法律を以てトリエストの歴史を教ふることを禁じて居る。是れ兒童をしてトリエストが嘗て伊國の都會であつた事を知らしめざらんが爲めである。其他いろ〳〵の課目について、些かでも民族的精神と交渉のある事項は皆教ふることを禁ぜら

づるものであつて、彼等は此大學を中心として大いに民族特有の文化の發達を企圖して居るのである。中央政府は固より之に反對であるが、政治上いろ〳〵の關係からして全然之を排斥する事も出來ず、結局政府側では維納に之を設けるか、或はプラーグに之を設けるかを條件として伊人の要求を容れんとした事がある。併し獨逸人の居る所やボヘミア人の居る處に伊語の大學を設けると云ふ事は、丸で人を愚にした話なので、伊人は決して之れが爲めに其憤慨激昂の態度を改めない。要するに伊語大學問題は、幾多の困難なる民族的問題の一つとして、今後尚墺國の政治家を苦しめる所のものである。學校ばかりではない。教會に於ても亦段々伊國の勢力を排けんとして居る傾向が見える。トリエストに於て今日約三百の僧侶があるが、其中約二百はスラヴ人である。政府の手加減の結果、同じ宗教でありながら、伊人とスラヴ人との仲が甚だよくない。

伊人の死者に對して葬式を司るを拒んだり、又は伊人の生兒に洗禮を授けることを斥けたり、其他宗教上の極まつた儀式を授くることを肯んぜなかつた例は珍らしくないとの事だ。教會でも此頃はスラヴ語の説教、スラヴ語の讃美歌が流行るので、伊人は段々教會から遠かる傾向があるといはれて居る。以上は主としてトリエストについて述べたのであるが、トリエスト附近の地方も亦同樣壓迫を蒙つて居ることは論を俟たない。トリエストから程遠からぬポーラーも伊人を多數有する都會であるが、スラヴ人と獨逸人とが段々增加して、十年間に二倍になつたが、伊人は僅かに四分の一丈け增加したに過ぎない。同地は墺國の軍港にして最も重要なる都會である丈け、伊人の勢力を壓倒するに用ふる手段は、トリエストに於けるよりも尚一層激烈を極めて居る。其他カポデストリア、イソラ、ピラノ、ホルボール、ウマゴー、サンロレンツオ等の伊太

利都市に於ても亦同様である。

次にトレンチノ方面は如何と云ふに、之は軍略上最も緊要の地點である丈け、墺國の警備も一層嚴重である。一體伊國の北境を保護する所の自然的の障壁は、申すまでもなくアルプス山脈である。然るにアルプス山脈は西に於ては丁度伊國と瑞西との境をなして居るが、東の方に來ると墺國はアルプス山の遙か南方に喰ひ下つてガルダ湖の畔にまで其領地を擴げて居る。斯くて伊國北境の自然的障壁は墺國の領分に屬して居るから、墺國は何の苦もなく伊國の平原に殺到し得る地位を占める事になる。此の喰ひ下がられた部分が則ちトレンチノで、之を墺國が領有して居る以上は伊國は常に不安を感ぜずしては居られないのである。今墺國ではトレンチノをチロールの一部としてあるが、一體トレンチノは地勢から云つて決してチロールの一部と見るべきものではない。植物などを見てもチロールとは全く別で、寧ろ南方の伊領と同一である。住民が伊人で、用ゐらるる言語も全く伊語たることは申す迄もないが、歴史上から云ふと、之は古來南方の伊太利諸邦と連合した經歴にも乏しいが、墺國領の一部として發達した沿革は斷じて無い。中世の始以來、羅馬帝國の宗主權の下に服する獨立の僧領地として發達し、八百年の間他國の侵犯を被らずに來たのである。尤も此間時々ヴェニスと戰を交へた事もあるが、常に敵を擊退するを得たのであつた。去ればトレンチノは十九世紀の始まで獨立の存在を繼續し來たのである。而して之がチロールの一部と認めらるゝに至つたのは、アウステルリッツ戰役後のプレッスブルグ條約にて、バヴアリアがチロールを併せた時よりである。此時バヴアリアはトレンチノを以てチロールの一部と爲し、以て其領有を主張し、一八〇八年遂に僧正を逐うて其主權を收めたのであつた。一八一〇年に至り奈翁はトレンチノをチロールより割き、其創建せる伊太利王國に附與せしが、維納公會は再び之をチロールの一部として墺國に與へた。トレンチノの今日の地位は此時を以て定つたのである。此以來墺國は此地を以てチロールの一部

來の獨立的名稱の使用を禁じて居る。去れば墺國の法律上には南チロールといふ地方はあるけれども、トレンチノなる名稱は存在しないのである。併し實際上此地方が伊人の優勢なる處として、チロール本部に對し、特別なる狀態を呈する地域たるは爭ふことが出來ぬ。斯くの如き地勢にあるが故に、トレンチノに於て墺國が其軍備に最も意を注いで居ると云ふ事は、說明を須ゐずして明であらう。且つ前にも述べた如く住民の大部分が伊民族である。即ち三十八萬の伊國人は全人口の九割を占め、墺國人（ゼルマン）族は僅かに一萬二千人に過ぎない。而かも其の三分二以上は兵士と官吏とである。其首府のトレントの如きは全然伊民族の住する所であるが、此處に墺國は平時に於て步兵三十六大隊、工兵三大隊、要塞砲兵五大隊、野戰砲兵隊十二中隊を備へて居る。又同地方の防備工事のために最近十年間に三千萬クローネの巨費を投じたと云はるゝ

築の爲めに、毎年莫大の金を惜氣もなく費つて居る。斯くの如き有樣であるから、墺國政府は少しでも伊國の勢力の同地方に加はることを喜ばない。されば同地方が伊太利本國と直ちに密接な經濟關係を生ずべき自然的境遇にあるに拘らず、極力其交通を妨害し、商工業上の取引を妨げて居る。電信電話の如きも國境を超えて伊太利の內部には達せしめない。水力電氣を經營して伊國の市場に賣弘めんとする計畫も、常に政府の沮止する所となつて居る。伊國の資本を以て同地の開發を計ることは勿論、同地の人民自ら其開發を計ることも墺國は之を喜ばない。何となれば同地方が經濟的に發達をすれば、山を超えて墺國に向ふよりも、寧ろ住民が期せずして、南伊太利と交涉の道を開くべきことは自然の大勢であつて、人力を以て之を奈何ともすることが出來ないからである。一體同地方は、昔墺國がロムバルヂーやヴェネチヤを支配して居つた時代に

は、經濟上之等の地方と密接の關係に在つて、中にもトレンチノの絹の如き盛にロ、ヴ二地方に向けられたのである。然るに墺國がロ、ヴ二地方を失ひ、其結果之等の地方とトレンチノとの取引を廢止してより、ト州の工業は俄然として衰滅した。そはト州は山を超へて墺國の內部に入り、夫のボヘミヤやモラヴイヤの盛大なる工業とは到底競爭することが出來ないからである。斯くてトレンチノの經濟狀態は墺國の鎖國政策の結果大に衰へ、住民は皆政府の措置を怨んで居る。夫れ丈けまた墺國は此地方に警戒の手を嚴しくするの必要があるのである。傳ふる所に依れば、其派遣する所の軍人にも力めて排伊思想を吹き込み、伊人と親まぬやうにし、又絕へず密偵を放ちて民族主義者の動靜を探らしめて居るとの事である。學校に於てもトレンチノの歷史は之を敎ふることを禁じて居る。伊人の經濟的及び精神的の開發は斯くして同地に於て著しく妨げられて居るのである。

以上の如くトレンチノに於ても、沿岸地方に於ても、墺伊兩者の關係は甚だ險惡である。されば該地方在住の伊人は墺國政府に對して甚だ嫌焉たらざるものがある。のみならず其對墺反感を利用して伊國の策士の入り込んで一仕事せんと企つるのも亦少くない。それかあらぬかトレント市及びポーラ軍港などに於ては、伊國人の間牒事件と云ふもの頻々として起つて居る。伊國側から云はすると、墺國政府では領內の伊民族をば悉く間牒扱をして居る、牢獄に投ぜらるゝもの、大半は無實の嫌疑に基くものであると辨ずる。何れにしても此取締は頗る八釜しい。殊にトレンチノに於ては最も嚴重であるから、近年此地方から外國（ことに米國）に移住を試みるもの非常に增加した。要するに墺國在住の伊民族八十萬は、極めて不幸なる生活を營むものとして、本國の同胞は非常に同情を表して居り、此同情は一轉して在外同胞の救濟の希望となり、此希望はまたやがて大伊太利主義（イタリア・イルレデンタ）の理想を燃やし、斯くて益々墺伊兩國の反目を深からしめて居るのである。

伊太利國民が大伊太利主義の理想に憧かれて居ると

云ふ事は、一八六六年七月二十五日、已にガリバルヂが一隊の手兵を率ゐてトレンチノに侵入した事件に徴しても明である。此遠征が政治上の必要から中途參謀總長ラマルモラ將軍の一令に依つて阻止せられた時は、ガリバルヂ自身は勿論、一般人民も非常に之を遺憾としたのであつた。此後政府は表向き大伊太利主義の計企を捨てたけれども、民間には六八年パルマノヴアに出來た一秘密團體を始めとして各地に侵略的運動の結社起り、過激の思想を以て墺國を怒らし又伊國の政府をも困らした。八九年頃より更にローマやミランを中心として此運動は勃興し、今度は專ら三國同盟の呪詛に力を注いだ。時の政府は三國同盟の支持者にして排佛政策の張本として知られたるクリスピイであつたから、斷乎として此種の運動を禁壓するの手段を執つたけれども、運動の火の手は決して收まらなかつた。遂に彼は同年七月二十九日書を獨のビスマルクに送り、彼の仲介によりて墺國政府に對伊人高壓政策の緩和を要求し、斯くして伊人の不平を幾分にても弛めんと試みるに至つた。此事は其の納得を得ず、云はゞ水泡に歸したけれども、如何に彼が三國同盟に對する外交上の要求と、大伊太利主義者の要請との間に板挾みとなつて苦んだかゞ、之によりて想像さるゝのである。

猶序に大伊太利主義の要求は本來事物自然の道理から見て正當なりや否やを一言評論して見やう。第一トレンチノに對する要求は正當と云つてよい。トレンチノは伊國の方から見ても、同地在住の人民から見ても伊國に屬するが自然であつて且利益である。適當の時機に適當の方法で伊國が之を合併せんとするのは、之を阻止する譯には行くまい。第二に沿岸地方に對する要求に至つては少しく疑問である。背後のスラヴ地方は無論圏外であるが、沿岸都市の伊人地方と雖も、全然之を伊國に合併しては背後のスラヴ人が困る。現に伊人が多數居るといふ點から云へば、伊國に歸すべきであるが、併し之等地方は決して背後のスラヴ地方と分離することが出來ぬのである。背後の地方と分離しては都市その者の生存が不可能となる。背後の地方亦

海への出口として必ず之等都市を有せんとするの正當なる理由がある。故に之等の地方は一概に伊に歸すべきものといふ譯には行かぬ。假りに墺國が分裂したとしても、之等地方は少くともスラヴ族と伊太利族との爭奪の巷となるべき所である。吾人は之等の商業市に墺國政府の武斷的政治を爲すを甚だ不當と認むるものなるも、去ればとて之を背後のスラヴ地方と分離するを可とするの説には容易に同意することが出來ぬ。要するに沿岸地方に對する伊國の要求の理由は、トレンチノの場合に比し、大に薄弱であることは疑を容れぬ。

次に伊國と獨逸との關係は如何と云ふに、之も前に述べた通り、本來は別に仲も惡くはないが、又強いて互に親むべき關係もなかつた。處が近年に至つて此兩國の關係は段々に疎隔するに至つた。一つの原因は獨逸が近年著しく侵略的態度を取るに至つたと云ふ事であらう。元來三國同盟の當初の目的は專ら防禦的であつて、云はゞ現狀の維持が彼等の希望であつた。獨墺にしても伊國にしても露佛の攻撃を恐れ、自家の現在の地位を紊されざらんと欲して同盟したのである。流石の獨逸にした所が、折角出來上つた帝國をもりたて、佛國から取つたアルサス・ローレンの寳庫を失はざらんとする消極的の目的が同盟訂約の主眼であつたのである。斯く三國同盟が消極的の目的を取つて居る間は先づ天下が太平であるが、獨乙は間もなく更に積極的雄飛の大望成就に同盟を利用せんとするに至つた。即ち彼の最近に於ける諸方面の著しき發達は、彼をして傲然世界に覇たらんとするの野心を起さしめ、斯くて自ら彼を誘うて三國同盟を動もすれば此の野心の爲めに利用せんとするに至らしめたのである。而して此際若しも伊國が獨逸の音頭に和して共利用するがまゝに進むとすれば、彼は必ずや英や佛と敵對の關係に立たねばならぬ事になる。是れ少くとも今日伊國の欲する所ではない。加之、三國同盟加入の結果として伊國が負擔した所の軍備擴張の事業は、頗る伊國民族の幸福を犧牲に供したので、一部の伊國民族の間には段々三國同盟を喜ばないやうになつたものもある。斯

當時伊は[illegible]と親近して居る。現にモロッコ事件に關するアルゼシラスの會議に於ては伊は公然獨に對抗して佛の味方をしたのであつた。單に之れ丈けならばまだよい。**此の水臭い獨伊の間柄は遂に先年のトリポリ事件の時に及んで一轉して激しき反目の關係に變じた。**

トリポリは云ふ迄もなく亞弗利加の北岸に伊國と相對する所の土耳其領土である。土地が近い丈けに伊國人が多數移住して大なる勢力を占めて居つた。伊國にとつては軍略上から云つても又經濟上から云つても最も肝要な關係を有する所で、從つて早くから伊國は目を着けて居つたのである。然るに一九一一年九月に至つて伊國は突然土國に向ひ、トリポリに於ける經濟上の特權を要求した。其拒絕するに會うて乃ち遠征隊を派遣し、遂に月の廿八日伊土兩軍の開戰となり、翌廿九日を以て宣戰布告の發布を見るに至つた。當時事柄が突發したが爲めに世間ではいろいろの風評をしたのである。局外から觀ると伊國の遣り方は隨分亂暴であつた。そは伊國は土國に向つて突然最後通牒を發し、「我國はトリポリに於ける自國の經濟的利益を保護する爲め、同地の軍事占領を行ふの必要を認めた。貴國政府は之に對して異議を挾まざらんことを希望す」と

[illegible]此伊國の態度を評して次の如く論じた。曰く亞弗利加西北岸のモロッコは今や漸く佛國の地步の確定する所となり、從つてモロッコからチュニスに至るまでの一帶の地方は略々佛國のものと確定せんとして居る。そこで伊國は之に對抗する關係上、急にトリポリを自己の勢力の下に置くの必要を認めた。啻り佛國のモロッコ經營に促されて、時機の未だ到らざるに拘らず、トリポリ占領を急いだものであると。けれども之は後に至つて眞相を得たものでないと云ふことが分つた。そは此トリポリ遠征は實は十九世紀の終頃から初まつた佛伊接近の賜物として、伊國が佛國の承認の下に公然と行ひ得たる豫定の計畫であつたからである。斯く斷ずる所以は、後に明かになつた事であるが、一九〇〇年から一九〇一・二年の頃にかけて、伊國は英佛とトリポリの處分に關して密約を結んだとの事である。即ち英國は埃及に於て、佛國はモロッコに於て、伊國はトリポリに於て各自行動の自由を承認し、互に相助けると云ふ事を約束したものと見ゆる。要するに之は英佛の外交が伊國を誘うて三國同盟を離れしむるが爲めに投じたる好餌であつた。尤もかゝる密約の存在は實は後に至つて始めて明になつた事ではない。一九〇一年プリネッチーが議院に於て「亞弗利加の南部からトリポリを通過する隊商の通路は、佛英共に手を觸れないだらう」と演說した時、又一九〇五年フォルチスが「トリ

ポリの經濟的占領が伊國に許さるるの日は遠からず來るであらう。」と述べた時、世間は已に薄々佛英伊の間に何等か意思の疏通があるだらうと想像したのであつた。何は兎もあれ伊國は第二十世紀の初頭以來已にトリポリに於ける行動の自由を得て居つたものらしい。只彼は其時機の來るを待つて居つたのである。然るに伊は一九一一年適當の時機未だ到れりとも見えないのに、急にトリポリの經略に取り掛かつた。之は何故かと云ふに、一つには佛國のモロッコ經略に促されたのでもあらうが、他の一面に於ては、僅かに土耳其本國の新形勢に迫られたのであらう。當時土耳其の本國に於ては失の青年土耳其黨が政權を掌握し、所謂對外硬の方針を執りて盛んに本國並びに屬領地に於ける外人利權の回收壓迫に熱中した。トリポリに於ても亦著しく伊人の利益を妨害したのである。そこで伊國は一日占領を後るれば益々伊國の地歩が減退するの恐があるので、遂に意を決して本來の計畫を實行したものであらう。斯くして伊太利と土耳其とは公然開戰をするに至つたのである。此戰爭では伊國も隨分まごつき、世間の豫想の如く勝負の數は早々に定らなかつたが、大勢未だ何れとも明ならざるに、十一月五日には議會に於て花々しく勝手に占領の宣言を發表した。其後戰局の進行は大體に於て伊國の有利に歸したけれども、併しながら土耳其側の勢も案外に强く、且つ地勢の關係上深く內地に進んで敵を屈服することが出來ない爲めに、伊國も隨分困難を感じたのである。

當時此戰爭に對する諸外國の意向を見るに、個人としては隨分伊國の亂暴な態度を批難するものもあつたが、國家としては多くは伊國の要求を目して國家發展上止むを得ざるに出づるものと爲すに一致したやうである。尤も之には宗教上の考も少からず手傳つて居る。何となればトリポリを土耳其の手から解放して伊太利の支配の下に移すは、則ち異端の土民を回敎徒の手より救うて基督教の手に包容する所以であるからである。不幸にして歐洲では、多少の罪惡も、宗教の名に於ては赦さるゝことが稀でない。兎に角伊太利の態度は大體各國の諒とする所たりしは疑ない。然るに此際獨り明白に不贊成の意を發表したものは墺國である。之は墺國と伊國との從來の關係を見れば怪むに足らない。又明白に贊否の意志は表明しないけれども、此際最も困難な地位に立ち、最も曖昧な態度を執つたものは獨逸である。何故なれば獨逸は一方に於ては三國同盟の間柄であるから、伊國の態度を公然批難する譯には行かない。**されば と云つて獨逸は伊國のトリポリ征略をば、表面は無論、內心でも之を歡迎するものでは**

の反感を買ふ事になる。伊國は今や土國からトリポリを奪はんとして居る。而して其土國は獨逸に取つては紙上の同盟國たる伊國よりも大切な得意である。土國と獨逸との關係は尚別に說くことにする。要するに獨逸は其世界的對外發展の大希望から云つても、又露と英とを制するの必要から云つても、土國に自國の勢力を扶殖する事は最も大切なる事業である。それで獨逸皇帝は曾て自らコンスタンチノープルにサルタンを訪問したるを手初めとして、或はフォン・デル・ゴルツ將軍を送り、或は故マーシャル大使を通じて、盛んに土國の政客の間に自國の勢力を扶殖したのである。故に土國の不利益になる事は努めて之を除いてやる義理もあれば又必要もある。然るに今や同盟國の一たる伊國が、土國に對して無名の戰爭を起して其領土を奪はんとして居る。現に土國は獨逸に向つて此事を訴へ、同盟の誼を以て伊國を制せんことを要求したのである。此要

い地位に立つ譯になる。されば獨逸は實は心中密に伊國の失敗を希つて居つた。土國の軍隊が案外に精鋭なる武器と、豐富にして純良なる彈藥とを以て伊軍を苦しめたのは、實は獨逸が內々之を供給した結果であると云はれて居る。此事が後に明かになつて伊國は獨逸に向て非常に憤慨した。第二に獨逸は伊國のトリポリ遠征を喜ばなかつた理由は、此トリポリ經略は詰り三國同盟の裏を搔いた伊佛外交の成功の果實であるからである。さらでだに伊國の三國同盟に對する關係は本來極めて不自然なものである。然るに今やトリポリの經略に伊國が成功すれば、伊太利の國民は往々英佛に接近するの利益を感ずるであらう。英佛接近の利益を感ずれば感ずる丈け、伊國は三國同盟から遠かるであらう。三國同盟に永く伊國を引止めて置く爲めには、英佛と接近するの機會を打碎かなければならない。斯くて獨逸はトリポリ經略を喜ばず、其失敗を心中希つて居たのである。政府も國民も斯の如き考であつたから戰爭の初めから獨逸と伊國との關係は餘り面白いものではなかつた。素より同盟國であるから、公然と批難はしない。只何となく輿論に物が挾まつたやうな感があつた。然るに此兩國の反感は、兩國の

新聞界に於て先づ爆發した。それは獨逸國よりの從軍記者が、トリポリから本國に盛んに伊國に不利益なる通信を發したと云ふ事が本である。獨逸では官民共に今度の事件を快からず思つて居つたから、自ら伊國に不利益な通信を多く發し、又斯かる通信が國内の讀者から歡迎されたものであらう。殊に伊國の軍隊の不規律だとか、其兵隊の弱いとか其將校の腐敗とかを相當に誇張して傳へたのであつたから、伊國の操觚界に於ても段々に獨逸に對する不平の聲が高くなり、果ては獨逸の新聞は投機業者に買收され、投機の目的の爲めに事實を揑造して報道する者なりなどゝ批難するものもあつた。後獨逸がトリポリに武器を供給して居ると云ふ事も分つて、伊人中には盛んに其背信を詰るものあり、之より獨伊の新聞は互に大論戰を初め、其論難の激しきトリポリに於ける實戰よりも熱烈なるものがあつた事は當時予の獨逸に居つて親しく見聞して驚いて居つた所である。伊國の新聞の攻撃が餘りに烈しいので、獨逸では其の主もなる新聞の悉くが加入して居ると稱せらるゝ獨逸新聞協會は、わざ〱大會を開いて伊國の新聞に公然抗議を申込むに至つた。之に對抗して伊國では、獨り新聞ばかりではない、民間にも例へば獨逸商品に對して盛んにボイコットを行ふと云つたやうな行動を取つた。當時如何に伊國に於ける反獨熱が盛んであつたかと云ふ事は、獨逸の赤十字社が、救護班を組織してトリポリに派遣すべく伊國と土國との兩方に申し込んだのに、土國は勿論喜んで之を受けたが、伊國では人民の反對に蹶せられ、遂に之を拒絶したと云ふ事によつても之を見ることが出來やう。要するに此等の例は獨逸と伊太利との關係は近年決して良好なものではないと云ふ事を證明するものである。而して兩國の反感は實はトリポリの問題によつて初めて起つたのではなくして、トリポリ事件は偶々多年鬱屈して居つた反感に爆發の機會を與へたものと見るのが至當であるかも知れない。

斯くの如く、獨墺兩國に對しては、伊國は今日決して好感情を持つてゐない。而かも佛を怖るゝ原因は消滅した。然らば伊國が三國同盟に入つて居る理由は今日殆んど消滅したと云つてよい。此事は久しく歐洲の外交を談ずるものゝ間に認められて居つたので、三國同盟の期限が切れて之を更新するといふ場合には、何時も今度こそは伊國は同盟より脱退するだらうとか、或は更に重大な制限乃至除外例を設けて初めて同盟關係を繼續するだらうなどゝ云ふ風説の傳はるを常とした。現に先年盟約の期限の切れんとした時、墺國の故皇儲殿下と密接の關係ありと稱せられし維納のライヒス・ポスト紙すら、伊の同盟脫退を豫言した程であつた。故に少くとも今日の同盟條約は、伊國にとつては最早反古同樣のものであらうと萬人の一致する所であつた。されば開戰の當初一部の論者は、獨逸は伊太利の同盟に忠實なるべきを豫想し、以て彼の態度を誤算したなど云ふ者もあつたが、之は誤である。獨逸は決して伊太利を以て忠實なる同盟者と視て居る筈はないからである。況んや伊は後に說くが如く、他方亦英佛と戰ふを得ざる事情あるに於てをや。扨て然らば三國同盟は今日は全然反古同樣のものと見るべきか。三國同盟は伊國の外交

歡せざるのに、倘此同盟を拋つることを敢てせざる所以のものは、强ち前代の惰性とのみ見ることは出來まい。近頃伊國の政治家のチツトニーの演說集が出版になり、サン・セエリノ男が之を英譯し「伊國の外交及殖民政策」と題して公けにされて居る。此本の評論は本年二月の隔週評論にも載つて居るが、此書によつて見ると、伊國の政府では、三國同盟と云ふものに、歐洲平和の維持の爲めに矢張り必要であると云ふ値打を認めて居る。チツトニーの言によれば、若しも三國同盟がなかつたならば、伊國と墺國とは巳に屢々衝突したに相違ない。此二國が衝突をすれば從つて歐洲の平和が非常に危くなつて來る。伊國が建國後永く平和的の發達を遂げ、歐洲も亦久しく平和の業を受けたのは、一つには墺伊の衝突を不可能ならしめた三國同盟のお蔭である。此意味に於て三國同盟は伊國にとつては勿論、歐洲にとつても亦非常に利益であつた。チツトニーは更に斯う云ふ事をも云つて居る。「三國同盟の目的は專ら平和にあり、決して他國の利益を侵害せんとするものではない。從て此同盟は決して伊國が英佛と親善ならんとするの希望と兩立せざるものではない。我々は英佛とは常に親善の關係を保たんことを欲する。從つて三國同盟は、伊國の英佛に對する親善なる關係を妨げざる範圍に於て、其存立の意義を有するものである。」此等の言によつて見れば、伊國が現今なほ三國同盟と云ふものに多少の價値を附して居ると云ふ事は明かである。而して

△伊太利と今次の戰爭

伊太利が同盟の誼に背いても獨墺の爲めに起つことのなかるべき事は巳に明白となつた。されば開戰の當初彼は逸早く嚴正中立を宣言して其態度を明白にしたのである。併しながら伊國はこの嚴正中立の態度を今後永く續くることが出來るだらうかどうか。之は一つの問題である。現に開戰の當初から、電報の屢報ずる所に依れば、民間には對獨墺開戰論が盛んであつて、絕えず示威運動を以て政府に決然たる處置を取らんことを迫つて居つたとの事である。「もう今度こそは起つだらう」と云ふやうな電報の傳はつた事は、今日まで幾度あるか分らない。伊國の新聞雜誌などを見ると殆んど凡てが主戰論に傾いて居ると云ふ事である。尤も伊國の新聞雜誌は多く靑年少壯の手に經營されて居るとの事であるから、自ら主戰論の賑ふのも無理はない。

されば大多數の新聞雜誌が主戰論であるからと云ふて、直ちに國民多數の意見が之であると速斷するのは穩でない。この事は去年十二月發行の「四季評論」に揭げられたる「伊國の態度」と題する論文の記者も吾人に警告して居る所である。併し獨墺に對して兵器を執るべしと云ふ考が餘程廣く深く行き渡つて居ると云ふ事は各種の材料によつて之を爾く判斷しても大過ないやうだ。又伊國膨脹の理想から云つても、今日獨墺に對して兵器を執ると云ふ事は、絕好無二の機會である。彼等の多年理想とする所のトレンチノー、其他の伊人在住地方の合併は、墺國と戰爭することなしには容易に實現せらるゝものではない。而して墺國と戰爭をするには今日ほどよい機會はないのである。此等の點を考ふれば英佛の味方をする、せぬは暫らく別問題として、兎も角此際伊國が墺國と戰爭をすると云ふ事は、伊國にとつて一つの必要と云つてもよい位である。獨りトレンチノーやトリエスト方面ばかりではない。アドリアチック對岸の巴爾幹方面に於ける發展の點から見ても、伊國が此際この儘沈默して居ると云ふ事は同國にとつて非常に不利益である。若し伊國が沈默して居る間に戰局は終りを告げ、而して墺の敗北に歸したとすれば、巴爾幹半島に於けるスラブ民族の勢は大いに張り、アドリアチック沿岸の地方には最早や伊の割込むべき餘地はなくなるであらう。尤とも伊國は去年十二月の末つ方一隊の兵を送つてヴアロナを占領したけれども、それ丈けでは戰後の領土決定會議に於いて有力なる發言權を有する譯には行かぬ。而して有力なる發言權者の一人たるを得ずんば、彼れは到底アドリアチック海上の雄國たることは出來ぬのである。此等の點から考ふると、伊國は何時までも中立の態度を執る譯には行かないやうに思はれる。是れ同國民の多數が主戰論を以て政府に肉迫して居る所以であらう。

其上伊國は近年英佛と非常に親しいのである。伊國が經濟上並びに政治上英佛の兩國に倚ることの多きは今更ら云ふを俟たない。伊國が地中海上に長く突出して居る所の、いはゞ島國であると云ふ地勢上の關係や、

爭ふときは、伊は[illegible]の危險がある。是れ伊國が三國同盟の一國でありながら、近年務めて英佛に接近せんことに腐心して居る一つの理由であらう。殊に伊國は英國に對しては最近殊に好意を表して居る。其故は近年英獨關係が緊張して、英が獨を怖るべき敵國と感ずるに至つてより、段々に英はまた伊國に對しても神經を過敏ならしめて居つた。伊國と英國とは歴史的に親善の間柄であり、伊太利の統一も英國の有形無形の援助に負ふ所が多いのであるが、今や伊は英の競爭者たる獨と同盟の關係になつて居るから、英は事によると英獨相爭ふ場合に伊は獨を援くる事になるまいかと疑つて居た。去れば伊土戰爭の際にも、英は伊に對して餘程曖昧の態度を採つたのであつた。そこで伊は其以來英に對して此疑念を去らしめんが爲めに、頗る苦心したと傳へられて居る。而して伊の佛と近頃著しく相接近して居ることは今また繰り返して之を述べぬ。そこで伊は少くとも英佛兩國の要求でもあれば援助出兵を拒み得ぬ位の情誼はある。然るに今や戰局の發展は更に捗々しくない。勝敗の數も孰れとも明かでない。何れにしても兩國共に危急存亡の時にある。而して伊國は其間に立つて、いはゞカスチング・ヴォートを握つて居るやうなものであるから、獨墺側も無論之を誘ふたに違ひないが、英佛側も亦恐らく切に伊國の來援を求めたに相違ないと思ふ。況んや伊の起つはやがて羅馬尼の起つを促し、以て戰局を早く決着せしりも運動に來て居る者があるとの事である。尤も人によつては、英佛は餘り多くの國の戰鬪に參加することを欲せずして、伊に對しては中立の嚴守を欲したと觀るの說もあるやうだが、予は之を信じない。英佛側は去年の暮巳に我が國に向つてさへ援兵の要求を爲したと傳へられて居るではないか。(予は之を信ずる相當の理由を有する)。それ程援助を渇望して居る英佛が、何でひとり伊國に對してのみ中立の嚴守を要求すると云ふ事があらうか。故に予は伊は必らず英佛の熱心なる援助の請求を受けたものに相違ないと思ふ。

斯く觀ると、伊國は實は最早や中立を維持する事が出來ない狀態に立ち至つたと謂はねばならぬ。何となれば此上伊國が中立を守れば、彼は戰後に於て全く孤立の地位を取らねばならぬからである。而かも單純な孤立ではない。兩交戰國から怨まれる地位を取らなければならぬのである。何となれば、同盟の誼に背いて獨墺に加擔しなかつたと云ふ點に於て、彼は最早や此兩國の怨敵であるの外、なほ英佛の切望に背いて敢て起たなかつたことの結果、此兩國からも自ら怨まれざ

るを得ないからである。斯くては彼は講和會議に於て何等の發言權を有し得ざるべきのみならず、戰後に於ても憐むべき孤立の地位を取らなければならぬであらう。且つ又之が爲めに、彼は多年渴望して居つた地方をも合併することが出來ないと云ふことになる恐がある。一説に、伊國が今度の歐洲戰爭を機として達せんとする所の希望は、所謂「受戻されざる」伊太利地方を受け戻すことに在る。而して彼が此等の地方を受け戾し得さへすれば其目的は達するので、戰爭するとせざるとは其關する所ではないといふ。換言すれば戰爭しなくとも其目的を達することが出來るなら、伊國は恐らく起たないで濟ますだらうと觀るのである。先頃獨逸大使ビューロー公は、羅馬に於て墺伊の間に周旋し、トレンチノーの割讓を條件として伊國をして飽く迄中立を維持せしめんと熱心に運動したのであつたが、若し之が成功すれば、伊國は即ちトレンチノーの只取りに滿足して戰鬪參加不幸を免れたのであらう。伊太利自身の中にも例へばヂョリッチーの如き親獨派の政治家は、戰爭しなくても目的さへ達すればよいではないかと云ふ説を述べたとの事である。(「外交時報」本年四月十五日號重德氏「伊太利人の伊太利」)。併し斯く觀るの説は正當であらうか。予は之を有り得ない事とは思はぬも、少くとも之を合理的の觀方とは考へぬ。成程トレンチノーを得ると云ふ事は、伊國人の國民的理想であるに違ない。之を得れば國民は大に滿足するだらう。併し國民の間には、例へば社會改革黨の領袖ビッソラチの如く、「何等之に値する最小の犧牲をだに拂ふことなくして、トレント若くはトリエストを貰ふのは耻づべきことである」と說いて居るものもある。(前記四季評論「伊太利の態度」參照) 予の考では伊國にとつて當面の最大問題は、最早トレンチノーを得るか得ないかの問題ではない。戰後伊太利が如何なる地位を國際關係に於て占むるかと云ふ問題である。ビューロー公の周旋でトレンチノーを得た處が、將來伊國が英佛か見離さるゝやうでは仕方があるまい。トレンチノーを得た交換條件として中立を嚴守し、爲に墺伊は開戰の不幸を見なかつたとしても、思ふに墺國は伊國の火事泥的行動に對して決して好い感じを抱くまい。然らば矢張り伊は結局英、佛、獨、墺の總てから怨まれることになる。故にビューロー公の墺伊調停の如きは、本來それのみで以て伊國の起否を決せしむるに足る要件ではないと思ふ。ビューロー公の運動は、墺國側の不

國民の大多數は十分之に滿足して、開戰論の鋒鋒を收め得たかどうかは一つの問題である。

斯く論じ來ると、伊國は到底此上中立を守ることは出來ない譯である。必ずや英佛の爲めに武器を執つて起たねばならぬ事になる。處が今日までの所、伊太利は頑として起たない。又近き將來に於ても容易に起ちさうに見えない。彼は一方に於て外交上是非共起たねばならぬ必要に迫られて居りながら、尙且つ斷然起つことを躊躇して居るのは抑〻如何なる理由によるか。之は伊國の態度を研究する上に於て最も精密に考へて置かなければならぬ點であらう。

此伊太利の妙な態度を解釋するものにいろ〳〵の說があるやうだ。最も普通に行はれて居る說は、伊國は戰爭しなくとも取る丈けのものは取れるからと云ふのである。開戰の當初世間には伊國は英佛に對して好意的中立の態度を取り、其報酬として他日トレンチノー又はトリエストを得るを豫期し得たと傳へられた。伊國が好意的の中立を表すると云ふ事は無論英佛に取つて非常な實際上の援けになる。例へば之によつて佛國は對伊國境上の警備を撤して之を北方の戰爭に用ふる事が出來るから、いはゞそれ丈け伊國の援兵を得たと同樣の事になる。之に對して英佛は必らず相當の報酬はするだらう。併しながら斯くの如き好意的の中立を

たいことも一方には[illegible]

に與する事になる。斯くては事態頗る重大になるから、先づ餘り荒立てないで置かうと考へた、と云ふ風に觀ることも出來る。何れ此等は事實によつて決すべき問題であるが、今日までの報道を綜合して考へると、それ程立ち入つた好意を英佛側に示してはゐないやうだ。然らば戰はずしてトレンチノーを得ると云ふ豫期は餘り當てにならぬ。又或人は曰ふ伊國人は一方に於て頗る打算的である。而して勝算が未だ十分に立たないから、彼は今尙形勢を觀望して居るのであると。併し之も今日では時期が過ぎた。戰爭の初めなら形勢觀望と云ふ事もあるが、今日では此上觀望の態度を取つて居つては、伊國は將來國際間に其立場を失ふに至るだらう。且つ形勢も今日では大體は明かである。獨逸に結局の勝味がないことは最早疑はない。少くとも伊國の參加が勝敗の決を早くつけしむるに足ることは明である。故に勝算の數明かならざるが故に起たないと見る說は適當でない。次に戰爭の準備が出來てゐないと云ふ說もある。準備の事を云ふならば、之は伊國に限つた事ではない。佛でも、露でも、英でも、皆準備は出來てゐなかつた。

斯う考へると云ふと、外に何も理由がない。殘る所は同國の中立論者の勢力の顧慮と云ふことのみである。中にも予は舊敎黨の勢力と云ふ事が、思ふに餘程重大な要素をなして居るものだらうと思ふ。

今日伊國で中立を最も熱心に主張して居るものに二つの派がある。一つは舊敎黨であつて、一つは社會主

義の一派である。社會主義者が極端な四海同胞主義の立場から、戰爭を絶對に否認して居ると云ふ事は、今更ら云ふを俟たない。舊教黨が伊國の中立を主張する所以に至ては、其純粹なる宗教的精神に基くことの外に、舊教黨の裏面に糸を操つて居る所の羅馬法皇廳の態度に動かされたるものである。法皇廳の墺國と親善の關係にあり、又、佛國と反目の關係に立つて居ることは隱れもない事實である。先づ法皇廳が墺國に非常な好意を有つて居ると云ふ事は今更ら喋々するを要しない。墺國は歷史的に舊敎の保護者であり又其の遵奉者であるの外、今日に於ては舊教の敎條を最も忠實に守る所の唯一の大國である。從つて墺國の存亡は則ち最も忠實なる舊教國家の存亡である。舊教國は外にも多いが、伊太利佛蘭西皆教會に背き、葡萄牙亦共和主義の横溢する所となつた。去れば墺國にして崩れん乎、殘る所は西班牙のみである。是れ法皇廳が墺國の利害をば最も切實に感ずる所以である。之に反して法皇廳は近年佛國とは非常に反目して居る。佛國は亦墺國と同じやうに舊教國であり、嘗ては舊教の保護者を以て任じて居つた者である。けれども今日の第三共和國時代に及んでは、動もすれば王政派と結托して共和國の基礎を危うする所の羅馬教會の世俗的勢力をば、力めて制限抑壓する事を主義方針とするに至つた。そこで久しき以前から佛國政府と羅馬法皇廳との間にはいろいろ困難なる交渉があつたのであるが、遂に一九〇四年佛國大統領ルーベーが伊國の王室を訪問するに及んで、兩者の國交は斷絶した。人の知る如く、法皇廳は昔獨立の一國家であつた歷史上の惰性として、今日でも多くの國家と國交關係を結び、互に公使を授受して居る。只伊國の政府は一八七〇年に法皇國を滅亡したと云ふ事からして、法皇廳とは敵對の關係になつて居る。（羅馬法皇廳の政治的地位については近く公にすべき拙著「現代政治史論纂第一卷」中の「羅馬法皇」論を參照せられたい）而して法皇廳では從來「我と親交ある諸國の元首が羅馬に來つて伊國の王室を訪問するのは、取りも直さず法皇に對する侮辱を意味するものである」として、諸國の元首を脅かして居つた。それが爲めに法皇廳と國際關係を有する諸國の元首は、之れまで法皇廳に氣兼して伊國の宮廷を訪問しないことになつて居つた。之はずつと後の話であるが、去る一九一一年三月伊太利の建國五十年祭の際に、獨逸のカイゼルですら、一度同盟國の誼を以て伊國の王廷に直接祝

意を表せんと宣言したに拘らず、後法皇廳の一喝に會うて之を見合せ、爲めに甚しく伊國民の物議を醸した事もある。これほど矢釜しく各國を脅かして居るのに、佛國大統領は遂に意を決して前年の伊王及び妃の佛都訪問に應ふべく、親ら羅馬に赴き、數日間伊國王室の客となり、やがて法皇廳には一顧をも與へずして巴里に歸つたのである。そこで法皇廳では非常に憤慨し、巴里よりは其の差遣せる公使を喚び還し、又ヴァチカン駐剳の佛國公使には歸國を求め、斯くて公然佛國と國交斷絕をしたのである。序に申すが此國交斷絕はまた不思議にも佛をして更に一層伊に接近せしむるの緣因となつた。次に進んで一九〇六年には、佛國に於て敎會と國家との分離を斷行した。是に於て法皇廳はあらゆる惡聲を放つて佛の國家を呪ひ天罰必らず來つて佛の政府を滅ぼすだらうと放言するに至つた。啻に之のみでない。法皇廳は佛國の外、英國に對しても露國に對しても好意を有つて居ない。交戰國の一方は概して法皇廳と親しくない者ばかりである。之に反して他の一方は墺國は勿論、獨逸とても法皇廳とは親近である。少くとも獨逸は墺國を除いては舊敎の最も忠實に尊崇さるゝ所である。斯くの如き譯合から今度の戰爭に於て法皇廳は當初から實は獨墺側の勝利を希ひ、英佛露の敗北を望んで居たのである。夫れかあらぬか北部伊太利の或る敎會では、公然墺獨側の勝利を祈つて居たものがあるとの事である。否啻に伊國に於てのみではない。西班牙でも、葡萄牙でも、和蘭でも天主敎徒は擧つて獨墺の勝利を祈願したものらしい。併し乍ら如何に法皇廳が熱心に祈つても、獨墺の勝利は一寸豫想することが出來ぬ。若し獨墺にして到底戰爭に勝てぬ者ならば、出來る丈敵方の勢力の增大するを妨ぐべきである。於是法皇廳の獨墺側の成功を冀ふの念は、一轉して伊太利政府をして嚴正中立を守らしむるの盡力となつて表はるゝことゝなつた。是れ今日法皇廳の勢力の下にある伊國の多數の敎民及び舊敎黨が、其意を迎へて熱心に中立嚴守を主張して已まない所以である。

其上尙伊國の舊敎黨は、今日三國同盟の維持を主張する所の穩和自由派と結んで居る。一體法皇廳は、伊太利政府から滅亡されたと云ふ怨に報ゆる爲めに、久しい間其敎民に向つて、伊太利政府の公事に關係すべからざるの禁令を發して居つた。從つて上は國會議員より下は町村會の議員に至るまで、舊敎徒としては公然法皇廳の許可を蒙ることなしに、之に與る事は出來なかつたのである。素より伊國の人民は大部分舊敎徒であるから、斯の禁令の如き、畢竟云ふべくして行ふべからざるものであつた。故に此禁令は主義としては相變らず久しく唱へられて居つたのであ

るけれども、實際に於ては勵行されては居なかつた。只獨逸の中央黨の如き公然たる舊教黨は存在せず、又熱心なる信徒は議員などになるのを避けて居つたのである。然るに段々實際の形勢を見ると、法皇廳では、獨逸に於けるが如く舊敎徒をして一つの政治的團體を作らしめ、之をして議會に勢力を占しめむる事が寧ろ得策であると考ふるに至り、一九〇三年遂に此禁令を撤回した。於是舊敎徒は初めて公然公事に關係することが出來た。かくて此年の十一月以來議會に舊教黨の發生を見たのである。而して此舊教黨はいろ〳〵の理由からして穩和自由派と結び、從つて三國同盟を維持繼續するの方針を執るに至つた。元來舊教徒は昔は伊國の如きものと同盟したと云ふので、墺國が三國同盟の一員となつて居るのを非難したのである。けれども今日では墺國に好意を表するの點からして、伊が墺と結んで三國同盟の關係を保つことを可とすることになつた。斯くして舊教黨は三國同盟維持論者となつた。從つて墺國と戰ふを欲せざることは云ふを俟たない。是れ彼等が熱心に中立を主張する他の理由である。其外もう一つ見逃すことの出來ない點は、去年九月以來新たに法皇の位に上つたベネデクト十五世の態度である。彼は貴族の生れであつて、其家系の中には政治的の血液が豐富に流れて居る。前代のパイアス十世が餘りに宗教的であつて、爲めに徒らに事端を釀し、法皇廳の國際間に於ける地位を著しく失墮した後を享けて法皇に選ばれた丈け、彼は先々代のレオ十三世の如く、大いなる野心を以て外交界に活躍するだらうと期待されて居る。彼の選擧されたのは九月初旬、即ち戰爭の開始されて間もない時である。法皇選擧の任に當つた幾多のカーヂナルは、新法皇選擧の大任を盡すに當つて、恐らく平和克復の大責任を感じたであらう。斯くして選ばれたベネデクト十五世は、世界の期待に辜負せざる人格として認められて居る。新法皇は此世界大亂の好機を利用して、何とかして再び歐洲政界の中心に飛び出し、羅馬法皇廳の地位をしてレオ十三世當時の如く有力なるものたらしめんと苦心して居る。即ち列國の間に平和の天使として臨まんとして居る。それには法皇廳は努めて各國と平和の關係に立ち、且つ又何れの國に對しても不偏不黨の態度を取らねばならぬ。さればにや彼は登極早々十年間巴里に學んだ博識聰明の聞え高きカーヂナル、ガスパリーを擧げて國務卿に任じ、以て佛國との國交を回復せんとして居る。英國とも去年十二月下旬新に公使を授受して國交を開始した事は、當時西電の報ずる所であつた。或人は新法皇が新に英佛に接近するの態度を取つたのは、他日協商側の戰勝の功を收むる場合の用意として英佛の歡心を買ふ爲めなりと論ずるが、之は恐らく正當ではあるまい。法皇廳が獨墺側の勝利を希ふの念に至つては固より前後變る所なしと思ふが、彼の主として希望する所は將來の政界に發言權を有することであらう。之を得るには各國の上に中立的態度を持することが絶對に必要である。要するに現法皇は斯くの如き態度を明白に示して居るから、法皇廳としては何處までも今度の戰爭に對しては嚴正中立を維持したいのである。法皇亦此方針をとつて盛んに活動して居る。彼は屢々森嚴なる敎令を發し天主敎會の言論界に向つて最も嚴格なる且つ絶對的に不偏不黨なる態度を自ら各交戰國家に對して取るの決心を表明し、且つ敎民亦此法皇の決心を奉戴せんことを勸告して居る。元來伊國の政府が中立の態度を取ると否とは、法皇廳の中立的態度に何等の關係はないやうであるが、併しながら法皇が其のお膝下の伊太利の國民、殊に羅馬の市民を制して、伊國政府をして中立の態度を嚴守せしめ得ざりしとすれば、法皇の威嚴は他の各國に於て十分尊敬せらるゝと云ふ譯には行かなくなる。是れ法皇廳が最も熱心に伊國政府をして中立の態度を破らざらしめんと熱中する所以であらう。伊國政府が斷然意を

決し得ざる所以も亦茲にあるのである。

然らば伊國は永久に起たないだらうかどうか。之は輕々に豫言することは出來ない。外交上の關係からは是非起たねばならぬ羽目にある。內政上の關係からは容易に起たれぬと云ふ境遇にある。云はゞ伊國政府は板挾みの狀態に陷つて居るのである。十數年以前であつたならば、或は政府は法皇廳の反對に顧慮せずして、其思ふ所を斷行し得たかも知れない。何となれば其頃伊國の識者の間には、隨分反法皇廳的觀念が强かつたからである。けれども此反感は近年著しく減じた。殊に最近總選擧に於て相續いて舊敎徒の選ばるゝに及び、法皇廳と伊國政界との關係は餘程密接して來た。それ丈け舊敎徒の勢力と云ふものは伊國の政界に於て重きをなして來て居る。それで今日では、伊國の政府は輕々に法皇廳に背く譯には行かないのである。況んや舊敎黨は其特殊の段階的(ヒーラルキー)組織によつて統制が最もよく行屆いて居り、從つて最も優勢なる一派をなして居るに於てをや。

併しながら他の一方に於ては、法皇廳も亦今日では昔のやうに伊國政府に對して理を非に枉げても反對すると云ふ態度を取る譯には行かなくなつて居る。殊に今日の戰爭の場合 飽くまで伊國政府の意に反して其行動を妨げると云ふ事は、甚だ不得策であると見るべき理由がある。何となれば若し伊國がいよ〳〵戰爭をすると決めた時に、法皇廳が飽くまで之に反對するとなれば、一方に於ては反法皇廳熱を一部の民間に激しく起さないと限らない。他の一方には法皇廳が斯の如き態度を取ば伊國政府は必ずや戰後の平和會議に法皇の參與を絕對に否認するであらう。斯くては折角の法皇の希望も水泡に歸する。此等の點より考ふると、伊國の政府の出やう一つでは、法皇廳が我を折つて伊國の戰爭參加を默認しないとも限らない。それかあらぬか、去年の暮から本年の春にかけて、伊國の政府と法皇廳との間には非公式の交涉があつたと傳へられて居る。其交涉の內容は、伊國がいよ〳〵起つた場合に、法皇廳は獨墺よりの使臣に對して如何なる態度を取るか。又戰時中獨墺兩國と法皇廳との通信の自由は如何に之を取扱ふかと云ふ問題に關して居る。尤も一方には、羅馬の政府と法皇廳との國交其物か、未だ成立してゐない今日、こんな交涉のありやう筈がないと否認するの說もあるが、併し他方には交涉の細目に亘つて綿密な風評も傳はつて居り、或は法皇廳の通信の自由は戰

時と雖も保障せらるべしとか、又は獨墺兩國より派遣せる法皇廳への使臣は、一時法皇廳から獨墺兩國に向て召喚を請求する事にすべしと云ふ決定を見たなどと云ふ評判が傳はつて居る。之は素より一片の風說に過ぎないけれども、伊國の政府としては此際他の點に大いに讓步しても、法皇廳との國交を開き、其同意又は默認の下に戰爭に參加せんと切望して居ることは、之を見るに難くない。或は財政上の負擔を恐れて現狀を維持するだらうとか、或は列國困憊の際に乘じて漁夫の利を占め得るが故に、敢て現狀打破の大投機は見合すだらうとかの說もあるけれども、伊國の將來の國際的地位を思ふ時は、決して中立の維持を以て伊國の利益なりと多數の政治家は考へて居るまいと考へる。況んや伊太利にして戰爭に參加せんか。彼は第一必らず地中海に於て尙一層優勢なる地位を得るに至るべく、第二にアドリアチック海に於ては無敵の覇王たるを得べく、假令獨墺側が終局の勝利を得た場合でも、伊國のヴアロナ占領丈けは動かすべからざるものたるべく、從つて伊國は之によつてアドリアチック海に於て覇を稱するに妨げなからうと思ふ。第三は伊國は之によつて英佛と尙一層親善の關係を進めることが出來やう。英佛と親善の關係を進むることが、同國の經濟的發達の上に如何に有利であるかと云ふ事は今更ら說くを須ゐない。四月二十日前後の西電は伊墺兩國の兵士の衝突を報じ、吾人は之ぞ開戰の序幕なるべしと思惟せしに、然うではなかつた。併し二十四五日の新聞には伊墺關係危機一髮の間に迫れりとの電報切りに到るより見れば、何れ伊國は早晚起たねばならぬ運命を有するものであらう。

（議員として予の最も力を效さんとする點を明かにす）

△根本志望の一端を

小山東助

僕は議會に經驗の無い新議員の一人である、經驗の無い代りに多少の理想は抱いて居る、否、此の理想を實現せんが爲めに、僕は議會に入らんと志したのである。理想は經驗を俟つて、始めて實現の機會に觸れる、之からが僕等の理想の試驗季節に入るのである。

議院に入つて僕は果して何事を爲さむとする乎。僕の根本志望は、議院其者をして理想あり品格あり權威あり眞に國民を代表すると同時に國民を啓導し、國家の事務を料理すると同時に、國家の生命を向上せしむる者としたいのである。一言にして之を掩へば、帝國議會に靈犀一點の眼目を與へたい、帝國議會の生活に生ける理想の光輝を加へたい。之が僕の本願である。

帝國議會は素より一個の大いなる事務所である、事務家の集合所である。國家の事務を精密に調査し研究し判斷し處理する所のパブリックオフイスである。議會の一員たる者は、財政、經濟、軍事、外交、教育、行政其他一切の國務に就て、相應の智識と批判力とを具備せねばならぬ筈である。けれども僕の信ずる處を以てすれば、猶ほ之のみを以て足れりとは謂へない。議院政治家は事務家以上の或物で無ければならぬ。日本の將來を如何にすべき乎、國是を如何にして遂行すべき乎、斯國斯民を如何にして偉大ならしめ幸福ならしむ可き乎に就て、深遠なる自覺を有たねばならぬ。即ち議院政治家は本來一個の豫言者的風骨を要とする。彼は理想のある事務家で無ければならず、事務の執れる理想家で無ければならぬ。斯くあつて始めて帝國議會は、その本來の權能と使命とを果し得るのである。

帝國議會は人民の代表機關に相違ないが、決して俗論の代表機關たる可きでは無い。人民の最善なる要求、最高なる理想を代表せねばならぬ。

帝國議會は政府監督の機關ではあるが、單に個々の問題に就て、政府の措置を批評し是非する丈けでは、眞實の監督は出來ないのである。政府は何等かの根本方針によつて其權力を行使する。その根本方針に向つて帝國議會の解剖刀を下し指南車を與ふるに非ざれば、監督機關の實を

擧げ得る者では無い。夫故に議會に理想を與へたい、議會の言論をして理想の根柢から湧き出づる誠實なる精神氣魄の表現であらしめたい。僕は斯く望み斯く欲して、議院の人となつたのである。

僕は猶ほ少しく進んでやゝ具體的に僕の志望を語つて見たい。

第一に僕は政黨内閣の樹立を要求する。衆議院に於ける多數黨が入つて内閣を組織するといふ政治的慣習の確立を以て、帝國を救ふ一個の條件と考へる。大隈首相も多分政黨内閣論者と信ずるが、總選擧前或人に語つて、何處に今頃政黨内閣などいふ議論をして居る文明國があるかと言はれたそうだ。僕はその眞意を解し兼ねる。憲政の模範國と呼ばれる英國に、政黨内閣論の聞えないのは、政黨内閣の實久しく行はれて、最早兎角の議論をする必要が無いからである。日本には今猶ほ依然として此の議論を繰り返す必要がある。最も今回の總選擧に不幸政友會が勝利を占めたならば、大隈伯は直ちに野に下られたであらう。その時果して政友會の首領原君を台閣に薦めたであらふか。伯が總選擧前、政黨内閣論を一笑せられたといふ風評によつて僕は之を疑つても見たのである。さりながら之は最早問題とするに足らぬ。今しも伯は衆議院の與黨を率ゐて、極めて快心に適意に政黨内閣論を高唱し得るのである、否、政黨内閣制の確立を企圖し得るのである。他日戰敗るれば、無論反對黨に讓る覺悟と主義とを今に於て明白にする必要がある。故桂太郎公は、その洋行前　先帝陛下に謁して、元老漸く凋落して復た大事に任じ得ない、廟堂事あるの日、政黨首領を召して内閣を組織せしむるの新例を開かれずば、國家の將來憂ふべし、此故に臣は親しく歐米の政黨狀態を視察し歸つて新政黨組織の事業に從はんと言上し奉つたそうである。「欽定政黨」の綽名は此事實に因由すると見える。それは兎も角も僕は桂公の志を認めて遣りたいと思ふ一人である。公は不運にして其志を爲し遂げ得なかつた、又爲し遂ぐるに適當の資格があつたか何うかも疑問であつた。大隈伯は之を爲すべき義務がある。今にして明白に此の主義を江湖に示す可きである。僕は恐らく最大多數の議員諸君と共に、此主義の實現を庶幾する者である。

第二に僕は新政黨の組織を熱望する一人である。政黨内閣制の前提として、成立政黨の大破壞新建設は、免る可からざる運命である順序である。僕は世に所謂大合同論者の一人であるが、併し無主義無理想の大合同は決して僕の欲する所では無い。僕は内に在りてはデモクラチックなリベラルな主義を取り、外に向つては民族的經濟的發展を方針とする文明的立憲的大人物を首領として新政黨を組織したいと思ふ。現代の日本に幸か不幸か大隈伯を外にして、其選に入る可き人物が無い。僕は出來得る限り老人を引き込ませて、新進少壯の人物を擧げたいと思ふけれども、其人無きに苦しむでは無いか。僕は矢張大隈伯を動かして大合同の中堅勢力たらしむるより外に妙策無しと信ずるのである。之に對して目下三種の反對意見を聽く。其一つは元老官僚の側から流れ出づる暗潮であるが、新大隈黨が大成すれば、將來少くとも五年十年はその勢力を持續して第二の政友會とも認むべき議會の多數黨たるに相違無い。そうす

觀察である。此意見は隱然たる勢力を爲して、大合同の氣運を抑制して居る。他の一つは同志會内部の議論、特に最高幹部の見解と思ふが、其意見に依ると、同志會は四面楚歌の間に慘憺たる苦心を經て今日の隆昌を贏ち得たのである。特に今回の總選擧に依つて、非幹部派も全然凋落し、結束漸く堅固ならんとしてゐる。若し卒爾として大合同を爲さば折角の結束を破壞する恐れがある。且つ大隈伯の百二十五歳說も天壽果して之を許すや否や、伯退隱の日、再び動搖を惹き起すが如くんば、始めより大合同をせぬ方が宜しいではないか。一人一黨といふが如き論客連の混入は大政黨の團結力を却つて微弱にすると謂ふのである。同志會の容易に動かざる蓋し其故ありと言はねばならぬ。更に他の一つは、無所屬團に屬する新議員特に實業議員の諸君が、黨派關係から超然として純粹透明の儘で居たい、純粹透明とは言ふものゝ、實は立派な政府黨ではあるが、黨派關係から自由になつて居たい、一人一黨に越した便宜は無いと云ふ意見である。中正會は一人一黨論の本場であるが、今は寧ろ大合同促進論にまで爛熟して來て居る。無所屬團の一人一黨は將來の變化は測られんが、當分兎も角面倒である。僕はかゝる反對異說の中に在りても、依然として有意義の大合同を希望する一人として、先輩同志の驥尾に附して働き度いと考へて居る。有意義の大合同が出來なければ、一人一黨に止るか、若くは小くとも有意義の團體を造るか、何れ大勢の推移る如く、對支外交の振作とか、太平洋策の確立とか、選擧權の擴張とか社會問題婦人問題の解決とかを特に重大視して居るが、要するに根本精神を言へば、(一)日本帝國の民族的經濟的膨脹政策を實行する事、(二)中級階級の健全なる發達進歩を謀る事、(三)婦人小兒勞働者の利益幸福を增進する事を眼目として居るのである。僕は特權階級の代表者では無い最も多數の平民の代表者である。僕は平民政治家として一生を貫くを以て、僕の最高使命と信じて居る。僕が所謂理想の內容、そが實現の方策に至つては、語るべき他日の機會を俟つ。僕は今ただ榮光に耀ける未來の議院を歩みながら、徐ろに初陣の準備を爲さむとする者である。

——四月二十日鎌倉に於て——

△予の微力を效さんとする諸問題

古谷久綱

拜復

議政壇上の一年生たる小生に對し、特に重要なる御下問に與り、光榮不過之候。御熟知通り、淺學菲才の小生、胸中多少の抱負は無きにあらざる

も、果して之れが實現を期し得るや否やに至りては、自ら顧て眞に汗顔に不堪候。隨て此の回答も遠慮可然かと存候得共、折角の御好意を無にするは、却て失禮と存じ、既に選擧區に於て公表したる二三の事項を左に開陳して、御一笑を煩はし申候。

選擧場裡に立ちしは、今回を以て初めと致候得共、小生の代議士たらんとするの希望を起せしは、昨今の事にては無之候。指折り數ふれば最早貳拾貳年の昔、即ち小生貳拾歳の夏、京都同志社卒業の當時より既に此の希望を抱き居候。其際小生は一生の目的を定むるに當り、先輩諸氏が汗と血と涙とを以て、明治維新の　皇謨を翼贊したる結果、國運隆々、終に立憲政治の實施を見るに至りたるを思ふと共に、將來憲政を完全に施行して國利民福を圖るは、吾人青年の國家に對する最高の義務たるを思ひ、不肖なれども、貳拾年の歳月を一身の準備に費し、年齢四拾を超ゆるに至らば、代議士として聊か國政に參與致し度きものと決心致候。爾後小生の新聞記者たりしも、歐洲に留學せしも、伊藤公に追隨せしも當杉並村に卜居せしも、悉く之れ此の準備に外ならず候。

烏兎匆々、歳月は實に人を待たず、準備は未完からざるも、馬齢は既に豫定の四拾を超ゆる貳歳と相成申候。加之小生は初めより私かに今回の臨時總選擧を以て、政友會に對する危機と認め居候。由來政友會は其創立の初めに於て小生と因縁淺からず、假令過去拾九年間に於て、如何なる失策、缺點、短所ありとするも、其功績の竹帛に垂るべきもの多きに拘はらず、一擧して我立法部より永遠に絶滅せられんとするが如きには到底小生の默視する能はざる所なれば、小生は挺身其難に赴き申候。

不敏を顧みず敢て帝國議會の一席を汚すに至りし事情右の如し。然れば小生は議員として、如何なる場合に於ても、我が欽定憲法の嚴正に施行せらるゝ様、飽くまで應分の微力を盡し度候。所謂人氣取りを主眼として、場當りの政治を行ひ、或は心にもなき巧言を以て群衆心理を煽動するが如きは極力排斥致度候。立憲政治は勿論或る程度まで多數政治に御座候。乍併多數黨の協贊だにあらば、憲法の命ずる所如何に拘はらず得手勝手の理屈を附けて、理が非でも推し通すが如きは、如何なる政黨政派の朝に在るを問はず、我が憲政の前途の爲に愼み度きものに御座候。要之小生の議員として渾身の力を致したきは、帝國臣民の爲に我が憲法の完全に且有利に施行せらるゝや否やを監視するに有之候。此の見地より小生は先以て弊害多き現行衆議院議員選擧法の改正を希望致居候。

更に進んで稍々具體的に卑見を開陳せんか、小生は殖産興業に特種の趣味を有し居候。殖産興業の事たる勿論廣汎なる問題にして、一々細論の暇無之候得共、要は我が國富を增進するに有之候。今日の帝國、各方面に俊才尠からず、希くば大に奬勵して、一日も速かに借金國の境遇より脱出し度きものに御座候。其れに就けても、學者の優遇、發明の奬勵交通機關の改善擴張、海運の奬勵就中海運業發達を目的とする特殊銀行の創設の如きに小生の熱望して已まざるものに御座候。

社會問題の攻究及解決は、小生の最も深き興味と希望とを囑する所に

有之候。文明の進步共に、貧富の懸隔日に益〻甚だしきを加ふるは、固より小生の喋々するを要せず候。貧人の友、富豪の友は、世上其人尠からず、小生は貧民の友、弱者の味方として、微力の及ぶ限り、彼等に心身の健全と生活の安全とを與へ、彼等をして幾千代までも、聖天子の忠勇なる臣民として、國運の發展に貢獻せしめ度切望に不堪候。

日淸、日露、日獨戰爭の結果、帝國は今や世界殖民國中の錚々たるものと相成申候。隨て殖民政治は帝國々政の主要なる部分を占むるに至り候。今日の如くして進まんか、帝國將來の榮枯盛衰は一に殖民政策の當否如何に關すと云ふも蓋し過言にあらず候。三年半に餘る朝鮮在勤は、殖民政策に關し、幸に幾分かの智識と經驗とを小生に與へ候故、今後聊か微力を此の方面にも效すを得んかと、私かに樂み居申候。

右の外、尙ほ得貴意度事項無之きにあらず候得共、徒らに賣藥の效能然たる文字を連ねて貴紙を汚すは、如何にも慚愧に不堪候故茲に擱筆致候頓首々々。

△外に在るよりは内に在りて

内務次官　下岡忠治

私が役人生活から代議士になつたのには、別に悟つた譯でもなければ他に何の理由もあつた譯ではない。當地方の人に勸められてなつたと言ふまでゝある。と言ふのは私の選出された地方では、これまで一人も代議士になつたものがなかつた。そこで今度はお前が出たら何うかと勸められて、終には私もやつてみる氣になつて出たと言ふに過ぎない。それと一つには私が實際の政治に携はる上から言つても、議會制度の外にあるよりは内にある方が、總ての點に於て便宜が多いと考へたからである。今一つは憲政の運用を滑にするには、自分等の如き經驗の無い者は好んで此方面に這入つて行く必要があると思つたからでもある。

現在我國の政黨は勿論完全なものではないが、これを急に改めることは出來ない。憲政の進步は多くの歲月を要する。然しながら憲政はいくらかづゝ進步して居るのであつて退步はして居らない。これを實際に見ても空理空論は次第に廢れて總てが實際的になつて來て居る。地方で演說をしても、國利民福國權伸張とかいふ實體的の問題を歡んで聽く傾きがある。これ即ち國民一般が憲政に慣れて來た證據であつて憲政の進步と言つてよい。吾々の少い經驗の範圍に徵して見ても、内容に重きを置かれるやうになつたことは明である。この機運を善導して、國民一般をして憲法政治に慣れしめたなれば、明治天皇の憲法御發布の主意にも叶ふやうにならうと思ふ。

私も多年所謂刀筆の吏をやつて來たのであるが、もう其役目も濟んだから、これからも議員の仲間に這入つて働いてみようと思つて居る。當分働かうと思つて居るだけで抱負も經綸も何もない。假令有つたにしたと

ころで我々閣僚が多勢して實際の政治に當つて居る以上己れ一個の政見等と云ふものは無暗に發表されるものでないのは知れて居るであらう。

△農村問題と其他

大芝惣吉

新たに代議士となつた上は、如何なる方針を以て其職責を果すべき乎。之は或程度までは無論考へて居つた事でもあり、政見發表にも公けにしておいた積である。

私の盡くさんとするところは、大體に於て、中央に於ける仕事と、地方に於ける仕事との二つに分ける事が出來ると思ふ。

先づ中央に於ける仕事といふのは何であるか。これは一人單獨では如何ともすることが出來ない。大體に於て我々の行動は本部の方針に依つて動かされて居るからである。が、何等かの方法で、私はその時々の政治の眞相即ち時事問題の眞相を一般國民に周知せしめる爲めに一種の組織的方法に依つて、東京を中心に全國に渡つて統一的活動を遣つてみたいと思ふのである。恐らくこれは現在に於ける最大急務であつて、今日地方の民が何れだけ我が國の政治を知つて居るか。日に新たなる政界の變動を彼等はどの程度まで領解して居るか。恐らくはこれ等の事に就いて彼等は總て無智であると言つてもよいくらゐである。斯くの如きは法治國として最も耻づべき現象であり、又斯くの如くにしていづれの時にか憲政有終の美を爲すことが出來やうか。私はこの弊を救ひ蒙を啓かんが爲めに、こゝにこの種の機關を設けて時局問題に就いて毎月一回又は二回各種の學者政治家の公平にして權威ある批判を聽き、これを各地方の寒村僻地にまでも及ぼしたいと思ふのである。判斷は無論各自の考へに任かせることゝして、願くば政黨政派に關せず天下のあらゆる名士を網羅してその高見を一般國民に周知せしめ度いものである。

次に地方に於ける私の仕事としては、私の最も關係ある地方即ち選擧區としての福島縣、郷里としての山梨縣、これ等の地方の爲めに微力を盡くし度いと思ふのである。先づ福島縣に對しては農村政策を以てこの地方の開發を圖り度いと思ふ。これは政權發表の時にも可成詳しく述べて置いたが、由來東北地方の農民は天惠に浴すること頗る薄い。人爲を以てこれを補なはなければならない。であるから人爲的施設として、私は先づ農村の改良を第一とするのである。亞いで自治體の改善、青年の指導といふ樣な方面にも努力すべきであると思ふ。

農村の收穫を饒かならしめるにも、數の上に於てその收穫を増すのと價の上に於てその收穫を増すのとの二つがある。數の上に於て收穫を増すことは技術の問題と密接な關係を有つて居つて、政治的手段で遣つて行くことは果して適切であるか否か又果して効果があるか否かといふことは疑問である。が、價の上に於てその收穫の増加を圖るといふことは政治的手段で遣り得ることであり又た相當の効果をも收め得ることであ

る。これ等の意味から言つても現政府の採れる政策たる通貨の減少、物價の低落及びこれと正反對なる米價調節置籾策救濟の事業に對しては私は絕對にこれに反對する。今日價の上に於て收穫の減少して居る事實は現內閣の誤れる政策が導ける當然の歸結であつて、歐洲戰爭の影響でもなければ結果でもなんでもない。今に於てこの政策の撤廢を斷行しなければ米價の調節置籾策の救濟どころか攪亂である。一日も早くこれ等の政策を改めて根本的に農業經濟を圖る具體的の方案を講じなければならぬ。即ち東北の地價修正がそれである。この必要を最も深く感ずるところのものは全國中この東北を措いては他にない。地價修正は即ちやがて地租の輕減である。廣漠たる山野森林を開拓して天然の富源を開發する必要がある。普交通機關の缺乏、運輸方法の不便等の爲めに天の與ふるところの天產を其のまゝにしてあるのは惜しむべきことである。これ等はもつと具體的調査の步を進めて一日も早く解決しなければならぬ大問題である。山梨縣に就いては、私は密かに政友會の現狀に就いて憂慮に堪へぬものがある。私はこれを地方の重立つた人の力で改良し、內に調和を圖り外に統一を圖る樣にしたいものだと思ふ。

今秋開かるべき縣會議員の選擧に際し黨弊刷新の爲めに現政府は政友會の打破を云々して居るが、これに就いて言ふべき理屈ならば私に於ても大に有つて居るが今は言はない。普相當の覺悟を以てこれが對抗を圖るのみである。正當に言へば政治家の見地から今日の地方の實情に照らして縣會議員の選擧を政黨視するのは又已むを得ないかも知れぬが、これは非常なる間違つた考と言はねばならぬ。少くとも地方政治の刷新とか黨弊の打破とかを標榜する現內閣が斯かる地方問題と政黨問題とを混同するのは自家撞着の甚だしいものといふべきである。私はこの區別を今少しく明瞭にし、地方民が誤れる思想に支配せられて地方の自治を政黨の爲めに煩はさるゝことのないやうに何處までもこの主張を地方民の前に發表したいと思ふのである。

一體從來の政治は餘りに政黨政派の僻見に囚はれ過ぎはしなかつただらうか。眼中唯政黨の利害得失のみあつて、眞の意味に於てその地方の實利實益を圖るといふことをしなかつた。此處は政友會の地盤であるからと言つたり、彼處は同志會の地盤であるからと云つたりしてそれが爲めにその地方の利益が犧牲にせられたことは殆ど數ふるを得ない程であらう。少くとも今後の政治家は地方の利益、從つて國家の利益を第一として政黨の發達はこれを第二に置かなければならない。

△選擧權擴張と外交問題

小山松壽

私は今度選ばれて衆議院議員の班に列し、實際政治の任に當るやうになつたからは、及ばずながら國家の爲めに微力を效さんとするところ素より一二にして止まらない。外交の事、國防の事、中央及び地方に於け

る官紀の振肅等數へ來れは多々有るが、要するに積年の黨弊が致らしめたのである、故に之を革新するに差當り最も緊急なる問題として私の力を盡さんとするところのものは選擧法の改良即ち選擧權擴張である。選擧權擴張の必要な事は今に及んで始めて之を認めたのではないが、今度の總選擧に關係するに當つて一層切に其感を深くしたのである。從來の政界は因襲と情實とで傷み疲れて居る。之を救濟し、之に新しい生命を吹込むには、どうしても新しい人の手に俟たなければならない。而して其の新しい人物の出現を歡迎するの氣分は實に全國到る處に瀰蔓して居るのである。唯今日にては未だ新人を迎ふるの途が招かれてないだけである。此途を開拓してそこに確固たる主張と卓拔なる識見とを有する政治家を輩出し、輿論を指導し、眞の立憲的政治を體現するのは實に此途を措いて他にはない。選擧權擴張の急務たる實に言を俟たないのであつて政界の革新は自ら之に依つて得らるゝであらうと思ふ。今回の總選擧に依つて政友會の横暴を打破したのも此氣運の然らしむるところであれば、新しい議員の多く出現したのも亦此氣運の因つて致すところである。

外交の問題に至つては歷代の内閣中||政友會内閣の外交に比しては勿論||現内閣の外交方針を以て私は最も優秀なものと信じて居るのである。然しながら今日は實に重大なる時局であつて、外交の事最も考慮を要するものがあるであらうと思ふ。中に就いても日支關係は單に日本と支那との問題ではなく、又東洋平和の基礎問題と云ふ許りでなく、次で來るべき全世界に亘つての大問題である。であるから私は此際幸ひ世界的人物たる大隈伯の手腕と名望とに據つて是れが根本的解決を得たいと欲して居るのである。

△憲法の運用と政治の高調

犬塚勝太郎

私が今回選ばれて貴族院議員になつたのは、別に深い仔細があつた譯ではない。今日の重要なる時局に際して、國家の爲め、延いては地方の爲めに一臂の力を盡くさんことを私の地方の人から懇請せられた結果に外ならない。

であるから大政治家が臺閣に列する時のやうな抱負も何も私にあらう筈がない。代議士としては勿論、政治家としても產れたまゝのほや〳〵に過ぎない。殊に實行の伴はない言論を矢鱈に振廻すことは私の好まぬところであるから、玆にさして申上げる程のこともない。當然しながら私が常々最も力を須ゐ度いと思つて居ることは、個々の問題に就いては素より個々の意見があるべきであるが、今少しく憲法の運用を滑かにし其効果を擧げることに努めなければならぬといふことである。それと同時に政治を低調ならしめないやうにするのが今の政治家の任務であらうと思ふ。世の進步と共に政治行政の問題に精進して政治上の音調を高尚

にして行き度いと思ふのである。

見て世の中といふものは、新舊兩樣の分子が相互に噛み合つて行かなければならぬ。古いものばかしでも不可ければ、新しいものばかしでも不可ない。古いものには古いだけの價値があり、新しいものには新しいだけの意義がある。新しい者は古い者を一概に貶して頑迷固陋と侮り、古い者は新しい物に伴ふ弊害のみを見て指彈するけれども、新しい物の起つて來るには起つて來るだけの理由があり必要があるのである。『古い者は新しくならうと努め、新しい者は古くならうと努めよ』と言つた人がある。誠に至言である。政治界に於てもこれと同じやうに、今後我が政界は新しい者の手に依つて開發せられなければならぬところも多々あらうけれども、新しい者が餘りに出沙張るのは決してよろしくない。私共はまだほんの政治家としての卵であつて、複雜な政界の事情には一向通じないのであるから、今に於て口幅つたいことを言ふことは出來ない。今後精々修磨して一人前の政治家となることを希つて居るばかりである。

△國民の權利自由の確保と法律制度の改善

法學博士　大場茂馬

私が嘗て大審院判事の地位を捨てゝ民間法曹の列に入り、今回復た更に選ばれて議政壇上に立つに至つたのは、一に我國民の權利と自由とを確保せしめんが爲めである。立憲政治の我國に布かれてより未だ必ずしも短日月といふ事が出來ない。立憲政治は國民に權利自由を與へんとする制度である。而も今日果して我國の政治は我國民に權利自由を確保せしめてゐるか。否寧ろ頃者憲政の逆轉を來たしてはゐないであらうか。國民の權利と自由とが尊重せらるゝ事なくして何れの處にか立憲政治の存在を認める事が出來やうや。私は敢て言はんと欲するのである、我國現下の國勢は一度定められたる立憲政治の本義に遠ざかり、明治天皇の下し給ひたる聖旨に悖らんとして居ると。

今日個々の法律を通覽するに、國民の權利自由の確保を圖るための法律は甚だしく疎漏杜撰にして官憲對人民の關係に於ける人權保護が獨り薄弱なるに止まらず、一般的人權保護も亦甚だしく薄弱である。從來屢々人權蹂躙問題の起つたのは之れが爲めであつて今後とても又屢々繰り返されなければならぬであらう。又近頃吾々が吾々の權利自由の安固を疑はざるを得ないやうにしたのも亦之れが爲めである。此杜撰と此疎漏とを去つて明確に限定する範圍の規矩即完全なる法律制度を設けて、眞の立憲政治の意義を發揮し、我國民の權利・自由とを安固ならしめ、國民一般の慶福を増進し從て邦家の隆昌を圖らんとするのが、今に於て私の最も力を效さんとする所である。

△憲法擁護、産業奬勵、文教刷新、國民衛生、

杉山四五郎

お尋ねを蒙りましたが、元來未熟千萬なものであつて、殊に長く地方に奉職した爲めに部分的の知見は多少ある積りであるが、中央に奉職した事は至つて年所の短かい事であつて、從つて一般的の政治に關する議見等は何等蓄へもないやうな譯で、誠に恥入つた次第であります。從つて衆議院議員として議政壇上に立つて或一定の抱負を實現すると云ふやうな事は不肖四五郎の到底當る所ではないのである。併し自分も元來政治に志した事は廿餘年の昔からであつて、大學に於ても政治經濟の學を脩め、爾來今日に至るまでの間、學究的には多少の調査研究を致して居つた次第であるから、之まで其研鑽を積んで居つた――素より粗末なる資本ではあるが――それを土臺として及ばずながら國家民人の利益幸福を進むる上に些かなりとも微力を效して見たいと考へて居る。

抑々我日本帝國の憲法は明治二十二年二月十一日を以て畏くも　明治天皇陛下が御宣布相成りたる不磨の大典なることは申上ぐるまでもなき次第である。又此憲法發布の際に賜つたる詔勅に於ても、憲法の條章により統治權を御行施遊ばさるゝことを宣らせ給うて居ります。又教育の勅語に於ても國憲を重んじと云ふ事に我々民臣に御垂教あらせられて居る次第である。大正の御代に至りまして　今上陛下は朝見式の際に賜つたる詔勅に於て又々畏れ多くも「憲法の條章に由り統治の大權の行使を愆ることなく」云々と仰せ給うて居ります。實に我々臣民は此有難き聖詔の下に立つて、常に愈々服膺して、此國家の根本法たる憲法を尊重し、此國憲の下に立つて行動せねばならぬ次第と信ずる。

元來我帝國の憲法は廿二年の二月十一日を以て欽定せられて居るが故に、即ち成文憲法は施行後滿廿五年を經過したる次第である。併しながら不文の憲法は遠く神武天皇の紀元第一年に已に其基礎を有するのみならず、國體の精華、國憲の基本は實に遠く神代に遡及して居る次第で、即ち我古神道なるものは國憲の淵源をなして居るのである。故に我々臣民は獨り欽定憲法の成文を尊重遵奉するのみならず此條章の解釋に當つては常に數千年來の不磨の不文憲法の精神即ち國體の精髓といふものを忘却することを許さない。若し苟且にも之を他の英、白、佛若くは獨等の其國家組織及び國憲の基本を根本に於て異にして居る主義精神によつて之を律するが如き事あつては實に由々しき國家の大事である。故に我々臣民は常に一大決心を以て我帝國の欽定憲法を尊重すると仝時に此不文憲法の精神を格守して敢て此憲法の紛更を來たし、若くは之を蹂躙し去るが如き事に對しては極力之を防止し之を箝制し以て我國憲の擁護に任ぜねばならぬ次第である。單に考へても已に前段の次第であるのに況んや前申した如く畏れ多くも　兩陛下から有難き御聖詔を拜して居ることであるが故に益々此精神を披瀝して憲法擁護に任せねばならぬのであ

る。熟ら昨年四月政變以來の現內閣の施設經營の跡を見ると、其爲す所往々憲法の條章に背反し、又憲法の精神に悖離し、甚しきに至ては憲法を蹂躙し去るが如き形跡あるは實に國家の爲めに深憂慨嘆に堪へざる次第である。今一々之を列擧することは避けるが、官制の改正の如き、官制通則の改正の如く、責任支出の如き、其他枚擧に遑あらざる程度に國憲の破壞を試み、恬然として恥づる所を知らないやうな風である。之れ豈に民に手本を示すべき、否輔弼の重臣たる閣僚のなすべき所であらうか。北至誠々缺き、其本分を盡すに冷淡なることと驚くに堪へたる次第である。又一方に於ては斯くの如き內閣の下に指導せられつゝある民心の歸嚮する所を省れば轉た寒心に堪へざるものがあるやうに思ふ。例へば歐洲出兵論の如き其一例である。宣戰は天皇の大權に屬して居る事は申す迄もない。之は素より成文憲法の認むる所であるが、成文憲法を俟つて後知るのではなくして遠く立國の初めよりして一朝事あれば天皇は即ち大元帥であらせられたものである。宣戰講和は素より天皇の大權であり又あつたのである。故に出兵の如きは宣戰と相俟たねばならぬ次第であつて、果して然らば歐洲出兵論の如きは、苟くも臣民の本分を知るものゝ輕々に口にすることの出來ぬものである。然るに近來輕々に斯る問題を論議するものが我同胞中に簇出したと云ふ事は、是れ即ち不知不識の間に我國體の基礎の上に汚點(スポット)をつけたやうなもので、誠に慨はしき事である。現內閣はかゝる輕佻なる思想、かゝる危險なる論議に對して何等の注意監督を加へたることを聞かぬのは又私の甚だ遺憾とする所である。私は以上の見地よりして及ばずながら議政壇上に立つて居る時と居らざる時とに拘らず、他の仝志諸君と共にかゝる非違を糺彈し、又之を痛論し、現內閣に十分の猛省を促がし、以て少くとも我帝國憲法の擁護に任ぜんと欲するものである。

◎

次に日清の戰勝に續き日露の戰勝によつて我帝國の國民の元氣と云ふものは其頂點に達したる事は誰人も否取するに吝ならぬ所である。此旺興せる國民の元氣を鼓舞助長し、以て之を產業の各方面に活用して國家を隆盛ならしむることが爲政家の要訣と考へる。若し戰勝に伴ふ弊竇たる奢侈を矯むるに急にして此元氣を苟且にも銷磨し去らしむるが如き事あつては政治の要道を沒却したるものと云はねばならぬ。現內閣は其政綱の示す所は一見堂々たるものがあつたにも拘らず人氣を沮喪し所謂不景氣を招來せるが如きは其政策の根本を誤れるものと云はねばならぬ。故に我輩は斯くの如き、假りに名つけて見たならば消極主義とでも云ふべき誤れる方針を排斥して國家の財政經濟に關しては飽くまでも積極の方針によつて、換言すれば國民の元氣を助長作興して產業の發展、改善に盡力したいと考へて居る。

次に近時思を潛めて民心の趨向を考へ、又其思潮の變遷を考ふる時は、教育の上に於て特に精神の鍛錬の上に於て輕々に看過すべからざるものあるを見るは、國家の前途將來にとつて甚だ輕視すべからざるものがあるやうに思はれる。今一々之を詳說するとは寧ろ我等の忍びざる所であるが故に、之は徐ろに先輩又同憂の諸士と細心講究の上、文教の當局者に

對して戒飭鞭撻するとは勿論、適當の機會に於ては相當の方法によつて國民精神の善良なる發達を遂げしめて、我大和民族の精髓を長へに後昆に傳ふることが出來るやうに、及ばずながら努力せんとする次第である。

國防の問題に至つては趙括の兵を談ずるが如き嫌があるが故に、素より專門の事項に關して容喙することは不可能であるけれども、只其國防問題の基本たる壯丁の精神上の健全と同時に肉體の健全、換言すれば國家の衞生問題については些か懷抱する所のものがないではない。故に我輩は衞生の方面より觀たる國防の施設に關し、現内閣は果して如何なる用意ありや、如何なる施設ありやを觀察して適當の評論を試み、又適當の助言をなすに微力を效さんと欲する次第である。概要右樣の如き考でありますが、宜敷御諒察の上、然るべく御聽取下さるやう希ひます。

△多數黨の監督と批判

大隈信常

政友會は故伊藤公の創設に依り其當初黨員の節制馴致に重きを置きたりしを以て議場と政黨本部に於ける黨員の步調は誠に整然たりしが衆議院に於て過半數を占むるや同黨員は常に我國民の大多數を代表するの一代政黨なりと誇るに至りたるが是畢竟同黨が常に政權を握り政局に立ちたる爲に權勢に阿附するもの相依り益々其大を釀製したるものにして今回の政府與黨が大を成したると其趣を異にするものあり然れ共同志會が今回の總選擧に於て多數を得たるは國民が同志會そのものを依賴したるにあらずして政友會に對する反動と政界の機運と政見本位の立憲的動作に由り偶然にも此結果を齎したるものなり即ち政府與黨として國民の覺醒より生じたる產物なり故に同黨にして其主義政見を以て天下の望みと人心の歸向とに投ずる事を思はず徒らに內訌を事とし或は意滿ち、驕り無遠慮なる行動に出でんか今日の榮華は所謂槿花一朝の夢と化し再び逆境に陷るべきは必然逢着すべき所なるを以て吾等として一切突飛なる政策を行はしめざると共に議會にありては飽迄反對黨の言論を尊重し曾て政友會が行ひたるが如く多數を恃みて是が非に拘らず自己に不利益なる言論を抑壓するが如き卑劣なる手段を取らしめず常に眞摯なる態度・着實なる行動に依て國民の輿望を維持せしめ若し其の步調の整はざるに於ては國民の輿論に副ふべき善政を施す能はざると同時に黨の節制を保ち且つ黨規を維持する能はざるを以て此間の弊害を芟除するを要し又政府黨として多數を恃み不知不識の間にも若し其勢力を弄ばんとするに於ては予等現閣黨弊刷新の意義より見て飽迄之を阻止し又は一種監督的に或は批判的に行動し多數黨として其鼎を過らせざるやう牽制に努め飽迄前者政友會の轍を履ましめざるに在り。

須らく誠實なるべし

鳩山一郎

私はまだ代議士になつたほや〳〵で、別に之と言つてお話する程のこともないが、たゞ今迄も考へて居つたことで、今度から政界の仲間入りをして特に其感を深くしたのは、餘りに今迄の政治家が誠實を缺いてゐたといふことである。世に誠實程肝要な德義は無いが、わけても政治家は誠實を以て旨としなければならぬ。然るに今迄の政治家といふものは誠實どころか、却て虚僞を事とし、政治は術であると考へて居たやうである、であるから人を騙したり人を陥れたりして喜んだり、實行の伴はない空論を平氣で主張したり、甚だしいのは昨日の主張と今日の主張とが全然正反對で、あんな事を言つた人が、今こんな事を言ふかと思ふやうな事も一向お構ひなしで遣つてゐる。鐵面皮とも何とも言ひやうのない話で、一般の道德はモット進んでゐる筈たのに、政治道德の方面だけは今日尚甚だ劣つてゐるやうに見える。私は之は何處に原因があるかといふに、未だ立憲政治の行はれなかつた、所謂藩閥官僚の專政政治時代の餘弊であらうと思ふ。倚らしむべし知らしむべからずの流儀で、何でも彼でも勝手に遣つて來たから、國民に都合の惡い事は知らしもしなければ、又騙してもおいた。殊に維新時分になつて、少しく革命的な機運が出來てからは尚更本當の事を國民に知しめる譯にも行かなかつたらうし、政治家同志にしても單に政敵を倒しさへすればよいといふ目的の勝利に急にして、其手段などに心を用ゐる暇が無かつたでもあらう。であるから、こんな風潮を導いたのも、時代の經過として亦已むを得ないかも知れない。が、今迄はそれでよかつたとしても、これからの政治はそのやうな策略や譎作で仕事をすることは出來ぬ。そんな時代は既に過ぎ去つて了つたことに氣が附かなければならない。私が今度自ら選擧の當日に、自動車で各區役所廻りを遣つたが、到る處で政友會に於ける私の知己先輩は勿論、知ると知らないとに拘らす、私が政友會員であるといふことに依つて私の爲めに貴重なる一票を投じに、忙しい中をも構はず來て呉れてゐる人を見た。私は愁くまで私の爲めに盡して下さるかと思つて誠に感謝の念を禁ずることが出來なかつたが、それ同時に反對黨の人となると、今迄私の親しい人や親父からの知人でも皆私の當選を防碍しにかゝつて居る。實際に政見が一致するといふので贊成し、政見が違ふといふので反對するならばよいが、只單に敵黨であるからといふので無暗に防碍したり、味方だからといふので、譯も解らずに應援したりするといふのは、單に敵を倒しさへすればよいといふ過度期の餘弊が殘つてゐるので、立憲政治が行はれてから最早彼れ是れ三十年にも成らうとする我國で、まだこれくらゐの程度にしか進歩しないといふのは慨しいことである。私は私を應援して呉れる同志に難有いと思つて其志を感謝しながら、尚此憾みを懐かざるを得なかつた。

さういふ風で、政界の現狀は今言つたやうに自分の味方でありさへす

れば、何でも彼でも擁護し、自分の敵であれば何うでも反對するといふやうな感情的な遣り方であるから、自分の黨派の爲めに、自分の黨派と進退を共にする爲めに、彼等は自然と自分の主義主張を裏切りして居ると氣が附かない。本當に言へば、自分の主義主張と一致しなければ其政黨を脱し、更に自分の主義政見を同じうする團體に入つて差支ないのである。それを徒らに感情に奔り敵黨を倒しさへすればそれでよいといふ考だから、自分の説は散々打壞されて了ふ。今度の增師案にしても、野に在る時には極力反對した人で、今日恬然と增師賛成を聲明して居る人がある、滑稽なのは責任支出問題である。今日政府の要路に立つて今回の責任支出は已むを得ないと辯護して居る人も、其野に在つた當時は政友會の責任支出を以て憲法違犯とまで極論した人であり、今日政府の責任支出を非難してゐる政友會の連中は、其昔政友會内閣の當時は、其政府の責任支出を以て最も當を得たる、金鵄勳章に相當するとさへ公言した人々である。茲に至つては殆ど噴飯に堪へないではないか。私は今日此政界の情弊を一掃して、一日も早く眞の意味に於ける立憲政治を擁立したいと思ふ。實際政治に就いて外交内治共に言ふべき事は多々あるけれど、刻下の急務として私は此點を改良したいと思ふ。事務多端の爲めに筆を執つてゐる暇はないから、今言つたやうな意味を良いやうに君の方で綴つておいて貰ひたい。

△實行の伴はざる空論を排す

大藏次官　濱口雄幸

私は今度初めて衆議院議員になつたのも別に理由があつた譯ではない。私は第三次桂内閣の當時から同志會の一員で、官吏はしてゐるが普通の官吏とは色合が違つて居て、今度次官になつたのも特別任用ではなかつたが、同志會員として成つたのである。

實を言へば私が今度代議士になるのは、まだ時機が尙早いと思つて居つたのだが、鄕里からも同志會からも勸められて已むを得ず立つたまでゝある。抱負といつても何も無く、政見と言つても同志會の政綱に從ふまでゝあるが、只今日の政界を觀て稍慊らなく思つてゐる事は、今迄議會で發表されてゐる議論が餘りに無責任な實行の伴はない議論が多かつたといふ事である。これといふのも、從來强大な藩閥内閣が根を張つて居つて、之を倒して、政治を國民的にする爲めには尋常一樣の手段では いかなかつから、實行の出來る出來ないをも考へずに、つひ極端な議論を發表するに至つたのであらうから、今迄としては或は已むを得なかつたでもあらうし、それでもよかつたのでもあらうが、今後の政治はそんな無責任な言辭を弄することは出來ない。入つては政權を掌り、下つては野に戰ふに當つても、其政見は常に堂々として渝るべからざるものである。朝に入つて直ちに實行の出來ないやうな議論は、假令野に在つても之を唱ふべきではなく、その代り在野當時に主張した主義政見は、政權を握るや直ちに之を實行に移して、其言論の實を果さなければならない。それが爲めには調査を綿密にして、明日からも實行の可能な議論をお互に發表するやうにしなければ眞の政治は發達しない。今度私が代議士となつた以上は、私自身は素より、一般政黨員に向つても空理空論をして、責任ある政見を發表するといふとを望んで已まない次第である。

◉蘆花 徳富健次郎著

訂正縮刷 みゝずのたはこと

（定價八十錢 郵税八錢）

五十六版

武藏野の孤村に鋤をとれる著者が折に觸れ興に乘じて筆を走らせし即興のスケッチ短篇小說、瞑想、書簡、紀行等を集む。清新なる田園の小景、詩化せられたる敎訓、涙を含む笑に充てる物語、有象より無象に通ふ神秘の暗示、平淡の中戰慄すべき恐しき說話卷中に充滿す。

□發行所 東京銀座大通新橋際（振替東京二〇〇番）新橋堂
同日本橋區吳服町八（同 二〇七七六番）服部書店

◉蘆花 徳富健次郎著

小說 黑い眼と茶色の目

（定價壹圓廿錢 郵税拾貳錢）

第十七版

是れ『不如歸』の著者『思ひ出の記』の著者。『みゝずのたはこと』の著者が、其二十七年以前同志社學生時代に於ける戀物語也、破れたる初戀の慘憺たる告白也。聽說、著者此告白を江湖に公にするに當り遲疑逡巡、稿を燒くこと實に再度に及べりと、其如何に眞摯にして謹嚴なる發表なるかを知るべきなり、此書によつて著者は其年來祕め置ける著者最奥の心事を語り世間は未だ曾て窺ひ知らざる著者の一生面に接見せん。

發賣元 東京市銀座通新橋際 電話新橋一九九一番（振替東京二〇〇番）新橋堂

◉高濱虛子著

小說 柿二つ

近刊

縮刷 村井弦齋著
食道樂
定價一圓五十錢 特價一圓廿錢 郵税十二錢 特價五月十五日限り

縮刷 村井弦齋著
食道樂續篇
定價一圓五十錢 特價一圓二十錢 郵税十二錢 特價五月十五日限り

食道樂附錄 村井弦齋著
和洋家庭料理七百種
定價六十錢 特價五十錢 郵税六錢 特價五月十五日限り

縮刷 村井弦齋著
臺所重寶記
定價六十錢 特價五十錢 郵税六錢 特價五月十五日限り

家庭 磯部鋭著
園藝實驗談
定價一圓卅錢 特價一圓五錢 郵税十二錢 特價五月十五日限り

家庭 尾崎密藏著
養雞法
定價四十錢 特價三十五錢 郵税六錢 特價五月十五日限り

瀬川博士著
實驗上の育兒
定價一圓卅五錢 特價一圓二十錢 郵税十二錢 特價五月十五日限り

□大賣捌所 東京市神田區表神保町（振替東京二七〇番）東京堂

（中付一の一）

文學博士 坪内逍遙譯

沙翁傑作集 第七

新刊

テムペスト

四六版天金美本
寫眞版木版密畫
數個入 全壹册
金壹圓卅五錢
郵稅金八錢

大沙翁が最晩年の**傑作**にして其**絶筆**と信ぜられたる**夢幻詩劇**！是れ喜劇？仙話？樂劇？象徵劇？作者が**自傳の概要**？彼の四大悲劇などゝは全く基調を殊にせり。如是**絶類の傑作**を含味せずしては**大沙翁**の大沙翁たる所以を知るべからず。本篇には譯者特に讀者の爲に六十餘頁の**長論文**を添へて其解讀の枝折とせり。

【既刊】

1	ハムレット
2	ロミオとジュリエット
3	オセロー
4	リヤ王
5	ジュリヤス、シーザー
6	ヹニスの商人

發兌 東京牛込早稲田 振替一一二三番 **早稲田大學出版部**
東京神田裏神保町 振替五〇一番 **冨山房** (賣捌) 全國書肆

ROMAJIでひく

ローマ字びき 國語辭典

九十頁 語數三萬五千餘
特價九拾錢 郵稅八錢
(定價金壹圓)

本辭典は我邦破天荒の企で

最も進步したる時代精神から產み出されたものであります。厄介至極な假名遣の束縛を受けず、最も容易く引けて、時間と勞力との經濟に於て、競爭激甚な今日の社會に、最も適當して立つべきものであります。一寸胴忘れをした漢字や假名遣を直ちに見出し得るの便利に至つては

三日使つたら生涯離されぬ重寶至極な辭典であります。

(本書の特色)

一、ローマ字さへ分れば誰にでも引けること。
二、說明はごく平易な口語體で少しでもむづかしい漢字には假名が附けてあること。
三、各語每に多數の類語を舉げ又漢字の意義、故事の由來等も丁寧に說明しあること。
四、現用の國語は俗語も、漢語も、外來語も又成句、諺までも舉げてあること。
五、一々英譯が附けてあつて和英辭書の代用をなすこと。

内容見本進呈

發兌元 東京神田 (振替口座五〇一番) 富山房
賣捌所全國各地書店

(中付一の三)

元大阪高等商業學校々長 福井彦次郎先生著

新刊

我觀人生

著者は教育界の豪傑として令名嘖々たり、其胸中鐵の如き信仰と直言直行人に下らざるは當代の異彩也、夙に硬骨を以て一世に超え常に青年渇仰の中心となる、其談論人生の機微を穿ち寸鐵殺人の慨あり、本書は其卓論百廿餘篇を蒐集し卷末東西博議一篇を加ふ、觀察奇警にして諷刺あり教訓を含む、上は國體の大事より市井の些事に及び教育と人生の密接なる關係を論じ處世修養の秘訣を說ける不朽の快著也、篇中到る處著者の面目躍如として讀者に迫る、何人も來りて此偉人の言に聽け

□內容目次大畧□

- 似て非なもの
- 深呼吸妙用の一
- 常識と烈の字
- 幸福は第二
- 人間の二大敵
- 世の中は芝居見物
- 大學卒業生と姙娠
- 好きこそ身の破滅なれ
- 小も大を兼ねる
- 醫者と汽車
- 乃木大將の自盡
- 風呂屋哲學
- 親仁の三ヶ條
- 遠方の診客心得方
- 四十二厄年論
- 中學卒業生の巡査
- 人の一生の心得方
- 婦人と小供の心
- 一等國相當の教育
- 輕業見物の心得方
- 大學卒業生の意氣
- 勝を第二着に制す
- 隣家同志の禮儀
- 袴がたゝめる腕前
- 死者に對する禮儀
- 若い敎員の不心得
- 未成年喫煙論
- 三位一體論

四六版總布上製美本
紙數約三百五十頁

價壹圓拾錢 送料金八錢

（中付一の四）

發行所 東京市本郷區本郷一丁目大通 電話下谷四三六二 振替東京一二五五八 日東堂

衆議院書記官長
林田龜太郎先生著

人生放語

（三百五十頁）

先生多年の實驗的處世上より表裏兩面の社會觀世態觀世間觀を先生獨特の烱眼を以て觀破したり然も先生に非らざれば到底他人の能くする能はざるの機微を穿ち一讀巻を措く能はざらしむ■目次大要■世間論■舊人物と新人物■東洋流の豪傑■原敬君の手腕■選擧の神聖■■選擧腐敗豫防二方法■議院腐敗の原因■議論の振はざる原因■世態錄■島國根性■大活動の賣春婦■一事業一工夫と其苦心■膽力と細心■成功者の資格■膽力修養二方法■大學生中の二派■處世觀■一木等諸豪傑と天下取の相談■胸中の閑日月■心の落付かぬ申譯主義■恰悧なる現代の青年■伊藤公より淸水次郎長の談を聞く■何人も欲しき此の心此努力■雲助と競爭■余は放蕩者に非ず■敵前の睡眠■身心一體論■隨時隨處睡眠自在■美觀錄■議長と特長■引込家と活動家■阪谷若槻仲小路■莊重なる政治家■忙感錄■觀祭と視祭■綠柳紅燈の喃語■賄賂は時に依て必要■非ハイカラ黨■歐洲旅日記■旅客と獨身美人■塵外淸語

▼總巾裝
▼箱入頗美裝
▼口繪寫眞
▼筆蹟挿入
▼價壹圓
▼郵稅八錢

（再版）

農學士
井上正賀先生著

藥物不用 諸病食餌療法

（紙類三百頁）

本書は食餌主義を多年實行して無類の健康を得て居る著者が絕對に不自然なる藥物を廢し自然的なる食餌に依て萬病を防ぎ且つ治する方法を詳說したるものにて▲胃腸を健全に保つ法▲肺病と食餌療法▲腦病と食餌療法▲胃腸病と食餌療法▲心臟病と食餌療法▲腎臟病と食餌療法▲淋病梅毒と食餌療法▲婦人病と食餌療法▲眼病と

價七十錢
郵稅八錢

（五版）

發兌 東京神田鍋町 大學館 振替東京四五一七

A辯護士の取扱ひたる 犯罪ロマンス（一）

松崎天民

人間が人間を殺すところに、悲劇の幕が開いて、人間が人間を裁判するところに悲劇の幕が閉る──と思つて居ては、大變な間違ひである。「一件記錄に見た犯罪」にも、飛でもない虛僞があれば、「法廷に現はれた人生」にも、飛でもない思惑違ひがある。法曹界有爲の少壯辯護士A君が、最近十年間に取扱つた五六の事件は明かに此の間の機微を語つて居る。人を殺した奴が可愛想で、殺された奴が憎いこともあれば、切迫詰つて犯した罪に、萬斛の涙を濺ぐ樣な事もある。「原因」と「結果」の間を流れる「プロセス」に棹して、「事件の眞相」を解決しやうとしたA辯護士の努力は、やがてA君自身の「生活」であつたとも云へやう。本號から數回に涉つて、私は其の「日記」の數節に赤裸々な「人生の姿」を探訪しやうと思ふ。

龜の精の祟り

一、待合「永樂」の春雨

「幸德秋水君の言論に敬服して、一種の社會主義を聖書以上に有難く思つて居た時代だもの、其の頃は僕も未だ若かつた。社會主義を地方へ傳道するために、

幸德秋水君が出張する時には、よく隨伴して行つたもので、種々と面白い事があつた。左樣さ、今から十餘年前の一昔、水戸の珂北三郡の土地と、僕とが知合になつたのも、實は幸德秋水君が紹介した樣なものであつた」

斯う云つて、餘り多く飮めぬ辯護士A君は、若々しい笑顏の唇に金齒の光を見せた。

雨催ひの心忙しい黄昏であつたが、千代何とか云ふ中年增の妓で、春本のかの子が松づくしか何かを踊つた頃から、咽ぶ樣な夜の春雨が降り出した。

私は相應の醉心地になつて、其の夜のお客樣たるA辯護士の前をも憚らず、「新しい戀」の披露などをした。瀧田樗陰君の顏も大分紅くなつて、指名で招んだ妓が「お芝居」とやらで、遲くなり相なのを氣にかけ初めた。白鶴がキリンになつたり、キリンが白鶴になつたり、果はお定例の雲節なども出た。

「茨城縣の珂北三郡と云へば、御承知の那珂川の北で海岸線に沿うた方面だが、學生時代に行つた緣故があるので、今でも多少の知人が住で居る。僕は其の後法律學校を卒業して、間もなく、官途に就いて居たが、三十九年には退官して東京に移り、暫く珂北方面へ遊びに行つて居た。これからお話しやうとする一場の物語も、實は僕の學生時代から緣故のある珂北での出來事なのだ」

赤坂の待合「永樂」の表二階に、林子や仲子の姿が現はれたのは、九時を過ぐる頃であつた。藝妓達は「小山内薰さん」を是非したり、「市村の吉ちやん」を云々したり、「木挽町の助六」を評判したりした。A辯護士が秋田辯で語る謎の樣な悲劇の舞臺面には、何の交涉も有つて居ない樣な顏をして、色戀の沙汰にのみ微笑んで居る藝妓達には限りない幸福の色が見えた。

A辯護士は始終ニコ〳〵して、過ぎ去つた「生活日記」を私等の前に展開げて見せた。

「更に僕は早稻田の文科に入學して、四十一年に卒業したけれど、文學で生活するよりは、法律で飯を食ふ方が容易だと思つた。間もなく辯護士の登錄を受

二年に起つた殺人事件であつた」

瀧田君が「踊れ、踊れ」と迫つたけれど、林子は「厭だわ」とか、「今日は身體が惡いの」とか云つては、何うしても踊らうとはしなかつた。そして、

「殺人(ひとごろし)の話なんか、厭だわ、ねえ、仲ちやん」

と云つて、肉感をそゝる樣な眼つきをしては、相變らず二人で「安價な戀」を囁き交して居た。

新橋の「花月」にしやうか、赤坂ならば「永樂」にしやうかと、飲みながら斯うした話を聽くに適い場所の一つた、「永樂」を選んだことを、瀧田君も私も失望はしなかつた。忠實なる聽者(きいて)を藝妓の群(むれ)に得なくても、A辯護士の思ひ出が流れる樣に浮かんで、其所(そこ)に痛烈な人生の姿を讀み得さへすれば、それで私は滿足であつた。かうした談話の相の手には、蓮葉な藝妓達の應酬(うけこた)へまりは、しめやかな春雨の方が、何んなに風情があるか知れない。

未だ十二分でなかつた。

以下は、A辯護士の實話である。――

二、櫻ヶ岡神社の傳說

水戸から二里ほど行つた所で、福島へ通ずる大宮街道に沿うて、櫻ヶ岡神社と云ふがある。境内には一帶に櫻の樹が植えてあつて、春になれば毎年、美しい花を開くところから、それで櫻ヶ岡神社と云ふのであらう。恰度、今頃が花の盛りで、朝な夕なの眺望には、旅人の足を停めさせて居るに違ひない。

櫻ヶ岡神社の畔には、十丁四方もあるお定りの大きな池があつて、池には無數の龜が棲んで居るので、四(あた)人の人々は、其の龜を「池の主(ぬし)」として言ひ傳へて來た。天氣の晴れた暖い日になると、澤山の龜の子が池の中からゾロ〳〵這上つて、道と云はず、田と云はず畑と云はず、ゾロ〳〵這廻つて居る。村人は

「そら、龜の子樣だ、龜の子樣のお遊びだ」と云つて、畏れ且つ敬ひ、若し過つて龜の甲に觸れたり、踏み潰したりしやうものなら、「池の精」の祟りで何んな憂き目に逢はされるか知れない、と取沙汰じ合つて居た。櫻ヶ岡神社に對する信仰と、底知れぬ魔の池に對する恐怖の念とは、何でもない龜の子に對する神秘的の傳說となつて、何人もこれを嘲り笑ふことすら、罪深い樣に信じて居た。

御池の龜の子に傷害を與へた者や、その一家一族の上に、恐しい祟りが落ちるとの傳說は、單り古昔からの口碑ばかりでなく、樣々の出來事が一層深く人々を恐れ慄かせて居た。現に櫻ヶ岡神社の氏子で、小宮村に住む根本お高と云ふ女の祖父は、龜の子を踏み潰した爲めに盲目になつて、二十餘年の歲月を不自由な常闇の身で暮して來た。恐しい「龜の精」の祟りは、當の祖父一人のみでなく、お高の父政五郎は、山で木樵りをして居た時、大きな樹の下に壓せられて、非業の最後を遂げた。そればかりか、お高の母お谷は、何時の間にか腰が脫けて、足腰が立たなくなり、起居さへも不自由な十年餘を過して來た。

父の政五郎は、大木の下で死なねばならぬのが、前世からの約束事であつたらう。祖父が中年から盲目になつたのも、盲目になるだけの因果があつたに違ひない。母のお谷が足腰立たぬ身になつたのも、別に何かの原因があつた爲めであらう。けれども池の傳說を信ずること深い村人は、一も二もなくこれを「龜の子樣」の祟りとして、戰慄して恐しがつた。その頃十六七の處女であつたお高が、一家一族の悲運と不幸とを、「龜の子樣」の神罰とのみ信じて、人知れず苦しみ嘆き悶えたのを、强ち無智だとのみ嘲けることは出來ない。

盲目の祖父と足腰立ぬ母とを抱へて、細々ながらも一家の生計を立て行かねばならぬお高の苦勞は、並大抵のことではなかつた。世の例の娘ならば、紅白粉に化粧して、半襟の模樣に柔き身を窶す妙齡を、お高はボテフリの魚の行商人になつて、水戶や太田の町を賣り步いた。十人並劣つた容色であつたが、かうして盲

を語り傳へながら、お高の賣り歩く魚には、眞價以上の代價を拂ふ者や、入用以上の分量を購ふ者さへあつた。

お高は斯うして、其の日〳〵の細い煙を立ながら、夜になると泉ヶ森の泉ヶ森神社に參詣して、祖父や母の上に潛む恐しい祟りから脫れ樣と祈願を籠めた。龜の子の祟りに苦しみ惱む者でも、泉ヶ森神社に祈願しさへすれば、必ず靈驗があると云ふ古老の言葉は、お高にとつて唯一つの希望であり、唯一つの慰藉であつた。

ポテフリと泉ヶ森への夜詣が七八年續く間に、お高は二十五歲の女になつた。

三、泉ヶ森深夜の秘密

その頃、お高と同じ小宮村に、田口茂八と云ふ二十二歲の若者が居た。女欲しさの血氣盛りに、一里や二

寄せて居た。齢は若いし元氣は溢れて居るし、戀の外には世界のない「田舍の若者」には、「龜の子樣」の祟りがチャンチャラ可笑しかつた。

或る夜、例の通り久慈濱へぞめきに行つて、一杯機嫌で歸る途中、茂八は過つて「龜の子樣」を踏み潰した。傳説を否定して居た若者も、何となく底氣味が惡くなつたと見えて、その翌日、近所に住む老人に向ひ、

「龜の子の祟りは恐いと云ふが、眞實の事かアね。俺はね、昨夜、その龜の子樣を、踏み殺したゞが、過失でも祟りがあるもんか何うか。眞實のこと聞かしてくれや、父さん」

と笑ひながら話した。茂八から此の話を聞いた老人は腰も脫けんばかりに驚いて、恐畏の眼を丸くしながら、傳説の由來を話して聞かせた。そして、今から一ヶ月間、泉ヶ森神社に願を掛けさへすれば、恐しい祟りから免れることが出來る由を敎えた。「現實」の他には、

世に何の信ずべきものも無いと思つて居た茂八も、老人の神秘めいた謎の様な話の前には、柔順な僕とならずには居られなかつた。

長い間、お高が唯一人で參詣して居た泉ヶ森神社の境内に、其の夜から茂八の姿が現れる様になつた。夢の様な月明の夜にも、風冷たい星月夜にも、二人の影は森の中に隱顯する様になつた。參詣する時刻は別々でも、歸途は大抵道連れになつて、果は互に、

「明日の晩も、また逢はうよ、ね」

と話し合ふ様になつた。長い間の生活の苦勞と、一向專念の信仰とで、若い女の身をかへり見るに暇なかつたお高にも、「二十五歳の女」としての悲哀が萠して居た。それが戀を知らぬ淋しさであり、男の肌を知らぬ物足り無さであるとまで、明かには自覺せずとも、何か知ら淋しかつた。生計向の事や、毎日の勞役や、毎夜の神信心の他に、何か一つ欲しいものがある様な氣持がして、お高の心は安らかでなかつた。

そこへ、強い誘惑の手をひろげて、お高が二十五歳の其の時まで知らなかつた、一つの謎を投げかけたのが、血氣盛りの茂八であつた。若い美しい白粉の女にのみ狼の様な牙をむいて居た茂八の眼にも、未だ男を知らぬお高の初々しさが何となく可憐に見えた。十人並より容色の惡い年長のお高にも、若い美しい浮いた女の有たない純深な皮膚と、清淨な貞操とがあつた。茂八は何よりも先づ、その「新しいもの」を得たいがために殆ど毎夜の様にお高に迫つた。

お高は有らん限りの力を盡して、切なる茂八の要求を排け様と努めた。場所もあらうに、不淨を許さぬ神社の境内で、互に祈願ある身には、神罰の程も恐しいと云つて、柳に風と受け流して居た。けれども、強い茂八の口から手から、毎夜の様に受ける壓迫と、二十五歳になるまで忘れて居た内に萠す本能とを、何うして制へることが出來やうぞ。握られた手を振り切つたり、摑まれた袂を拂つたりして、五六日の間は事無きを得たけれど、遂に二人の仲は、その儘では濟まなかつた。神見そなはす境内の深夜、お高は生れて初めて

その事あつてから後、泉ケ森神社の夜詣は、二人の爲めに樂しいもの丶一つになつた。

四、茂八お高戀の浮名

こ若い男と若い女との夜詣が、人目の無い「淋しい時」と「淋しい所」とを得ては、それが戀に落ちるのも、或は當然の成行かも知れない。唯、泉ケ森の神靈は、二人が夜毎の密會を、何んな心で見そなはしたやら。二人は無我夢中になつて、其の當座は何の思慮分別もなく、「戀の甘酒」を汲み交して居た。

「茂八の野郎とお高のあま奴、近頃何んだか樣子が變だんべい。飛だ夜詣りしやがつて、今に見ろや、龜の子様よりもひどい神罰が當るけに。野郎も野郎だが、あまつちよもあまつちよだね」

二人の仲が村内に知れ渡つた時、多くの人々は茂八を嘲けらずに、お高の大膽と不埓とを罵つた。そして老人の盲目も、母の足腰も、お高があんな風では、到不容色のお高と何するとは[illegible]茂八[illegible]云つて笑ふがあれば、年少の茂八に許したお高の初情事を興ある事にして囃すもあつた。

切迫詰つて茂八に許したけれど、お高は心私に、神罰の恐しさに戰慄して居た。足掛十年の間、祖父と母のために祈願を籠めたことが、たつた一夜の罪に依つて帳消されることを、お高は何んなに本意なく思つたであらう。一度は許した仲だけれど、その關係を續けて行くことが、お高にとつては並大抵ならぬ苦勞であつた。出來る事なら切れてしまつて、前の身體に復りたいと、たゞそれのみを念じたけれど、茂八の方でなか／＼承知をしなかつた。

お高のためには、死身になつての大事であつたが、茂八にとつては日常茶飯の浮氣事であつた。浮氣の色沙汰は、時間の經過をさへ待つて居れば、自然に忘れ去る時が來る樣に、一月經つか經たない間に、茂八の心は次第にお高から遠退いた。

「茂八の野郎奴、われ何と云ふ大馬鹿だか、考へても見ろやい。お高の家、三代も續いて、神罰の祟りがあるでねえか。そんなあまッ子とわれ、泉ヶ森でねんごろしてると、お利益がねえどころか、恐しい神罰でわれの家にまで祟りがあるけに。切れろやい、切れろやい、今の間に切れろやい」

若い遊仲間から斯う云はれた時、十人並以下の不容色なお高の顔が、茂八は厭で厭でならなくなつた。泉ヶ森の夜詣にも、わざとお高の眼を避けて、逢はぬ幾夜が續く樣になつた。

神罰の恐しさに戰慄して、幾度か切れてくれ〳〵と迫つて居たお高も、男に飽かれて捨られる頃には、もう男と離れることが出來なくなつて居た。若い同士の色戀沙汰は、斯うなるのが常例とは云ひながら、迫られて許した仲の茂八が、最初の間はさうでも無かつたのに、遂には離れ難い戀心地になつたことを、お高は自分で「因緣だ」と思つて居た。今夜は逢へるか、明日の夜は逢へるかと、果は物狂はしい氣持になつて、森陰や社殿の中で待受けたが、戀しい茂八の世界は、既に暗い泉ヶ森から、明い久慈濱の方へ移つて居た。

久慈濱の料理店銀波樓の酌婦で、容色好し愛想好しのお花と云ふのが、茂八の新情婦であると聞いた時、お高は初めて男の薄情を知つた。初めて戀をして、初めて男の肌を知つて、初めて薄情な目に逢つて、初めて男の薄情を知つたお高は、たゞ譯もなく茂八が怨めしかつた。泉ヶ森の神慮に逆つた報とは云ひながら、自分一人が受ける悲嘆にしては、神樣も餘に片手落なと、お高は且つ怨み且つ泣いた。

「たゞ一度、男に逢つて、恨が云ひたい」

お高は嫉妬のために、狂氣の樣になつてしまつた。

五、銀波樓の情夫殺し

茂八の姿が毎夜の樣に、久慈濱の銀波樓に現れる樣になつてから、泉ヶ森にはお高の影が見えぬ樣になつた。盲祖父と病母とを抱へて、其の日その日の生計に追はれて居ながら、お高は「失つた戀」の創痍に、心も

囚へ得たものは、人にも打明けることの出來ぬ、切ない胸の煩悶のみであつた。

泉ケ森から小さな丘一つ越えて、銀波樓まで十八丁の間を、お高は毎夜の樣に歩きながら、茂八が歸つて來るのを待受けて見た。冷たい風に襟もとの寒さを覺える夜も、蕭條と降る薄ら寒い雨の夜も、人の影、人の足音に胸轟かせて、若しや茂八でないかと近寄つて見たり、或は聲かけて呼で見たりした。

「お高のあま奴、何うかしてるだんべい」

行末長く添ひ遂げられる仲では固より無いが、唯一目逢つた上で、怨恨の數々を云つて別れたい。思へば男を知らずに居た昔の身が、戀しく懷しく慕はしいが、あゝそれも今となつては、泣いて還らぬ愚痴言だとて笑はれやう。思ふまい、思ふまい、年少の若い男に許したのが、自分の一生の過失であつた――。と斷念め樣とする直ぐ其の傍に、茂八の笑顏が現れて、あれおらうに夜が明けて、久慈濱の朝景色を、涙に曇る眼で見渡したことも、昨日や今日の夢心地、現心地のみではなかつたものを。――

幾日幾夜の待受けに、待ぼけさせられたお高の怨恨は、人心地を失ふまでに物狂はしくなつた。泉ケ森の樂しかつた逢ふ瀨を思ひ起すにつけても、嫉妬の炎消し難いは、銀波樓上でお花とさんざめいて居る茂八の姿であつた。あの唇で、あの手で、あの足で、と思ひ初めると、お高は身も世もなく悲しくなつて、淋しい遣る瀨ない氣持さへ起つた。斯うまでしても逃げるのなら、此方から押し掛けて行つて、怨恨の數々を云つた上で、別れるものなら氣持好く別れてしまひたい。捨られるものならば、惜し氣もなく捨られてしまひたいと覺悟しながら、又しても頰に流れるのは、茂八の薄情を怨む未練の涙であつた。

お高は氣抜けした人の樣になつて、海岸をトボ〳〵

歩きながら、銀波樓の附近へ行つて、四邊(あたり)の樣子を窺つて居た。それは松吹く風寒く身に泌む月明の夜で、寄せては返す波の音に、涙自づと下るを覺える夢見る樣な靜な夜であつた。銀波樓には二組か三組かの客があると見えて、甫高い女の聲で苦勞も無さゝうに笑つて居るのが手に取る樣に聞えた。お高は其の聲する方に忍び足に寄つて聞くと、女はお花の頓興な蓮葉な笑ひ聲で、男は夢寐にだも忘れることの出來ない、憎い情(つれ)ない怨めしい茂八の酒に醉ばらつた聲であつた。

お高はもう狂氣の樣になつて、茂八の居る座敷へ躍り込み、物をも云はず茂八に飛び付いて、絞る樣な聲を上げて泣いた。顏色を變へて逃げたお花には目もくれず、お高は聲を限りに泣き叫びながら、茂八の膝にしがみついた。林檎の皮を剝くために、茂八の側に置いてあつたマキリ(ナイフの稍大なるもの)に、お高の手が觸れるや否、お高は阿修羅の樣に狂つて、マキリを茂八の胸に突き刺した。

キヤツと一聲悲鳴を上げた時、既に茂八は冷たい死骸になつて、漾ふ血汐の中に横はつて居た。

樓内は上を下への大騒ぎとなつた。

六、殺人犯が罰金百圓

茂八が悲鳴を上げて倒れるのを見た後、お高は疾風の樣に銀波樓を馳け出して時を移さず海中へ投身したが、遠淺の濱邊であつた爲めに救助されて、其筋に捕はれの身となつた。――

「僕の見た表面の事件は、以上で盡きて居るが、此の事件の辯護を僕か依頼されるまでには、他に一つの因緣話がある。先づそれからお話しやう」

と云つて、A辯護士はシトロンを一氣に飲んだ。

林子や仲子はあと口がかゝつて、何時の間にか居なくなり、瀧田君と私の中には、千代何とか云ふ妓が一人、他の事でも考へて居る樣な眼つきをしながら、お酌だけは忘れずにして居た。雨はいよ〳〵本降りになつて、夜の更けるに從ひ、一種のしめやかな情調が、十疊の室に流れ渡る樣になつた。

ふ顔役も、到る所に陣取つて居た。關東を兩分して、その一を領すると云ふ大里派と、また一方に雄飛して居た助川派とが、曾て大爭鬪を演じた事があつた。博徒の喧嘩は血を見ねば止まぬが慣例(ならひ)で、その時も河原子と云ふ所で、大里派の鐵が助川派の繁を、一刀の下に斬殺した大事件が起つた。

その當時、僕は大里派の依頼を受けて、被告人鐵の辯護を引受け、遂に鐵は無罪を言渡されたので、僕は大里派の者から、少からぬ敬意を拂はれる事になつた、それから後は、事件がある毎に、何でも彼でも僕の許へ相談に來る樣になつて、中には重い罪でも、僕に依頼さへすれば、輕くなつたり無罪になつたりするものと、極めて居る樣な男もあつた。斯う云ふ關係から、お高の茂八殺しが有ると間もなく、大里派の福太郎から手紙で、お高の辯護をして遣つてくれと頼んで來たので、僕も快く承諾して、早速出かけて見た。

廷に現れた時でも、檢事はこれを謀殺罪に問ふて、情狀酌量の上罪一等を減じ、無期徒刑に處せられたしと請求した。然し僕の觀察では、最初からお高に殺害の意志は無く、たゞ一時の狂熱に驅られて、脅かしの積であつたに違ひない。最初から殺す考へで居たのなら何か兇器を携えて飛び込む筈であるのに、お高は何一物も持たずに、茂八とお花の居る所に亂入して、先づ茂八へ飛びついて聲を上げて泣いたではないか。最初から茂八を殺す考へがなかつた事は、兇器を所持せぬと云ふ一點のみでなく、お高の心理狀態を觀察すれば直ぐ判る問題であつた。

茂八を殺した刹那には、殆ど逆上し切つた無意識の狀態であつても、お高が海中へ投身した時には、悔悟と恐怖の念が錯綜して居たに違ひない。そこで僕は此の事件を、輕い過失殺人罪に過ぎないとて、各方面から立證して、極力謀殺犯で無いことを主張した。お高

が盲祖父と病母に對する平生の孝行や、泉ケ森へ夜詣り當時に、被害者に挑まれたことや、二十五歳まで男を知らずに居た事や。凶行當時の關係者の口述や、凶行後直に投身した事などが、裁判長にも極めてよい心證を與へたと見えて、お高は遂に過失殺人罪として、僅に罰金百圓の言渡しで、決審してしまつた。

死刑か、無期徒刑かと取沙汰されて居たお高の茂八殺しが、罰金百圓で事濟みになつたと聞いた時、人々は今更の樣に驚いて、殺した女と殺された男の上を考へて見たりした。

七、金波樓の女中お玉

次に起つた問題は、罰金百圓を何うして納め樣かと云ふ心配であつた。折角辯護をして遣りながら、百圓の罰金を納め得ない爲めに、少時間でも體刑を受けさせることゝは、辯護士としても心苦しい事である。お高のためには、實に生命に代るべき百圓の金であるが、お高にもお高の家にも、そんな大金は逆さに振つても有るべき筈がなかつた。

辯護を僕に依賴した關係から、大里派の福太郎が種々面倒を見る事になつて、何かと俠氣ある世話をして遣つた。恰も其の頃福太郎が久慈濱に劇場を建たので、目の見えない祖父と腰脫けの母とは、劇場の番人に住み込ませる事とし、お高一人は女中奉公でもして、糊口の途を就けることに極めた。

「そこで先生、罰金の百圓ですが、現金は俺の方から出しますが、俺が出したと云ふことが世間に知れては、後々が五月蠅くて仕樣がねえから、一つ先生のお名前にして納めて遣ることにしてくれませんか。不具者の二人を引取つて、飯を食はせて置きさへすれば、お高も安心して身の落着を定めることが出來ませう。何も彼も乘りかゝつた船だから、先生、どうかさう云ふことに……

福太郎が出した金を世間の手前だけは僕が納めた事にして、これでお高の身の上も、安心して娑婆に住めることになつた。海に投じて自殺を企てた程の女だも

た。そして福太郎の恩義に對するよりも、公明なる裁判官の言渡に對するよりも、辯護の勞をとつた僕に向つて、最も熱烈な感謝の情をさゝげて來た。

お高が僕を水戸の宿屋の一室に訪ねて來たのは、事件が落着して間もない時のことであつた。

「何と云ふ御縁で御座いましたやら、今度と云ふ今度は、先生樣にいかい御手數を掛けまして、何と御禮を申して宜しいやら、とても言葉では申し盡くされません。先生は妾のためには、再生の大恩人で御座いますもの、妾の身で出來ます事ならば何んな事を致しましても御恩の萬分の一を御返し致したいと存じて居ります。何うか妾の身で出來ます事を、何なりと御申し附けなさつて下さいまし。先生のためとならば、火の中でも水の底でも、妾は決して〳〵厭は致しませぬ……」

僕は言葉靜にお高を慰めて、僕一人にそれほど有難昔の事は一切惡い夢でも見たと思つて、忘れてしまつて、生れ變つた女になつて、正しい道を歩くが宜いと教えた。人は何んな身分の者でも、何んな仕事をして居る者でも、正しい道さへ歩いて居れば、決して罪を犯したり、神樣から見捨られたりする樣な事はないと教えた。そして女に一番大切なものは「貞操」であると云ふことを、噛んで含める樣に說いて聞かせた。

其の後、お高から代筆の手紙が來て、「大洗の金波樓に、女中奉公しましたから、先生、どうか御安心なさつて下さい。水戸へお越しになりましたら、必ず〳〵お立寄り下さいませ、お待ち申して居ます」とて、名もお玉と改めて居る由を書き添えてあつた。

これで何ゝ彼も落着したので、僕は重荷を下した樣な氣持になつて、心私にお高の行末に幸福多かれかしと祈つて居た。

八、辯護の謝禮に戀愛

お高が僕に對する擧動は月日が經つに從つて、次第に露骨大膽になり、自分の罪を辯護して貰つた人への感謝と云ふ單純な意味のみには、受取ることの出來ない節々が見える樣になつた。

水戸に於ける僕の旅宿は、昔から定つて居るので、電話で問合せさへすれば、僕が居るか居ないか位は、何でもなく判つて居た。金波樓の女中お玉になつたお高は、豫じめ宿屋へ頼んで置いて、僕が投宿すると直ゝ、知らせて貰ふ樣に手筈を極めて居たさうで。何時でも判で押した樣に、使の男に手紙を持たして寄越したのは、金波樓のお玉からであつた。

「お待受け申候間、必ず〱御越し被下度候」と云ふ手紙が、毎日の樣に來るばかりでなく、果は大洗から人力車を迎いに寄越して、退引ならず迫られたこともあつた。けれども僕は斷乎として、お高の好意を排けて、何時も空車を挽かせて歸した。自分の辯護した被告の女と、あらぬ浮き名を謳はれることが辯護士としての對面に關るばかりでなく、尾に鰭付けての世間の誤解を恐れたが爲めであつた。時には手紙で返事して事件の落着した今、僕に逢ふ用事は無い筈だなどゝ、わざ〱怒らせる樣に云つて遣つた事もあつた。

けれども女からの手紙や使者は、晝となく夜となく僕の旅宿に攻め寄せて、たゞの一時間でもお顔を見せて遣らねば頸を縊つて自殺するかも知れない樣な形勢になつて來た。たとへお高が十人並劣つた女にせよ、また曾て被告たり辯護士たる關係があつた女にせよ、有情の僕、決して不愉快には思はない。詮方無いので一度だけ金波樓へ出掛けて親しく逢つた上、得心の行く樣に說諭をしてやらうと決心して、久し振に大洗の波打つ際に立つた。ほの〱と松が見えます磯節の本場だけあつて、大洗沿岸一帶の風光は、何時見ても繪であり、詩であり、歌であつた。

金波樓の三階で、久し振りに逢つたお高の姿は、見違へるばかり美しくなつて居た。ボテ振つて居た昔の

見ると、お高はもう他愛もなく喜んで、

「よくお出掛け下さいました、お目に掛りたくて毎日毎日、どんなにお待受けしたか知れません、お蔭様で妾は斯うして、無事に働いて居りますが、これと申すも皆、先生様の御蔭で、先生様の御同情に依ります。御恩は一生、死でも忘れは致しません」

と、判で押した様な事を繰返し／＼述べた。餘り多く飲めぬ口の僕は、夕飯もそこ／＼にして、十時頃臥床に入つたが、半夜ふと眼が覺めて見ると、枕頭にお高が一人、ニコと笑ひながら僕の顔を窺いて居るではないか。改めて云ふが、僕に對するお高の感謝は、事件の落着した當時から、一種の戀愛狀態に變つて居た。

お高は聲を潛め呼吸をはづませながら、

「先生樣、妾は茂八を殺した罪人で御座いますけれど、妾一人だけは海に投身しました時から、もう生れ變つた人間の積で、罪滅しは濟みました身體だとさいましたもの、先生樣は妾の命の親で御座います先生樣、どうぞ妾の身體を思ふ存分になさつて下さいまし、お願で御座います」

と云つて、僕の臥床に寄り添うて來た。

九、行く方不明となる

先生樣に獻げた身體ですから、思ふ存分にして下さいと迫つたお高の顔には、男に餓えた女の制し切れない野獸性が、炎の樣に燃えて見えた。僕はもう閉口して了つて、臥床の上に端座しながら、先づお高の顔を力強く凝視て、子供を叱る時の樣な表情をして見た。

僕は言葉優しくお高に向つて、其の心得違ひを說いて聞かせた。お前が僕に身體をさゝげると云ふ意味を決して嬉しく思はないではないが、それは道の違つた事ではなからうか。罪を犯し罪に服して、淸い前の身に復つたにしても、お前の身はお前の身にして、實は

お前の身ではないかも知れない。お前が若し眞實の心からお前の身を僕にくれると云ふのなら、僕はお前の心と身とを、改めて世の中の人々の前に差出したい。そしてお前の爲る事や云ふ事が、少しでも世の中の人々の爲めになれば、それが何よりの滿足ではないか。お前の身を生き長らへさせた神樣の御心も、お前に善い事をさせ樣と云ふ、深い思し召があつての事に相違ないと思ふ。

道理を盡して說き聞かせても、お高は咽び泣くのみで、果は亢奮した色情狂者の樣に、極端な表情をしたり、烈しい身悶えをしたりした。二十五歲にして初めて茂八に敎えられた戀心地は、茂八殺しの事件があつて以來、心の何處にも宿さぬ樣になつたが、その代り今まで潛んで居た本能の要求が、强い勢で頭を擡上げて來たのであらう。僕は其の夜、遂に少しも眠ることが出來ず、お高と睨めつこをして、夜を明かしたが、僕に對するお高の擧動は、次第に赤熱して行く一方であつた。その力强い一種の壓迫から脫れ樣とするのは僕に於ても並大抵の努力ではなかつた。お高は僕に戀したと云ふよりも、寧ろ僕に依つて、抑へ難い性慾の滿足を得やうと思つて居たに相違あるまい。

それから後、水戶へ行つた折々、相變らず金波樓でお高に逢ふと、お高は相變らず熱心に迫つたが、僕は相變らず冷たく說法して居た。斯うした不即不離の狀態は二三年の間續いたが、僕は斷じて心も身もお高には許さなかつた。そして何時も口癖の樣に、

「お前と僕とが、今、變な間柄にでもなると、僕がお前を辯護して遣つたことが、何の權威も無い事になつて了ふぢやないか」

と笑ふのが例であつた。お高の方に立入つて考へればそれが强ち慾望一點張からの事ではなく、眞實に心の底から、自分の身體は無いものとして、再生の恩人たる僕に獻げた積で居たのかも知れない。決して自惚れではないが、斯う善意に解釋する方が、お高に對する當然の道で、またお高の滿足する處であらう。けれども僕は、お高の肉體を得て、それを思ふがまゝ自由に

と僕との關係は、被告人であり辯護士である範圍外には、一歩も踏み出すことを許されないのが、お互の良心であり、お互の幸福であらう。

金波樓に二三年居た間に、お高は五十か百の金を貯めて、浪の音激しい大洗を引上げ、更に水戸の料理店環翠亭へ、女中として住込んだ。水戸の町に出て居れば、僕と逢ふ機會が度々あると云ふのが、お高にとつては、何よりの樂みであり、慰みであつたと云ふ。

然し、環翠亭に居たのは、半年足らずの間だけで、四十六年の夏も過ぎて、秋風立ち初めた頃には、もう水戸にも大洗にも居なかつた。

お高は何時の間にか、消えて無くなつたのである。

十、女の行く道は丸髷

僕はそれ限りで、お高に逢ふ機會がなく、今日まで打過ぎて居るが、自分の取扱つた犯罪悲劇のヒロインと絶した女として、何うして忘れ去る事が出來やうぞ。

何でも噂に傳へ聞く處に據れば、水戸から十里の太田在は、山方村の博勞で、五十過ぎた老人の許へ、後妻として貰はれたさうで、既に一子を擧げて居ると云ふ。僕の許へも祖父や母の許へも、何の消息もしないけれど、久慈濱で魚賣る或る女が逢つた時、

「辯護士のA先生、久しくお目に掛らないが、お變りは無い樣子かね……」

と、それとなく尋ねて居たさうである。

思ひ詰めて、情夫を殺して、投身した程の女だけれど、お高は世の常の婦人に過ぎなかつた。世間の人々は能く口癖の樣に、

「人殺しを遣つた程の女だもの、何うせ一本道では納るまい。道理で彼の容貌が、普通の者とは、何處か違つて居ると思つたよ」

と云つて、刹那に起つた犯罪事件を以て、其の人の本

來の性までも律し様とするのが常である。そして、一度、監獄の門を出入した者に對する時、多くの人達は「前科者」と云ふ三字の下に、押し籠めてしまうのが常である。お高も其の例には漏れず、常に斯うした一種の迫害の下に、刑餘の月日を過して居たことであらう。世間からの壓迫が無くても、お高の過ぎ來し方を彩るべき思ひ出としては、餘りに苦しい痛ましい血腥い出來事であつた。

料理屋兼旅宿の女中から、多くの女が流落して行く道は、賣春婦か、妾か、何れにしても日陰の花と咲いて凋んで、一生涯を不眞面目に終るのが例である。殊にお高の様な大罪を犯した女の一生は、飛でもない横道に外れてしまつて、人を怨み世を恨み、自暴自棄の揚句の果は、零丁の淵に溺れて沈むのが、殆ど判で押した様な徑路である。けれどもお高の志望は、暗い方から明るい方へ向いて、憂き流れよりは浮かむ瀬へと、一生懸命に泳いだゞけの幸福があつた。五十歳を過ぎた老人にもせよ、定まる良人に嫁して子を生み、妻と呼ばれ母と親しまれることに依つて、數奇を極めたお高の半生は、初めて復活したのである。

お高の行末は、屹度幸福であるに違ひないと、僕は確信して疑はない。――

A辯護士の長物語が終つた頃、瀧田君の顏にも私の面にも相應の醉が廻つて居た。雨は小歇みもなく降り續いて、三人の頭には三人別様のいろ〱の感慨が湧いて居た。

「銀杏返しから大丸髷になつて、お高の前半生にも一段落が着いた譯ですね」

と、瀧田君が笑ふと、A辯護士も、

「さうだ、さうだ、すべての女が丸髷になつてしまへば、世間の事も、さう面倒ではないよ」

と云つて、MCCの煙を紫色に吹いた。

「要するに女の問題は、廂髪か、銀杏返しか、丸髷かの三つでせう。廂髪の喜劇、銀杏返しの悲劇、丸髷の歌劇とある中でも、私が好んで觀て居るのは、銀杏返しの悲劇ですよ。殊にお高の茂八殺しの根柢に

千代何とか云ふ藝妓だけは、一語(こと)も云はずに、花やかな戀の世界でゞも夢見て居る樣な、幸福(しあはせ)らしい顏(かほ)に、斷えず微笑(ほゝえみ)を浮かべて居た。

——大正四、四、一七朝——

「妾を殺すまで」の長篇を掲ぐ。A辯護士の取扱ひたる裁判事件の中にても、特に傑出したる犯罪悲劇なり。（天民附記）

留學雜記帳より（ロンドンとパリ）

法學博士　河上　肇

一

ロンドンにはウェストミンスター寺院(アベー)がある。偉人國葬院とも謂ふべき場所である。パリのパンテオンは略ぼ之に似たもの。

或日そのパンテオンを見に行く。茲ではカヴォー（墳墓のある洞窟）を見るのに、案内者(ガイド)に就かねばならぬ。時を定めて案内者が人を呼び集める。其時それに随(つ)いて入(はい)るのである。一人の案内者が何十人かの群を引き連れ、薄暗い洞窟の中を、出來得るだけ急ぎながら、只だ時折立ち停つて若干の説明をするだけなので、一分間たりとも落ち付いて英雄の墓墳を仰ぎ、追慕の念を催し懷古の情に耽る遑がない。之がルッソーの墓墳である、ヴォルテーアの墳墓である、こゝにユーゴーが眠り、そこにゾラが眠つて居ると云はれても、やつと

聞き終るか否かに、早や先頭は他の場所へと進むので何一つとして頭に殘つたものは無い。もうお仕舞だと見へて、そこに出口がある。戶の外に例の案內者が立つて居て、銘々から思召の金を貰つて居る。皆が出で皆が金を遣ると、ドーンと戶を閉めて錠を下ろす。其でお仕舞である。次には復た何十人かの見物客を引連れて同じ事を繰返す。此の如くにして、同じ事を日に何度か繰返す中に、案內者のポケットは相當に膨れるであらう。私は敢て其の一法二法の金を惜いとは思はぬが何遍入つても同じ事なのだから、パリには七十日も居たけれど、パンテオンの墳墓室に入つたのは、前後只一度である。折角玆にルッソーの遺骨があり、ユーゴーの遺骸があると云ふのに、殘念至極だが致方も無い。

二

ロンドンに最初行つた時は僅一週日滯在しただけであるが、其の一週日の滯在中に三度も行つたほどウェストミンスター寺院は私の氣に入つた。パンテオンでは帽子を冠りながら大きな聲で話して居るのを見受けたが、私は始めてウェストミンスターに行つた時、人々の足音を偸みつゝ何れも帽を手にせるを見て、西洋の儀禮は少しも心得ぬ私でありながら、入ると直ぐに寺院では帽子を脫るものだなと氣付いたほど、それほど全體の空氣が靜かで、如何にも人の心を沈める感じがした。そうして隅から隅まで案內者なしに、自分獨りで思ふがまゝに逍遙ふことの出來たのは、如何にも悅しかつた。定日以外は無料で入れぬ所でも、一定の金さへ拂へば、思ふがまゝに何時までも逍遙を恣まにする事が出來た。經濟學者ではヘンリー・フォーセットの半身像が此所に在る筈であるに、第一日目には其を見逃して仕舞つた。二日目には是非探し出したいと思ふのに、容易に見付からぬ。其も其の筈、往來止めにしてあゝ片隅の室の遙か奧の方に其の半身像は懸けられてあるのであつた。併し遠くから薄暗き壁に掛けられてある其の半身像を兎も角も認め得たほど、私は悠々と

傍の壁には『エネルギー不滅の法則』を考へ出したジョールの爲めの紀念板がある。

此の牌は、ゼームス・プレスコット・ジョールを永遠に紀念するが爲め結合したる諸國の人々に依りて、茲にニュートン、ハーシェル及ダーキン等の墳墓に近く置かる〻。……

と云ふ牌銘も、私は之を手帳に書き留めることが出來た。幾度か私の論文や著書に引合に出した蒸氣機關の發明者ゼームス・ワットの石像もある。ガウンを着て倚子に腰を掛け、左脚を後にひきて右脚を前に出し、紙を膝の上に展べ、左手に其の端を抑へ、右手にコムパスを握つて居る。臺石の表面を見ると、其には次の如き意味の文字が彫り付けてある。

斯の國の國王、諸大臣、並に貴族平民の多くの者どもが、此の紀念像をゼームス・ワットの爲めに建てた。像は、人間が……彼等の最上の感謝に値する所の人々を尊敬することを知つて居ると云ふ證據を示す爲めにのみ、只だ建てられたものである。

思ふに、彼の産業革命、引いて現代の物質的文明をパーソニファイ(人間化)するならば、そこにゼームス・ワットの塑像が出來る。私は今ま親しく其の偉大なる塑像の前に立つて、彼の生涯を懷ひ、又た産業革命の偉業を思ふて、萬感の徂徠に涙を催ほさんばかりである。紀念像の下に彫り付けてある幾行かの文字も、實にゆかしきものである。私は行を追ふて鄭寧に其の文句を手帳に寫し取りながら、日本にも若し斯かる場處があるならば、私は小供等の教育の爲め屢々彼等をそこに携へたいものだと思つた。

三

私はパリに行つてパンテオンの墳墓室に入り、遽し

く其處を追ひ出された時、ロンドンのウェストミンスターを思ひ起して、つく〴〵其を慕はしいものに思はずには居られなかつた。併しパンテオンはパリに在る、そうしてパリはフランスに在る。そこに行つて英國の空氣を索めるのは、其の索める人の間違であらう。

此のパンテオンには嘗てミラボーが國葬せられた。然るに、國民軍の護衛の下に其の國葬の營まれてから僅三年目に、議會では、彼の骸骨を堀り返して其の代りにマラーを葬ることを決議した。かくてミラボーの死骸は或日の夜中に此のパンテオンから持ち出されてクラマールと云ふ所の墓地に改葬せられた。マラーが暗殺された事は、當時甚しくパリ人の血を湧かしたものと見へる。現に彼が多くの人々に惜まれ、多くの人々の涙の下に葬られたことは、今カーナヴレーの博物館に在る當年のスケッチを見ても略ぼ想像される。然るにミラボーを追ひ出して其の代りに入つた此のマラーン・エチアンヌ・デュ・モンの墓地に埋めらるゝ事と爲つた。えらい事をしたものだ。併し其がパリ人であり、其がパンテオンである。考へて見れば、此のパンテオンの墳墓室は、矢張り例の案内者(ガイド)に随いて、出來得る限り遽(あわただ)しく見て廻るべき場所柄なのである。堂前に建てられて居るPenseur（考へる人）と題するロダンの作品は——裸體の男、左腕を膝に突き、掌を以て額を支へ居る銅製の巨像——背面の建築と如何にも不調和に見ゆるが、併しパンテオンの歴史、パリの歴史、從つてフランスの歴史を知る者にとつては、此のロダンの作品こそ替へも動かしもならぬパンテオン堂前の欠くべからざる裝飾である。

四

「實に不思議にもフランス人の人種的成分はイギリス人のそれと正確に同一であつて、即ち彼等は何れもケルト人、ローマ人、ゲルマン人の混合である」（ゲラール）。然るにも拘らず「一衣帶水を渡つてカレーよりド

無いか。併し其の不思議を說明する爲めには別に又た

時局の人・裏面の人

鐵拳禪

▼總選擧に意外の勝利を得た政府黨は、同志、中正、隈伯後援の三派大合同運動で、尠からず頭を痛めて居るやうだ。一體大合同談は、總選擧前に島田三郎君や、尾崎行雄君等の間に交換され、成立の曉には首領に大隈伯を擔ぎ出さうとの魂膽であつたが、時機尙早と云ふので、其儘になつて居たのだ。

▼然るに、此度總選擧が終り、同志會百四十八名、中正會三十五名、隈伯後援會二十九名と云ふ大多數を得たので、此の機を逸せず、二百十餘名の大政黨にしようと、大合同談が再燃したのだ。一寸考へて見れば、輕く話が纏りさうだが、實際事を運んで見ると、色んな支障があつて容易に進行しない。

▼と云ふのは、同志會は政黨組織てある。今や政友會以上の多數黨となつてゐる。が、中正會は一人一黨主義て、議員の團體に過ぎぬ。後援會は大隈伯の同情者乃至謳歌者、利用者の團體で、烏合の衆である。既に同志會と他の二會とは、其の性質を異にして居るのだから、急に合同しようとするも、まるで水と油を混ぜるやうだ。なか〳〵半年や一年で融和するものでない。同志會の加藤男や、大浦子は、夫れを見て居るから大合同を欲しないのだ。

▼彼等は三派の大合同は望まないが、中正會や、後援會から來り投ずる者は歡迎する。惟り歡迎するのみならず、進んで自派に引れ入れようとして居る。で、中正會や後援會と合同するのは望まないが、彼等自ら解體して來り投ずるなら、差支がないと云つた風である。併し、尾崎君や花井博士は、解體して迄も、同志會に降らうとの考へは持つて居ないや

うだ。

▼三派の大合同は、斯様な利害關係と、感情問題で、不可能な狀態にある。大合同が出來なければ、止むを得ず一歩退いて中合同を策するより外に仕方がない。中正會は議員倶樂部だから、是れまで通りでも可い樣な者のゝ、隈伯後援會は總選擧結了の今日、其の存在は殆んど無意義である。此の三者は、政黨組織にせず、單に一人一黨主義の下に、議員團體として合同し、而して其の名稱を改める位なら、譯は無さ相だ。既に政友倶樂部と亦樂會が合同して、中正會となつた例も有ることだから。

▼新議會の新議長は、無論政府黨のものだが、まだ何人を擧げるかに決せぬ。是れまでの例に據れば、同志會より議長、政友會より副議長を出すのが順序だが、正副共に政府黨で獨占しようとの風聞もある。今日議長候補者として指目さるゝに、同志會の島田三郎、箕浦勝人の兩君と、中正會の花井卓藏君が、果して何れに落札するであらう。

▼議長は小便さへ長く堪へる事が出來れば、誰でも勤まる役だと、曾禰荒助の時代には言はれたものだが、今日では議場整理の手腕があり、先例法規に通曉して居り、而して反對派にも信望のある人物でなければ、議長適任者と稱することは出來ない。で、小便を長く堪へる、堪へぬは最早問題とするに足らぬ。

▼島田君は初期議會以來の代議士で、攻擊にも防禦にも共に長じた能辯家である。其の滑かなる喉頭の音樂の前には、何人と雖も辯殺されざるを得ぬ。議會の歷史を實地に踏んで來たのだから、先例法規は勿論、大抵の出來事は知つてゐる。夫れに議場整理の手腕も十分だから、議長として申分ないが、唯政友會や國民黨の領袖連に毛嫌されてゐるのが缺點だ。夫の不評判な奥繁三郎でさへ其の椅子に据つたのだから、彼れの据れない筈はないのだが、同志會では無二の闘將を失ふのを恐れて、箕浦にでもしようかと思案中なのである。

▼箕浦君も矢張初期議會以來の人物で、赤銅のやうな顏を見ただけでも島田君よりは貫祿がありさうに見える。副議長の經歷はあるから、議場の整理法は心得て居るが、何分にも無口で、溫厚で、近年のやうな騷がしい議會を統一するの能力に乏しい憾がある。黨の内外には、島田君のやうに多くの敵を持つて居ないから、政友會に交渉すれば、直ちに承諾するであらうが、議長としては餘程見劣りがするやうだ。

▽色んな難癖を附けたり、闘將を失ふを惜んだりすると、議長的人物は同志會に見出せなくなる。そこで、政府黨と云ふ大なる範圍より選ぶとすれば、花井博士を推さざるを得ない。彼れは島田、箕浦兩君に比すればこそ閲歷乏しけれ、其辯才、頭腦、手腕、信望必ずしも二人者に優るとも劣らぬ。まだ青造で貫祿が足らないと云ふ者もあるが、年齡は最う五十である。議長の椅子を占むるに、少しも早いことはない。舊人物の屛息して、新人物の首を擡げて來る議會では、却て斯の如き人物を議長に推擧するが可い。

▽花井君は評判の物臭博士で、髮は梳らず、扮裝も素振も構はぬが、案外細心周密で、一工夫した後でなければ其の事に取り掛らぬことゝし

だし、素より才氣煥發の人だから、當意即妙、奇策縱横するのかも知れな
が、對議會策や、演說の態度や、何かに就ては深い注意を拂つてゐる。『本員は』と舌なめずりをすれば、短くて三十分、普通は一時間もやるのだが、議會の呼吸を計り作らまくし立てる。反對派の妨害に遇ふと見れば、當意即妙の辯句を挿入するとか、勅語勅諚を引用するとか、他をして乘ずるに追なからしめる。是れが花井流の軍略で、今日の人氣を得た所以なのだ。

▼大隈伯や、尾崎君は、調子に乘り過ぎると放言漫罵を試み、時々言禍を買ふが、花井博士は如何に長く饒舌つても、他の揚足をこそ取れ、自分の詞尻を捕へられるやうな事はせぬ。議長席に据ゑては、箕浦君のやうに重厚ではないが、議場整理に臨機應變の處置を取るの手腕があり、翰長に一々先例法規の教示を受ける事のないのは、彼れの議長としての強味であらう。

▼あれ程油の乘つた原敬君も、總選擧の結果、政友會が少數黨となつたので、悄げてゐる所爲か影が薄くなつたやうだ。後藤新平男ならば、敗れたにつけても非常に強がつて見せる筈なのだが、原君は芝居氣が無いだけに、華々しい立廻りを見せることが出來ないのだ。

▼原君は政友會の氣勢を立て直す爲めにも、堂々と論陣を布くだらうと思つて居たが、一向夫れらしい氣色も見えない。敗北後も結束會を二度までも開いて、最初は選擧干渉を議會で糺彈する樣な事を云つて居たが、次には政府の處置其他に就ては非議すべき事もあるが茲では言はぬと云

ふ議論の前途を思ひつゝ居たら云ふべき事あらうに、突如として臨時に來て、斷會開會前から氣勢を昂むべきであるに、原君は何時も不徹底な態度で、世間體を繕はうとするから、妥協苟合の底意があるではないかと疑はれて信望を失墜するのだ。

▲議會解散前の原君の行動は、多數黨總裁の行動として非難を免れないものであつた。二個師團に對する態度は疾に決してあるべき筈なるに、あの問題に對しては白紙なりとか、外交問題に比すれば小問題なりとか曖昧模稜の言を弄して居たが、愈々其態度を決せざる可からざるに至つて、山縣公を訪問する樣な醜態を演じてゐる。彼れが何時も妥協的態度で、政見に依りて驀進せぬのが短所だ、此の態度を改めざる限り、彼れは加藤男と對等に太刀打することが出來ない。

▲福井三郎君は、今次の敗因は院外團を疎外したからだと云つて居るが總裁原君の態度が斯の通りだから、院外團を何程優遇した所で、氣勢の揚らう筈はない。原君が政見に依りて行動し、少しも曖昧模稜な事さへ行らなければ、政友會の向ふ所も定り、從つて院外團の聲援も盛んになる。憲政擁護運動の燎原の勢を呈したのは、全く院外團の聲援に由るのだ。福井君は院外團の優遇を說く前に、總裁の腰を強くする工夫をしたら何うか。

▲選擧干渉で物議を醸した、石川縣知事の熊谷喜一郎君は選擧終了と同時に依願免官となり、福島知縣の太田政弘君が其の後を襲ひ、熊本縣內務部長の堀口助明君が其の後任に陞進した。此の一知縣の馘首されたの

を見て、選擧干渉は此の縣に止まつたやうに思ふが、陰険辛辣、凡巧妙なる干渉は到る所に行はれたさうだ。

▲熊谷君の干渉は極めて露骨で、猛烈で、政友會の地盤を根柢から覆した。大阪や京都も新議員の選出された方だが、石川のやうに全部新顔を出した所は一縣も無い。夫れに前に政友五、同志一と云ふ勢力であつたのが、今次は後援二、同志三、政友一と云ふ形勢と激變した。米田穣、法博戸水寛人、中橋徳五郎等が落選して、無名の新顔がズラリと並んだのだから、熊谷君も會心の微笑を洩して居るだらう。

▲中央では兎も角も地方では餘り問題にして居なかつた小山東助君は、末席ではあるが一千六百四十六票で當選した。彼れは理想選擧を標榜し、盛んに演説會を開き、演説は極めて穏健で、毫も他を攻撃痛罵しなかつたので地方人の受が好く、模範的競爭だと稱されたものだ、夫れでも運動者は戸別訪問をやり、縁故關係を辿て説き伏せもした。選擧費用は總額八千圓を要したさうが、選擧地では一萬九千圓を費したなどと云つてゐる。

▲總選擧の演説會には、隨分珍妙なのも有つたさうだが、中でも亘理胤正君のは一風變つたものであつた。前座は荒井泰治君が勤め。最後に亘理君の出る幕になると、定紋打つた紫の幔幕を引廻し、殿様は靜々と現はれて、『私の政見は荒井君の述べた通りであります、萬眾御賛成を願ひます』とばかりで姿を隠す。是れが何程利き目があつたかは知らぬが、兎に角亘理君の殿様宣言として大正四年の選擧記錄に殘すが可い。

▲黒須龍太郎君の彌次振は有名なものたが、新議會には佐々木安五郎君が再び顔を出したので、虎龍相搏つの概があらうとの評判だ。又鐵拳の雄を矜る遠藤良吉君の好敵手としては、大日本武徳會員で、眞庭念流の劍術の達人なる本間三郎君が選出されたが、不幸にも遠藤君が落選したので、好敵手を失つたのを歎じて居るさうだ。

▲本間君は村會四度、郡會一度踏んだだけで、さう大した閲歴の有る人物では無いが、劍術の達人と云ふので、大浦子に愛されて居るのだ。同志會の連中は、佐々木蒙古でも、伊東知也でも吼えて見ろ、事面倒になれば本間を差向けるからとばかり、親船にでも乗つた心持で居るさうだ。

▲新議會には、官僚出身の新人物がだいぶ入つて來たが、臼井哲夫や、背木膂雄のやうな餘り香ばしくない人物も交つて居る。夫れから五十嵐佐市とか、村上太三郎とか、堀三太郎とか云ふ成金が出てゐる。臼井の瀆職罪で入獄したは世人の記憶に新なる所だが、彼れは洒唖乎として日比谷に出て來た。人の罪まで引被るやうな、太ッ腹な、面白い人物なさうだが、一たび職を汚したのだから、國民の代表たる事だけは遠慮して然るべきだ。臼井なくんば蒼生を如何せんとも云ふ様な、今宗吾でも無いのだから。

▲秋山定輔が除名されたので、同志會の非幹部派は長島隆二、添田飛雄太郎、鈴木寅彦の三名のみとなつた。斯っなつては後藤系の人物も、自ら凋落の影を憐むより外なからうが、秋山君が議會に一席を占めてゐる以上、何等かの機會に風雲を捲かんとするに相違ない。『秋山を除名したのは、火を消さんとして油を注ぐ様なものだ』と、誰やらが評して居た。

東京の女と大阪の女

清水庸三

東京の女と大阪の女を街路の裝飾品として見る時は、其處に又捨て難い味が生じて來る。尤も街路を裝飾するものにポストがあり、電柱があり、屋根看板がある。けれども之等は單なる色彩美、形態美として行人の眼に線形の複雜さを反映すると云ふに止まつて、等しく裝飾品とは言ふもの丶、其れは極めて乾燥無味な裝飾品たるを免れない。街角の電柱の側にポストがあつても、電柱は電柱、ポストはポストと、其の色なり形なりが個々別々に孤立して、兩者の間に混然とした氣分と云ふものが浮んで來ない。が、若し夫れ五月雨そぼ降る大川端、兩國橋を背景にして、蛇の目の傘から白い襟脚を見せながら、黒塗りの足駄を運ぶ素足の女を點綴する時は、川岸も橋も或る氣分の裡に包まれて、其處に都會でなければ味へない、一種の裝飾的情趣と云ふやうなものが浮いて來る。

東京の街が、地形上、山の手と下町とに大別されてあるやうに、東京の女も其の居住して居る土地に應じて、趣味の上にも思想の上にも、乃至は服裝の上にも自ら山の手風と下町風とに分れて居るのは洵に面白い現象である。下町風の女の服裝は純江戸ッ子の趣味であり、山の手風の女のそれは、田舎者の趣味である。之の異つた二つの趣味が、最も鮮明に分れて來たのは江戸が東京と改稱された時に始まつて居る。其の頃は地方の住民が鋤鍬を捨て丶、『首府へ！』と叫んで東京目掛けて移住して來た時で、市中に散在して居た江戸土着の住民即ち江戸ッ子は、之等移住の田舎者の爲め

に、日本橋、京橋、本所、深川方面の下町へ驅逐され、小石川、牛込、麹町方面の山の手一帶の町は、今や田舍者の占領する處となり、玆に田舍者の文明と趣味とが醞釀された。そして其れが若い女の姿態の上にも一種の創作として表はれて來た。即ち髮の結振りの方面では、下町風の結綿、島田、銀杏返しに對して、束髮が出來、エス卷が出來、二百三高地が出來、庇髮が出來た。近くは帝劇の樂屋や丸善の二階あたりから其の暗示を受けたらしい前髮を分けた女優卷きなるものが專ら「新らしい」と自稱する階級の女に、持て囃されるやうになつて來た。

其の外、着物の着振りや、柄の好みの方面では、水の垂るやうな高島田に、襟脚の白さを衒ふ下町風の拔衣紋に對して、首筋の皮膚を見せまいとするの詰襟が尊重される。粋な黑塗りの吾妻下駄に澁味を感ずる者は。一方に又キルク製の草履が有する高尚さを認めない譯には行かなくなつた。

キルク製の草履を穿ち髮を庇に結つた女の姿は、冠木門に黑板塀の打續いた山の手の町には、最も相應しい配合である。更に又、帝劇の食堂や、銀座邊のカフエー何々の前に點綴するも、共に好個の對照たるを失はない。然しながら過つて之れを、新富座や市村座などの赤い毛氈を敷き詰めた雛段の上に置く時は、徒らに四邊の氣分や色彩と調和しないばかりでなく、好んで對照美を破壞するものである。「ハイカラで高尚」と云ふ事は、山の手の女を形容するに最も言ひ得た言葉である。

ハイカラで高尚なのが山の手の女の特徴である如く、下町の女のそれはイキであり粋である。之のイキと之の粋とは、文化文政以來の江戸町人の趣味が傳統的に繼承され、以つて今日に到つたものである。從つて田舍者に依つて假造りに作られた山の手の女の、殖民地的乃至實利的趣味とは、其の根本に於て實に格段の相違がある。緋縮緬の帶揚げを胸高に締めて、赤い半襟を掛けた桃割れの娘、黑繻子の襟の掛かつた半纏を蓮つ葉に引つ掛けた眉跡の蒼いお店の內儀さん、之

れが下町女の趣味である。水天宮とベッタラ市とお酉さんの賑ふ日には、是非共無くてはならぬ裝飾品である。華美なメリンスの風呂敷包を大切さうに抱えて、お針の御師匠さんに通ふ女は、下町の娘でなければならぬ。「チョイト歌舞伎のしばらくが馬鹿に好いんだつて」と言ひながら外出の序に、一幕見の趣味を味ふ女は、下町の內儀さんでなければならぬ。

常盤津や長唄などの冴えた撥音の洩れる露路裏長屋の格子戶の前に、赤い鹿の子を掛けた結綿の娘が、人目を憚るやうにして、窃つと聞耳を立てゝ居るなども、山の手では見られない下町特有の情景である。

薩摩琵琶やカチウシャの唄が、山の手女の色合であるならば、常盤津、淸元、長唄は、下町女の色合である。

東京の文明は諸方の田舍者に依つて作られた文明であるが、大阪の文明は大阪土着の住民即ち贅六の作つた文明である。

何故と云ふに、大阪は東京程地方の田舍者が移住して居ない。大阪市民の大部分は、豐太閤の建設した難波津時代の所謂上方商人の子孫である。尤も現今では泉南、泉北、紀伊、淡路、滋賀、名古屋邊の地方人が澤山移住して居るには居るが、大多數を占めて居る大阪土着人の文明に同化されて、別種の文明を形造る程の勢力はない。從つて大阪の女は、東京の山の手と下町程に趣味の上にも思想の上にも劃然たる區別はなく、或る一貫した共通點を大阪女の全體の上に認める事が出來る。

●大阪の女を其の色合の上から强いて區別して見るならば、船場、島の內、九條、天滿、福島位のものである。就中、船場と島の內は、上方文明の醱酵地であり繁華の中心であるだけに、大阪の代表的女と言はねばならぬ。彼女の趣味思想の飽まで古風にして保守的なる點は、東京の下町女のそれと、甚だしく似通ふて居る。其の相違せる處は、彼れのイキであり粹であるに對して、此れは濃艶であり官能的である。之の異りたる傾向は、直に髮の形や着物の着こなし柄合の上に違

憾なく表れて居る。前髮は出來るだけ前へ出し、鬢は飽くまでも膨ませる。「あて之れ好つきやし」と言つて彼の女の手を出す呉服物の柄合は、必ずこつてりした縞物である。

九條と天滿と福島の女は、其の趣味の淺薄粗大にして殖民地的乃至實利的なる點に於て、東京の山の手の女に髣髴たるものがある。九條と天滿と福島の女の趣味が、活動寫眞にあるならば、船場、島の内の女のそれは近松物の芝居にあり淨瑠璃にある。東京で受けた泰西藝術とやら云ふ新らしい洋服劇が、大阪で失敗に終つたのも、想ふに芝居の大切な華客たる上方女に共鳴しないからであらう。新世界の淋れるのも上方女の趣味に合はないからであらう。代表的上方女の趣味は永久に道頓堀にあり千日前にある。絢爛錦繪の如く賑かなる色彩の世界、道頓堀、千日前は、サッカリンを交ぜた甘酒の如くしつこき上方女を點綴するに依つて、始めて情趣ある裝飾美を發揮するのである。

道頓堀の夜の情調は、川と橋と藝者の姿とを配合する處に搖曳する。宗右衛門町から九郎右衛門町一帶に軒を竝べた藝者屋の灯が、崖下の道頓堀川に倒映する戎橋畔、緋縮緬の蹴出しを燃えよとばかりに褄を取つた「藝子はん」の仇な姿を點綴する時は、其の情景の艷美なる、到底吾人の禿筆の能く盡す所でない。正に之れ東西裝飾美中の極致である。

更に東京の女と大阪の女の扮裝上に於ける賢愚優劣の方面に就いて見る。東京の女は紅白粉を附けるにしても、髮を結ふにしても、自分の姿勢を土臺として、之れに適合するやうな色彩と形態との配合に人の知らない苦心をする。

氣紛れな一時の流行に惑はされて、丸顏の女が前髮を分けた瓜實顏の粋姿を模倣するの愚を學ばない。何うすれば男の眼に訴へてより充分な効果を擧げ得るかと云ふ事に、極めて細心な注意を拂つて居る。けれども大阪の女は自分の姿や形の上に、獨自の見解を持つて居ない。百合子形の髷が流行すれば相率ゐて百合子形に、渦卷模樣が流行すれば期せずして之れに走る。

旋して大阪の女は誇張的で[illegible]居る點は衆愚的とも云へば云へる。

一例を擧げると、萌黄地に金糸を以つて社頭の杉を配合した半襟が、心齋橋筋の十合呉服店から賣出された。それを試みに用ひた南地の某藝者には顔面との調和が非常に好く、彼女の色白の顔を一層白くして見せた。それを某新聞が誇大に吹聴した所が、忽ち娘はんも買へばお内儀はんも買つた。女中も買へば女學生も買つて、一時非常な流行を極めた事があつた。が然し元來强烈なる之の色彩は、大理石の白さを持たぬ顔色には極めて不調合で、その生ずる反映は寧ろ陰影の黝黑さを増すに過ぎない。されば直に之れと相重なるべき上着の色と、乳白なる顔色とに依つて僅に色彩的調節が保たれるのである。其所に氣の着かない大阪の女——先天的淺黑い顔色を持つて居る大阪の女が、之の萌黄の半襟を用ひると云ふ事は、却つて自已の醜さを擴大して暴露せんと試むる洵に愚な行り口で、滑稽なずる情ない斯うした實例は、電車の中或は途上と到る處で發見するに苦しまぬ。大阪の女は吾れ自らを粉粧する上に於いて、今少しく合理的に細心であらねばならぬ。

何れも薄い髮の毛と、生氣に乏しい滑らかな肌を持つて居る大阪の女が、多く類型的の顔をして居る事は爭へない事實である。纎弱な女性として、個性を滅却され又は滅却したまゝの永い間の習俗は、遂に顔面に表現せられる『見え』にまで影響して居るのは、洵に己を得ない事である。彼女は都會的に極めて巧緻に洗練された美貌を持ちながら、而も卓越したるそれではなく、限られたる幾人中の優秀なるものに過ぎない。殆んど相等しき趣味と思想を抱ける女性の容貌が、同等の美しさを現はすのは原理である。女學生に共通なる顔、町娘に共通なる顔——これ等は未だ人爲的に相異りて修飾せらるゝ餘地がある。けれども劃一せられ

たる生活狀態の下に於て、之の修飾をも加へらるる事なく、あるが儘に放置されたる彼女の顏が、同一特徴の上に形成せらるゝのは自然の數と云はねばならぬ。

東京の女は髮の形を撰む上にも、着物の柄合を定める上にも、自己の姿勢を本位として之れに適合するやうな、形と色との配合に人の知らない苦心をする事は、前項に述べた通りである。從つて印刷局通ひの女工や、活動寫眞館の手引女や、十二階下の白首が、一見令孃女學生にも見擬ふやうな、銘仙矢絣の羽織を着たり、庇髮に紫色のリボンを着けたりして、服裝の自由を謳歌して居る。是れは女工たり手引女たり白首たる自己の境遇を耻ぢて、其れと人に氣着かれないやうにする爲めの、憐れむべき虛榮心より出でたるものなるは勿論であるが、一面又色彩美、形態美の發現に腐心する結果と見て差支えない。

然るに大阪の女は、服裝上の階級的區別を承認して、其の制限區域外へは一歩も踏み出さうとはしない。だから大阪の女は女中なら女中、町娘なら町娘と一見して其れと判別されるやうに、チヤンと一定の服裝をして居るから、向ふ川岸を歩いて居る女でも、單に其の髮の形や着物の柄合を見ただけで、一目でそれと見分けが附く、女中を町娘と見誤まるそうな事は決してない。大阪市内に於て所謂上方風を堅守して新時代の文明と沒交涉な船場では、現時でも封建時代の遺風を捨てず、其の使用する下女に對しては、如何なる嚴寒の時候でも決して羽織を着せない。竪縞木綿の着物に白い竹長の髙島田、之れが船場の下女の服裝である。之の一事を以つてしても大阪の女が如何に頑冥にして無智であるかを說明して餘りがある。

頑冥にして無智なる點は、東京の女にも澤山ある。由來若い女の肉體美は、鈴を張りたる双の眼と、襟筋と乳房と足頸とにセントライズされてある。就中、其の最も官能的にして挑發的なるは、あのふくよかなる乳房であるが、法律上肉體全部の露出を許されない今日、吾々は街路に於いて乳房の美に酔ふ事は出來ない。されば殘されたる襟筋と双の眼と足頸とが、肉體

を窄かずに褄を執り、襟筋の美しさを見せる爲めに故意と客に正面しなかつたさうである。然るに近來足袋カバーなるものが流行して來た。

足袋カバーは云ふまでもなく、嚴寒の候に用ゆるもので、其の特長は足袋の汚れを防ぎ、足頸を温めると云ふ處にある。要するに反美的にして一意實利的ならんとする處に、足袋カバーなるものゝ存在の理由が存して居る。之の足袋カバーの愛用者の大多數が、若い東京の女――殊に色を賣り媚を鬻ぐ藝者階級に屬する女に依つて占められて居ると云ふに至つては、啞然たるもの之れを久しうせざるを得ない。今事實に就いて之れを見る。新柳二橋は言ふも更ら、赤坂下谷等の色街を徘徊する所謂藝者なるものゝ足頸には、悉くメリヤスの足袋カバーが纒はれて居るではないか。其の餘勢は更に山の手と云はず下町と云はず、殆ど東京の女の全部を擧げて、之の醜惡愚劣なる足袋カバーを穿か

の眼鏡を掛けた新らしい女、襟の汚れを防ぐ用意に反古紙を以つて襟當てをした商家の娘――數へ來れば際限がない。吾人は街路に於ける若い女の裝飾美が、足袋カバーと襟卷きと靑色の眼鏡とによつて、刻々に破壞されて行きつゝある事實を見、轉た慨嘆に堪えないのである。

蜜蜂の話

（禁無斷轉載）

岩野泡鳴

目次――一、邦種の蜜蜂。二、蜜蜂の社會組織。三、分封。四、新蜂群の成立。五、蜜蜂の變態的生理。六、蜂群滅亡の場合。

一、邦種の蜜蜂

同じ日本の種族と云ふことに於ても、僕等は民族と蜂族とに關しては全く反對な意見を持つてゐる。僕等は日本民族を以つて世界に最も强固な又最も有望な民族とするが、邦種の蜜蜂はどうひい氣目に見ても、殆どあらゆる種類の西洋蜂に劣つてゐる。それにも拘らず、養蜂上の國粹保存主義だと云つて、わざ〳〵劣等な邦種ばかりを飼つてゐる養蜂家が一名、大阪にあつた如きは愚の極だ。

成るほど、價段から云へば、邦種は洋種に比べて十分の一にも當らぬ。洋種一群の價段が八十圓から百二十圓にも上つたことがあるなどは、ほんの一時の熱であつたとしても、公平なところ、今のところ、三十圓は當り前である。それが邦種なら、たつた三圓で買へる。洋種なら、王蜂一匹でも七圓から十四五圓はするのだ。この相違は、一つには、邦種があり振れてゐて珍らしくないにも由る。誰れだッて、日本犬を――土佐犬か何か特別なのでなければ――金を出して買ふものは殆ど無いのと同樣であらう。

然し邦種の蜜蜂を飼つて見て經驗したところによると、たゞ珍らしくないのが劣等だと云はれた理由ではない。第一、その採收して來て蜜房の中に醸成する蜜の質が洋種のほどに濃厚でない。無論、それほど濃厚でなくとも、腐らぬだけ水分を蒸發させてあるかして、それを秋から春の初めまでの越年期乃ち、ざッと半ヶ

年の居喰ひの料にして置けるのだ。稀薄な蜜には比較的に滋養分が乏しいとすれば、邦種の蜜蜂は日本軍隊の兵卒どもの如くまづい物で能く生活してゐるわけで、生活維持の上から至極便法になつてるが、その蜜を人間の市場に賣り物に出す時は、分量が多くて重量が少い。と云ふのは、蜂蜜は稀薄なのよりも濃厚なのが重量も値うちも結集してゐるからである。

第二に、世界中で最もまづい物を喰つてる日本軍隊は却つて最も強いが、精神上の問題が加はらぬ日本蜂はどうしても敵に對する抵抗力が弱い。養蜂家等の注意すべきことに、害敵若しくは盜蜂の難がある。巣箱と云ふ物は一般にその底が地上から二三寸あがつてるやうに置かれるが、蜂の出入り口、乃ち、巣門には底と同じ平面で二寸ばかりは板を出してある。蜂は一旦そこへとまつてから巣に這入つて行くのだが、僕等はそれでもなほ滿足せず、その板のはづれから地上へまた別な板なり瓦なりの橋を架けて置く。この橋がしてないと、あらしや雨の日に、蜂が直ぐ巣門へ這入れないで、見る〳〵四五十匹がその手前で倒れてしまう事がある。橋があるとそんなことは全く起らぬが、その代り、蝦蟇と云ふづう〳〵しい敵は、この橋を半ばのぼつたところにうづくまつて、巣門から飛び出す蜂をかたッぱしから吸ひ込んでしまう。そして巣門内の蜂がそれに氣付いて一匹も出なくなると、またのそ〳〵と進んで行つて、巣の正面を手で以つてがり〳〵云はせる。斯うなると蜂も忿怒半分、恐怖半分にぞろ〳〵飛び出すのをまたぱくり〳〵やつてしまう。養蜂家等は蝦蟇を發見すると直ぐ世界から取り除いてしまうのだが、たま〳〵その大きな腹を割いて見ると、百匹足らずの蜂がまだこなれないで出たこともある。

蝦蟇ほどにづう〳〵しくないが、また蜜蜂の鋭敏な敵は熊蜂と赤蜂とである。巣門の高さが二分しかないので熊蜂のからだは這入れないが、渠はそれにも拘らず這入らうとして門をがり〳〵かじることがある。そんな時には、然し、大抵、蜜蜂に抱圍されて刺し殺されてしまうが、この敵一匹を倒す爲めには蜜蜂が少く

とも二十匹倒れる。そしてそれをもかまはず敵に飛び付くのは洋種のに多く、邦種のは大抵巣内に引ッ込んでしまう。が、熊蜂の聯合襲撃は見るもおそろしいもので——僕が初めて邦種の蜜蜂をたッた一群買ひ求めてまだ間もなかつた時のことだが、もう、敵は威づいてしまつて、或日、働蜂が小さめの如くばら〳〵と飛び歸つて來る庭の空へ、その蜂よりも殆ど五倍大なのが五六匹も群を成して、歩調を整へた飛行機隊の如く方向が確かに、若しくは大洋を浮ぶ戰鬪艦隊の如く重々しく、現はれたのである。これを見た僕はぞッとした。まして敵は人間の姿を見ると、どこかへ隱れてしまひ、人が見えなくなると、また現はれたではないか？幸ひに、この時は、テニスのラケットを以つて二匹を打ち落し、他を追ひ拂つてしまつた。

赤蜂になると、少しからだが小いので、蜜蜂の巣門を這入つて殺されたのに僕は二回出くわした。一回のは洋種の巣で、大した損害を發見しなかつた。が、或時、邦種の一群の一部があたふたと巣門から逃げ出し而も飛びもしないで、何百匹となくどれもこれも箱の周圍の地上を這ひずりまわつてゐるのを見た。拾ひ上げて巣門へ持つて行つても門を避けて外方に向ふ樣子が、どうしても何かからだに故障があつて、生活界を遠ざけられたやうだ。それにしても、故障蜂が身體の故障の爲めに、一匹や二匹づゝ、あり勝ちに、生活界を追はれて再び巣に歸へれなくなるのを見るのとは違ひ、數百匹が一時にとは異狀だと思つた。果して赤蜂に内部を襲はれたのであつた。その翌朝のこと、兎に角殺し得た敵の死體はこれを巣門まで運び出してあつたが、邦種は腰が弱いので、その場に臨んだ時にあわて過ぎたのである。そして巣門外を這ひまわつたあわてものゝうちには、敵と巣門内で戰つて健げにも負傷したのもあつたらうが、さうでないのが大部分で、而も皆滅んでしまつて、本群はたッた一匹の敵蜂の爲めに小い物になつてしまつた。

以上は蜜蜂に對する蜜蜂以外の盜蜂だが、蜜蜂同志でも盜蜂があり、從つてまたその盜難がある。これに

は一列六七匹のが二列にも增すことがある。そして番兵と番兵との間には各々一匹の蜂が出入出來るだけの餘地を殘して置いて、歸り來る蜂を一々鼻覺で誰何する。そしてにほひが違ふと――別群の蜂の來襲に相違ないから――飛びかゝつて格闘する。そして敵味方とも倒れてしまうのである。この點は邦種のも洋種のも變りはないが、邦種のは格闘にも誰何にも根氣が弱い僕が最後に殘して置いた邦種一群が洋種の爲めに平らげられたのは、つまり、それが爲めであつた。

洋種のが邦種のに盗蜂に行くのを僕はわざとうッちやつて置いた。午前のうちはそれでも精を出して防いでゐたが、午後には、もう、盗蜂に澤山這入られてゐるのを自覺したのか、巣門をあたふたと出たり這入つたりして、別に防禦もせず、さりとて花粉を取りに飛んでも行かぬものが多くなつてゐた。その夜、巣門に網を塞いで置いて、翌朝、盗蜂が這入れないでまご付

發見した。先づ王を除いて統一力を失はしめ、それからゆるり〳〵と貯蜜を運んでしまはうと云ふのが、すさまじい盗蜂の計劃であつたのだ。

邦種の第二缺點を餘り長く述べたが、まだ第三の缺點としては、洋種がよく家習化してゐるに反して、邦種には野性質を脱し切れない。氣六ケしくッて、少し面白くないと直ぐ逃走を企てる。一つには、わが國の土地に慣れてゐて、どこへ行つても生活が出來ると云ふ氣まゝがある爲めだらう。かの一時最も尊重されたイタリヤ種の如きは、本邦輸入の初年には誰れも彼れも越冬に全然失敗した。その翌年の輸入で半分だけは取りとめた。そしてイタリヤ種の越冬をうまく行けるやうになつたのは、輸入の三年目からである。それにしても、イタリヤ種は勿論、それよりもこの土地にもッと慣れた洋種――たとへば、暗色種のカニオラやカウカサス等――でも、箱を逃げたが最後、却つて生活の

續けやうがないのである。雨に打たれ、風に拂はれ、落伍に落伍が加はるばかりで、そのうちには王をも逸してしまう。そしてそんな恐れのないやうな安全な木の洞や岩穴はなか／＼見付からぬのである。これを知つてか知らないでか、洋種はなか／＼逃走を企てぬが邦種は土地ッ兒であるだけ、そこはづう／＼しい。

然し邦種でも王さへ附いて行かねば逃走をしないので、王の羽根を――勿論、交尾濟みの上でだが、――切つて置く道もあるが、僕は洋種専門になつてからそんな必要をも感じなくなつた。云つて置くが、蜜蜂は人間と違ひ、邦種のは洋種のと決して雜婚はしない。

二、蜜蜂の社會組織

明治の最終年であつた、わが國の或學者が蜜蜂國の組織は立君制でなく、共和政體だと云ふことを論じた。研究心に乏しく、何事にも雷同してゐたわが國の養蜂家等には、この新説――實は、新説でもなかつたのだが――は蜂蜜その物のやうなあまい夢を破る所以であつた。わが國養蜂家の一般は、蜂の社會に王がゐると云ふ形だけを以つて、蜂も亦日本人の如く忠君愛國の徒だと思ひ做して來た。かゝる俗物どもの代表者とも云ふべき一養蜂家が、――多分、理解に乏しい貴族院議員のやうな老人だらう――さきの學者の説を攻撃して、苟も日本人の言論として不忠不義極はまると叫んだ。實に、とんでもない見當違ひである。

そんなあまい、見當違ひの夢で以つて、蜜蜂の社會の實際は判斷出來ない。第一、蜜蜂の王は女性であつて、若し交尾不能に終つてゐるか、産卵二ケ年に及んで老衰に傾くか、不時の疾病または負傷に出會つてるかすると、如何に王でも、働蜂どもから殺されてしまうのである。第二に、産卵は無論交尾濟みの女王、乃ち、母蜂がするのだが、それが活動的になるのには、時期を問はず、働蜂どもが外界から花粉を盛んに運んで來なければ駄目だ。これを見ても、働蜂どもが幼蟲の喰ひ物を持つて來て奬勵しなければ、母蜂は産卵を盛んにしないのである。第三に、蜂群逃走の時を觀察

方と云つたら、『お前達はどうしたのだ』と云つてるやうだ。これを見ても、逃走の如き一大事件にも、働蜂どもの意志がさきに立つてゐるのである。

以上は蜜蜂の立君制的觀察を打破する三條件だ。なほ一つを加へることが出來るなら、熊蜂などの王は自分獨りで越冬を爲し、春になつて新らたに働蜂を產んで行くに反して、蜜蜂の王は先づ働蜂どもがなければ生存さへ出來ぬ。だが、立君制でないのが直ちに共和制である所以にはならぬ。後説も亦單に比喩をもて遊んでゐるのだ。僕の考へでは斯く勢力ある働蜂どもが――單に自我の中の無數の慾望の如きで、――それらが一々個的に意志があるのではないから、その團體を共和的と云ふのは當つてゐない。然しかかる動物の本能的團結たるは勿論のことだ。王に一群を左右する力はないが、王がゐると云ふことは產卵を豫知させて働蜂にその場所を守る落ち着きを與へるのは事實だ。こ

集するのである。僕は曾て王の羽根を切らうとして指を以つて先づ王を捕へようとしてゐるうち、どうした拍子か、それを見失つてしまつた。そのうち、僕の被(かぶ)つてるゴール付きの帽子の上に働蜂どもが群を成したので、そッと取り外して調べて見ると、果してそこに王が多數から守られてゐた。

一群は一母蜂を抱擁して越冬するのだが、梅の花の咲く頃から巣内は活動をし初め、働蜂は巣の掃除や整理をするそのあとの巣房を、母蜂は一々檢分して產卵の場所を定める。そして母蜂が產み付けたあとを働蜂が、またそれ〴〵見まわつて、適當に養分のあるなしを調べて置くと、卵がかへつて幼蟲になる。働蜂が最も愛着するのはこの幼蟲をで、これが少しでも出來ると、それまで逃走の意志があつた群も再び思ひとまるのだ。幼蟲はその初め小さい勾玉(まがたま)のやうに房の底に横たはつてるが、それが段々大きくなると、房一杯に立

つて、一旦その上を蠟と花粉との混合物で薄く蓋されてしまう。斯うなると、働蜂どもはもう見向きもしないで、『勝手に出られるなら出ろ』と云ふありさまだ。

蓋された房中の幼蟲は成熟すると、卵の產み付けから二十一日目に、止むを得ず、自分で蓋を嚙み破つて新働蜂として出るのだが、不成熟のは半分ばかりからだを出したまゝ死んでしまつたり、死なないで出ても羽根が出來てゐなかつたりするので、舊働蜂どもはそれを流產兒若しくは不能兒として、遠慮なく巢門外に運搬してしまう。否、產兒の出來損ないにばかりさう云ふことをするのではない。立派に働いてた働蜂でも一たび羽根に負傷するか、他に活動不能の個處を發見されるかすると、嚴格な意味の喰ひつぶしと見られてその場に無理にも仲間から拋り出されてしまう。そしてそれに抵抗することは出來ない。蜜蜂の社會では越冬の半死半睡期は別だが、一刻でもなまける事を許されないのである。

新働蜂のまだよく飛べないのは、巢内に於て、必要の出來た巢房增營の手傳ひをさせられ、前年生れのもの等と共に手をつないで、古い巢の下端若しくは枠の上部の横木から、幾條にも垂直にぶらさがり、それで上下左右の寸法を計つて、同じ大きさの正六角形の房——これが蜜房にも花粉房にもまた產卵房にもなる——をうらおもて兩面に枠の大きさに達するまで數限りなく築き下げて行く。その材料は蠟で、働蜂の腹の下部から產出する。それを口に取つて糸の如く延ばしながら、適宜にくッ付けて行く。ところが、王のゐない群か退化した群では、房の形が正六角に成らないで多くは圓形になり、房と房との間に出來る明きが蓋のやうなもので埋められる。邦種の造營した房は形が小さい上に有王の群にでも、不正確なのがあり勝ちだ。

當歲の働蜂がいよ／＼外を働けるやうになり、勇んで巢門を飛び出す時は、——これは出房後殆ど十六日目だ——先づふり返つて見て巢門の位地をおぼえ込みそれから螺線がたに空に飛びあがり、花のにほひのして來る方へ消えてしまう。近處に目あての花があらば

るほど蜜を含んで飛び返る時は、一つには外敵を恐れる爲め、また一つには路を失はない爲めに、わき目も振らず一直線だ。そしてその線が高い立ち樹にでもぶつかつてゐると、それを横へ曲つては外さないで、上へばかり避けるのである。

働蜂の取つて來た蜜と花粉とは別々な房に貯藏されるが、花粉は幼蟲の養ひに蜜は王並に自分等の兵糧になる。尋常な狀態で一群が强大になると云ふのは、斯うして働蜂がふゑることである。働蜂は無事に行けば六ヶ月までの生命を保てるさうだが、多くは外の勞働中に害敵にやられたり、强風に吹き倒されたり、俄かの寒氣に野外で凍つたり、巢門外で盜蜂と格鬪したりして、意外の横死を遂げてしまうものだ。尤も、云はば、小さいものだから、雨ぐらゐ降つても、雨粒と雨粒との間をくぐつて雨中をぬれないで歸つて來ることもある。また、働蜂の複合眼は兩側に一つ宛あり、ま

場合は大抵危難を免れる。が、何にしろ、箱の内外で不眠不休の勞働をするのであり、その上に、蜜源地（みつげんち）が一里も二里もあつた場合には、過勞の爲めにどうしても壽命が短くなるにきまつてる。

然し群全體としては、働蜂の死の數よりも、寧ろ、あとからあとから生れる、新働蜂の方が多いので、春の暖氣が增すに從つて、段々强大になつて行く。

三、分封

養蜂家が養蜂の場所を定める時、あたりに同業者の有無を調べるが、この時能く一般人の報告にだまされることがある。どこそこに『澤山』蜂を飼つてるところがあると云ふので、それは困ると思つて行つて見るとなァに、たッた一群を持つてゐるのだ。素人（しろと）が澤山と云ふのは一箱の中でも多く這入つてると云ふのであるが、養蜂家の勘定では、群が多いのを澤山と云ふのだ

そしてこの意味の澤山も、無論、その初めは一群から分れて行くのである。

一群は一つの巣箱の中に飼はれるが、舊式の飼ひ方では、巣の組織は蜜蜂の自由にまかせて置く。で、蜜をしぼる時は、巣をこわしてその巣と共にしぼると云ふ不便がある。が、新式改良の巣箱では、巣をこわさないでその巣脾の兩面の蜜だけを分離器にかけて取れるやうに、一巣脾が一枠毎になつてゐて、何どきでもこれを箱から出せるし、また他の箱へも入れられるし、斯うして自由に並べて置くことが出來る。一枠の巣脾兩面におの〵〵千匹附着すると見て、一群三枠のものが六千匹、五枠のが一萬匹、十枠のが二萬匹のわけだ。性の惡い種蜂屋が五枠の群(と云へば、可なり大群であるべきだ)として賣つたのでは、正味二枠分しかゐないのである。そして二枠ぐらゐの群では、如何に良種だと云つても、花の途絶する八月に若しくは十月後の無花期にあり勝ちの盜蜂を防ぎ切れぬばかりでない。熱を持ち合ふ力が不足の爲め越冬が出來ず、蟄居時期の初めに於て全滅してしまう。

少くとも、正味三枠以上ある群でないと、安全とは云へぬ。それが冬を越して氣候があッたかくなると、毎朝夜の明けるのを待つて、順番に入りかはり、立ちかはり、麗はしい良い匂ひのする花の世界へ出て行くのである。蜜蜂の好んで行く花を氣候順に並べると、早春では梅の花、猫柳など。櫻の咲く頃になると、その花を初めとして、すみれ、たんぽぽ、菜花、げんげ、クロバ。次ぎには、苺、蜜柑、栗の花、五六月からは、月見草へ澤山行き、七月頃には南瓜の花に行く。この花はゆふがたしぼむものだが、蜂のうちにはウッかりその中にとぢ込められるものがあつて、——それでも夏のことだから、——その中に一夜のあまい夢を見夜があけてその花が開くのを待つて飛び返る。その他にモチの花、猿すべりの花、イボタの花、すべての秋草、矢車草、ダリヤ等の西洋花。そして茶の花から枇杷の花を一年中のうちどめとする。

人間がのん氣な花見をするとは違ひ、蜜蜂が花に行

が殺されてしまう。その代り、蜜と花粉とを身に滿載して歸る働蜂の勇ましさと云つたら、口に勝ちどきを擧げないばかりである。その何千、何萬匹と云ふのが一直線に皆自分の巣を目がけて庭の空を歸つて來る。それが一箱の蜂群ものであつても、なか／＼盛んなもので――ばら／＼と、小つぶの雨が音なしに降つてるやうだ。これが四月から五月の初めへかけての空なら、養蜂家どもはそれを見て獨り心にうなづくのである。ヹール付きの帽子を被つて、巣箱を開き、枠を外して見ると、巣脾の下端部に――果して――一つなり、數個なりの異常過大な房が經營されてゐる。これを王臺と云ふ。新王蜂が出來る用意だ。蜜房、花粉房並に働蜂房は枠にさがつた巣脾の兩面に並びひらいて各々正六角であるのは既に語つた通りだが、王臺はその大きさが六角房の三倍乃至五倍もあり、圓い形が底太く延びて巣脾の下端にくッ付き、さきは下に向いてあなり、二つなり必要なだけ殘して、あとはすべて指さきでつぶしてしまう。一群に付き、さう澤山王ばかりが出來ても仕やうがないからである。

王臺造營には働蜂どもが、そこに片寄つて群がるから、直ぐその箇處が分る、その初めは房底としてどん栗のちよくのやうな物が出來るのだが、元來これは働蜂どもが並みの働蜂房を改造するのであつて、そこを改造の場所と選んだその時、既に、數時間前に、並みに行けば働蜂となつて生れる卵が一つうみ付けられてゐたわけだ。その周圍に働蜂どもはどん栗の下がつたやうに圓く壘壁を築き廣げて行つて、その下端は少し細長くなつて蓋が出來るやうになる。その王臺材料は蠟と花粉とをまぜ合はせた物だが、蓋が出來るのは十日目頃からで、それまでは下方にひらいてゐて、そこから働蜂どもは出入りして王蛆の喰ひ物を供給する。

俗には、王蛆の喰ひ物を『王の乳』と云つて、特別な

物のやうに云ひ做すが、米國の養蜂家ダダントによると、それは誤稱だ。並みの働蜂卵(どうほうらん)に與へられた乳と同じ物だが、働蜂卵に最初一回與へて置くのは三日の間に變化して一種の粗食になつてしまうのが、王蛆にはゆたかに且絶えず與へられるので、變化しないだけのことだ。この點だけを見ても、單に王の名に對して有せられるメテルリンク流の小六ケしい迷夢は破れてしまはう。つまり、王となる卵も働蜂卵と同じであり、王蛆に與へられる食物も働蜂蛆に供せられたのと違ひはない。ただ比較的に長い給餌と王臺につつまれるとの二事で以つて、同じ卵が働蜂と成らないで王蜂と生れるのである。

今一つ云ふのを略して來たが、蜜蜂の社會には、俗に『惰け者』と云はれる雄蜂どもが必要に應じて生れて來ることを忘れてはならぬ。母蜂が雄蜂卵を產み付けるのは五月の初めから七月の半ば頃までで、丁度、王臺が出來る頃である。雄蜂房は働蜂房を少し大きく改造しただけで、形並に向きは向じだ。卵の初めから滿二十四日で化成する。そして雄蜂は一群に二百匹から四五百匹しか生れない。生れたての王蜂よりは恰幅があつておほ飯喰らひである癖に、『おれは別に任務がある』といふやうに、少しも働蜂等とは勞働を共にしない。天氣のいい日には、而も熱い盛りに、ぞろ〳〵と巣門を飛び出し、あてどもなく徒らに空中をぶん〳〵とおほきな羽音を立てて飛んでるから、『あいつ、惰け者だ、な』とは直ぐ素人にも分る、然し雄蜂どもは、その實、養蜂場の空にまで溢れてゐる瑞兆を感知してゐるのである。

新王蜂の誕生！　十日目頃に蓋の出來た王臺はなほ段々熟して行くと、さきの方が赤みを帶びて來るが、なほ熟すると、赤黑くなる、これは人間なら、滿月のしるしで、王蜂蛆は卵から滿二週間で蓋を切る。全體母蜂の健全な群に於て新王の要求が出るのは、あまり大群の爲めに分家の必要を生じたからである。で、大抵の場合には母蜂は新王が生れる二三日前に、同群中の・一部——再び收容して見ると、先づざつと正味二三杯

れてだと云ふが、これも矢張り働蜂どもの本能作用に母蜂が伴はれるのであらう。これを自然分封と云ふ。

自然分封は、天氣のいい日に、午前九時から十一時頃までに起るが、必らず一たびは近處のこんもりした樹の枝にをさまつて蠢動する。これが若し單に逃走の意志で飛び出たのであつたら、その周圍少くとも一二里の間を——蜜源不足か、敵の多いかの爲めに——いやなのだから、飛び出す前に遠い行くさきを定めてかかるので、直ちにその方へ勢ひよく消えてしまうのだ。が、分封群はこの蠢動中に四方に探偵を放つて行くべきさきの報告を受ける爲め、午後の四時頃まで同じところにとどまつてゐる。その間に僕等は用意してある別な箱にこれを收容するのだが、その面倒をも避ける爲め、僕等は群が自然に分封しさうな時を見計つて、人爲的に群を分けてやり、この方に在來の母蜂がをさまるやうにする。

それでも、無王になつた方の群が失望もせず、まご付きもしないのは、新王の出現が分つてるからである外からは働蜂どもは待ち遠しがつて王臺の蓋の周圍を和らげてやり、王臺の中からは、もう十分に成育した新王が早く出ようとして、蓋の裏をぱり／＼嚙みほごしてゐる。その盛んな音は、僕等が巣箱のそばにゐて、これを聞くことが出來る。產みの苦しみとも云へよう。また生れる歡喜のしるしとも見えよう。蓋が蝶つがひでとめてあつたかのやうに一方へ外れると、新王はまだ清淨無垢のからだでとび出す。そして一先づ自分でからだを振ふ。働蜂どものうちには、そのあとに從つて行つて口に用意した蜜をささげようとするのもあるし、からになつた王臺の中を調べて、うぶ屋のあと始末をするのもある。

新王、乃ち、生れた處女蜂が第一に何をやるかと云ふに、他の王臺の、殊に蓋された王臺の、ぶち毀わし

である。これは自分以外に王の生れるのを防ぐ爲めである。王と王とが出くわすと、必らず格鬪してどちらかが倒れると云ふ人があるが、これは然し半ば事實、半ばは想像でないかと僕には思はれる。王蜂にも尻に劍はあるが、働蜂のそれの如く眞つ直ぐのでなく、曲刀のやうにさきが曲つてゐて、不斷は、產み付けた卵の位置を直す爲めにこそ使へ、他の王との戰ひの外の戰ひには全く用ゐない。そして王と王との果し合ひも滅多にないやうで――これは自分も貴重なからだを、どうせ果し合へば、倒れしめぬまでも、負傷するのを避ける爲めであらう。一群に王が二つゐると、一方が追ひ出されるか殺されるかするのは、これも九分九厘までは働蜂どもの仕わざらしい。その證據には、一群内に働蜂どもが、どうした拍子か分封もしないので、新らしい王が無事で舊王と一つ箱にゐるのを、僕は或ところで發見したことがある。この場合を解釋すると、働蜂どもに分封の氣力もないほどなので、どつちかの王を除くの力も皆から集まらなかつたのだと見なければならぬ。

兎に角、生れ立ての王が他の王臺をかみ毀わさうとするのは、自分以外の王が生れるのを防ぐ爲めであるのは事實だとしても、ただそれだけの消極的本能だらう。そして働蜂どもに於て今一回、若しくは今二回の分封を必要としてゐると、渠等は新王が今存在してゐる王臺を毀わすのをさしとめるのである。そして第一回の分封には舊王が巢を出るに反し、第二回のからはあとから生れた王の方がその群に分れる。斯くて、僕等は蜜蜂の一群に付き、越冬が出來る程度を見越しての群分けを二つなり二つ以上なり得るのである。がその新王どもの方がいづれも交尾濟みにならねば、それだけの新群が各々全く成立したとは云へない。

ここでちよつとメテルリンクの蜂王の名につり込まれた裝飾的修辭癖が、如何にも表面は立派だが、養蜂の事實に相違してゐることを三ケ條指摘して置きたい第一、渠は働蜂どもが苟も自分等の王たるものに「尻を向けぬ」と云つてゐる。が、僕の實見では、禮を知

が、王に從つて行くもの若くは今から蜜をささげようとするもの等の外は、如何に王のそばでも、まち〳〵に勝手な方を向ゐてゐる。

第二、渠は働蜂どもが如何に受けつけぬ王でも、これを同輩の如くは刺して殺さぬと云ふ。が、これもさう――少くとも、除外例なしには――斷言出來ない。僕の實見によると、受け付けぬ王を働蜂どもが除くには、三方法が用ゐられてゐる。甲のは、寄つてたかつて王を巢門外に押し出すのだ。これは次ぎに云はうとする方法の出來そくなひかも知れぬ。乙のは、矢張り寄つてたかつてだが、メテルリンクの云ふ通り、その場に壓迫して饑ゑ死ぬか、呼吸がとまるかするまで、一日一晩でも待つてゐるのだ。これは巢脾の面上に起つたことでも、枠の下木の上に出來たことでも、多くの場合、おしまひには落ちて底板の上のことになる。そして王の逃げ方によつては、死ぬには至らないで、

殺してしまう。僕はこれを二回も見證した。そしてその一回の時の如きは、死んだ王に働蜂の劍がささつた儘、その王と働蜂とが一緒につながつて、巢門外にころがつてゐた。

かかることを王の名にかこつけて尤もらしく取りつくろつた報告をするのは、メテルリンクが種蜂屋として素人どもを感服させて、お客にしようとする手であるか、然らざれば、渠の文學に於ける例の空疎な修辭癖を蜂蜜の研究にも應用したのであらう。なほ第三に渠は處女王が交尾の爲めに巢外に出た時、多くの雄蜂どもを試みて飽くまで高く空天に舞ひのぼり、最も有勢について來た最後の一雄と交尾すると云ふ。が、これも例の手で、ほんの形容に過ぎなからう。若し果してさうだとすれば、多くの熱心な養蜂家がわざ〳〵交尾場を樹木のない廣ッパに選定するまでもないことだ如何にまだ身輕な處女王でも、王は身體の組織が働蜂

とは勿論、雄蜂とも違つてゐて、さう高くも遠くも飛べない。身長は働蜂の半インチに對して、王蜂のは處女の時でも殆ど一インチの八分の五か六はあり、その癖、羽根はそれに比較するだけの大きさがない。且、働蜂の腹部には二つの空氣ぶくろがあつて身體を輕くするに反し、王蜂にはそれが押しのけられて二つの卵巢が据わつてゐる。そんなからだで、どうして雄蜂ども——働蜂よりは少し大きいが、王蜂よりは少し小い——の追求を、そんなに高いところまで、わざと逃げてゐるだけの機敏さがあらう？メテルリンクは『鳥が來て最早その神秘を冒さぬやうな場所に遂せねばならぬ』と云ふ理由を附會してゐるが、鳥またはその他の害敵の難はありがちのことで、新王が交尾に出たつ切り歸らぬことを僕等は度々發見した。つまり、王蜜の交尾はかの女がその目的で出ると、直ぐ行きあたりばつたりに出來るものらしい。

兎に角、今や養蜂場五六月の空には、餘ほどの密度を以つて雄蜂どもが粗大な羽高を立てて飛びまわり、處女王の飛翔を待つてゐるわけだ。そして巢内の雄蜂どもはまたかの女を促して、飛翔せしめるやうにする。ところが、處女王は生れて三日目から、天氣さへよければ一日に二三度乃至五六度も巢を出るが、それが直ちに雄蜂に會ふ目的であるとは、多くの一般研究家等の言をさし置いて、先づ最も信用すべき斯道の人エブスタに據ると、實際には稀れだ。渠の言では、かの女の最初の飛翔はただ度々踏查をする爲めであつて、五日間毎日何回も飛んで出たこともあるさうだ。然し交尾が空中で行はれる事實だけは確かであつて、早いのは新王が生れてから三日目、遲いのでも十日を越えることは滅多にない。が、僕は曾て一新王が——餘ほどどうかしてゐたのだらう——十二日目にやつと交尾濟みになつたのを見た。さう交尾が後れる時は、群によると、新王を不姙王と見てあせり出し、働蜂どもが自分等が孵化しない卵を產み初めることがあつて、王には餘ほど危險だ。

交尾がいよ〳〵濟んだ新王は、その尻に濡れた白い

からちぎれて這入つてゐる證據で、また新王に母蜂の資格が出來たしるしである。母蜂はそれから秋若しくは翌年の分封の時までは外出しないが、大抵は交尾の二日目から、巣の中で毎日二千から三千の卵を産み初めるのである。それでも、最初の卵は、僅かばかり、否、時によると或多數まで、入らない雄蜂と化する。雄蜂が生れるのは、生理上精蟲のかかつてゐない卵であるから、母蜂の腹中に入つた陽根がまだよく納まらぬうちに出る卵だけ、まだ働蜂には化せないのであるが、母蜂の精蟲嚢には、ルカルト教授によると、一匹の雄蜂から受けた精蟲を二千五百萬保つことが出來るやうになる。かかる無數のものを處女王に與へた雄蜂は、そのかかる光榮の報いとして、立ちどころに死んでしまう。

雄蜂としては、然し、斯くて死ぬのも一生だが、斯くしないで虐殺されて死ぬのも亦一生だ。見じめと云

倍も生れるのであるから、――見よ、實際の自然はさうきつちりと經濟的には行かぬ――第一回の新王の交尾が濟む頃からして、段々と働蜂どもに虐待される。それも、まだあとに第二王の出生が豫期されてるか、唯一の新母蜂にまだ信を置いてゐぬかすると、その間は働蜂どもが雄蜂どもをまだいたはつて置く。が、いよ〳〵これで全く不用だとなると、「この穀つぶしめ、出て行け」よがしに取り扱はれる。この場合、母蜂はちつとも頓着なく、巣脾の上に自分の産卵面を廣げて行くのである。

働蜂は自分よりもづうたいの大きな雄蜂を――雄蜂がいやと云ふのに、無理にも――口に喰はへて引きずり、ひんまわして、巣門外に追ひ出す。すると、渠は止むを得ず他の蜂箱の巣門へ飛んで行つて、その群の仲間入りをさせて貰はうとする。斷つて置くが、雄蜂だけはどの群へも木戸御免で、番兵は誰何もしないの

である。が、その頃には、そこでも雄蜂虐待が初まつてるのだから、また同じやうにして追ひ出されてしまう。またその他の群へ行つて見てもさうだ。かかる虐待を働蜂の一匹や二匹や三匹がやつてる間は、まだしもさうされないでゐる雄蜂の方が多い。が、やがては一群中の働蜂どもが皆さう云ふ氣になる時が來るのだ。すると、午後四時から六時頃まで（この時節では、まだ明るいが）のたつた二時間で、六七十匹の雄蜂どもが巣門外に抛り出される。かうなつた時は、渠等の方で再び飛び立つ氣力もなくなつてゐる。それが二日か三日のうちには、渠等の大部分は群中から平らげられてしまつて、たまたまあとに殘つたのはもつと長く働蜂どもと共棲してゐられることはゐられても、殆ど目に立たなくなる。そして全く雄蜂がゐなくなるのは、一番後れたところで、八月の末だ。そしてこの時節には、——今や巣内の喰ひつぶしは無くなつたが、——花の咲くのが少い爲めに盜蜂の來襲が頻りになるので一群が神經過敏になつて番兵の働きも一しほ敏活になる。斯くてここに新蜂群の成立が十分確かになつたのである。

五、蜜蜂の變態生理

既に分つた通り、成立した蜂群には母蜂一匹と無數の働蜂どもとがゐる。そして分封時に至つて、雄蜂どもが仲間入りをする。この三別蜂を產む者は一群每に一つの王しかない。

王は蜂群に於ける唯一の完備した女性で、その腹部には生れながらにして卵が產めるやうになつてゐる。かの女は遂に交尾を了し得なかつたとしても、矢つ張り生れながらの卵は產むのである。これを單性生殖若しくは處女出產と云ふ。一種の生理的變態だが、この場合の孵化は雄蜂にしかならない。その理由は、卵を王蜂蛆若しくは働蜂蛆に化すべき精蟲を前以つてその王が受けてゐないからである。で、これと同じ場合が老いぼれた母蜂にもないではない。多產の結果さきに交尾の時に受けた雄蜂の精蟲が精蟲囊に盡きてしまつ

卵は産んでも雄蜂ばかりになつてしまう。シイボルドと云ふ有名な顯微鏡學者の發見によると、まだ盛んな産卵期にある母蜂の産んだ卵でも、雄蜂房に這入つてるのは、精蟲がかゝつてゐない。して見ると、變態的に處女王が産むのは、乃ち、それと同じ卵に過ぎないのである。

それから、働蜂は俗に女性でも男性でもなく、中性の物だと云はれてゐる。が、實はエブスタの云ふ通り「發達してゐない女性」とするが本當らしい。尋常の狀態では、無論、働蜂は産卵をしないが、さきにも云つた通り、新王にどうしても交尾を了した樣子がないやうに見える時にも、働蜂は自分で王の代理を務め出すことがある。若しまたその群が長らく無王となり、且その前に産み付けられた卵も今は幼蟲となり、また羽根ある蜂となつてしまうと、働蜂どもは自分等が全く母蜂になりをうせたつもりになつて、頻りに産卵をするに、働蜂は大抵二箇以上甚しいのは五六箇も、一房の中に積み重ねる。そしてその多くは孵化しないで終るが、しても亦雄蜂しか生れない。そしてそれは眞の雄蜂通り交尾に有効であるかどうかは、すべての養蜂家並に研究家等の疑問とするところである。かゝる場合に最も奇體なのは、働蜂の尻にあつて敵と戰ふ爲めの劍が無くなつてしまうことだ。いよ／＼斯うなつてからその群に新王を誘入してやらうとしても、なか／＼受け付けないのみならず、忽ちかの女に飛びかゝつて皆で壓迫して窒息させてしまうか、然らざれば、まだ劍を殘してゐる働蜂どもがかの女をさし殺してしまうかする。

六、蜂群滅亡の場合

一、外部の害敵が如何に多いとしてもまだ内部までは侵し得ない。が、蠟蛾(らふが)の巢が蜜蜂の巢脾を通して出

來ると、蜂群は産卵房の根本から喰ひくづされてしまう。從つて、蠟蛾は蜜蜂の最大敵、最大破滅者と思はれてゐる。

二、何かの理由で長らく無王になつたまゝの群、若しくは一層御叮嚀に、もう、王を與へようとしても受け付けないで働蜂どもが産卵してゐる群は、どうせ滅亡するにきまつてゐる。王が出來ッこがないので、分封の望みもないのは勿論、群その物が消極的になるばかりだ。たま／＼生れて來るのがあつても、用のない雄蜂どもであり。退化した働蜂等はまた日々減じて行く。全體働蜂等の生命はダダントに據ると、冬を込めて、比較的無活動の時期にでも、無事に行つて、六箇月を越えぬ。春から夏の活動期では、過勞ど故障が多いとの爲め、平均たッた四十日以内だ。從つて無王群は夏なら饑ゑ渴えないでも四十日以内に、また冬を數へて而も暖くして置いても六ヶ月間に全滅してしまうわけだ。

洋種に襲はれた爲めと僕が第一章で云ひ及んだ僕の一無王群は、——邦種であつたが、——人に預けてそのうち邦種の王をどこかで發見したら買ひ與へようと思つてゐるうち、九月から十月へ一ヶ月半ほど經た。その間に、もと四枠分もあつた群がたッた二三十匹と數へられるほどの慘澹たる少數に減じてゐて、無能の雄蜂も一つ二つゐたし、働蜂の過半には劍が落ちてゐた。それでも時期が時期だけに、なほ四五の巣房に貯蜜をしてゐただけが感心なものであつた。饑ゑの爲めに死んで行つたのではなかつたから。

ところが、第三に、饑ゑ凍えて全滅した群ほど悲慘なものはない。これは專ら越冬期の食物、乃ち、貯蜜が盡きて熱が取れなかつた爲めの死である。僕の或時の失敗で云へば、梅の花の匂ひがあたりに少しづゝ聽え出した時、——この時期の活動には、まだ蜜源が乏しい爲め、蜂に無駄骨折りをさせるやうなものだから貯蜜の少い群へはわざ／＼給蜜してやるべきを、僕は怠つてゐたので、——或群の巣門外に四五十匹の蜂が倒れてゐるのを見た。あわてゝ中を調べようとして箱

だ寒い日があつたのを思ひ出し、また最近二三日のあつたかさに働蜂が一匹々出游しなかつたのを思ひ出した。そして痛ましさを豫期してこのおほひの新聞紙を上から上から取り除いて行つた。

もう、巣の整理に取りかゝつてゐた證據には、舊い巣脾を改造の爲めにかみ砕いた粉が底板の上に枠數だけの山を成してゐた。が、その上に蜂の死骸がまた何千何百となく、累々としてつみ重さなつてゐた。僕はやり慣れない墓堀りの寂し味をおぼえた。そして一々取り出して見た枠の巣脾面には、とッ付いたまゝ動かなくなつたのもあるが、それらを羽掃木で拂ひ落すと、一層驚いたことには、どの巣房にも、多少でも蜜の氣のしてゐたらしいのには、悉く、あはれな小動物が一匹づゝ首を深く突ッ込んで、その黑い冷たい尻だけを正六角の房外に出して死んでゐた。そしてそれを一々摘まんで引き出さうとしても、いのち掛けに喰ひ

この時、僕はこの蜂群が持つてゐた而もなかなか侮れない生々慾を、幽靈の如くまのあたりに感じたと思つた。



タゴールの研究

▽タゴール所感

木村泰賢

私は目下の所、主として印度の古代思想を研究してゐるもので、現今の思想までにはまだ手が届かない。然しながら近頃タゴールの哲學が非常に名高くなつて持囃されるものだから一二册の書物は讀んで見た。それは第一に三浦關造氏の譯した"Realizationi of Life"即ち「生の實現」と、同く同氏の譯した"Gitanjali"とである。それで今は此範圍内でお話をしやうと思ふ。ドラマに關しては覗いて見たが、興味も無ければ、また能く解らなかつた。

今タゴールの思想を述べる前に、日本の紹介者に就いて一言批評を試みて見たいと思ふ。タゴールの譯書とか研究書とかいふ物が、近頃大分出るやうであるが、一々讀まないから解らないが、私の遺憾に思ふことは、總て其等の紹介者が印度思想に對しては所謂素人であるといふことである。今タゴール紹介者の先鞭者として三浦氏に就いて少しく申して見ようならば、三浦氏の「生の實現」の譯文は譯者自身も自慢をして居るやうに、相當に力も有れば洗練もされて居る。然れども只何分にも印度思想を知らない爲にタゴールの思想がハツキリ現れてゐない憾みがある。タゴールの代表的書物ともいふべき「生の實現」を原本と比較して見ると、非常に遺憾な點が多い。敢て三浦氏に惡まれ口を叩く譯ではないが、譯者が初學者の爲めにと言うて、古代思想史の大要を卷頭に二頁程附してあるが、之は讀者に親切な遣り方の積りであらうが、無かつた方が數等優してあつた。僅に二頁ではあるけれども、之に依つて殆ど遺憾なく氏の印度思想に對して正確な概念を缺いて居ることが表れて居る。殊に六派の説明の如きは其大部分が誤りであると言つてよい。内容の譯に於ても印度思想を知らない爲めにとんだ間違をして居ることがあ

る。一々正確に比較したのではないから解らぬが、鳥渡目に附いただけで見ても、英譯書の第一頁、譯書の第二頁に：Fuel for sacrificial fire：とあるのをたゞ單に「薪炭の料を供す」と譯してあるなど、少しにても印度思想の何者かも知つて居る者ならば、このsacrificialといふ字を見遁して單に薪炭の料などと譯されるものではないのである。殊に原書には譯、梵語を擧げて、引用文には必ず脚註として梵文を附してあるのにも拘らず、三浦氏は全然之に構ひなく全く見捨て去つたから、原文の妙味は非常に減ぜられた譯である。元來梵語には外國語の表し得ない深い味がある。タゴールはその背景を藉りてメロヂアスな講演を遣つたのだが夫れを缺いて見ると味ひは拔けて來る。殊に滑稽なのは梵語の意味を誤つたり、發音を誤つたりしたところが澤山有ることである。例へば譯書の二十三頁に「ヤクタマーナ(神と一になる)義」とあるが、之はユックタートマーナハ(Yuktātmānah)と呼ぶべきである。又パラマートマーを菩薩と譯してあるけれども之は最高我と譯すべきである。又「マーヤー」(Māyā)をメーヤーと發音して居るなど、數へ來れば係る滑稽は澤山に有らうと思ふ。これは單に印度思想を知らぬ爲めのみならず、餘りに功を急いで專門家に相談することもしなかつた爲めであつて、紹介者としては輕卒な非難を遁れないであらうと思ふ。序であるから、三浦氏が「ギーターンジャリ」を「伽陀の捧物」と譯したのも妥當ではない。伽陀は原語ではGāthāで佛教の十二分經の一になるのであるから、この合語を用ゐると、その方の連想が浮いて來る。Gītāは歌、añjaliは合掌と譯すべき語であるから、ギーターンヂャリは寧ろ讃歌とでも譯すべきであつたのである。

惡まれ口はこの位にして置いて大ぎに**タゴールの思想界に於ける地位**は如何といふに、タゴールは詩人である。然し普通の所謂詩人と違ひ、深い哲學、深い宗教を含む詩人である。そこで仝時に彼は哲學者である。然れども概念の分解綜合に依つてシステムを立てる哲學者ではない。彼は直に實在を握らうとする神秘的哲學者である。そこで仝時に彼は宗教者である。然しながら殿堂に籠つて御經を讀んでそれで能事畢れりとするが如き宗教家ではない。彼は神と人との爲めに生きて働からうとする宗教家である。一言にして云へば彼は哲人である梵語で言へばリシ(Rsi)である。この眼で彼を見なければその思想も本當に分つて來ぬと思ふ。

タゴール思想の特徴　タゴールの思想は決して新しいものではない。野口氏が朝日新聞に於て、タゴールの思想は日本の陽明學の中にもあると述べたが、陽明の思想は禪を通じて印度から來たものであるから其間に暗合の有るのは勿論の事である。況して之れを印度思想から見れば、彼の思想は今より約二千五六百年前のウパニヤットと佛教とを根抵として出來て居るものであるから、彼の思想を新奇なものと考へるのは間違である。然し彼獨特の特徴といふべきものは、現生活を肯定し、深き意味に於ける樂天家であるといふことである。御承知の通り、印度の思想はウパニシャット以來常に幾分かは厭世的で、動もすれば現世生

活を否定して、人生の歸趣を彼岸に求めやうとする傾向がある。然るにタゴールは夫等の思想に基きながら、而も夫等を否定しないでゐながら、現世生活を肯定し、生命の躍進に歡喜を感じて居るといふのが彼の一大特徴とせねばならぬ。こゝが彼の現代式な點であつて、最も世に持囃さるゝ所以であらうと思ふ。簡單に言へば、彼は印度思想の最も幽玄な旨を體得して、而も之を現代式に活用し、之を表現するに技巧を弄せざる音樂的の語を以てしたところが限りなく人を引き着ける彼の魔力の有るところである。

思想系統　然らば彼の思想系統は何うして來たかといふに、彼の思想は印度の永き發達の背景の上に立つてゐるものである、其思想系統を少し調べて見度いと思ふ。タゴールの思想はウパニシヤッドと佛敎とに基く事は彼自身にも明言して居るところである。このウパニシヤッドは紀元前八百年頃から佛敎の初紀頃までに圓熟した婆羅門思想であつて、其中には色々の說があるが、中心となる思想は大我小我の同一を說く事である。所謂吠檀多の語で言ふならば梵我一如の思想である。即我々の個人の本性と宇宙の本性とが別物で無く同一であるといふ考へである。タゴールが常に力說して居るところの無限絕體の生命と各人の生命との融合を目的として居るのは確に此處から來たものである。然しながらウパニシヤッドには第一義的に於ては道德博愛を說くといふ事は出來ないのみならず、それを體現した人格的保證を見出す事は出來ない。勿論ウパニシヤッドの中にも道德的の德目もあれば、或は其中には幾多の聖者も現れて居るが然し夫等はとても梵我同一論の大思想を表現する程の重味を以てゐない。此缺陷を補つたのが實に佛陀である。佛陀は印度のみならず世界の聖者として崇高なる人格を表したところが、いかにも此人に於て初めて梵我の融合は表れたやうに思はれる。殊に佛敎は道德的な宗敎として慈悲博愛を宣傳したのは梵我同一論の歸結のやうに思はれるのである。タゴールが道德を說き博愛を說き、愛に依つて無限の生命を實現せうとしたのは確に佛敎から來たところである。自分も言つて居るが如く、此ウパニシヤットと佛敎とはタゴールの思想系統の基である。

然し之等は古い事であるから、是等を消化するためにはタゴールの其後に發達した澤山の思想をとり入れねばならぬ。『生の實現』を讀むと其中には實に雜多の思想が入つてゐるやうに思ふが、ウパニシヤットに亞いで彼の思想を形作るに力のあつたものは薄伽梵歌(バカバツトギーター)である。ウパニシヤットの思想は大我と小我を說くけれども、此大我を見るに概ね哲學的冷靜的である。然るにバカバツトギーターになると、大我を人格的のものとして說いて、これを宇宙の原理と見、個人の本性と見ると同時に、愛すべき恐るべき神の如くに見やうとして居る。殊に此中には現在の生活を肯定する要素が非常に多くあつて、人生の人間的活動を以て直に無限に生くる所以だと考へて居るところもある。タゴールはウパニシヤットに基づきながら、其梵を見るに如何にも生き〳〵としたものとして吾々の本性でありとしながらも、同時に離れて吾々を救ひ吳れるものゝやうに見たのは、確にバカバツトギーターの思想を受け

たものであらう。且タゴールの最も喜ぶところの活動觀（カルマヨーガ）即ち現生活的活動をしたまゝに、それが神人の平和を得るとする其確定も全くバカバットギーターから來たものである。それ故に彼の第一次的の思想系統はウパニシャットと佛敎であつて、御二次的のものはバカバツトギーターと見ねばならぬ。然しながらウパニシャットもバカバットギーターも組織立つたものではない。それ故に大我小我の關係の如きは大體に於て定まつて居りながらも非常に動揺がある。如何にこれを見るべきかと言へば所謂學派時代の思想に依つて見ねばならぬ。學派時代の思想としてタゴールは何に依つたかといふと、彼は無明を說きマーヤーを談ずるところは如何にもシャンカラ（八世紀頃）に依つたやうにも見えるけれども、到底シャンカラの敎徒ではない。何故ならばシャンカラの哲學は殆ど個人的觀念論といふべき程のものであつて、自我以外には神も世界も他人をも認めないものである。然るにタゴールは神も認め世界に意義を與へ他人をも自我をも認めて居る。これは私の想像で、學統の關係は未だ能くは調べて見ぬけれども、どうも彼は十二世紀のラーマーヌヂヤに負ふ所が多いやうに思はれる。このラーマーヌヂヤはビシヌ主義の人であつて、ウパニシャッドを薄伽梵歌やビシヌプラーナ書などの眼で解釋して所謂局限一元論（visista-advaita）を唱へ出した人である。局限一元論とは要するに全宇宙は大原理たる唯一の梵（彼は之をビシヌ神と立てる）より發展したるものであるから、世界も個人も本質上大原理と離れたものではない。併しながら巳に世界、個人と發展した以後となれば、大原理自體と個人及び世界との間には對立があるといふ點である。即ち本體論上よりは一元論で現象觀上よりは二元主義である所がやがて局限一元論の名稱のある所以である。ところでタゴール思想をこの見地から眺めて見ると殆どこの說を繼いだと言つても宜い程よく似てゐる。例へば「生の實現」（内典八六―八七頁）に、

自然が法則の制限によつて神より離れたるが如く、個人我もその我見（egoism）に依つて彼より離れたり。而も神は欣んで自己の意志に制限を置いて吾人が吾人自身の小世界を支配すべき權を與へ玉へり。そは恰かも父が其の子に、彼のなし得る範圍に於て若干の自由を許すが如し。……

吾人の自我が形をもつて神より離れたるも神の愛なり、而してまた吾人の自我が分離して更に再び神と調和し融合するも神の愛なり。

少し横道にそれるが、こゝにも三浦氏の譯に間違つた所がある。氏は「自然物は各その法則の範圍内で神から離れて自我特得の行動をしてゐる」とやつつけたれど、原典では確かに自然と個人我を併へて說いたものである。土臺as…soの關係も self も egoism も御構ひなしに譯すから驚き入らざるを得ぬのである。扨て本題に戻つて、上の引用文によればタゴールは神對世界及び個人の關係を、もとは世界も靈魂も神より離れて來たものであるけれども、離れた以後には或る範圍に於て各自、自分の法則とか自由意志とかを有するものと見たのである。即全くラーマーヌヂヤの所謂局限一元主義ではありはせぬか。而もそれが本をたゞせば神

の愛であつて最後に再び神の愛によつて神と融合すと說く所もラーマーヌヂヤそのまゝである。ラーマーヌヂヤは何故に世界及び個人我が神より分れるかの理由を說いて、一面に於ては個人我がこの責務を果たすためで、他面には神は無限の愛よりして再び神に復歸せしむるためであると言つてゐる。而も彼はこの關係を法華經に倣つて長者窮子の比喩で說いた處もあるが、今タゴールが父と子の關係で說明したのも恐らくこゝら邊りから來て居るものと思ふ。殊に注意せねばならぬことは印度思想は大抵物質世界を惡むべきものとしシャンカラの如きは之を幻影(マーヤー)と見たのに反し、ラーマーヌヂヤは之を神の身體であると說いて、物器世界を惡く見ぬことである。タゴールが盛に自然を嘆美して之に慣れたのも矢張この見方から來たものらしい。其外かやうな所を尋ねて見ると實にラーマーヌヂヤとタゴールとの間には生息相通する點が澤山にあつて、どうしてもその關係の密接であつたことは疑はれぬ。この點はタゴールが來たなら聞いて見たいと思ふ。とにかくタゴールの第二次の思想系統をなすものを薄伽梵歌と見ればその第三次はラーマーヌヂヤである。ところがこのラーマーヌヂヤの流派は其後印度に大に盛になり殊に南方では今でも非常な感化力を持つてゐるけれども、印度宗敎の弊風として段々と迷信的要素が加つて餘程墮落して來た。況してその他のシブ主義の宗派などゝなれば御話にならぬ程の迷信多く、どうしても印度敎に一大洗滌を與へねばならなくなつたのである。これをなし遂げやうとしたのは十八世紀の有名なラーム、マフン、ローイ(Rām Mahun Roy)といふ人である。かれはウパニシャットを基礎として基督敎の宗義をも取り入れ、又猶太敎の宗義をも取り入れて唯一神敎的の敎義を宣傳したのである。これを梵敎會(Brahma Samāj)と名付る。これが發達するに從つて有力な一人の弟子が這入つて來た。それは誰れであるかと言ふとデーベンドラナート、タゴール(Devendranāth Tagore)である。即ち今のタゴールの先代である。然し此タゴールはローイの說には滿足せず別に敎會を立てた。根本梵敎會(Adi Brahma Samāj)がそれである。そして彼はこの敎會の敎義を四ケ條に纏めたのは有名なる Brahma dharma vīja(梵法種)である。それは第一に、宇宙の原理は梵である。最初には梵のみがあつた。第二には、此梵は唯一なものであつて、精神的實在で又普遍不動圓滿なものである。第三には我等は梵より湧き出でたもので梵性を有するものである第四は、我等は神を愛し神の命令によりて人を愛さねばならぬ。といふ主義である。タゴールの直接の系統は實にこゝから來て居るのである。そこで彼の唱導する所、斯る所を見れば凡てこの主義で貫かれてゐることはギーターンヂヤリを見ても生の實現を見ても直ぐに分ることであるこの意味に於て彼は梵敎會の宣傳者であると言つてもよからう。要するに彼の思想は上に述べた數段の背景を豫想するものであつて、少し賞め過ぎて言へば彼に來りて印度思想の粹は印度的にして而も現代的に翻譯されたと言つても宜からうと思ふ。しかし進んで言へば彼の抱きゐる位の思想は已に數百年前より日本の大乘佛敎徒によりて考へられて來たことで、殊に禪などゝなればモット進んだ所まで達してゐ

かにも殘念である。余りにゴテゴテと述べて不得要領になつたが最後に

少しく所感を言へば近頃の思想は大分著しく東洋的になつて來た。オイケンでもベルグソンでも皆著しく東洋的になつて居る。吾人は斯かる東洋的の思想も西洋人を通さねば味はれなかつたが、タゴールといふ純乎たる東洋人に依つて東洋思想が説かれるやうになつた事は嬉しい。願はくば從來の日本人の遣り方のやうに一時の慰みとして玩ばないで、タゴール思想の因つて來るところを研究して之を日本人のものとしたいものである。

▽讚歌の詩人タゴール

中澤臨川

印度はいま或る意味での復興(ルネツサンス)の時期に向つてゐる。枯渇した涅槃(ニルバナ)の智慧を新しい生命に復活しようとする氣運がタゴールを中心として燃え始めた。彼ほどその國人に敬愛せられてゐる者はない。昔、ナプレスでタツの歌が謡はれたやうに、印度の街々では普くタゴールの歌が謡はれてゐる。イエツの書いた物の中に、ベンガルの秀れた一醫師の話としてルは持て囃されてゐて、現代は『ラビンドラナアトの時代』だとさへ謂**はれてゐる。**

彼は詩人であつて、同時に音樂者である。その詩は尊い單純と音樂的諧調とを以て個々人に迫る面影がある。それにしても、何といふ豐かな、敬虔な、傲らざる滿足の充ちた、淨い哀調の溢れた詞であらう。その詩には、覺悟と感謝と生きた祈禱との中に復活した珍らしい東方の智慧を窺ふことが能きる。

彼は先づ第一に"lover"である。彼は宇宙萬物の中に身を置いて、愛し、理解し、そして感謝した。彼は到る所に神を見た、神の光瀾の中に身を投げた。『人間が彼の心に持つ神の觀念は總ての驚異の中の驚異である』と彼は言つてゐる。イゴオの障壁を開いて、愛しそして理解することは、何物をも憎まないことであり、何物の生命とも親和する唯一の道であることを彼は體驗してゐた。彼にとつては水は、『單にその四肢を潔めるばかりでなく、心をも淨める、なぜならそれは彼の心靈に觸れるから。大地は單に彼の身體(からだ)を載せるばかりでなく、彼の心をも喜ばせる、なぜならその接觸は物的接觸よりより以上のものであるから——それは生きた現實であるから』。かうして彼の心はいつも美と喜悦(よろこび)とに燃え、そして宇宙の生きた諧調の中に呼吸した。『生の實現』に次の一節がある。

『昨夜、闇を被ふ沈默の中で、私はひとり立ちつくして、永生のメロデイ

ーを歌ふ唱歌者の聲を聞いてゐた。寢床に就いてから、私は犬のやうな考を心に懐きながら眼を閉ぢた。たとへ睡眠の中で私が無意識でゐやうとも、生命の舞ひは猶ほ私の休めた身體の靜かな舞臺で、星と歩調をとつて行はれるであらう、心臓は波打つであらう、血は血管に躍るであらう、そして私の身體の幾百萬の生きた原子が主の指先に觸れて鳴る琴糸の調に合はせて震ふであらう」と。

英譯「ギタンヂャリ」の卷頭に、質素な著者の肖像が載つてゐる。稍や後向きに擡げたその頭、靜かに瞑目したその横顔、緩るく膝頭に組まれたその手——何といふ敬虔な相であらう。これが彼の瞑想し且つ祈禱する常の姿態である。そして之がまた印度人の讃歌を誦する姿勢である。然り彼等にとつては祈禱は同時に詩である。印度人の信仰に據れば、詩は素と下界に明かされる遠い前から、神の國で行はれてゐたものだといふ。いかさま、タゴールの詩には斯うした神聖の感觸が深く蝕されてゐる。彼が

"I am here to sing thee songs"

といひ、

"When thou Commandest me to Sing"

といふ時、彼は眞に神の爲めに歌ひ、神に據て歌つたのである。彼の詩作の凡ては神と永生との爲に捧げられた讃歌である。彼にとつては神は"Lief of life"であり、同時に"Master poet"であつた。彼の詩は、「靜かな、充ち溢れた閑寂の中での生命へのデディケーション」であり、「この世界の祭典」へ招かれた感謝でもあつた。

「あなたは私を永生にした、それがあなたのなぐさみである。私の壊れ易い甕を、あなたは幾度も幾度も空虚にして、また絶えず清い生命を盛つてくれる。

あなたはこの小さな葦の笛を、小山や谷を越えて持ちはこんだ。そしてこの笛の中へ、永遠に新しい諧調を吹き込んだ。

あなたの手の不死の感觸を受けて、私の小さな心は喜悦に限界を失ひそして言ふに言はれぬ詞を産み出す。」

「唯、わが主よ、あなたは私の心を、あなたの樂の無限の網のなかに捕へてゐる。」

「歌ふべくあなたが命じたときに、私の心は衿りを失ふ。私はあなたの顔を見上げ、涙が私の眼にたまる。私の生命のあらゆる粗暴なもの〻不調子なものが、皆な一つの甘い調和に融ける——そして私の歸依心が、海を越えて飛ぶ喜びの鳥のやうに翼を擴げる。」

何といふ詩的法悦であらう、そして聖的忘我の歡喜であらう。からいふ心持から、彼の詩は小川に落ちた夕日の影のやうに、蓮の花咲く五月の朝のやうに、待人ある暗い雨の夜のやうに、或は靜かに、或はうつとりと、或は淋しく、甘い悲しみの聲に、沈んだ歡喜の音に、さては子供の

智慧に、少女のほこりに、聖者の死の沈着に、まことの調となつてゆるく溢れてゐる。

タゴールは十七八歳の頃から詩を作つた。二十五歳から三十歳頃までの間に、彼は最もうるはしい作物を殘してゐる。その間に彼は四五の戲曲をも書いた。それは神秘的色彩の飛も高いもので、東方のメーテルリンクと謂つた面影がある。これ等は今でもカルカッタの劇場に上ぼされて、非常な成功を收めてゐる。

その後彼の作品は次第に深さを增して宗敎的にまた哲學的になつた。それが一篇の『生の實現』なる論文中に秩序づけられて、立派な世界觀、人生觀を示してゐる。イエツの『ギタンヂャリ』の序の中に、ベンガルの醫師の言つてあるやうに、彼は今迄の印度の聖者達のなかで、生命を拒否しない第一人者である。彼は生命そのものから罰を發してゐる。彼は死涅槃の歡を説かないのである。

『かくて私はこの生命(いのち)を愛するが故に、私はまた同じく死をも愛さねばならぬ。』

と彼は歌つてゐる。彼の哲學は根本から樂天想である。彼はこの世に存在する惡即ち不完全を善即ち完全に行く行程の一時的幻象とみてゐる。かやうな障害があればこそ、この世には創造があり、不斷の實現が行はれるのである。死は生命の消極相である。從て死は究極の實在ではない。空が青く見えるやうに、死は黒く見える。然し空の色が鳥の羽を染めないやうに、死は決して生存を汚がさない。死の觀象のあるにも拘はらず、

全體としての生命は決して死を重く見てゐない。それは笑ひ、躍り、そして戲れる。それは建設し、蓄積し、そして死の面前で愛する。」かるが故に『生命はそれ自らが樂天的である、そは進むべく要する。』『全世界は創造の喜びである』で我等をして餘りに人生の消極的方面を寡用視せしめるな

歩みを覺え初めた赤兒を見てゐると、失敗が多くて、成功は至て尠ない。若しも我等の觀察を短い時間に限るならば、之ほど殘酷な光景はなからう。然し、それにも拘らず、赤兒にとつてはこの失敗のうちに何れだけ悅びの衝動があるかわからない。生命が「完全」へ向ふ衝動もまたさうである。タゴールはまた愛、行爲、力、努力、その他生命の完全が要求するあらゆる要素を説くことを忘れなんだ。そこに彼の新使命が横はつてゐる。彼は生命の進化の確信者である。彼はかうした意味から言へば東洋のベルグソンである。

タゴールは生命を敬ふが故にまた死をも敬ふ。活動を尊ぶが故にまた靜止をも尊ぶ。『私のこの「私(アイ)」は日となく夜となくそれ自らの故鄕を求めて勞苦する。嗚呼、汝がその故鄕を汝のものだと呼び得ないうちは、その苦みは堪えないであらう』でかくて我等の心は斷えず『渡守よ、彼方の岸に私を渡してくれ』と叫んでゐる。で、『あらゆる私の事業はあなた(神)のものです』と我等が言ひうるに到つて、我等は彼岸(ひがん)に渡される。かやうな願望の叶つた人にとつては、大神(おほかみ)に對する『たゞ一つの拜跪(サリユーテーシヨン)』の中に彼のあらゆる活動と平和が融ける、死すらも。

昔からタゴールほど光明的な死の讚歌を歌つた者はなかつた。『ギタン

ヂャリ』の最後の方にある二十餘篇はみなそれで埋められてゐる。"And I am eager to die into the deathless" ——これが彼の確い信仰であり、また歡喜である。

『死が、お前の家の戸を叩くであらうその日に、何をおまへは彼に捧げるつもりか？

お、、私は私の生命の盈ち溢れた水甕を私の客の前に置くぞよ——私は決して彼を空手では還さぬぞよ。

あらゆる私の秋の日、夏の夜のあらゆる葡萄の酒をも、私の忙はしい生命の收穫をも、落穗をも、私の月日の終焉に死が私の戸を叩くときに私は彼の前に捧げるぞよ。』

何といふ充實した生命の覺悟であらう。いま一つ、

『わが友よ、この私の旅立ちする日に、好運を私の爲めに祈つてくれ。空は曙に輝き、私の行く道が美しく横はつてゐる。

…………………

私は婚禮の花冠を戴かう。私の着るものは赤蔦心の旅衣ではない。

途中に何んな危險があらうとも、私は少しも恐れない。

私の旅の終つたときに、宵の明星が現はれて、「帝王」の門前から黄昏の諧調の悲しい曲が吹奏されよう。

▽タゴール哲學の究竟

吉田絃二郎

私たちの神觀或ひは宇宙觀は古來常に二つの徑路を辿つて來たやうに思はれる。一は神と人とを對立させる考へ方であり、他の一は神即人の考へ方である。一は欣求憧憬の生活であり、一は自力創造の思想である。無論神人二者を對立せしむる思想と雖もその根柢に於いては元來一元的なものであつて、その表現に於いて神と人或ひは禮拜さるゝものと禮拜する者との二つに分たれる。例へば最初に父なる神があつて、それからして子なる神或ひは人類が岐れ出だたとする思想である。しかしてこの二つのものは絶えず一つにならうとする努力、欣求、思慕、追求の念を抱いてゐる。タゴールの思想は即ちこの種に屬するものであらう。

、彼れの思想は萬物悉くブラアマより生れ出づるの觀念を基礎としてゐる。しかして萬物はまたブラアマの裡に渾然たる調和純一の交響樂を奏でつゝ無限より無限に光耀と法悅の人生伸展の道を進軍するものである。彼れに言はしむればブラアマは法悅と光耀と永生の實在であるが故に、彼れの表現なるこの世界は凡べて法悅と光耀と永生とに充ち滿てる

あり、罪悪があるやうに考へられるのは、まだ私たちが眞に人生を觀るの眼を持つてゐないからなのである。まだ眞に私たちがブラアマを意識するの境に達してゐないからである。彼れはブラアマを覓めブラアマに醉はんがために觀照し、禮拜し、勞作する。ブラアマを見失へる人々の生活は恰かも牧者を失へる小羊のやうに、當てもなくさ迷ひつゝ、當てもなき世界の曠野に絶望と頽廢と死を待つの生活である。私たちはブラアマに歸らなければならぬ。ブラアマは私たちの家である、母の懐である。私たちの血管に母の血が脈搏つ時、私たちの胸にブラアマの溫かみを感ずる時、私たちがブラアマと共に生けるの意識を抱く時、私たちの生活は光耀法悦永生に充てる眞生活となる。その刹那に涅槃の境は私たちの心に築かれ、天國は地上に打ち建てられる。

　さてブラアマとは何であるか？　彼れは全知の實在である。彼れは無限の空間に住める實在である。この世界の劫初に非生（メアスレス）の靈が殘存した。そは即ちブラアマである。彼れは劫初より存在したる唯一絶對の實在であつて創造せられたるものではない。彼れは壯絶純一の精神であつて、衰滅なく、死なく、永遠の實在である。彼れは光耀法悦の源泉である。彼れは宇宙の創造を企てた。彼れはたゞ然か想へることによりて現前する萬有を創造した。彼れよりして生命、心靈、感覺、空氣、光り水及びこれ等の凡べてを抱ける大地が造られ、日月が創造せられた。次に彼れは法則を造つた。彼れの大法の鐵鞭の下に萬有は動いてゐる。彼れを恐るゝが故に焔は燃え、太陽は熱を與へ、雲と空氣と流れと死と花と木の實は彼れ等の歩むべき途を歩む。

　彼れは完全の無限なる理想である。彼れは永遠に完きものである。彼れは愛であり、眞理であり、美であり、善である。彼れは無限の刺戟を與ふるものである。彼れは絶えず心の貧しさと飢とを私たちに感ぜしむるものである。私たちはその貧しさと飢とを充たさんがためにブラアマを覓ねる。こゝに私たちの生活の刺戟がある。そこに無限のあこがれがある。

　畢竟タゴールの思想はブラアマを戀する無限のあこがれを外にして存し得ないと思ふ。彼れは絶えずブラアマを慕ひ、ブラアマを追ひ求むるものである。神人合一の至境にブラアマを崇めつゝ拜しつゝ醉ひつゝ讃美しつゝ、光耀の世界に悠久の生命を生くる聖者の生活こそ至高至聖の人生でなければならぬ。

　ブラアマを追慕するのこゝろは私たちの本然的な衝動である、恰かも嬰兒が母の懐を追慕するやうに。それと同時にまた私たちは母の懐を離れて嬰兒が成長することのできないと齊しくブラアマの胸、ブラアマの大法を離れて生くることはできないことを知つてゐる。

　然らば私たちは如何にしてブラアマの懐に抱かれることができるか。如何にしてブラアマの大法を發見し、ブラアマの裡にありて絶えずブラアマに醉へる感謝と歡喜の生活を實現することができるか？。彼れは先づ私たちに向つて汝自身の眼を開けと命ずる。無智者にとりて世界はナツシングである。智者にとりてのみ世界は意義あるものとなる。暗黒の

なかにありて私たちは何ものをも認めることはできない。けれども、もし私たちが一つの燭をかゝげる時に私たちはその周圍の世界を知ることができる。更らに私たちがより大きな燭をかかげる時私たちは更らにより廣大な周圍の世界を見ることができる。私たちの理智の光明が擴充せられるだけ、私たちの周圍の世界はより大なる意義を以て充たされる。無智の徒にとりては星も大空も空無である。けれども智者にとりては一と片の花辨も無限の意義を語るものである。昔印度人の理想的生活は心靈意識の完全なる發達を致す如き生活の外になかつた。彼れ等は常に觀照生活の孤獨を愛した。彼れ等は森林に入りて或ひは荒野に立ちて靜觀瞑默の生活を擅にした。古來印度人にとりて最高の生活を營みたるものは道德家でもなく、賢人でもなく、勇者でも、政治家でも、王者でもなかつた。觀想生活のうちに無限の光耀と歡喜とを味到したる聖者の生活こそ最貴至聖の生活であつた。彼れ等は智識に於いて絶對心靈に達してゐた、彼れ等は心靈と合一せる自己を見出してゐた。彼れ等はあらゆる利己的慾念から解放せられて常に絶對の神に到達し、常住不斷の平和境にあつた。

私たちは絶えず聖者の途を歩かなければならぬ。タゴールの主張する生活はこの外に出てない。

けれども聖者の生活は容易に實現せらるべきものではない。そこには言ふべからざる苦痛や涙が伴ふ。私たちはかすかに神の聲を聽くことはできる。けれどもその姿を明かに把握することはできない。私たちが專念神にあこがれ、神を覔ねんとする時、神は必ず私たちの扉の前に立つてゐる。けれども更に進んで私たちが明かに神の姿を意識せんがためには、私たちは殆んど終生の努力をさゝげなければならぬ。

『私は黄金の牡鹿を探して彷徨いてゐるんだ！　あゝ、さうだ何時も私から逃げて行くあの足速い幻影を！

彼れに近寄つてご覧、直ぐと彼れは遠のいてゐる、お前の眼の前に黄と埃の雲を遺して！

おゝ私は不安な放浪者のやうに森と野とそして名もない陸をうろつきさ迷ふ、夢にも振り返らうとは思はないで。』

神を覔ねんとする人々の齊しく經驗しなければならぬ苦痛はこれである。私たちは絶えずブラアマを追ひ求めてゐる。ブラアマは私たちの前に幻の如く徂徠する。しかも私たちは容易に彼れと合一することはできない。明かに彼れを意識することはできない。覔ねんとして覔ね得ざる悲哀、知らんとして知ることを得ざる理智の悲哀がこゝに生れる。彼れの父デエンドラナアトが嘗てその生涯を神前にさゝぐるの前に經驗した悲哀もこれであつた。タゴールも恐らくこの絶望的な時代を經驗したであらう。彼れの作「ギタンジャリ」や「生の實現」が光明、歡喜に充てる人生の讃美であるに對して「園丁」に見る戀愛と生活の燃燒に見る哀愁、絶望、傷悲の心持ちを考ふる時に私たちは何うしても彼れが、最初からして今日の如き明るい思想の所有者であつたと思ふことはできない。彼れもその絶望の時代にありては悲しき戀を謳ひ、人生の幻滅を悲しむ者

いそして永久である。悲しき戀をしておん身のうちに眼醒めしめよ。」

けれども斯やうな絶望頽廢の時代は必ず要求信念の時代に取つて替られなければならぬ。悲哀或ひは絶望の一時代は思想發展の徑路に於ける一つの門であるとしても、それは決して永久の途ではない。永久の途はブラアマの光りとよろこびに充てるものでなければならぬ。私たちはその永久の光明ある人生の道途を覔ねる。明かにされたる理智の眼は光明の道途を發見する唯一のちからである。即ち私たちの理智が部分的でなく全一のものとなつて働く時、私たちはブラアマを見ることができる。彼れはこの理智の究竟を指して心靈意識と稱へてゐる。私たちの心眼が開いてかの肉眼に見えざる神の姿を見、私たちの意識が發達して、かの肉體の感覺上に知覺することのできない神の玄妙な靈動をも感ずるやうにならなければ、私たちの生活はまだ眞實のものではない。

タゴールに隨へば私たち自身、或ひは私たちの周圍の天地は悉く神秘幽玄に充ちてゐる。神の囁きは常住坐臥私たちの影の如く私たちをつゝむでゐる。それに對して私たちの心靈意識がどれほどまで伸びて行くことができるか、意識の伸展につれて世界が擴げられる。意識が擴大せらるゝだけ私たちの個我は明かになり、また大きくなつて行くのである。

さて如何にして私たちはかくの如く無限大な意識を所有することができるのであらうか。こゝに離脫の觀念がタゴールの思想のなかに取り容

を捨てよ」と叫ぶ。彼れは私たちに向つて先づ「汝の狹き個我を捨てよ」と言ふ。一つの水甕の水を守る時私たちは水甕の重みを感じなければならぬ。水甕を捨てゝ大海そのものゝなかに入る時私たちの上には幾千倍の水量が湛へられてあるにもかゝはらず、私たちは何の重さをも感じない。私たちの所有は私たちに自由を與へるものでなくて、私たちを束縛するものである。たゞ個我のみを守る人々は彼れ等が所有するものにのみ絶對の價値を與へて、その餘のものゝ價値を見遁す。少くとも彼れ等は彼れ等が所有してゐる以外の世界を安價に見積る。それ故に彼れにとりて世界は小ひさくせられ、安價にせられる。私たちが持てる凡べてのものを捨てゝ、空無の觀念から出發する時に私たちはこの世界が、惠みに充ち、よろこびに溢れてゐることを發見することができる。私たちは先づ自巳の凡べてをブラアマにさゝげなければならぬ。タゴールにとりて自己犧牲は救濟の第一步である。かの燭火がその油を犧牲にすることによりて光明を放ち、周圍を照らし、彼れ自身の意義を發見するやうに、私たちは先づ自己を神のためにさゝげなければならぬ。神に仕ふる處女のやうに信從な敬虔な生活に入らなければならぬ。こゝに於いて私たちはクリストの言つた「嬰兒の如く」なつて天國に入ることができる。但こゝに注意しなければならぬことは彼れの犧牲は決して自我否定でもなく人生の厭離でもない。より大なる人生を見んがための離脫であり、よ

り豐かなプラアマの懷を探り得んがための自己犧牲である。彼れは非我を主張すると同時に自我を主張する。私たちが自我を失ふならば私たちにとりて神といひ世界といひ何の意義も持たないものとなる。神を索め實在を如實に把握せんとする努力は只管私たちの自我を生かしめんがために外ならぬ。蓋し彼れが非我を主張する所以はより大なる自我に生きんがためである。

さて我たちがその凡べてを捨て個我離脫の生活から心靈意識の世界に入る刹那に私たちの心眼は悉く開かれて、私たちの世界は悉くその面目を一新して來る。私たちは靈的に更生するのである。こゝに再生或ひは靈生なる現象があらはれる。雛鳥はその卵殼を壞らなければ眞實の世界を見ることはできない。雛鳥がたゞ彼れの狹い卵殼のなかに暗き一室を守つてゐる間は、彼れはその卵殼を以て彼れの凡べての世界であると想へてゐる。けれども雛鳥が卵殼を打破したる刹那に彼れは眞實の世界は無限大であり、そこには煌く光りと快き空氣とが滿へられてあることを發見する。

かくして心靈に眼醒めたるものゝ世界は悉く怡悅と光明とにあふれてゐる。「あらゆる生物は歡喜より生れ、歡喜によりて支持せられ、歡喜に向つて進み、歡喜のなかにはいつて行く」ことを感じずには居られない。私たちは一片の花の上にも一塊の斷岩にも全世界の歡喜が滿へられてあることを直感する。私たちはあらゆる現象を透してその奥にプラアマの聲を聽く。

「我れにまで耳傾けよ！　汝不死なる聖靈の子等よ、天の高座に棲める汝よ！　我は暗黑の彼方から光明を放射する絕對人を知れり。」

こゝに至りて私たちの生活は常住神の聲をあこがるゝ聖者の生活に入るのである。私たちは絕えず神の愛をたゝへ、神の光明を慕ふものとなる。神は正しき者にも惡しき者にも雨を降らすところの愛の神なることを直感し私たちのうちに神の愛が眼さめる。タゴールによれば私たちが愛することを爲ないのは理解しないがためである。私たちの意識が發展し、理解が廣くせらるゝにつれて私たちの愛はより廣きものとなる。けれども理解は愛の第一步であるのみで、愛こそ愛の究竟であり、愛こそ理解の究竟である。私たちは理解せざるが故に愛せざるのである。否な愛せざるが故に理解しないのである。こゝに於いてタゴールはクリストの愛、佛陀の慈悲觀を以て意識生活の至境とする。

「天なるもの、または地なるもの、遙かなるもの、または近きもの、見得べきもの、または見得べからざるものの萬有に對して、汝は憎むことなく、殺さむと念ふことなく、無限なる慈悲の關係を保て、立てる時も、坐れる時も、横はれる時も、汝が眠るまでかくの如き意識のなかに生くることが即ちプラアマの精舍である。」

佛陀のこの思想はやがてタゴールの思想である。プラアマは愛である、隨つてプラアマによりて造られたる世界は凡べて愛でなければならぬ。愛の心を以て見る時に萬有は凡べて正しく、美しい。彼れにとりては死も惡も暗もない。惡は不完全な善であり、醜は不完全な美である。死は

造の生命と創造と創造である。かく觀じ來る時にこの宇宙は凡べて永遠の生命を謳ふ神の舞踏場となる。私たちは最早や薄暗い室の内に蹲つて愁しむではならぬ。私たちは絶えずプラアマの生命と法悦と光明とに酔ひ、プラアマをたゞへなければならぬ。こゝにアドレエションの生活が初まる。今や世界は禮拜するものと禮拜せらるゝものとのたゞ二つの存在になつて來る。そしてこの二つが絶えず相抱かんとしてゐる。即ち神人の調和である。私たちは絶えず彼れを禮拜しつゝ彼れを覓ねてゐる。同時に彼れはより以上に私たちを覓ねてゐる、恰かも失はれた小羊が牧者を求むる心以上に牧者は小羊を探し歩いてゐるやうに。

以上私はプラアマ、自己犠牲、心靈意識、愛、禮拜の生活について極大まかに述べた。しかしてこれ等の順序を經過したる者の生活の究竟は神との大調和大合一でなければならぬ。彼れはこゝに始めて神の人となつて生活することができる。こゝにタゴールの準備の生活が終る。

更らに彼れは私たちに向つてその完くせられたる聖者の生活を提げて巷に出でよと叫ぶのである。何となれば神は愛であると同時に勞作であるが故である。神の光明も法悦も愛もたゞ勞作を透してのみ可能であるが故である。

森林精舎の觀照裡に得られたる犠牲、心靈意識、萬有調和の心を抱いて私たちは山を下つて巷に出でなければならぬ。そして私たちが森林に

森林にありて祝福せられたる聖者の義務であり、また生の實現の第一義である。かくて私たちは森林に在りて[illegible]の[illegible]裡に在て一層明かに神の聲を聴き、神に酔ふことのできる人とならなければならぬ。

最後に、生の實現とは何であるか？　個我を捨てゝプラアマに入り、プラアマの愛を意識しつゝ愛のうちに勞作し、愛のうちにプラアマを表現することである。勞作はプラアマと交通する所の究竟の途である。

詩人はその詩に、藝術家はその藝術に彼等自身を表現し、プラアマを表現する。かくして彼れはその勞作のうちにプラアマの無限の歡喜を覺へる。彼れは絶へずプラアマに自己の勞作をさゝげる。彼れの隣人のために勞作をさゝげる。そこに與ふる者の歡喜が生れる。河は流るゝことによつて、焔は燃え上がることによりて、花の香は薫ずることによりて歡喜を覺える。私たちの勞作をして焔の如く花の如く河の如くプラアマのためたらしめよ、隣人のためたらしめよ。

凡べてプラアマと隣人のために愛を與ふる者の生活、勞作を寄奉する者の生活！　これタゴール哲學の究竟を示すものである。

▽散文詩家としてのタゴール

野口米次郎

タゴールのベンガル語の原詩は何んなものだか知らぬが、英語の飜譯では所謂散文詩(プローズ、ポエム)として取扱はれ可きものです。所で此散文詩といふ名目(デシグネーション)に關しては議論が有る、散文は散文、詩は詩で、假令其相違の點が度合ひの問題であるとした所で、箇々別々のもので兩者を一ッにす可きもので無い。一の繪を稱するのに音樂的名目のソナタとも云へねば、又シンフオニーを大音調詩(グレート、トン、ポエム)と呼ぶのを容ばぬと同理由で、散文詩といふ名目は不得要領である、若し名稱を付けたければ、散文詩と云はずに散文の音律(プローズ、リズム)と呼んで貰ひたいと主張した連中のうちの一人には、先づシャープを擧げねばならぬ。彼等は散文の音律とは呼んでもよいといふが決して音律的散文と混合して貰ひたく無いといふ理由は、彼等は音律其物に意義を持たせねばならぬといふ主張からです。英語國では所謂詩に入る可き語數が自然に定められ制限せられて居る、而して散文では自由に得手勝手に仕用せられる言葉が持つて居る音律(在來の作詩家連は音律を持つて居らぬと否定して來たのであるけれども)を重要視して來て巧に、放膽に草した美文が則ち彼等の所謂散文の音律なのです。其例をウヰトマンの詩中に發見するのは難事で無い。所がウヰトマンの眞髓を捕へたけれども殘念には概念的固執の爲めに大なるを得無つたカーペンターの作と成ると、音律的散文と成り終つた形狀を呈して居るです。詩を散文の暖簾の下で行こうと企てた西洋の最初の文學者は誰であつたか知らぬが、日本人なる私の腦中にはツルゲニエフの名前が直ぐ浮んで來ます。それから例のボードレエです。然しツルゲニエフやボードレエの所謂散文詩は今日の私から云ふと極めて徹底せぬもので、内面的觀察の發生を持つて居らぬ外面的遊戲に落ちたもので、無形の音律が、顯はれた言葉を活動せしめて遂には特種な有形の音律を完全するに至る私等の主張したいといふ『散文の音律』じゃ無いのです。今タゴールの詩を以上書いて來た尺度に照らしたら如何なものかといふに、單にタゴールといふ背景を取捨てゝ、文藝上の作品として取扱ふといふ段に成ると偉大な價値を持つて居らぬと思ふです。ギタニヂヤリは性質上概念や技巧に落ち易いのであるが、其詩の多くのものは所謂 arbitrary introduction に止まつて居るのを發見します。勿論中には——『散文の音律』作家が主張する一種の吟調を具備して居て、シャープが書いた論文の句を引用すると『山上に吹く風の高低、海岸に打込む浪の起伏』を想像せしめる逸品も有るでしやう。散文の音律を巧に操つた作品は、『彼等は薄暮の空氣の様に急に靜かに來らねばならぬ……彼等の各々は風であり空氣であり呼吸であらねばならぬ、完全であり最後のものである狀態を譬へると宛も五月の月夜林中から湧き出る短い急激な鳥の歌か、又暗明の裡に響く燕の羽翼とでも云はねばならぬ』と再びシャープが書いて居る。タゴールの散文詩或は『散文の音律』で上出來な作を手當り次第一ッ二

を掲載します。)

「彼來りて我が傍に座せしが、我醒めざりき。のろはしき眠りなりしかな、あゝうとましき我！　夜靜かなる時彼來りぬ。彼其手に琴を持てり我が夢は其音調にとも鳴しぬ。

あゝ、いかなれば我が夜は斯くも空しく過ぐるや。

彼の息わが眠りに觸るゝ時、いかなれば我常に彼を見ずして眠るや。

「汝、彼の音なき足音を聞かずや、彼來る彼來る彼今來る。

いづれの時、いづれの世、いづれの日、いづれの夜も、彼來る、彼來る、彼今來る。

我はさま〴〵に異なれる心にさま〴〵に異なれる歌を唱ひぬ。されど其風その調子に常に響く彼來る、彼來る、彼今來ると。

のどかなる四月のかぐはしき日に、森の徑を過ぎて彼來る、彼來る、彼いま來る。

六月の暗き雨の夜、いかづちの雲の車にのりて彼來る、彼來る、彼今來る。

かなしみにかなしみ來る時、彼の足わが心を踏む、彼の黄金の足觸るゝ時、我がよろこびは光り輝く。」

こうタゴールの詩を英語譯で讀んで見ると、在來の散文詩作家の慣用法則ち對句――言語の上で無い場合が多いにしても意味上の對句を疊込

譯上に顯はれた所では、在來の散文詩を餘り多く進めたものじやないことに成るです。前云つた如くギタンヂャリ一作の詩は私の理想に近つて終つて居るのが至當であるとしても、其他の作品の上に於ても、今日の私の詩に對する意見から云ふと如何にも食い足らぬもので、流動的調ひが足らぬので、直に詩の全體を在來の觀念の裡に退却せしめて仕舞ふ。私の理想中の『散文の音律』は更に一歩も二歩も進めたものであらねばならぬ。タゴールの作ではこれ迄の所、ギタンヂャリ以上のものが無い、私がギタンヂャリから供給された興味(インテレスト)は三部經などの佛典を近代化されたものから得る興味と等しく、別に特種のものとも思へませぬです。詰り餘りに說法に落ちたもので、云はゞ東洋一流の智的觀念を詩に盛り出した點は感服するとしても、直に私をして一種の嫉ひを起させます。詩人は說教師で無い、智者の言語は詩人の言語としては餘りに靜かで平和で常識に富んで居る。そりやタゴールは所謂詩人以上で、人の云ふ聖者の一人でありましやう、我々純然たる詩人たりたいと思ふ連中から文藝品として論ぜられるのはタゴールの迷惑と思ふ所でありましやう。

今日までに已に書物としては二册もタゴールのギタンヂャリが公にされて居るが、私の讀んだ日本語譯では、拔萃ではあるが、前云つた心の花誌上松村みね子の譯が、間違ひも無いのみならず原詩の音律の響きを

傳へて居ると思はれます。書物と成つた譯の方には隨分甚だしい誤譯がある樣に受取られました。原文が正當に解され得る力の有無を論ずる餘裕さへ無く、墓地に新らしい血を日本現時の文藝に捧げたいといふ譯者の努力と熱心は中々感心なものでありましやうが、原著者の迷惑は一方なりますまい。此處にもう一ツ松村みね子の譯を揭げます。

『なんぢ我をして終りなきものたらしめたまふ。これなんぢの望みたまふところなり。なんぢ此かよわき器を幾度か虛しくして、常に新しき生命を以て滿たしたまふ。

　なんぢ此小さき蘆の笛を持ちて山を行き谷を行き、永遠にあらたなる音を吹きたまふ。

　なんぢ不朽の御手を觸れたまへば、我が小さなる心はよろこびの爲に限局(かぎり)をうしなひ、言語を以ていひつくしがたき言語を述ぶ。

　なんぢの我に賜ふ限りなきたまものは唯此いともちひさなる我が手の上にのみ與へらる。世は移る、しかもなんぢはなほ注ぎ與へたまふ、しかもなほ滿たし盡くさず。』

　この譯文を讀んで『なんだ古い音調で文藝を一轉化せしむる程の力の無い文字だ』といふ人があると、私は云ひます英語譯（ベンガル語の原文は知りませぬが）では在來のものを受けついで、所謂散文詩の系統を引いたもので、少くも私を驚かす程のものでは無いのです。私は餘計なことの樣ですが此處に附言します、マンダラ詩社から我々が近頃公にした詩集マンダラに、蒲原有明君の書いた『序文の代りに』が載つて居ります。至つて平易で了解し易い原文をわざ〳〵六ケ敷く難解に塗り上げたタゴールの日本譯を讀むだけの同情があるなら、有明君の前記マンダラの序文なり詩なりを讀んで與れ玉へ。有明君のものはタゴールの歩み行きつゝある路を等しく辿つて居るもので、則ち宗教的背景を持つて居る作です。

▽佛基兩教の接觸とタゴール

三浦關造

□寺院と傳說とを壞つて、純な宗教的經驗に入(はい)らふとする佛教徒と、教會とニケヤ會議制定の教理とを放棄して、素裸體(すつぱだか)で眞理に觸れやうとする基督教徒とは、益々佛基兩教の間にある相違點を打破つて、一の中心眞理に迫つて來た。特に基督教に於てはトルストイに或はドストエフスキーに、佛教に於てはタゴールに、或はカビールに明かに之を認める事が出來る。（勿論其の他大きな宗教的新運動はいくらもあるけれど）

□ニケヤ宗教會議で、基督教の代表者等は、精査に精査を加へ、熟議に熟議をこらして、十二ケ條の教義を制定し、之を以つて正統派となしこれから一歩も近寄(ちかよ)つてはならぬとしたが、陸續として教派競ひ起り、各々自家の宗派を以つて正しいとする樣になつたが、基督教そのものゝ中心生命には段々遠ざかつて行つた。此の時に當り、ヘブライ書第十一

教的信念に生きよと叫び出したのはトルストイである。トルストイの宗教にはストイツクよりも強い深酷な道徳的絶叫がある。予はトルストイ程強烈な道徳的欲求を拵つて居つた人は近代實に稀だと思つて居る。少くとも文藝の上に、これ程強烈な生と道徳との問題を叫び出でたものは近代文學者中、予の知る處では「カラマゾフの兄弟」に現はされたドストエフスキー以外にあまりない樣に思はれる。

□トルストイに從へば、眞の基督教は、一切の教義を棄て、教會を打壞して仕舞つて、只一人此の人類社會の中に立ち、無限の一角に佇んで自分の胸を襲ふて來る無限責任の感激、止むに止まれぬ自我のとるべき途の自覺內に其の要素が存じて居るものだとの事だ。即ち無限世界に對し、神に對して「俺は何うしても斯うして行かなければ止まれない」といふ尊嚴な感激の中に眞宗教の要素がある。人間は其の感動に從つて行動すれば、必ず道徳的である。必ず人類や一切生物に對して慈愛同情の感が起る。其結果必ず人類平等の觀念が湧いて來る。只其丈が宗教の眞要素で、其の最も徹底した一言は即ち基督の云つた「神の意志を行ふこれ吾が業なり」だとトルストイは云ふのである。

予は吾が讀んだ神學や基督傳の中で、トルストイの宗教論とドストエフスキーのカラマゾフの兄弟程、強い宗教的感激を以つて讀んだものはない。神學や聖書の講義を聞いて居た頃には居眠りばかりして居たが、

殺し、靈は人を活す」で、彼等に教會や教義の儀文が無く、純な宗教的實感があるからだ。其の宗教的實感といふのは至極單純なもので、三國音書に現はされた、基督の教へた宗教である。

□思ふに、トルストイの信念は近代人の求めつゝあるものではあるまいか。若し宗教なるものが形而上學や有神論や宗教哲學を俟たなければならぬとするならば、人は幾世期經つても決して眞の活ける宗教的實經驗に入ることは出來ない。若し其等の學問に依らなければ宗教が解るもので無いとするならば、勿論人類の平等といふ眞理も成立しない。平等とは人類は誰でも佛たり、神たり得るといふ處に其の基礎があるのだからだ。

トルストイの宗教は、何人も信じ得る基督教である。王侯も田吾作も之だけは信じなければならない。けれ共三位一體や贖罪を信じなければ人では無いと云つたらば、斯る冒瀆な奴こそ人間ではないわけだ。

□斯ういふ風に丸裸體の宗教を求めて來た處には、自ら基督教と佛教とが接觸しやうとして來た。其は爭そはれぬ事實だ、宗派に屬する者が何麼に怒つても爭そはれぬ事だ。

□佛教に於ては詩人カビールは儀文を棄て、虚僞の衣を脫ぎ去つた人であるが、其の詩人の大感化を受けたタゴールは勿論、眞純な實感と合理の上に自己を觀じて、佛教なるものゝ純な信念を體得した。

□「讀經を止めよ、讃歌を止めよ、數珠をつまぐるを止めよ！汝は閉ち込められたる寺の寂しき暗隅にて、何を拜せむとはするぞ？汝の眼を開いて、汝の前に神居まさゞるを知れ！
　彼は農夫が堅き地を耕す處、道普請師が石を割れる處に居給ふ。彼は日に晒され、雨に晒さるゝ者と共にましまし、其の衣は塵埃に蔽はる。汝の法衣を脱ぎ棄てゝ、彼の如くに塵立てる地の上に下り來れ！」……との夕ゴールの詩の一句は、即ちトルストイが教會と其の儀文を打破つたのと同じ事である。神は日や雨に晒されて農夫や道普請師と共に働き給ふ……とは肉に靈感が燃えつく樣な叫びである。

□タゴールは寺を棄てた。數珠を棄てた。讀經を止めた。而して自我の問題を解く單純な眞理の中に、眞の佛教的信念を捉へた。トルストイは「自我の哲理問題」とは云はず、「自我責任の感激」との意を洩した。從つて其の說明の仕方はトルストイの方が單純で、徹底して居る樣だがタゴールは又トルストイの持たなかつた詩を藉いて無限の風光に浴した美はしい世界を見せた。要するに兩者の信念は歸する處相觸れて居る。

□タゴールは斯ういふた。
　凡そ稜々として聳え立つた自我てふ個性は、何物も粉碎するを許さぬ權威を持つて居る。若し此の自我を失つたら、其こそ絕對破產であり、全世界を失つたのである。然し、此の個性を維持せむには、不斷の爭鬪と苦悶とに依らなければならぬ。而して人類が自我其のものゝ眞價を擧ぐるのも、即ち此の苦悶煩痛に依るのだ。自我の價値を一面から見れば即ち犧牲である。然し此の犧牲に依つて自我の得達といふ事が生じて來る。基督が「凡てを棄て、十字架を負ふて(即ち死んで)吾に從へ」と云つたのは、佛教の涅槃て、無私無慾の極地に達した眞理、即ち最大犧牲に依つて眞實の生命を得ることを教へたのである。
　何故自我が其程尊いかといふに、自我の深底に達磨が働いて居るからである。達磨は吾々の自我の中に働いて居る最後の目的である。處がその目的たるや絕對孤立の態度をとつたら、決して其の眞の面目を表はす事が出來ない。で、其の眞の働きをするには、一粒の種子が、外皮を突き破つて出て來る樣に、自我てふ孤立の外皮を突き破つて外部に表現されなくてはならぬ。自我は外部に再現して、其處に眞の得達がある。個性の發揮、吾がとる業に對する最大忠實の努力、道德的苦痛、無我無私獻身犧牲、愛は即ち自我を外部に再現するの途である。これに依つて個人は宇宙と合體し、無限を意識する事が出來る。無限は無限なるが故に享有する事が出來ないと云つたら詐だ。勿論絕對に享有する事は出來ない。けれ共籠の鳥が無限の虛空に飛び出でゝ、飛べ共〳〵無限なれど、空が限りなければ限りない程喜ばしい樣に、無限意識の中に飛び出てた人の心は自由と喜びとがあるものだ。人間が斯うして孤立して居る自我の外壁を脫して無限に向つて飛翔する眞純な喜びの中に、眞の美はあるものだ。美を離れて宗教は無く、眞理はない。鳥が鳴く、花が咲く、光が輝く、雨が降る、木が茂る……其等も凡て無限生の流れ流れ行く喜ばしい現はれである。即ち宇宙美の表現である――といふのはタゴール

の思想である。そして只其丈がタゴールの根本信念である。

□タゴールにとつても、トルストイにとつても、自我放棄、即ち克己努力、犠牲獻身の愛を以つて宗教的要求を充すべきものとし、トルストイは宗教の徹底したる目的は、自己の裏に意識され、自己の良心を通じて呼び來る神の意志に從ふ事だとし、タゴールは我の深底に秘める達摩を發揮する事だとした。共に其の宗教の根底は單純である。説明する文字こそ異なれ、其の實相は同一である。吾等は教義と寺や教會に捉はれた信者になつて、虚僞の上に宗教を求めてはならない。贖罪や聖餐や三位一體を以つて基督教の根本義とする信者は、不合理と惰慢と不德の上に宗教の根本義を立つるのである。如何となれば三位一體には父が子を殺したといふ不德の神性があり、贖罪は人間が罪を犯して其の罪を神の責にひつかけて平氣で濟す教理で、しかも神がアダムの罪故に人類に罪したとの原罪論と矛盾して居る不合理惰慢の要素を含んで居るからである。斯る宗教を眞に信ずれば信ずる程、人間の心は不自然となり、不眞實となり、其の生活は徹底しない。吾等は神がバアルの塔を壞ち給ひし如く、是等の宗教を壞ち給ふ事を信じて居る。而して今や其の黎明期に達した。トルストイやタゴールは其の大なる豫言者である。若い人々の眞實な心には、此の世界大の叫びが今に今に荒ましい勢で叫び出でやうとして居るのだ。これからの時代は東西統一の新時代である。或は急轉直下の勢で、全世界の國境が壞たれて、只一つの大なる國が、一大寺院の中に這入つて行くかも知れない。ドストエフスキーは必ず其時代が來ねばならぬ。そして其の第一人者は東方から出て來ると豫言した。

□タゴール研究の爲、英書及び邦譯、其の他の參考書を掲ぐ。

1. Gitanjali, (song offering)
2. Sadhana. (the realigation of life)
3. The Gardener. (Lyrics)
4. The Crescent moon. (Poems of childhood)
5. Chitra (a play)
6. The Lost office. (a qlay)
7. The king of the dark chamber. (a play)

以上はタゴールの自著で、其の内(3)(4)(5)を除いては邦語全譯あり、其の内増野氏の譯書ギタンヂャリは、甚だしき誤譯と直譯と不敬虔な文句とに滿されて見るに堪えず。例へば、歌へとの神の命を受けて、「莊嚴の想ひに胸は張り裂けむとす」とすべきを「私の心は矜持と仲違ひするのである」との不作法な誤譯を平氣で並べたり「神よ暫し氣儘にみ側に座さしめ給へ」とすべき處を「私は一瞬の恣縱にむけて尋ねる。お前の傍に座つてもいいか」と山出しの女中よりも不敬な言葉で、神に向つて云ふ敬虔愛慕の情を表はして居る。氏は予を僞人也緣日商人也と云つたが、彼こそ實に狡猾なる山師だと云つてよい。

右英書の中未譯の部は某々の手で近々出版される筈。猶參考の爲め譯書解釋等を擧ぐれば、

一、タゴールの哲學と藝術（吉田絃二郎氏著）

一、來獻觀(靜觀と思潮内の一端)(岡田哲藏氏著)
一、タゴールの生の實現(中澤臨川氏著)
一、タゴールの哲學(齋木仙醉)
一、磯部氏譯「暗室の王」……新潮社發行
一、小林氏譯「郵便局」……東文堂發行
一、三浦氏譯生の實現……玄黄社發行
一、同伽陀の捧物……東文堂發行
猶英書にて間接氏を研究すべきは、
一、Devendrnath Tagole の自傳(タゴールの嚴君)
一、Poems of Kabir (タゴールに感化を與へた詩集にしてタゴール自らの譯)

——終——

▽タゴールの道德觀

三井甲之

思想は之を具現せむとする時、宗教的信念も哲學的思索も藝術的表現も道德問題に觸るゝのである。それ故に道德問題に觸るゝことはその思想に生命のあることを證するのである。近世の思想家は實生活的興味に觸るゝ點に於てひとしく道德論者である。釋尊の生命も亦神を說くよりも法を說いたところに示さるゝのである。タゴールは思想の源泉を古代の神話哲學宗教に探つた、しかし一般に古代の宇宙人生觀をそのまゝ復活せしむることは不可能である、それ故にタゴールに於ても常に彼の時代と彼の人格との光に於て過去を眺めて居るのである。しかして彼の思想は印度現代の生活と離して考へ得られぬところにこそ生命を有するのであつて、之に反して古聖典の引用を過重せむとする傾向の示さるゝところには宗教と道德との史的開展の事實に隨順せずして完成を過去に求めむとする知的推論の餘裕を認むるのである。彼が神を說き愛を說き宗教を神と人との純主觀的關係たらしめむとするが如く經驗を遠かつて思想を開展せしむるのは心理的要求を無視せむとするものである。宗教は全く內的のものではあり得ぬ。それ故にそれは教會又は國家との關係に具現せられなくとも少くも神話的人生觀と結合して神秘的色彩を帶ぶるに至るのである。かくして宗教は道德的規範を示すか神秘主義的迷信に陷るのである。タゴールの宗教が此の神秘主義的傾向を示すのは彼が國家の代りに世界を思想の對象とせねばならぬとともに、被征服者として現實に失望するものが却つて無限の理想を追求するに至るべき自然の要求によつてゞある。しかし民族の世界的活動は先づ精神的範圍に於て世界的地位を占め、後に實際的活動に入るのが史的開展法則の示す所であるからして、彼が思想家として現はれたのは順序としてはよいが、彼の思想には內外相續呼應して民族の將來の運命を指導する內的必然性を有すべき眞實が認められようか。

國家と民族との衰亡は特權階級の貪欲專橫と俗衆の無智迷信とによる

のである。彼の思想の系統と傾向とが此の社會的階級と俗衆的迷信の打破に向つて居るのは認めらるゝけれども、彼には現實の人格それ自身に潜むべき矛盾と、出世間的信念と世間的行爲との衝突とを苦悶苦鬪に具現して勇猛精進せむとする狂熱を認むることは出來ぬのである。内外の圓融は靜かに流れゆく冥想的情趣によつて畫されむとして居る。彼が原始基督敎的の謙遜道德を說くのも同じき理由からである。しかし彼が歐洲文明を批評し貪欲の利己心を罵るところは被征服者の哀訴より志願の決心を示さむとして居る。

しかし彼はやがて眼を現實から轉じて自然、愛、無我を冥想靜觀に求めむとするのである。淺薄なる幸福道德に面接する時内心の歡喜に無極の生命と無價の財寶とを求めむとするのは正しき道である。しかし此の内的生命は常に外に表現せられむと用意して居る。彼の場合に於てそれが敎育事業に如何に具現されて居るかは知らぬが、それが藝術的表現に於ては冥想と作爲との餘裕を示して居る。輸入の彼の詩集を誦することは高尙の趣味の一種とならう、しかし彼の詩はイエーツ、西行等の詩の如く畢竟隱遁的逸民の風流いすさびである。吾等は悲しき現實に面接せねばならぬ、回避的超越を思うてはならぬ。

藝術は神々及び英雄時代の文化のしるしであつた。現代文化のしるしは科學である。自然科學はすでに革新せられて今日に至つて居るけれども、精神科學は今改新の端緒につかうとして居る。精神科學は自然科學的研究を攝取して新しき歩みを始むべきである。しかし自然科學的研究法と理法とを以て全人生に臨まむとする時誤つた人生觀が生の開發を障礙するに至るべきは憂ふべきであるが、しかし自然科學的研究應用そのものに反抗して内心の冥想に回避せむとするものも亦自然科學的人生觀を任意の冥想的遊戯によつて構成せむとするものであつて、一種の詩的懈慢界の人々である。自然科學的研究應用とそれによつて複雜化せられたる外的文化の一切を回避せずして之を攝取する勇猛精進と此の享樂的懈慢とは分たねばならぬ。マアテルリンク、ウインデルバンド、リツカート、オイケン等は最近日本に紹介せられてその懈慢哲學の惡影響を及ぼした風流人の仲間である。トルストイ、ニイチエ、イブセン、ベルグソン等にも此の弱者の回避思想の痕跡を認め得るのである。タゴールも無解決の悲劇に面接し自然の不可抗力に隨順するよりも、愛、無我、自然それらの名義の幻影泡沫を冥想裡に按排せむとして居る。此の餘裕は彼をして作爲の痕跡に冗漫を感ぜしむる譬喩的表現を工夫せしめて居る此の如き說法に於ては吾等は之をタゴールに求めるよりも傳來せられて久しき佛敎經典に更に適切なるものを見出し得るのである。

日本に於ては印度より支那を經て開展の脈絡を相續し之を民族的經驗に同化せしめ天才的直觀に純化せしめた日本佛敎が今復活し開展を相續せむとして居る。それ故にタゴールを歡迎せむとする人々の社會的地位建築物の規模それらは日本の内なる生命ではない、オイケンの代りにタゴールを迎へて延期せられたる祭禮を行はむとする閑人階級の生活形式である。彼等はタゴールに日本の詩を示さうとして古今集を示さむとす

る人々である。それ故にそれらとは關係なくタゴールの日本訪問が歐洲動亂と内的關聯を有するならば、彼の將來はその道德觀の進展と宗教的信念の開發とを期待せしめ得よう。その時彼が歐洲より受くべきはノーベル賞金とは性質の異つたものであらう。吾等はタゴールより學ばむとするよりも、彼が我等から學ぶべきを思ふのである。吾等は亡國的偉大を示さうとするのではない、ともに生の悲痛と世界現勢の危急とを味ひ又理解せむとするのである。彼を迎へるのに印度の高標子を以てせむとするは、日本に同情を有するといふ印度思想家に對する禮ではない。彼より新奇を期待せず、神秘と空想とを求めずして、眞摯なる道德觀を求めむとするのは此の故である。彼の道德觀は現印度に於て卓絶せるものであらうが、現世界の活舞臺に於ては寧ろその藝術的表現の技巧に壓せられ、新奇の品として取引せられむとしつゝある。しかしまことの道德觀は斯くの如く譬喩的說法の外形に一切を示すべきものではない。それは背景に民族的生活の苦闘を潜めて内的信念に統一せられむとする道德的秩序の戰、無限の不可思議を藝術的直觀に實現せむとする官覺的表現であり無限の創神力を有する藝術であらねばならぬ。それは決して愛玩せらるべき享樂の對象ではない。古代印度の思想に生命のあるのは民族遷移と先住民族征服との活動を背景とするからである。古代神話の衆神の讃歌を力强く復活展開せしめ、學術の發達と責務の遂行とを說いて轉輪王の理想の實現に具體的根據を置く道德觀をわれらに期待せむとするのである。

▽タゴールとウパニシャット

文學博士　井上哲次郎

タゴールの詩については大分文學者側からして批評もされて居るやうであるからして其事は暫らく措いて、タゴールの思想の淵源は印度の最古の哲學ウパニシャットにあるのであるからして、我々のウパニシャットに對する感想を述べて、タゴール研究者の參考に供しようと思ふ。

一體古代の哲學の最も發達した所は、西は希臘、東は印度であるが、印度の哲學と云ふものはいろ／＼な學派となつて發達を遂げたので、稍々希臘の哲學といはゞ對抗するやうな氣勢が見えて居る。而かも佛教の如き大宗教が其中から發生して來たと云ふ事は却つて希臘に見るべからざる事である。佛教は宗教ではあるけれども又一方面は哲學である。そして此等の印度の哲學派はいろ／＼になつては居るけれども随分ウパニシャットの影響を受けたものが多いやうに思はるゝ。佛教の如きも其大乘佛教に至ては確かにウパニシャットの大思想を受けて却て原始佛教よりも一層の發展を遂げたやうな形勢が見える。兎に角ウパニシャットは印度哲學の中では最古のもので、抑々印度に於ける哲學の率先で又源頭である。そして其哲學の起つたのは固よりヴイタ教の解釋の結果起つて來たのであるが、時代はしかと極めることは出來ないけれども、まア略

ウパニシャットも沢山あつて、何十とあるウパニシャットであるからして、其等が悉く一時に出來たものではなからう。時代に於て多少前後する所があつたであらうが何分印度は歴史的觀念の乏しい所で精確に時代を確定することは到底不可能である。只いろ／＼な點から推して行つて略ぼ見當を其邊に附ける位のことである。で、ウパニシャットを我々が初め讀んだ時にこう云ふ感じがした。何だか之は神話見たいなもので何だか變である、隨分可笑しなものであると思うて、稍々輕侮の念を生ぜんとしたのである。併しながら研究の必要があるから尚いろ／＼注意して讀んで見たのである。さうした所が初めとは違つて次第に面白味が生じて來た。そして遂にウパニシャットと云ふものは非常に面白いものである。どうも之は世界の文學の中でもなか／＼稀な深遠なる思想を含めてある奇書であると考ふるに至つた。何分ウパニシャットは普通の哲學書のやうな具合に定義をしたり分類をしたり、いろ／＼さう云ふ手段を設けて組織的に哲學を叙述したものではない。多くは問答體になつて居つて、稍々神話めいた處が見える。それで一寸見ると普通の神話と紛ふやうであるが、然し只の神話ではなくしてなか／＼偉大なる哲理が其中に含まれて居る。まア其哲理の歸着する所は無論一元論である。そして其一元は梵天である。梵天であるけれども其梵天と云ふものは人格化して見た時には一の具體的のものと想像せらるゝけれども哲理の方から云へばさうではない。矢張り世界の實在である。そしてそれを精神的に形をなしたものである。それをいろ／＼に詩のやうに、ダイアローグのやうに、神話のやうに敍述してあるものだからして初め妙な感じを起したのも無理もないが、併し其中に含蓄されて居る哲理に觸れて來れば、誰でもかゝる古代に於てかゝる深遠にして偉大なる思想のあつた事には驚嘆せざるを得ないのである。そして其ウパニシャットと云ふのはいろ／＼あるが、其中に比較的非常に面白いのと又それ程面白くないのとある。詰り優劣を認めざるを得ないのである。哲學上最も面白いと云ふのはチャンド、ギア、ウパニシャットであるとか、アイタリア、アーラエカ、ウパニシャットであるとか、ムンダカ、ウパニシャットであるとか、プラスナ、ウパニシャットであるとか、ブリハト、アーラニカ、ウパニシャットであるとか、タイチリヤカ、ウパニシャットであるとか云ふのである。一體それを一々區別してお話すべきであるけれども今は其暇はないからして全體に含まれて居る哲理について少し話して見ようと思ふが、其前にウパニシャットの飜譯の事を一寸云つて置くのも無駄でなからう。ウパニシャットは何十とあるけれども嘗て支那譯の佛書の中に飜譯されて這入つて來たやうなことはない。あれ程の飜譯の中には外道の哲學書もいくらか這入つて居る。金七十論だの、十句義論だのといふやうなのは何れも外道の哲理の書であるが、此等は一切經の中に這入つて居る。併しながらウパニシャットは一つも這入つて居らぬ。まアウパニシャットは矢張り秘密の書としてなか／＼得ることも困難であつたらう

し、又佛教の方からはこれを餘り重要と見なかつたといふのも理由であらう。が、これは西洋には比較的に早く傳はつたのである。佛人のアンチル、デ、ペロンといふ人がウパニシャトの波斯譯を更に羅甸に重譯してこれをウプネカットと名付けた其ウプネカットといふのは即ちウパニシャットの間違であるが、さういふ題で西洋に廣がつたのである。このウプネカットは今でも折々古本屋から出て來る。それで此ウプネカットを最も愛讀した哲學者はショーペンハウエルである。ショーペンハウエルは毎晩寢がけにウプネカットの何行かを讀んで寢たのである。他人ならばバイブルを讀むやうな具合に、ショーペンハウエルは此ウプネカットを讀んだといふことである。兎に角ウプネカットはショーペンハウエルの愛讀書であつた、ショーペンハウエルに大いに印度思想が這入つて行つたといふ一つの源泉はウプネカットであつた。其後マックスミューラーは sacred books of the East を刊行するに至つてウパニシャット中の重要なものを飜譯して其中に加へたのである。が、又其中獨逸の有名なる梵語學者ドイッセンが悉く現存して居るウパニシャットを飜譯してゼックスチッヒ、ウパニシャット譯名「六十ウパニシャット」を出版したのである。斯様にして學者はウパニシャットを研究する便宜を得ることゝなつたのである。そこでウパニシャットの飜譯に就いては其位にしてウパニシャットの哲理を少し話して見よう。ウパニシャットの哲理は大體は先に云つた通りに偉大なる唯心論であつて、其實在を梵天として居る。梵天は一大精神である。ところが此梵天と各個人といふものは關係がある。世界の一切のものは悉く此梵天の中にある。であるが又梵天は各個人の中にある。梵天を內在的に見て居るのである。只梵天は各個人の中にあるのみならず各個人の本體實質は其梵天に外ならぬものである。自分自身の本體をよく知れば、即ち己れを知ることが出來れば己れ自身が即ち梵天なることが解る。然し普通の者はそれを知らずに居る。知らずに居るといふのは即ち迷から來て居る。迷ふて居るから解らぬのである。そこで眞智識を得て其迷夢を拂つて了へば、自分自身が即ち實質本體に於て梵天であることが解る。それが解るのは悟である。それでウパニシャットの中に二つの名言がある。約りウパニシャットの哲理を了解するに適切なる格言が二つある。一つは aham brahma asmi といふので、他の一つは tat tvam asi といふのである。aham brahma asmi は『我は梵天である』といふことで、tat tvam asi の tat は英語の that であつて、即ち「それは」と云つて梵天を指して『それ梵天は即ち汝である』といふことである。此考を一層組織的に説明して哲學を建設したのはヴーダンターの哲學である。これはバーダラヤーナーが建設したのである。けれどもそれは矢張り後に大乘佛教の中に多大に這入つて來た。而して先日も弘法大師開祖一千一百年の紀念講演會の折も述べたが、密教にも這入つて居る。密教には梵天が大日となつて居る。大日は我である。又我々は大日の中にあると內在的に見て居る。矢張梵天の考が只名を變へて這入つて來たものと見て差支へない。それで梵天なるものは先づ第一實在である。世界の實在であると同じく我々の

つて居る。

太陽は彼處に輝くにあらず。月も星も雲も輝くにあらず。此日は尙之に劣る。若し梵天にして輝く時は如何なるものも之に從つて輝く。其光明によつて一切のものは光明を得る。

斯う言つて居る。シャンカラがこの意味を解釋して、

凡て知覺し得らるゝものは只梵天の光明によつてのみ知覺し得らる。日月等も其中に輝くといふべし。梵天は自然的にして他の光明を待つて知覺するところにあらず。梵天は一切他のものを表顯す。然れども他のものによつて表現さるゝものにあらざる也。

斯ういふ具合にウパニシャットでは宇宙に原本的の光明ありとして、而してそれは梵天であるとしてある。それからして梵天を精氣ともして居る。又梵天を原因として居る。それから梵天を不可知的として居る。彼のスペンサーが世界の實在を不可知的として說いたが、これは近頃のことである。ウパニシャットは已に三千年も昔に世界の實在を不可知的として說いて居る。それから梵天を全知として居る。それから梵天を常住不滅のものとして居る。それからして梵天を住居なりとして居る。といふのは天地萬物皆梵天の中に住んで居るものなりといふ具合に說いたのである。ムンダカ、ウパニシャットに斯ういふことがある。

彼の中に天も地も空も織成(おりな)さる。心意も亦一切の覺能と共に然り。

然し茲に樂といふのは一切のものゝ依つてなずる處といふ義である。

又梵天を妙樂(ウオルテ)として居る。梵天は最上の愉快としてある。後に佛敎に至つて極樂(スクハベテイ)といふことをいひ出して來た。此極樂は原始佛敎にはないことである。これは恐らくウパニシャットの妙樂の考が一變してこゝに具體化して極樂となつたのである。尤も佛敎にあつても哲理の方面では極樂は矢張りウパニシャットの妙樂と見て差支へない。けれども方便として世俗方面を說く時には餘程具體的に特別の世界があるやうに說いたのである。又梵天を呼吸と見て居る。それはウパニシャット中各所に散見して居る。チャドキャウパニシャットに『然らば何れが神なりや』の問に答へて『呼吸なり』とある。呼吸の梵天なることはカラシータキー、ウパニシャットに委しく出て居る。

予は呼吸なり。予を有意識的自我として不朽として考案せよ。生命は呼吸なり。呼吸は生命なり。不朽は呼吸なり。呼吸は不朽なり。呼吸が此身體中に存する間は生命は確に存するなり。呼吸に依つて彼は不朽の他世界に得る智識によつて眞の概念を得る。予を生命及び不朽として考察するものは此世界に於て不朽不滅を得る。

さういふ風に說いて來たのでなか〳〵ウパニシャットには面白い事が見える。且又彼の色々な哲學派の主張の淵源が多くウパニシャットの中にあらはれて居る。譬へば地水火風空の五大の一つを以て世界の原理と

して主張して來た哲學派がある。即ち地を以て世界の原理としたのは地論師で、水を以て世界の原理としたのは服水論師で、火を以て世界の原理としたのは火論師で、風を以て世界の原理としたのは口力論師で、空即ち精神を以て世界の原理としたのは空論師といふやうな哲學派があつたやうであるが、それ等は皆ウパニシャットに淵源して居る。而してそれ等は希臘の哲學と餘程よく似て居る。さういふ事を考へるとウパニシャットは哲學としてなか〳〵趣味があり且つ又なか〳〵面白いものである。之についてお話すればお話すべきことは幾らでもあるが今は其中の或點を逃ぶるに止めて置くことにしよう。終りに臨んで、私はかゝる深遠偉大なるウパニシャットの如きものゝ邦語譯の出現せんことを希望し、又タゴールを研究せんとするものも、出來るならば彼の思想の本源をなすウパニシャットまでも遡つてやつて貰ひたいものと思ふ。まアこんなお話で御免を蒙りませう。

△タゴールの案内者として

木村龍寛

私が印度のカルカタに居ッた時分に、丁度今回の歐洲戰爭が勃發した。之を觀た印度人も騷いたが、其時私の頭に起つた歐洲戰爭觀といふものは、政治上又は國際上の方面で、國と國との關係が今後何ら變化するかといふ問題ではなく、世界人類と世界文明との上に偉大なる或變化が來るであらうといふことであつた。

惟ふに世の中は二つの文明から成立つて居る。一は物質的文明で他は精神的文明である。而して物質的文明の建設は從來歐洲人の天より與へられたる使命であり責任であつて、東洋人に與へられたる使命は精神的文明の建設であつたかのやうである。假令何事を爲すにしても又何事を考へるにしても、組織といふ組織は必ず內面が無ければ成立たない。天が理想的に作るにしても必ず精神と物質との世界を必要とする。即ち天は世界の東西兩國に、一方は精神的文明の建設、他方は物質的文明の建設と、此二つの使命をそれ〳〵西洋と東洋とに向つて與へたのではなからうか。太古の印度文明が洋の東西に光を放つた時代は精神的文明の發達した時代である。然しながら內部のみいくら發達しても外部が之に副はねば完全なる文明と言ふことが出來ない。そこで精神的文明の發達と同時に物質的文明の發達を必要とし、玆に太古の東洋の精神文明に一段落を附けて、西洋の物質的文明を盛ならしめるに至つたのである。而して亞いで來るところのものは此二つの精神文明と物質文明との調和統一せらるべき時代である。此兩者の調和發達こそは實に天の目的であり、自然の目的であり、又人生の目的であるのである。

十六世紀よりかけて二十世紀に至るまでの所謂西洋文明の發達は、最早や其頂上に達し、今や其局を結ぶべき時代は來たのである。であるから今度の歐洲戰爭は單に國と國との爭では無く、此戰爭を好機として新

たに太古印度の精神的文明を蘇生して、西洋の物質的文明に對し、並に兩者の調和發達を圖らんとする現象とも見ることが出來るであらうと思ふ。

近來西洋に於ても、西洋人が印度の哲學宗教を研究せんとする要求は甚だ熾烈を加へて居る。殊に獨逸の哲學は次第に印度思想に近づきつゝある。是れ即ち從來西洋に於ける物質文明に慊らずとして、新たなる精神的生活即ち靈の生活を何處かに求めて之を東洋の哲學思想に得たのである。日本に於ても今迄西洋哲學にのみ心醉して居つた者も、それに依つて彼等の精神的渇望を滿すを得ず、偶々新たに起つたところのオイケン又はベルグソンの新精神主義の哲學に依つて僅かに其渇を癒さんとして居つたのである。

然るに時宛も幸なる哉。舊くより我日本と最も關係深き印度の、而も其代表的思想家、代表的哲學者、代表的宗教家とも言ふべき、殊には詩そのものを以て人格とせる偉大なる詩人ラビンドラナート、タゴールの我國に來朝するといふ事は、宛も母の愛に飢えたる小兒の慈母を待つやうなものであつて、我國民の精神生活の上に非常なる感化影響を與ふるであらうと思ふ。私は之に依つて我國の思想界は一變するではなからうかとさへ考へてゐる。恐らくは今後我國民は從來棄てゝ顧みざりし手近の印度に注意するやうになり、其深玄なる哲學思想を研究して精神的文明の建設に力を注ぐに至るであらうと想ふ。此意味に於て、我日本人は歐洲の物質的文明と東洋の精神的文明とを調和する貴い使命を帶びた人種であると言ふことも出來る。

タゴールは今度私と一所に日本に來る筈であつたが、據ろなき事故の爲めに已むを得ず私が先きに來ることになつたのである。タゴールは果して何をしに日本へ來るか。氏は嘗て日本を研究した人では無い。然しながら氏は常に日本と印度とは舊くから其關係極めて深く、其間に何となく密接な關係が結ばれてあるやうに考へて居つた。其密接な關係といふのが何處に伏在して居るか、それを研究したいといふのが氏の切なる願である。日露戰爭後光明赫々として、其名聲を世界に馳せた新邁國たる日本を氏は深い同情と理解とを以て圓滿に解釋し圓滿に之を歐洲に紹介するであらう。而して又氏の人格と氏の思想と氏の偉大なる筆とに依つて之を印度人の頭に傳へ知らしめるであらう。決して氏は歐州化せられたる新日本を研究せんとするのではない。古く且つ淨き日本の武士的生活を氏の深い趣味を以て觀んと欲するのである。タゴールは必ずや何かの土産を我日本に置いて行くであらうと私は信ずる。

タゴールは如何なる人であるか、といふに、タゴールは東印度のベンガル州、カルカッタの人である。遠い〳〵祖先の事は知らないが、タゴールの家は印度が英國の支配下に屬する以前から、カルカタに於ける富豪であつて、高等種族に屬する階級の家に生れたのである。彼れの父はデベンドラナート、タゴールというて、丁度十八世紀の終頃、印度の宗教界が非常に紊れて居つた時代の事である。英國からは多くの基督教宣教師が這つて來て盛に西洋思想を鼓吹し、印度固有の宗教家は悉く迷信に耽り、風俗亦淫猥を極めて見る影も無い有樣であつた。時に大革命家が

現れた。それは今日の所謂プランモシヤマジ（新しい印度敎）の開祖なるラージヤランモホンライ其人である。彼れは印度のあらゆる宗敎は勿論のこと基督敎及回々敎までも究めた結果、ウパニシヤット哲學を基礎として新宗敎を創造し、迷信的舊宗敎を排して一代の風雲を捲起したのである。然れども古き迷信に眠つて居る當時の印度人はこの新人をば背敎者として迫害したので、大革命家であり未來の英雄であつたこのラージヤランモホンライは遂に英國に走つて空しく大志を抱いたまゝ死んで了つた。その時このタゴールの父デベンドラナートは深くこの新宗敎に歸依して、親しく門弟となつて、其敎を聽き、又自ら革命の必要を感じて、開祖ラージヤランモホンライの死後、多くの財産を投じ、師の志を繼いで同志と共に一の宗敎的團隊を作るに至つた。このデベンドラナート、タゴールはこの宗敎團隊を作つた程あつて、印度古代からの諸宗敎諸哲學は勿論の事、特に深くウパニシヤット哲學に通じて居つた。而して彼れの家族は悉く此宗敎の熱心な信者であつて、一家擧つて其の研究と宣傳とに努めた。この中に育ち、この志を繼いだのが、實に今回來朝すべきラビンドラナート、タゴール其人である。故に彼れは幼時より已に父の哲學思想を受け容れ、其の血管には父の熱烈なる宗敎改革の血潮が流れて居つたのである。

氏の幼年時代の學問修養は印度に於てよりも寧ろ英國に於てであつて、彼はオックスフォード大學に學び、其高等中學を卒業したのである。元來印度人特に東方印度人は詩、文學、思想發達して居るが特に、タゴールは幼より宗敎的修養に入つた爲めに、詩に對して趣味を持ち、英國から歸つて後は、梵語梵學を研究し、古代の詩を味ひ、ラマヤナ及びマハバロトの如き歷史的詩をも熱心に研究して、遂に自らの人格が詩の精神と同化する境遇にまで達した。彼は自ら詩を味ひ、味はつた詩は更に彼自身を味ひ、詩の力と自分の力と相寄り相援けて新らしい力を産み出したのである。これ實に今日世界中に其名聲を肆にするタゴールの詩的思想の根本である。氏の詩の如何に深いかといふことは、氏が來朝すると共に、私が飜譯する詩に依つて知つて貰ひたいが、今簡單にこれをいふてみれば、總て氏の詩は其の根底をば世界に於て最も深玄なるウパニシヤット哲學の上に置き、ウパニシヤット哲學を以て自然を見、ウパニシヤット哲學を以て生きて働く人生社會を味ひ、更にウパニシヤット哲學を根抵として人情風俗、習慣を解釋し、斯くの如き自然、斯くの如き社會斯くの如き人生をば、自らの神なほ恍惚とすべき美しき詩に歌ひ込んだのが、彼の詩の特長である。元來詩人といふ者は凡て寂しいところや悲惨な境遇に同情する者であるが、殊にタゴールは現今の印度が太古の文明を有ち古代の美術、古代の宗敎等に豐富で有りながら、而かも十分これを發揮することが出來ないといふ悲惨なる境遇に居ることを自らの詩を以て歌ひ、之れを詩に表現して、なほ其裏面に於て悲惨なる印度の國に永久に存在すべき平和の際を含ませて居るといふことは實にタゴールの詩の深玄優美なる點であると思ふ。

タゴールは詩人とはいへ、多くの詩人の如く決して狂的ではない。彼

談じ、自分の從屬に語るといふやうに其の日常生活は極めて嚴格である。

この點から觀ると我が日本の武士的氣風がある。のみならず氏は理想的教育を行はんとし、理想的教育に依つて太古の印度文明を復活せんとした。乃ち彼はカルカッタを距る約百哩のボルトマンの近傍に地を求めて別宅を建てゝ茲に俗界を離れた小高い丘の上に、彼れは宗教派文學者等を集めて或は詩を歌ひ或は哲理を談じて居るのである。斯く氏は宗教及び哲學の方面に進歩して居る人であると同時に、藝術方面にも大に發達して居る。音樂も大に彼の好むところであつて、彼は自ら作つた詩を朝な夕なに大聲に唄うて居る。氏は印度人ではあるがエリアン人種であるから、其骨格風采は總て一見恍惚とするやうな魅力を有つて居る。眼は極めて大きく、色はあくまで白く、背は甚だ高くして而かも一見女らしい優しさがある。その起居振舞又は話振り等の態度は總て女性的であるが、一度熱烈燃えるやうた精神の叫びを聞く時は恰も獅子の吼えるが如く又た象の怒り狂へるが如く猛然を衒くばがりである。氏は又詩人であると共に散文、劇、評論等にも巧みである。時には自ら劇場に望んで、俳優として演技することもある。其悪型に扮することは氏の最も十八番とするところである。然し茲に一言すべきことは、氏は未だ一般の印度人が彼自らの詩化せるを知らないのを憤慨して居る。勿論氏は詩の神様とも唄はれ、東印度の青年に非常なる尊敬と渇仰を受けて夜の七時から始まるるのである。然しながら氏は其の同胞からは左程までの尊敬を受けて居らない。一例を擧げると、先年世界的文學者として名聲あるノーベル賞金を貰つた時、カルカッタの青年及友人門下生其他諸の文學會等が集つて歡迎會を催し、わざわざ特別列車を發して、氏の住んで居るボルデマンの近くの別宅に逍つて來たことがある、其時氏は沕くが如きベンガル人の歡声と讃歎の聲を聞いた後、憤然として立つて曰く『諸君は今初めて私の詩の價値を知つたのか。私は同人種でありながら今日まで私の詩の價値を知らない者から、歡迎を受け、讃歎の聲を聞くことを決して喜びとしない。斯かる會は私の寧ろ不愉快とするところである』と一喝の下に多數の人を罪つて了つた。誠に茲に詩人の詩人たる特性、哲人の哲人たる權威があるではないか。

氏は常に多くの會合を避けて、何も知らない最も無智な社會の人々、田舍の老爺老媼及び無邪氣なる少年等を相手にして談ることを樂んで居る。であるから此度日本に來るに就いても餘りお祭的に花々しい歡迎を受けるよりも、靜な田舍にでも間借りをして其の愚婦愚夫及び少年と親しく交るのを樂しみにして居ると、私の來る時分に寄越した委任狀の中にも其の意味が含まれてゐる。

一 倘タゴールの哲學に就いては述べたことも澤山あるが、今は忙しくて其暇が無い。左に委任狀を掲げて參考としやう。

Joranko
Calcutta
Feb. 18, 1915

Dear Mr Kimura

Instead of starting for Japan immediatly my intention is to wait a few months longer, meanwhile sending you there to make necessary preparatfons. I want to know Japan in the outward manifestation of its modern life and in the Spirit of its traditional past. I also want to follow the traces of ancient India in your civilization and have soms idea of your literature if possibe, I doubt not that you will be able to help me. I must ask you to protect me, while I am there, from pressure of invitations and receptions and formal meetings. I want to live very simply and quietly with as little as if possible.

Very sincery yours
Rabindranath Tagore.



新最刊

支那國際法論 第一卷

外國裁判權と外國行政地域

菊判角背革
全一冊
紙數五百餘頁
正價金參圓三十錢
郵税金十八錢

▼支那研究者は三讀せよ！

本書は主として支那に於ける所謂領事裁判制度及居留地制度の法律關係を尋究せるものなり、但だ著者は從來の用語たる領事裁判權は名其實に副はずとなして別に之を外國裁判權と稱し又居留地の外鐵道附屬地公使館區域等之と同樣の性質を有する地域少なからずとし之を汎稱して外國行政地域と謂へり、抑も是等の制度は支那のみに特有するものに非ずと雖も其最も顯著なる事例は只支那にのみ之を見るを得べく其法律關係亦頗る錯雜せるものあり、之に關する學術的研究の公にせられたるもの歐米諸國に於ても亦甚だ多しとせず殊に居留地制度の法律的研究に至りては見るに足るべきもの極めて稀なり、著者は多年支那に滯在し自ら各居留地其他の地域を踏査し其實地に就て觀察し得たるもの頗る多く且密なり今其蒐集し得たる各種の資料に依り極めて精細に諸般の法律關係を研究して本書を編成せらる、書中豐富なる事實上の資材は著者獨創の學術上の意見と相俟つて眞に光彩陸離、支那研究者の必ずや案頭に備へて精讀刻究を要すべき近來の名著也。

上海東亞同文書院教授 文學士 大村欣一氏著

支那政治地理誌

菊判布裝（上卷）壹冊
正價金貳圓八十錢
郵税金貳拾四錢

東京日本橋區通町
大阪東區博勞町

丸善株式會社

京都三條通麩屋町
福岡市博多上西町

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

（中付二の一）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

柳亭種彦名作　歌川國貞名畫（最新刊）（全四冊）第一卷製本出來　定價各冊金七拾錢　送料八錢

繪本 偐紫田舍源氏

裝幀大和綴美本　全頁繪畫入　極彩色木版刷數葉挿入

■春宵紅燈裡に本書を繙かば江戸時代の情緒彷彿たらしむ。

艶麗無比の彩筆を行りて情趣を恣にせる江戸時代掉尾の大傑作柳亭種彦一代の名篇「修紫田舍源氏」は日本文學の精華として世界に誇る名篇たるは何人も良く知る所挿繪の構想は凝者たる種彦の案配に基る歌川國貞一代の名畫は本書に現れたる人物、衣裳、模樣等は遂々旅衣にて似合はしき繪を畫きたるは萬人悉く愛好珍重せる所なり秀麗なる木版刷の彩畫と全頁の繪畫は本書の最大特長にして他の模倣を許さゞる所

本書は全部悉く繪本の原本其儘改描する等の事なく草双紙の極彩色の表紙は同樣に挿入せり今や徳川時代の文學書類も湮散灰滅せんとし、貴重なる浮世繪も求むるを得ず、本書の如きは原本の面影を傳へんと製版までの數越年と多大なる費用と勞力とを吝まず完成せる如きは大正出版界に於ける未曾有の大事業たるを知る可し

■好評如湧

女七人に男一人

高濱虛子作長篇小説

紙數四百三十頁

口繪　平福百穗畫

石版十度刷艶麗無比　裝幀頗る美麗

〜定價金九拾錢□送料八錢〜

發兌元　東京市神田區旅籠町一の卄　■四方堂書店■　振替東京九五五六　電話下谷六九七九

發賣元　東京市京橋區元數寄屋町三　■北隆館書店■　振替東京七一五○　電話新橋一四三九

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

（中付二の二）

新刊

メリメエ傑作集

■厨川白村
■一宮榮誠
共譯

十九世紀後半の文學に驚くべき影響を與へた佛國短篇小説の巨匠メリメエの作は實に一種の藝術品て人を魅する話の興味に至つては天下一品といはれ其作を味はぬ人は近代文學を語る資格がないといはれて居る忠實なる此譯書は我國の文藝に新空氣を與へるてあらう

四六判全一冊
定價 金七拾五錢
郵税 金八錢

廿一版

縮刷 近代文學十講

厨川白村著

■四六判 六五〇頁
■價 金八拾五錢 ■郵税 金八錢

▲最近世界文學の縮圖▼
▲新文藝唯一の入門書▼

近年の快著と呼ばれ熱烈なる歡迎を受けたる本書は今や增補訂正を加へ縮刷せられ美本として出づ

新文藝の大勢に通じ現代の思潮を知らむとする士は本書を精讀せざるべからずとは天下の定評なり

(中付二の三)

東京・京橋・銀座 壹丁目廿二番地
大日本圖書株式會社
郵便振替口座 東京二一九番

泰西文藝思潮の淵源

近代思潮叢書

各冊菊半截二百五十餘頁■定價五十錢郵税六錢

〔三版〕

第三編 **個人主義思潮** 相馬御風氏著

未だ世に知られざりし近代個人主義の第一人者マクス・スチルナーを中心とし、キヤールケガアルド、イプセン、ニイチエ、ジョージ・ムーア等苟しくも近代生活の怖るべき苦悶の底より此の來るべき生活の暗示的豫言を絶叫せる偉大なる先覺者の熱烈なる主義主張は、著者一流の明快なる筆致によりて遺憾なく表現せられたり。

〔四版〕

第四編 **未來派及立體派の藝術** 木村莊八氏著

今や繪畫藝術の研究者にとりて、一時一瞬も閑却すべからざるは未來派及立體派の研究にして其の思想的主義主張は一般文藝愛好家の知らざるべからざる大問題となれり。本書は正にこの兩者を最も完全に滿足せしむべき邦語に唯一のものたるを斷言す。兩派に屬する代表的作品の精巧なる挿繪も亦美術界の珍たり。

〔新刊發賣〕

第六編 **タゴールの聖者の生活** 吉田絃二郎氏著

常に未來より未來へ、無限より無限へ、法悦と光明の旋律に調和の世界を築き行かんと祈求して止まざるベンガルの大詩人、大思想家の哲學及び生活は本書に依りて初めて其の神髓を闡明せらる。緣幻爛蕩の薫りゆかしき東洋の大思想に味倒せんことを欲するものは來れ。

第七編 **ロマン・ロオランの思想と藝術** 內藤濯氏著

吾人はロマン・ロオランを外にして佛蘭西の新文藝を論ずる能はず。彼の思想的努力を外にして彼の國に於ける時代的精神の波動を知るに由なし。彼の思想と藝術とは深奧なる暗黑裡より新らしき曙光を求めつゝ跳ける一の世界の象徵なり。其の純眞なる生命の開展と敬虔なる生活態度とは獨り本書の讀者にのみ享 を許されたる新世界の榮光たらずんば非ず。

重版 復重版

第一編 ニイチエ **超人の哲學** 生田長江氏著

第二編 **惡魔主義の思想と文藝** 岩野泡鳴氏著

東京市牛込區西五軒町卅五

天弦堂書房

振替口座東京貳九五五九番

(中付二の四)

人物評論（五十九）

秋山定輔論



△秋山定輔論

文學博士　三宅雪嶺

帝大卒業生も一萬數千となつては中に何程か變り者がある。秋山定輔氏も其一人である。氏は官吏になつて居れば低くても縣知事、大抵次官位になつて居らうし、二年後の若槻氏が入閣したところから見れば、入閣も强ち六ケ敷くなからう。同年代若しくは其以後に出でゝ、氏より出來の惡いもので勅任官

になつたり、現になつて居るのがザラにあり。實業界には相應の身代を作つたのが色々ある。それに氏は最近の總選擧に打つて出で、東京市で最も多く運動費を遣ひながら、運動員が檢擧され、或は失格するの已むを得まいかとも疑はれる。剰へ同志會の初めの血祭に上げられ、衆議院に立場を失つた形がある。誠に割の惡いことをなし來つたといふべきである。然しそこが尋常と違つて居るところであつて、未だ俄に得失を言ふことは出來ぬ。

氏は帝大出身の割合に波瀾多い生活を送つて來て居る。本郷で二六新聞を興し、無理でも何でも一時東京市で發賣高を第一位に達せしめた。それから代議士となつて出で、河野議長をして彈劾的の奉答文を出し、衆議院解散といふ始末に立ち至らしめた。煙草屋の關係ともいふが可なり大きな騷ぎを起したのである。ところが後新聞も借金で思はしからず、衆議院も偵探とかで罷めねばならなくなつた。病氣や何やで十年引ッ込んで居る中に色々劃策し、桂公に取入り、新政黨を作ることにしたのは實に政友會に大打撃を與へる原を作つたのであるが、今はこれと關係なくなつて居り、關係しようとしても得ないのである。實に成功失敗錯綜して居つて、其成功は他人の容易に眞似し得るところでない。氏は一口に策士と言はれて居り、又策士たるの能を備へて居る。己れの目指す人に說きつける辯才があり、何とかして引入れるに妙を得て居る。大學を出るなり新聞を興さうとし、幾萬圓の金があるとして設備を整へ、社員を集めた。愈々發刊となると金の無いことが解つた。無いは無いが發刊せねばならぬ退引ならぬ場合となり、人もそれならばと金の無いを承知して仕事を始めることになつた。さういふ流儀が何時でもある。一種の才幹ばかりでなく、一種の度胸がある。人を說付ける段に人が尤もと思ふ。才子肌の多辯で上は調子なのと違ひ、赤心を披瀝し、身を以て事に當ると見え、それで人が引入れられ、隨分様々な人が様々なことで說付けられて居る。何といふ收入あるべきでないのに、相應に華美に暮して居るのも、約り人を說付けるに長じてのことである。病氣といふので失錯して洋行し、今度の選擧にも人一倍金を散じたなど融通の才なくして出來ることでない。

才幹もあり、度胸もあり、機會を見て突進するに於て殆ど天禀ともいふべきところがあるが、それにして何時も結果の面白からぬのは廻り合せの不良いところもあるが、信念の足らぬのと、最後の十五分に堪へることが出來ぬのが頗る與つて居る。氏は新聞を興し、代議士になつたりしても、何の爲めかゞ解り惡い。只景氣を好るだけにしか思はれぬことが多い。何を爲さねばならぬかといふ定つたことがない爲め、勢に乘じて大に活躍するものゝ、勢が惡いと見て早くも他の方面に移らうとする。若し自ら深く信ずるところがあり、必ずこれを行はねばならぬとして取懸るならば、早く成功せぬ代りに、今一層成績がよく、仕事がもつと永續したらう。信念の薄いところからも來て居るが、平素事に臨んで奮鬪する割合に、愈々の場合になつて腰が弱い。偵探の疑ひで除名されやうとした時、何處までも踏止まるべきであつた。何も辭するには及ば

い。漠然露探といふやうなことで騒がれ、而して其事實無根を信じた以上、最後の勝利を得ることは堅め信じてかゝるべきである。ところが最後の十五分に腰が碎けて了つたのである。今回同志會から除名されたのも理由甚だ漠然であつて、これも大に爭ふべきであつた。別に了簡あつて穩にして居るのかも知れぬが、其悧巧なところがよくない。愈々除名の理由に就いて爭つたならば、これ亦何等か新生面を拓き得るのである。河野氏なんかが除名に同意するといふのも解らぬ。官吏で懲戒免官は容易ならぬことであつて、政黨員が政黨から除名されるのも容易ならぬことである。昔ならば刀の手前で爭はねばならぬことである。それを其儘泣寢入になつて了ふのは勢の不可なるを觀てのことであつて、悧巧が損である。身を捨てゝこそ浮ぶ瀨はあれ、勢の不可なりと見えるところで蹶然立つて爭ふべきである。氏は鬪士を以て稱せられて居り、屢々惡戰苦鬪したやうであるが、皆勢の可なる時のみであつて、不可なりと見ると餘りに腰が弱い。同志會では大浦子加藤男安達氏等が後藤男の野心を斥け、其の導火線たる秋山氏を除いたのであらうし、それ等の手合はこの邊に就いて眼が肥えて居り、一つ威壓しておけば手出ししなくなると見て取つたのである。後藤男も順境に際して止め度ない程跋扈し、一旦逆境に轉ずると意氣地なく退いて了ふ。同志會を去つた時などいかにも呆氣ないものであつた。男がこの邊に心得あるならば秋山氏の後押

普通に優つた才ありながら、屢々失敗するのもこの邊から來て居るのであつて、惜しいことである。

秋山は一書生を以て活社會に飛出し、二十六の數を解れ過した時など、勢の盛なるものであつた。若手の珍らしいもので、新人物であつた。然し歲月人を俟たず、まだ老境に入らぬにしても、五十に遠くない。もう只良い頃に活動してばかり居る譯にゆかぬ。何とか纏つた大仕事をせねばならぬ。今度旗擧げしたならば、目先のことだけで運動せず、一生涯の事業として着手すべきであつて、若し防碍が起つたならば何處までも踏止まつて爭ひ、場合に依り斃れて止むべきである。策士と見らるゝ弊は、才がありさうで割合に無いところにある。誰も彼も油斷せずに見て居ると案外拔けたところがあつたりしてそれで損を爲る。秋山氏はさういふ策士と趣を異にし、餘り才振らぬ方であるが取柄である。然し強さうで案外に弱いのは弱點である。但だ眞に弱いとも思はれぬ、悧巧に身の處置ぶりしようとするところで弱くもなるのであらう。今後は此邊のことを慮るべきである。

△徹頭徹尾誤解せられたる人、秋山君

長島隆二

秋山君と私とは極めて密接な間柄であつて、又秋山君は私の最も尊敬する一人である。君は今日世間から兎角の非難を蒙つて居るやうであるが、それは總て君の人物を知らない誤解に因るもので、早晩此の誤解の雲は除かれて本當の君が世間に認めらる時が來るであらうと思ふ。而してそれは數十年を出でずして來るものと私は信じてゐる。夫の露探事件といひ、何故恁くも君は世間から誤解せらるるのであらうかといふに、君は絶大の手腕を有して、而も常に陰に在つて畫策到らざるなしといふ風であるが爲めでもあらうが、又今日の政治家ほど其人物を觀るの明に乏しい者は無い。外に顯れたる仕事の結果を觀て是非善惡の判斷を下す者はあらう。而もそは抑ゝ末である。眞に其人の人格手腕を知るならば、決して恁くまでに人を誤解するものではないのである。秋山君が今日後藤男と歟を通じて同志會に弓を彎かんとするとか、第三黨を操縱して其間に暗中飛躍を行はんとするとかいふのは君を誣ふるの甚だしきものであつて、君の人物が恁くまで了解せられてゐないかと思ふと、君に對して洵に氣の毒の感に堪へない。

君は今日同志會を除名せられた相であるが、除名せられるにはそれ相當の理由が有るのであらうが、私は其理由を以て今言つた誤解に基くものであらうと思ふ。私の知つてゐる範圍に於ては尠くとも正當な理由と認むべきものが無い。陰謀を運らしたといふでも無ければ黨規に從はなかつたといふ事も見ない。若し有つたとすれば、それは君の信ずる立黨の精神と同志會一部の人の抱く精神とが違つて居つたといふ事でもあらうか。然しながら、私自身にしても今日同志會の遣り方に就いては慊らなく思つてゐるところもある。既に黨議決定の後からは何と言つても仕方は無いが、決定するまでには、自分の意見と異る所があれば擧げて論爭することは決して差支の無いことと私は信じてゐる。否それが正當であつて、只譯もなく盲從することが、黨員の任務でも無ければ又黨としての名譽でも何でも無い。成程所謂規律ある政黨としては望ましくない事であるかも知れぬが、一二要路者の意見に盲從してゐることのみが必ずしも美德でもなからう。此意味に於て私は從來幹部とも爭つて來た。然しながら、それ故私を見做して政界の拗者と云ふならば、それは云ふ者の勝手である。故らに平地に波瀾を起す者となすならば、それをも甘んじて受けやう。少くとも私自身に取つては自ら省みて些の疚さをも感じない。遠慮なく言へば、同志會中最も獻身的に黨の爲めを思つてゐる者は誰かと問はれたならば、言下に私だと言つて答へるに躊躇しない。素より手腕とか働きとかは別問題である。唯黨の爲めを思つてゐるといふ意味でならば、私は本當にさう信じてゐる。それと同時に秋山君も黨

である。殆ど身命を抛つて政黨組織に盡力したと言つても可いのであらう。君はいかにも忍耐強い人である、堅忍力行の人である。思立つた事はいかなる障碍が有らうとも遣り通さなくては決して已まない人である。それなればこそ今日まで逆境に在つて其識見を養ひもした。大抵の者ならば挫折すべき處を切抜けても來た。其根氣の強い點だけでも吾々は敬服して措かないのである。私は敢て斯う言ひ度い。今日の政治家中、爵位や勳章やを剝脫して赤裸にして放り出したならば、最も仕事を爲る點に於て秋山君だけの強みを有つて居る者が果して何人あるであらう。恐らく一人も無いと言つて可からうと思ふ。彼の識見は果して何時の間に養はれたものか、それは私は知らない。然しながら夫の卓拔なる識見と、而して何物をも貫かねば已まない熱心とを以てして、彼は實に底の知れぬ恐ろしさを藏して居るものである。彼は常に事の大局に着眼して居る。事の些々たるは敢て彼の問ふところではない。彼が久しく逆境に在つて考へたところの、大政黨の樹立、即ち區々たる政爭の外に超越して國家百年の大計を定める爲めに總てを包容するところの大政黨の樹立といふ事は、桂が朝に在つて多年感じて居つたところと其意見全く相合致するに至つて玆に同志會の創設といふ運びになつたのであるが、君の識見の凡庸でない事は此一事に就いて觀ても解ると思ふ。であるか

ろ。而も[illegible]と[illegible]も今日まで君は一日も[illegible]思はなかつたことは[illegible]か一したのも亦此ところに在つたのである。然るに現内閣が大[illegible]に

あらう。大合同、大包容は君の理想であつた。而して君の當時最も盡力

逸したに就いては彼が心中怡まざる所のあつたのも亦無理はなからう。營業税問題に就いても初より卒先して同志會の黨論を定めまた常に陰に現内閣を督勵して來た者は彼であつた。而して彼が常に最も憂へて居つたところのものは支那問題である。支那問題は單に支那と日本との關係に止まらずして、實に全世界の問題である。今に於て是れが根本的解決を見ざれば永久我國家の禍根を絕つことが出來ないであらう。支那と日本とは今後必ず相提携して行かねばならぬ。支那の國富を增進する爲めには其の背後に日本の武力を要するであらうし、日本の武力を發揮して行くには背後に支那の經濟力を必要とする。若し此兩國にして相提携することなく、從前の狀態にあるならば、支那は或は獨逸と結び、或は亞米利加と結び、或は英吉利と結び、其何れと結ぶにしても其目指すところの敵は我日本でなければならない。之は常に私も考ふる所であつて、今に於て此禍根を絕ち、相倚り相助けて東洋永遠の平和と世界の文明とに貢獻しなければならぬと思ふのである。幸ひ今日は對支交涉が開かれてゐるのであるから、何とかして早く是れが解決を見たいと思つてゐる。只今日交涉倘捗らずして、一度び增兵の名の下に出兵しても支那の諾くところとならず、或は總選擧の結果に依つてと思つた事も空頼みとなつた

のであるから、倘今後採るべき方法は枝葉の手段にあらずして根本的大策を斷行するの外ないのである。而して此の根本的大策實行に就ては朝野政治家の一大決心を要し且つ一般國民の非常なる覺悟を要するのである。是れは同時に秋山君の年來の志望でもあり、一日も早く是れが解決を告げ、同志會に依つて君の理想が實現せらるゝのを觀たならは假令君は同會を除名せられても、それが爲めに其主張を二三にするやうな事はなく必ず國家の爲めに其成功を歡ぶであらうと思ふのである。

△秋山定輔君

松井柏軒

（一）

秋山定輔君は當代の一奇材也、其の赤手空拳を以て帝都の中央に二六新聞を創刊せる、一枚の筆を揮ひ、敢然日本隨一の富豪たる三井王國に挑戰し、横打縱擊、竟に或る元老の一人をして調停せしめ、以て僅かに其の鋒鋩を收めたりしが如き、或は無頼漢の壓迫を排して娼妓の自由廢業を說き、或は勞働者の味方と稱して資本家に反抗し、以て不撓不屈の意氣を示したりしが如き、眞に奇とすべきもの少からず、古來氣を負ふを以て自から許す神田ッ兒の徒が、今尙ほ君に隨喜するも偶然に非ず、

（二）

唯だ奇なるは、秋山君の身邊に、一種の陰翳の絶えざること也。曩に露國陸相クロパトキン將軍の來朝するや、君實に之と會合して、竟に所謂露探となれりとの評起り、疑雲日を逐ふて濃密を加へ、竟に議會の公然たる問題ともなつて、君は一場の沈痛なる告辭を最後として議會を去りたりき、是れ素より君の寃罪也、然れども此の疑雲を捲起せしものは、君の舊部下の親近者なりしがために、世俗また多く君を疑はざるを得ざりしのみ。

近時また君の總選擧に就て疑似の說を作す者あり、君の選擧費の潤澤なりしこと、實に帝都二十有餘の候補者に冠たりしとは、世俗の多く傳ふる所なりき、思ふに其の運動の花々しかりしは、參謀者の奇謀能く衆心を左右せんとせし結果にして、必らずしも黃金の力に非ざるべし、然れども君の親近者の耳語する所によれば、如何に君と昵懇なる者と雖も能く君の資財の出處を知ると能はず、而して君今や大森附近に所謂『秋山新田』なるものを所有し、玆に小なれども一棟の別墅を建て、且つ日夕自働車を驅て電奔雷馳するに觀るに、其の資底の豐かなること想像するに足るといへり。

斯の如き一種の陰翳の君の身邊に存することは、君に於て寸毫も以て疚しき所なしとして、多く意に介せざるべしと雖も、君を一代の奇材として相當の敬意を拂ふものよりいへば、必らずしも雲煙過眼視するを得ざるも知る可らず。

（三）

り、暗夜低處に潜みて巧みに他の短に乘ずるを例とす、策士たる君の身邊に、彼の一種の陰翳の存する、また必然の宿縁ならざらんや。

最近に於て、君は桂公の帷幕に參して頗る同志會の創立に努力したりしが如く、又山本內閣が輿論の包圍攻擊を受けし時、夙く既に大隈內閣の出現を豫言して人を驚かしたりき、大隈內閣成りて幾許ならず、時に山本權兵衞伯に面して徐かに獻策したりしことあり、大隈內閣を咒詛して政海に波瀾を捲起さんとしたりしことも亦絕無ならざるに似たり、去冬師團問題のため議會の形勢切迫するや、君は山縣老公自署の書を得たりと稱し、之に由て大隈內閣假令議會の解散を奏請するも、勅許を得ること不可能なるを知ると唱へて、密かに政友會の幹部に遊說する所あり。彼等が迂濶にも情況偵察と判斷とを誤まりて、萬議會の解散なしと誤信したりしも、實は君の計略に乘りしなりしとも傳ふ、吾人は未だ事の眞否を知らず、又知るの要なしと雖も、君が常に九地の下にまで潜み如何なる所にも出沒して、遮止他の端倪を許さず、以て縱橫に奇策を弄せんとする形迹の掩ふ可らざるを視るのみ。

吾人は君を當代の一奇材として愛惜するが爲めに、玆に一言忠告せん。君既に再び衆議院に一席を占めて、憲政のために努力する志あらば、宜しく策士たることを廢棄すべし、立憲政治は凡庸政治也、公明を尙ぶが爲めに、權變奇略を要せず、否、之あるを以て弊とし恥とす、今にして言論て一人乃至數人と格鬪して之を倒すに足るも、機關銃、大砲を發射する大部隊の軍には抗する能はざるに非ずや。

君の絕倫たる精力と、不撓不屈の努力とを以て、言論戰の先鋒と爲り政黨の號令者傳令使となつて正々堂々齊馳せば、憲政の下、眞に比類なき名士として、名譽の月桂冠を戴き得べし、君は今日殊に深く之を思て可也。

△人からも政界からも見捨てられた秋山

匿名氏

秋山も今度の選擧で出るには出たけれど、同志會からは除名されるし中正會には行けず國民黨には行けず、それならば政友會ででも歡迎されるかといふに、秋山を歡迎する者は恐らく一人だつてありはすまい。全くの孤立無援の地に立つて何時までも無所屬に居なければなるまい。同じ無所屬の中でゞも秋山の言ふことを聽く者は一人か二人しかないといふに至つては秋山も亦窮せりといふべしである。然しながら今日秋山が

こんな境遇に立つて困らなければならぬと言ふのも全く自業自得で、彼は到底今後の政治家ではなく、全く過去の人であるからである。權謀と術數とで騙し合ひを遣つて居た今までの政治にはまだ／＼彼の働き得る餘地もあつたし、又彼を必要とした場合もあつたゞらう。桂や伊藤などいふやうな頭の舊式な殿様風の人を說いて之を說き伏せることは出來たでもあらうけれど、頭腦の緻密な理智的な、條理整然とした、例へば島田三郎とか加藤高明とか原敬とかいふやうな人間に對しては直ちにその底を看破ぶられて了ふ。

彼が立憲政治家としての資格を缺いて居る證據は、夫の彈劾奉答文の一件のやうな大失敗をしながら、今日まだそれを失敗ともなんとも思つて居ないことに依つても解る。衆議院に於て多數を制する政黨が、時の政府を彈劾することは當然であるが、あの場合のやうな謂はゞ三百の頭顱の耳を欺いて、僅に二三人の同志に依つて內閣を倒し得るなどと考へるのが抑々間違ひである。奉答文といへば版で刷つたやうな極り文句のものだが、奉答文を起草するには各派の代表者が集つて慣例に協議することになつて居つたし、このことあつてから後は一層嚴重に取扱はれるやうになつたけれど、あの時は議長の河野が『今度は私が書いて來たからそれでいゝだらう』などゝ手輕に誤魔化して議場へ持ち出した。これを河野が演壇に立つて讀み上げると、何にも知らぬ議員どもはいつものやうな奉答文だと思つて、パチ／＼手を拍つて「賛成々々」といふ譯で、其奉答文を通過さして了つたが、後から靜に考へて見ると『外交は機宜を失し、內政は彌縫を事とし……』などゝいふやうな內閣彈劾の意味を含んで居つたものだから、玆に大騷ぎとなつて、秋山等が企んだやうにこれを宮內省に持ち込むことが出來ないで、あべこべに議會は直ちに解散といふことになつた。だから議員の中でも隨分怨んで居る人もあらうがこんな大失敗を遣つて置きながら今日まだその非を悟らないやうなことでは到底今後の立憲政治に參與する資格はない。萬事が斯ういふ遣り方で、輿論政治の眞義を無視して二三人の有志さへあればなんでも遣れるやうに思つて居るなどは、いかにも時勢遲れである。

秋山は今度同志會から除名されると直ぐに、有權者や有志の人々を招待して其席上で一場の演說を試みたさうである。『私を衆議院議員に選擧して下さつた皆様は、私を同志會員として選擧して下さつた事と思はれる。自分も亦同志會の主義政綱に依つて進つて行く積りであつたのであるが、圖らずも今回同志會から除名された以上は皆様に對して顏を合はすことが出來ない。私は玆に潔く議員を辭したいと思ふ』といふ意味のことを言つたさうであるが、これは江戶ッ子の弱者に對する同情といふものを故らに覘つた卑怯な遣り方で、どうせ聽衆の中でも、例の秋山の慣用手段だと知つて居る者は、辭職するならば何も人に相談する必要はないのだから、勝手に潔く辭職するがよいと考へて居つた者もあらうけれど、その場は先づ／＼それには及ぶまいといふので納つたが彼の遣り口は何時でも斯ういふ風であつて、それを知つて居る者にとつては噴飯の至りである。こんな誠意のない、表裏のある、口と腹とのうらはらな

常套手段は何時までも人に看破られない筈がない。識見とか抱負とかが有りさうに言ふ人もあるが、唯勢の利に就くことのみを知つてゐる彼に見るべき主義の有らう筈もない。政見發表の時なども「對支問題の解決」などを標榜して居つたやうであるが、彼に支那問題に對する見識があるかは疑はしい。之に就いては伊藤仁太郎が古島一雄の應援演説に巧い事を言つてゐる。「吾輩も永い間政治に關係してゐるが、未だ秋山君の支那問題に對する根本的政策なるものを聽いたことがない。之れは多分我古島君の爲めに代つて言つて呉れたのだらう。」と。只感心な事は秋山が何處から金を引張り出して來るか。これは一の大なる疑問であつて、彼以外には彼の昵近者と雖も誰れ一人として知る者はあるまい。彼の家を家宅捜索した時に檢事が突込んで金の出所を尋ねたさうであるが、其時にも彼一流ののらりくらりとした返事で、金持の友人から出るやうな、また出ないやうなことを言つて逃げて了つた。」が、いくら金持だからと言つてさう何時までも秋山の爲めに金を出して居る理由もなからうから、これは餘程不思議な事と言つてよい。生活にしたつてとても年俸の四五千圓位では思ひもよらぬ程の華美な生活をして居るし、今度の選擧にでも二萬や三萬の金は撒いて居るだらうし、二度までも洋行したりなどする費用が果して何處から出たものか。親父の方に金は有るには有るけれど秋山が二六新報を經營して居て隨分困つて居た時にでも二三千圓の金より他には出さなかつた親父が、さう私山の爲めに無盡に金を注ぎ込んで居やうとも思はれない。どう考へてもこれは一つの不思議である。

秋山がもう今後政治的に活動することの出來ないのは今言つたやうであるが、そればかりでなく、少しく地位もあり、識見もあるやうな人は已に秋山から離れて今では側へ寄らない。松本正之介とか、三宅豹三とかいふ其他多くは前科者の手合があるばかりで眞面目な者はもう相手にしない。恐らく今度が彼の政治的生命の終りではなからうかと思ふ。

△東洋流の智慧者

早川鐵冶

秋山に對する世間の評はどんなものだか、それは知らぬが吾輩と秋山とは同鄕人で、確か吾輩より一つ二つ上ぢやないかと思ふ。吾輩が家を出て世間へ飛出したのは早かつたから、同鄕といつても私山とは學校でも一所に居つたことはない。秋山と知合になつたのはよつぽど後のことで所謂お互に巣出ちをしてからのことである。秋山も役人をして居つたし吾輩も役人をして居たが、彼は會計檢査官か何かで極めてじみな仕事をして居つたし、吾輩ははでな仕事をして居つたから其間に往復はなかつた。寧ろ親しくなつたのもお互に浪人以來のことである。

秋山と吾輩とは性格が違ふ。やつと同じ性質なのは一口に膽といふ點である。如何なる艱難にでも堪へられるといふ點である。秋山と吾輩と

が茲に二十何年來親んで來たのもこれが爲めである。が、其他の性質は全然反對で再望とはまるで違ふ。再望は短氣で一徹で一旦斯うと思ひ立つたからは、理が非でも押し通したり、どんなものでも打壞したりして自分の意志を貫徹しなければ已まないのだが、そこへ行くと秋山は、一年が二年でも、二年が三年でも根氣よく時機の至るを待つて居る、二六新報の經營にも隨分困つて居つたが、それでも十年といふものは所謂沈香も焚かねば屁もひらずて、門前宛ら雀羅を張るやうでも別に其家を賣らうともせず、何もせずに自轉車にばかり乘廻して居た。その時分よく人が遣つて來ては秋山はどうしたものだらうと言つて訊ねたものだが、我々のやうな者の目には、所謂遠大の志がないとでもいふのか秋山の考へて居るやうなことは解らなかつたから、『一年や二年なら格別、もう小十年になるのに自轉車にばかり乘廻して居つて何んにもしないやうでは秋山ももうお終ひだらう』と惡口を言つたりしたことがあるが、さうからして居ると彼は猛然として緣故もない東京で、而も第一位の當選で現れて來た。こゝいらが秋山の豪いところで、再望の不明なところであつたかも知れない。議會に出ても彼れは訥辯で、迚も華々しい仕事は出來ぬ人と思つて居たに、辯舌も達者だし、彼の河野の上奏案一件でも全くは秋山が河野を傀儡に使つたのであつて、彼れの働きのある人間だといふことも解つて來た。彼れの秘書をして居た三宅豹三なども盛に彼れを褒めて居る。政界のみならず遊里といふか、狹斜の巷といふか、待合や芝居茶屋の女將や、藝人社會で彼れを褒めることと言つたら驚くばかりである。この點に至つても再望は何んの手腕もなく迚も彼れなどの眞似は出來ない。これなども彼れと再望との性格の違ふ點である。

露探事件で、秋山が世間の嫌疑を蒙つたのは有名なことであるが、何故あの時彼れば其事實無根であることを證明せずに、そのまゝ職を辭して了つたのであらうか。何故除名せらるゝまでも戰はなかつたのであらうか。再望は其當時も手紙でさう言つたのであるが彼れは返事をしなかつた。すると俄に彼れは歐羅巴へ行つて、歸つては來たが肺病になつたとかで復たしても秋山の姿は吾人の眼前から消え去つて了つた。其後彼れの消息は杳として傳はらなかつたが、『然し奴のことであるから今に又何か遣るであらう』ぐらゐに考へて居つた。すると一昨年の一月か、桂から今度新たに政黨を組織するに就いて再望にも助力せよといふことであつた。當時再望は政友會に不平があつて所謂不平組の同志を糾合して居つた時であつたから其志を貫徹する爲めに桂との會見をしなかつたのだ。然るに事志と違つて再望は政友會から除名されて了つた。すると其除名された其日の其夜、桂から使があつて即刻會ひ度いからといふことで、最早や除名された以上は何の差支もないから桂と合ふことにした。すると突如として其場に秋山が現れた來た。『然らば再望を再三桂の邸に誘引したところの者は君であつたか』といふと『否やさうではない、今君を捕虜としたといふことを聞いたからだ』と云つて居たが、果してどうだつたか、其間の眞僞は解らないが、兎も角此處で久しく其影を見せなかつた秋山が斯うして再び政界に働いて居る姿を見たのである。再望が桂に

までには根氣よく二年も三年も、附けつ纏ひつして非常なる耐忍力で以て遣つたらしい。同志會を作つたのは桂であるが、其種を蒔き土を耕し芽を育てたのは秋山である。それ以來同志會では、秋山と吾輩とは同鄕人ではありお互に親密な交際を續けて來た。前言つたやうに二人は性格が違つて居つて、一人は短兵急に事を遣らうとし、片方は隱忍して徐に事を運ばうとする。その代り吾輩は一旦信じた事は何處までも變らないが秋山は其段になると時々變つて了ふ。吾輩は一旦反對した以上は何處までも反對しなければ已まないが、秋山は今では政敵として蛇蝎の如く憎んだ桂とでもあのやうな事を共にして居る。

桂が死んで、同志會は首腦を失つて了つた。其時吾輩熟々思ふに、加藤高明君は到底野人の頭領としての柄ではない。一官僚、一外交家としては格別、野武士を統率するの器ではないと信じて、加藤ではいかんといふことを言つたのだが、此時秋山は『それが短氣といふものだ。訓練をして遣らして見ようぢやないか』と言つて寧ろ加藤を總理にすることを勸めた一人だと思ふ。同志會が出來た今日でも吾輩はまだ黨首として適任者とは思はないが、秋山も終ひには段々僕の說のやうになつて、今ではさう認めてるやうである。

今度の選擧で吾輩は落選するし、秋山は除名されて了つた。吾輩と違ふのはこゝのことで、吾輩は萬事歐羅巴主義で、立ちながら話をしたり出て人を説付けることなどは巧いものだ。除名の理由は何ういふのか吾輩は知らぬが、實に氣の毒だと思ふ。秋山は二年も三年もかゝつて桂を引張り出して來て同志會といふものを作り上げた最功勞者ではないか。而かも現內閣の下で之を除名するに至ては尙さらである。今日の現政府を作つたのも、即ち大隈が出盧して政界の局面展開を遣つたのも偏へに秋山の力があつて、麴町八丁目や、及ばずながら有樂町の此事務所などが役に立つたところが少くはない。大隈を引張り出すといふことを考へたのも秋山なら、骨を折つたのも秋山である。彼れは常に帷幄の內に在つて劃策怠らなかつた。之を慶安太平記に譬へて見ると、差當り由井正雪といふ役割である。然しながら由井正雪ばかりでは仕事は出來ない金井谷五郎や丸橋忠彌もなくてはならない。この早川は槍を取つて一味に加はつた點からいへば、丸橋忠彌ぐらゐの役柄を務めたとも言へる。然るに今秋山を除名するといふのが既に怪しからぬ話であるのに、河野が進んで除名に贊成したなどは尙更ら解らない。吾輩は落選してから此方誰れにも會はない。大浦が見舞を寄越して呉れただけで、其他の者は誰れも寄付かない。誰一人として屁をかまして呉れる者もないから、吾輩も屁もかまさずに居る。秋山にも其後まだ會つたことがない。が、兎に角吾輩のやうな思慮の無い、西洋流とは違つて、耐忍力のある東洋流の智慧者であるといふことだけは確かである。

△秋山の眞骨頭

仲小路廉

秋山定輔ほど世に疑はるゝ奴はない。これ程誤解を招いたのは珍らしい。そして今でもまだ普通の人々はそれが誤解だか本當だか分らぬと思はれて居るらしい。矢張り今日に於て十分研究する丈けの値打のある人物である。

秋山が世上に對して拭ふべからざる汚點を蒙つたと云ふのが所謂明治三十七八年事件の時に於ける露探の嫌疑と云ふ事だ。事もあらうに、嫌疑もあらうに、露探の嫌疑とは何事だ！ 若しもさう云ふ事が事實であるならば、今日こそ親善の間柄だが其當時に於ける一大敵國、而かも我國民が全力を盡して對抗せざるべからざる危急存亡の大時機に際して僅の人間ならばイザ知らず、當時相當人にも知られ、又衆議院に議席を有し、而して一方には社會の耳目となるべき二六新報を自ら經營して居つた秋山にして、又當時に於ける一個有爲の人物として、又多少血性的の男子として自分も信じ人も信じて居つた所の秋山にして、我國空前の大戰の時に露探と目さるゝに至ては誰も彼も其肉を啖はんとしたのは無理もなき次第である。當時我輩は秋山が果してそんな事をするものかどうか、すればどうも苦しい事をするものだ、如何にどうしても斯樣な事はあるまいと思うてゐた。又我輩は今でもさう思うて居る。當時秋山は議會に於て非常なる彈劾を蒙つた時に我輩も議場で其狀況を見て居つたのであるが、若し秋山が世上に噂せられて居るやうな、剛强なる人物であるならば必ずや憤然起つて全力を擧げ全身を犠牲にする。一身を賭してまで之を辯明し飽くまで激論を加へ所謂血流を流すまでの古武士の風あつて然るべきものと思つた。議場に於て倒れて後已むの態度あつて然るべしと思つた。之について回顧することのあるのは彼の星亨の彈劾事件である。人物に大小の差こそあれ、星と秋山とは其性格に多少似た所がないでないと思はれて居つた。其星が嘗て取引問題について非常の嫌疑を蒙り、遂に彈劾を受けた。當時も議場にあつて親しく其狀況を見て居つた。處が流石に星亨だ。彼は赤裸々に彼の性格をあらはした。如何にも男らしい人物であつた。斷乎としてかゝる事のない事を言ひ張つた。幾度追窮されても頑として動かない。謝罪せよと云つてもなか〳〵謝罪處でない。何としても動かぬ。とう〳〵仕舞には除名を受けた。除名の結果議場を去り院外に出ることになつた。然るに星亨の性格は此除名によつて又益々あらはれた。彼は栃木縣より選出せられたるものであつたからして、彼の除名の結果栃木縣より一名の補缺を出すことゝなつた。然るに星亨はまた猛然として起つて、自己の補缺選擧に自身が又出馬したのである。而して奮戰激闘の末又遂に當選して再びノコ〳〵と議場へ出て來たのである。普通の補缺選擧でさへなか〳〵困難であるのに、況んや議院内に彈劾せられ除名せられた自己の補缺選擧に出馬して、而かも遂に當選した。是に於て實に其意氣豪快到底常人の及ぶべからざる所

がある。再び出て來た上は致方もなく、又世人も彼の强烈なる點に同情を表して――人は又强烈なる男性美に對して同情するものである――彼の評判は一層高くなつたのである。再び議場に出て來た彼を見ると、彼は矢張り傲然として大手を振つて威張つて居つた。勿論星には非難すべき點もあつたらうが、彼の人物は確かに男性的の人物であつた。人物の大小こそあれ、當時秋山にも多少星亨式の傲岸な所もあり、又强烈な男性美もあり、一種任俠的の性格もあるやうに受取られて居つた。然るに痛烈なる彈劾を蒙つた時の秋山の擧動は實に吾儕をして意外の感に堪へざらしめた。如何にも氣勢が昂らない。若しもそれが冤罪であるならば血涙を揮つて、壇上に倒るゝまで辯明論難して然るべきである。然るに秋山の態度はさうでなかつた。我々は秋山としてはかゝる事はあるまいと同情を有つて居つたに拘らず、議論に於ける彼の態度は少しも愉快な、壯烈な、男らしい感じを與へなかつた。只悄然として告別の辭を述べたに過ぎない。我輩はどうした事か、何故もつとしつかりしないかと歯痒さに堪へなかつた。爾來十年秋山の名聲一時に地に落ちた。十年屈服、よくも辛抱したと云へば示ふものゝ、何故モット男らしく自己の立場を明かにし孟子の所謂自ら省みて縮くんば千萬人と雖も我れ往かんの男氣を出さなかつたか。あの時の秋山の態度については今日でも我輩は遺憾の念を禁ずることが出來ない。

處がそれから數年經つて我輩は秋山と知合ひになり、又先年外遊中にも一遍會つた事がある。それから大正年代に入り、あの政變が起つて桂

公が同志會を創設することゝなつたが、聞く所によれば桂公の政黨發起については秋山君も餘程の關係があると云ふ事だ。然しそれとてもどう盡力してどう云ふことがあつたかと云ふ事は兎角表面には分らない。何でも餘程の盡力があつたものださうだ。以來彼とは數回會つた。段々種々な話も聞いて見たし、又いろ〳〵自分の衷情を云つたり、意見を云つたり、又苦心の事なども云つて居つた。どうも一體の話振りは極めて低音で諄々として物を說くと云ふ有様である。而かも其話の中には一種の氣骨も見える。機鋒も見える。又其中には一種云ふべからざる超然とした形の見えるともある。忘れもしない、桂公の通夜の席上でも、その通夜の合間〳〵には種々の談話もするのであるが、なか〳〵話に趣味もある。宗教の觀念も確かにあれば、又哲理上の事も考へて居る。話せば話す程面白味の加はる趣がある。超然として餘り物に拘らぬやうな所があるかと見れば、其胸臆を話す際には機鋒の閃々として露はるゝ處もある、眞實であるや否や疑問とする人もあるやうだが、其說く所は實に國家を以て任とする確かに世を憂ひ國を憂ふるの狀況は見受けらるゝのである。思ふに秋山の心中には何處までも我帝國の立場と云ふ事を考へて居るやうである。我四圍の形勢に對して到底も現在の狀態では可かぬと考へて居るものゝ如く見える。少くとも支那に對しては十分なる解決もしなくてはなるまいし、又我地步も明かにしなくてはならない。延いては歐洲戰後の事についても今日より餘程の考をして置かなければならぬといふ事も痛切に感じて居る。米國や墨西哥に對することについても一通りの計畫も抱いて

居る。此等の總ての點を綜合して考へて見ると、彼は何處までも擧國一致を必要とする觀念は間違なかりさうに見える。我輩は今日であるからこそ申すのであるが、桂公の生前の意志も確かに擧國一致を以て今日の場合に處する最緊要の點と考へて居られたのである。對外問題殊に支那問題の解決については、國内に於て兄弟牆に鬩いで見たり、蝸牛角上の爭をして居つては到底も中外に對して我の威信を全うし得べきでない。今日の事柄は内の事も固より大切ではあるが、それよりも大切な事は外に對して先づ我帝國の地歩を確實にしなければならぬ時であると。此點は桂公の深く考へて居られた事柄である。單に二大政黨の對立云々と云ふが如きは斷じて桂公の本意ではない。桂公の眞意は確かに擧國一致其力を提げて外に向ふより他に途は無いと、斯く考へられて居つた事は明かである。蓋し秋山君も其點については確かによく桂公の眞意を諒解して居つたのみならず、彼の信念も亦其處にあるのであらうと我輩は思うて居る。然るに只其性格が、又其行動が如何にも人よりも疑はれはせぬかと思はるゝ所がある。どちらかといへば、非常な陽性的な豪快な、壯烈な、男子と云はんよりも寧ろ陰暗なる策士である。其行跡を韜晦して餘りに目立たざる間に於て自分の意志を遂しようとする人である。之は固より各人の性格に由ることであるから敢て非難するに足らぬかも知らない。兎に角秋山の胸臆に藏して居る熱烈の情は確かに國家を憂ふると云ふ事に間違はなからうと思ふ。若し又一我輩の觀察が誤つて居つたならば、寧ろ我輩は自分の誤に滿足し、秋山をして是非我輩の信じて居る通りのものにしたいに思ふ。又表面は豪快らしく、壯烈らしく見えぬが其内面に於ては確かに強味があり確かにメゲナイ人物だと思ふ。願くは人物拂底の折柄、かゝる人物は餘りに之をイヂメずに之を痛めずに、又世人は少しは其誤解をも解いてやり、成るべくは之を用ひて大いに其驥足を伸ばさしむることが國家の利益であらうと思ふ。予は敢て秋山に恩怨がない。故に自分の觀察したる秋山の眞骨頭を直截に披瀝して、以て記者の問に答へ、併せて世人の參考に供した次第である

△學生時代の秋山君

床次竹二郎

◎僕が秋山君を知つたのは大學の豫備門時代からだ。それからずつと大學を卒業するまで同級であつた。尤も秋山君は法律科で僕は政治科であつたから始終一所に學問をしたといふ譯ではないが、當時秋山君と一所に自炊をして兄弟分のやうにして居つた吉田と云ふ人が、又僕の友人であつたものだから、僕も時々其宿を訪うて、牛肉などを食ひながらいろ〳〵の話をした事がある。非常の親交のあつた譯ではないが、先づ僕等は同學の中でも親しい方の部であつたらうと思ふ。

◎秋山君は其當時からなか〳〵利かぬ氣の人で、何でも新聞をやらうとか代議士にならうとか云つて居つたやうだ。其時分僕等はまだ考が熟さず、十分將來の方針も立てなかつたのに、秋山君は兎に角ちやんと其目的を定めて、着々其實現に努めて居つたやうだ。だから先生が大學を出て二六新報を創めた時などは「ア、先生いよ〳〵やつたな」と思つてゐたものだ。

◎學生時代の秋山君は別に勉强家と云ふ程の事もなかつたやうだ。まア僕等は皆中位に勉强して居つたらしい。又學問も中位より少しいゝ位の所であつたらうと思ふ。

◎僕は大學を出てから久しく田舍廻りをやつて居つたから、其後餘り深

く交際する機會もなかつたが秋山君はなか〳〵意志の強い人で、又いろ〳〵の事を考へて、いろ〳〵の事を劃策して行く頭のある人と僕は思つて居る。策士であるかないか知らぬが、餘りチヨコ〳〵小細工を弄する人とは思はない。先づ計の多い人とでも云ふのであらう。彼が病氣の爲めに洋行から歸つた時に須磨にじつと引込んで居つて又再び出かけて行つた事などは如何にも君の性格を出して面白いと思ふ。兎に角今の時代に於て一寸常人と違つて珍らしい一廉の人物だと僕は思つて居る。

△逆境に屈せぬ秋山定輔

男爵 後藤新平

秋山定輔の人物評か。それや面白からう。秋山は矢張り問題の人として論ぜらるゝ丈けの値打の十分にある人だらうと思ふ。

自分は秋山が二六新報をやつて居る時分から知つて居るが、其時分秋山は非常に極端な說を持して居る人のやうに聞いて居つたが、會つて見ると全く噂とは違つた人であつた。伊藤公は早くより彼の才幹を愛して居つたが、公からして彼の事についていろ〳〵話を聞いた事が少くない。公の話の中にこんな事があつた。俺の所へある男が來て秋山を社會黨のやうに云ふたが、段々其人の云ふ所を聞いて見ると其人は全く社會主義と國家社會主義とを混同して居つたので可笑しかつたとて笑はれた事がある。今でこそ誰れでも社會主義と國家社會主義との區別位は知つて居るが、當時の警察官とか又普通の官吏など云ふものは其區別をさへ知らぬ程無學なものであつた。彼の露探事件が起つて、彼が議院を退くの巳むなきに至つた時などは伊藤公は實に深く慨嘆せられたものであつた。公の言はるゝには、今度の事件の如きは實に我帝國にとつて遺憾至極の事である。僞證罪を以て人を縛るなど云ふ事は立憲治下にあるまじき事である、實に大和民族の建てた立憲政體の一大汚點、一大瑕瑾である。之は一秋山の爲めに歎ずるにあらず、秋山の明りを立てるは大和民族は戰時と雖も物に醉はずして、是非曲直に反して公平なる判斷力を有することを內外に知らしむるものであるから、時を見て、天下の爲めに其寃を雪いで遣れと云ふ事を私にいはれた事がある。今でこそ彼の事件は、警視廳の過失であり、政治上の私怨復讐であつたと云ふ事を誰でも認めて居るが、當時伊藤公は憲政の汚點として深く此事を慨嘆せられて居つたのである。爾來自分は彼の行動を見て居るのに、伊藤公の云はれたやうに、露探などの形跡が毫末も無いのみならず、其愛國慨世の念の深き到底尋常人の及ぶ所にあらざることを知つた。彼が往々奇禍を買ふのは全く其愛國の至情、常人と調子の合はぬ爲めであつて、これは古い其例に乏しからぬ事と自分は見て居る。此頃友人の勸めによつて候補に立つと云ふ事だから、先年の伊藤公の依賴の事なども憶ひ起して、推薦狀を書いてやつたりした處が、或者は之を誤解して我輩が第三黨を作る野心だとか何とか云つて居るやうだ。物は其人の度量次第にしか見えぬものだから、そんな人間の誤解はどうでもよいが彼の愛國の至情の未だ一般の人の認むる所とならぬのは國家の爲めに遺憾に思ふのである。

次に桂公との關係であるが彼が二度目の洋行から、歸つて來てからは一層愛國心が增まして來たやうだ。どうも今日の我國の文化は健全とは思はれない。此潮流のまゝで行つたならば我帝國の將來はどうなるであらうかと云ふことを深く考慮したらしい。彼は從來政治上の關係から桂公とは多く反對の側に立つて居つたのであるが、いろ〳〵國事を談じて

見ると圖らずもよく意見の一致を見出したので、それから桂公に行くやうになつた。桂公の同志會を作るについては彼の力が與つて大なるものがある。桂公の政黨發起の時には自分等は當初の贊成者ではなかつた。自分は政黨と云ふものの政治に必要なることは認むるけれども二大政黨對立と云ふが如き型を作り、綱を張り、落雁屋が落雁の型によつて落雁を作るが如く、政治の一切を其型の中に追ひ込むと云ふやうな政黨論には同意を表すると云ふ事が出來なかつた。處が桂公は最早や妥協や情意投合の政治の弊を認め之を矯正する必要上よりしてどうしても自ら新たに政黨を作ると云ふ事を決心せられた。其當時は政友會を擧げて桂公に上げてもよいと云ふ提議もあり、又今一度情意投合をやつてもよいと云ふ申込もあつたやうであるが、桂公は之を斥けたのである。桂公は、先帝の御宇であれば今一度情意投合をやるのも政治上の激變なくしてよいかも知れぬが、然し新帝の御宇になれば、人心を新たにして所謂局面の一轉を計らなければならぬと云ふやうな考でどうしても新政黨の樹立と云ふ事に決心されたのである。其間にあつて桂公の意思を定めるに大いに力のあつたものは秋山であらうと思ふ然るに桂公の發起した新政黨樹立の本旨は、進歩黨の領袖四五の人と密會された時から、少しく變化し、多少のゆがみを來たしたやうに見える。公の本旨は政黨革新であつて、二大政黨の樹立とか、政友會打破とか云ふやうな小さなものではなかつたのであるが、進歩黨領袖との密會の結果は、自ら政友會の全部を敵方に廻はし、遂に最初の本旨と違ふやうな形となつて來たのである。其間にあつても秋山は最も公平な、正大な立場にあつて桂公の爲めに盡力したやうに見える、兎に角同志會の今日あるは秋山の力によることの大なるはどうしても之を認めざるを得ぬ。彼は此間に處して徹頭徹尾誠意を以てやつたのであるが、而し彼の誠意は群衆の誠意とは、其程度を異にして居るが爲めに、往々俗に容れられぬと云ふ結果を來たすことになる。彼はそんな事を知らぬ程の馬鹿ではないが、然し其れを知りながら其本領を枉げぬのが彼の特色である。彼は群衆からいくら排斥されても、又世俗からいくら壓迫されても、少しも構はず、平然として居る丈けの度胸のあること丈けは確かである。古の國士に比して、自分はまだ〳〵力も足らぬ、苦勞も足らぬ不遇處か自分は古の國士に比して遙かに幸福であると彼は思つてゐるらしい。

それから今度の選擧に於ける關係などでも全く政府とは反對の位置であつて、可なり壓迫を受けた事は事實らしく見える。けれども彼は戰つてメゲヌ人である。壓迫されてヘコマヌ人である。逆境に處して非常に強い人である。選擧後我輩の處へ一度來たが、其時「今度は大分いぢめられたさうだね」と云ふと「まア、さう云ふ話は」と云つてそれを遮つて「いろ〳〵の事がありましたよ」とて笑つて居つた。又「何だかあなたと政治上の運動について關係があるやうな噂もあつたのであなたも御迷惑であつたでせう」などゝ云つて歸つて行つた。彼は決して愚痴を云つたり泣言を並べたりする男ではない。今度同志會を除名された時も、電話で以て「とう〳〵除名されました。除名されぬ前に一歩先じて脱會したらと云つて勸めて吳れた人もありましたが、自分から去るのは本意でありませんから……」と云ふやうな事を云つて居つた。そこいらを考へると先生の人物も毛色も一寸今流行の人とは違つて居る。彼は少しも逆境に屈せず、成敗利鈍に拘らぬ男であるから、今別に悲觀して居るとか、屈托して居るとかいふ事は決してなからうと思ふ。恐らく彼は今日も矢張り冷靜に自己の立場を考へ、熱誠に國家の前途を憂へて居る事と考へる。

● ● ● ●

告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

青い酒と赤い戀

天民式觀察と天民式文章とを以て、文壇に獨得の地歩を領せる松崎天民氏が、伊豆修善寺の浴舍に在りて、新に執筆せるネオ、ローマンス物語なり、自家身上の感想と事件とを叙したる「醉ざめの悲哀」と「溫泉ロマンス」の二篇は、中年にして妻を失ひ、戀に惱める生活苦の告白を見るべく、文情惻々として讀者の實感を衝くべし。若し夫れ「女優メリー孃」「銀座の評判娘」「草津溫泉の夢」「肺病で死だ妓」「ロンドンの戀」「平野丸の甲板」「謎の伯爵夫人」「芝居茶屋の女」の八篇に至りては、漂泊の男と流轉の女とが、數奇なる運命に翻弄されつゝ苦しみ惱み悲しみ悶ゆる戀愛生活を描いて、小說以上の眞事實に讀者の感興を惹かん。現代の高級小說に苦しみ、當今の低級講談に飽きたる讀書界の渴望を醫すべき新著として此の書を大方に提供し得るは、本堂の欣快とする處なり。新進の洋畫家三國久氏の挿畫數葉は、三色版に、寫眞版に、凸版に、また才人の豐麗なる新技巧を見るに足らん。

四版 **同棲十三年** 八十五錢 送料八錢

三版 **東京の女** 價四十錢 郵稅六錢

七版 **淪落の女** 價五十錢 郵稅六錢

再版 **淪落の男** 池內萍絲著 價金五十錢 郵稅金六錢

四版 **人生探訪** 價六十五錢 郵稅金六錢

新刊 **女鳩桐の雨** 鈴木三重吉 價金九十錢 郵稅金八錢

(中付三の一)

發行所 東京日本橋鐵砲町六 振替東京壹五〇五六 **磯部甲陽堂**

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

(中付三の三)

堀内新泉先生最近之傑作

人間百種 細君百癖

中版四百五十頁總布
美本全一冊
定價金壹圓廿錢
□送料金八錢□

(中付三の四)

新刊

女は常に濃厚なる化粧と華美なる衣裳に隱れて一見其眞相を得ず、著者曩きに百人百癖を著し江湖の大喝采を博し今又其夫婦篇たる本書を成す、實に十年苦心の結晶也、觀察犀利、文章絶妙、一讀感に堪へざらしむ、家庭に必備の書也

內容目次大略

■酒の好きな女
■子供の喧嘩に飛び出す女
■夫おもひの女
■上手に夫の機嫌を取る女
■無暗矢鱈に笑ふ女
■法螺ばかり吹いて居る女
■馬鹿に夫を褒め立てる女
■これは困つた癖のある女
■何でも知つた振をする女
■近處隣に迷惑をかける女
■夫の勇氣を皷舞する女
■妙に物を隱したがる女
■針の持てない女
■夫に甘へる女
■誠に邪猜深い女
■夫を尻に敷く女
■容姿自慢の女
■我子に酷く當る女
■力の強い女
■演劇好きの女
■人附の惡い女
■我子を自慢する女
■誠に無性な女
■至つて悋氣深い女
■負嫌いな女
■だらしのない女(以下)

發行所
東京市本郷區本郷一丁目大通
電話下谷四三六二番
振替東京一二五五八
日東堂

評論

新文明の道程

中澤臨川

個人主義より民族主義へ

十九世紀文明の末路が停滯し、腐敗して、型にはまつた物質的デモクラシイの空氣を漲らせ、その重い惰力の下で世界的平凡があらゆる社會に行き渡り、人心は倦怠し、阻喪し、輕躁に流れ、第一に利我的となりそれから冷笑的となり、薄情となり、癒すべからざるディレッタンティズムに墮したことは、私の今まで繰返し述べて置いたところである。私がかやうな顯象に名けて病的個人主義だと言つたことも、恐らく讀者の記憶して居らるゝことと思ふ。この個人主義はいかなる社會にも行き渡らざるなきの有樣である。國家としては、今日の流行をなしてゐる軍國主義（ミリタリズム）にしても、商賣主義（インダストリアリズム）にしても、皆な近代物質文明の赤裸々な所産であり、利我的個人主義の曝露されたものである。更に各個人に就て見るときその個人主義的傾向は最も著しい。彼等は唯だ利我的に自個を守ることにばかり急であつて、少しも他を顧みるの暇がない。彼等の態度は消極的でそして怯懦である、冷笑的でそして輕躁である。彼等は怠惰な悲觀者であり、恐ろしいほど自識した努力否定者である。殊に彼等は頽廢文明の特産物としての厭人家（ミサンスロピスト）である。

　利我的に消極的にばかり自個を守るに急であることは、取も直さず自分自身の周圍に障壁を築いて、皮層なイゴオの中に隱れることである。彼等は自らに囚はれ、相互に「生命」の源から遠ざかつて、孤立しそし

て萎縮する。彼等には底く深い處から來る共通の感激がない。從て彼等は非愛國的である。かやうに精神的に孤立した個人同志の作る社會は、勢ひ方便の爲めに維持せられ、そして物質的に結合せられてゐるに過ぎない。かやうな國家社會は安價な平和の爲めに個人に平凡を強ゐ、機械的に個人を束縛し、眞の個性を減殺するものである。

一方また、かやうな機械的國家には何の權威もない。生命の自然的傳統から起る民族的自覺即ち愛國心に依て繋がれない國家とその要素たる個人との關係は非有機的で全く不自然である。各個人は能ふだけ自分の生活の便宜を國家に要求すればそれで足れりとしてゐる。其處で「最大多數の最大怠惰」の欲望が、「最大多數の最大幸福」の假面を被つて現はれる。實際、今日の國民は自己の利益と幸福との爲めに國家を利用することばかりを考へてゐる。安逸と利我主義とが彼等の要求する全部で、個人は國家に對し何等の精神的義務を負はないかの如く、また國を以家て個人の物質的幸福の機關乃至は方便とだけに見做してゐる。高價な犠牲を拂つた「自由」も「平等」も型にはまつて停滯しそして惡用された。立憲政治そのものが既に危期に迫つてゐるのではないか。

物質文明の餘弊たる病的個人主義が、ます／＼個人を利我的にし、非愛國的にする間に、同じ個人主義が國家にも應用されて、軍國主義實利主義の競爭となり、その結果が今回の歐洲戰爭を爆發し、世界を恐怖せしめつゝあることは、恐ろしい皮肉と矛盾であると言はなければならない。今や近代文明は悉くその假面を脱ぎ棄てて、血に渇く齒牙を暴露しつゝ、世界を驚かした。かくて今日の社會は自己の作つた罪過の結果に苦みつゝ、自覺の第一歩に向つてゐる。何れの國民も民族的本能に醒ざめ、國家的觀念が強くなり、一致して同じ問題を眞面目に考へると同時に、現代文明の眞相を——その不自然と缺陷とを——悟り始めた。新國家主義、民族主義、愛國主義が利我的個人主義に代りつつある。佛蘭西ではモオリス、バレスやシャール、モ

オラスが斯樣な新福音の使徒として數年前より持て囃されてゐる。又英國では牛津のジャックス教授が『戰時に於ける人心の變化』を論じ、今回の戰爭は英國々民の國家に對するこれまでの觀念を一變したと高調し、從來餘りに個人的で自己の利益と安逸の爲めに國家を弄してゐた國民が急に精神的になり、宗教的覺醒を示し、之と同時に愛國的觀念が勃興し、國家は忽ち位置を換へて絕對命令者となつたと言つてゐる。國家は嚴然として『國民よ、今度は俺の番であるぞ、今までは何によらず汝等の命令に默從してゐたが、今度は反對に汝等に絕對的服從を要求する』と宣言した。そして全國民は一言の不平もなく之に服從したと。更に教授は言葉をついで、今回の如き人心の覺醒は英國史上未曾有であると斷言し、今後帝國の使命及責任に對する國民の自覺は一大進歩を來すであらうと言つてゐる。

かやうな國家的乃至は民族的自覺を以て、單に戰爭に對する恐怖心または自己保護の本能に驅られた一時的顯象と速斷するのは謬つてゐる。勿論近因はそこにあるが、その運動にはもつと底深い根據がある。それは久しく病的個人主義に由て不自然に壓迫せられてきた生命力が擴大を要求した結果である。個人のイゴオが自ら築いた小さな城壁の中で窒息せんとする苦みを逃れようとして、それを破つて出た結果である。生命力の勃興は當然民族的自覺の形をとらねばならぬ。なぜなら、生命の樹はその種子に適した鄕土に深く根を下すことに由て、眞の天性に達するのであるから。換言すれば、生命の擴大は傳統の力の自覺に由らなければならないから。で、かやうな民族的自覺に伴ふ愛國心なるものは、空虛な傳說的のものや、國家的利我主義から起るものとは全くその趣を異にしてゐる。土地から離れ、家族から離れ、民族から離れて、何處に生命の樹は營養をうるであらうか。自己が實際に生き、愛し、苦しんだ處を離れて、眞の自由と解放が得られやうか。生命は根のない抽象でなくて、具體的の生長であることを我等は忘れてはならない。ベルグソンが戰前に、自分の國內に勃興し出した斯樣な新氣運を評

した言葉は、現代民族主義の心理を最も好く傳へたものである。曰く「私の信ずる所に由れば、我等は今精神的に偉大にして深甚な變化を目撃してゐる。……然り、眞に私は之を以て佛蘭西の道德的復興であると信じてゐる。で、最も私を感動させ、明かに斯の復興を會得せしめる理由は、それが單なる理想――誰も知る如く、理想は變り易いものである――の轉化でなくて、實に純正の轉化、換言すれば寧ろ意志の創造であるといふことである。夫れ意志とは性格それ自らの表現で、最も改變しにくいものである。であるから現代の青年の進化は、私にとつては一種の奇蹟である。私は二重の理由によつてこの顯象を歡迎する。即ちそれは我等の道德的統一を再建するのであるから。またそれは佛蘭西の有する天才が衰滅しないといふことを證明するものであるから。……我等の青年が之に先立ちし幾時代の者よりもより堅固であり、より大膽であり、より多くその責任を自覺してゐること、一言にして言へばより佛蘭西的であるといふことを視て、誰か歡喜せずにゐられやう』と。

今日までの利我的個人主義は個人を不自然に民族から離して、精神的に孤立せしめた。彼等はたゞ機械的に社會を作つてゐるだけで、生命の無限の源から共通の力を汲み合ふことをしなかつた。蜂が巣の中にとぢ籠つてゐたゞけで蜜を作ることができるか。そのやうに自我(イゴオ)の狹い殼だけを守つてゐる人間は、他からの營養の道を斷たれて、最後は餓死を待つの外かはない。彼等は自らの城塞に逃げ込んで、外部に敵を作つた捕虜である。その最後の運命は降服があるばかりだ。かやうな生活には一瞬の平和もない、唯だ欲望と無力な意志との間に不斷の爭があるばかりだ。彼等が悲觀者となり、冷笑者となり、努力否定者となり、ますく利己的になり、救ふべからざるディレッタンティズムに墮することは理の當然である。然るに生命の要求する個人主義はかやうな消極的のものではなからう筈である。生命は充實を要求すると同時に擴大を要求する。樹木の生長は充實即擴大である。即ち生命に於ては充

實の要求たる個人主義と擴大の要求たる民族主義とが一致調和してゐる。此に於てか、ひたすら自個の利に即した從來の個人主義が不自然な顯象であり、新興の民族主義、國家主義が眞に生命の要求してゐる個人主義であることが解かる。個人主義が正當に實踐せられ擴大せられれば、それが民族主義に行く。民族主義が生命の傳統を重んじ、その種子と郷土との自然の力に從て眞の天性に榮ゆるところに生々たる創造がある。かやうな社界は最早機械的に法律的に結ばれるばかりでなくて、共通の精神力に由て統一せられ、人間の諸活動が同一感激のリズムを作り、政治も藝術も同じ高尙な目的に向て働くやうになるのである。「皮相な法式を棄て、深い自個の本能を伸長せしめ、他の自我を傷けることなく眞の自由なる時代を組織するのが、最も善き社界である」と、モオリス、バレスの言つたその社會が近づきつゝあるのではないか。

世界主義より人道主義へ

近代の極端な利我的個人主義が國家や民族を無みし、從て非愛國的の空氣を漲したことは、前にも述べた通りである。その結果我等は期せずして消極的の世界主義者となつた。或者はディレッタンティズムの極、民族的本能の强ゐる國家といふ如き重い觀念に堪えられないで、無理に冷静を裝はうとした。ドレフエー事件に於て示した佛蘭西の青年の態度がさうである。レミイ、ド、グールモンが斯う言つた、「愛國（パトリエ）の爲めに死ぬことは眞の不愉快である、率直に言へば我等は愛國者でない」と。また或者は主義の上から同じ病弊に墮ちた。社界主義者に由て「世界勞働組合」が結ばれた。彼等にとつては自國の富豪よりも外國の同僚が親しいものであつた。國と國と戰つてお互に干戈をとる羽目に陷るよりは、同盟罷業の方が彼等には意味があつた。その極端な者になると便所で國旗を汚すことさへ敢てする例が歐洲にあつた。教育界でもこの非愛國熱が勢力を占めて、廿年前の巴里では、名聲ある「高等師範學校」の控室で堂々と非國家的の歌が合唱されたといふ話である。要するに病的個人主義に起因した一

種の世界主義(インターナショナリズム)が最近文明の一特徴だといつてよい。

それが「思想」の假面を被つては、絶對宗の哲學となつて現はれ、或は抽象的人道主義となつて現はれた。或る學者が斯う言つてゐる。『自分は唯だ理智を認める。理智には境界がない。自分はいかなる事情のもとにも、一人の理性家の爲めに百人の國民の生命を犧牲とすることを惜まない。自分は領土の保全などいふことには眼も呉れない。瞑想のできる一隅さへあれば自分は澤山だ』と。彼等の或者はカントの「純粹理性」や範疇的な「至上命令」を曲解して抽象的な世界愛を說いた。然るにこの抽象的人道なるものは、もと安逸をむさぼる時代精神の變形であつて、之ほど無意義なものはない。さればコスモポリタンの代表者の如く言はれてゐるトルストイでさへ斯う言つてゐる。『近代の最大罪惡は人道上の抽象的愛である、何處ともなく漫然存在する者に向つての非人格的の愛である。我々がまだ知らない人、まだ見たことのない人を愛するといふことは到て容易なことである。我等は何等の犧牲を拂ふ必要がなくして、同時に自分で樂しむことが能きる。かやうなことは良心の痴化である』と。

現代に於ける民族主義の勃興は生命の自覺に芽ざしてゐる。從てその要求する愛はより具體的でなければならない。郷土を離れ、家庭を離れ、國家を離れて何處に人道の花が咲くか。生命は汝の隣人から始まる現實の愛を要求して已まない。我等は餘りに理性や抽象を重んじ過ぎた。本能の力に復らなければならない。我等は人道の愛なる空漠たる觀念の夢から覺めて、生命の傳統の肥えた土に立脚し、卑近な然かし切實な愛から段々大きな愛を體驗せねばならぬ。要するところ、抽象的人道主義、消極的世界主義の魔醉郷を離れて、經驗の愛に生き、そして具象の人道主義を樹立せねばならぬ。

今回の戰亂は計らずも舊文明の缺點を曝露し、我等をしてその價値に對する深い疑問に逢着せしめた。我等は戰亂の悲慘を經驗するにつけ、今更のやうに今後の世界平和の維持策につき、痛切に思ひ廻さずにはゐ

られなくなつた。今日は我等が怠惰な牧羊者のやうにぢるはしい空想を突想してゐる場合でない。「理想の破産」時代が來たのだ。眼前に切迫しつゝある事象は切實な解釋を要求してゐる。今日の歐洲は干戈ヶ交へつゝ何れの國民も一般に精神的となり、道德的覺醒の兆を示してゐる。利己的個人主義は國民性の墮落を來し、一方軍國主義商賣主義を釀成して、戰亂の種子を胚胎せしめたことは、何人にも爭はれない確信となつた。そこで民族的自覺とともに、積極的の人道主義が起りつゝある。我等は舊文明の缺陷を悟り、新しい基礎の上に世界の文明を改造する急務に迫られてゐる。取も直さず、全世界の國民は從來の謬想と罪惡とを悔いて、再び生命の源に立歸りながら新意志の創造を企ててゐるのである。要するに、新文明の道程は、理性の惡戲たる抽象的世界主義から生命本能の衝動たる具象的人道主義へ向つてゐると謂ひうる。

神經主義より筋肉主義へ

利己的個人主義は重い頽廢の空氣を漲らせて、著しく人間の活力を消耗せしめた。その結果はデカダンの文明が榮えて、人は神經のみに手頼る世紀末が來た。『我等をして餘り長き間神經のみで生きてゐた國民の筋肉を再造すべく急がしめよ』とはモオパッサンの歎聲である。

果してその時期が來た。生命の本然と傳統とを重んずる民族主義の勃興は、人をして病的理性の薄明から醒めしめ、本能の眞活力に蘇らしめ、健全な筋肉主義を産まうとしてゐる。『考へることよりは寧ろ行ふことに熱心な、眞理よりは寧ろ幸福に飢えてゐる新時代』が來た。彼等は幻影を棄てて生命に復歸した。彼等はその力と、その體力と、そが偉大な胸と、喜びに飢えたそが勇ましい感能と、曠原の上に舞ふ鷹の翼のやうなそが翼とを驕としてゐる』。彼等は賢明で、大膽で、勇敢で、神經的でなく、感傷的でなく、自分にも他人にも至て嚴肅である。彼等は虛禮を惡み、努力に生きようとした。彼等には冷靜な批評的精神は欠けてゐたが、勇氣を以て實行することはその得意であつた。彼

等は單調な平和と睡たげな理想を厭んで意志の鐵砧を謳歌した。彼等は讀書をさへ嫌つた。くだ〱しい觀念の體系を説いた哲學書を披いたり、薄明の中に呻(うめ)くやうなデカダンの文學に讀み耽るよりも、彼等には呻りを立てるプロペラアの美が却て意義があつた。彼等は野外に生活し、そして不節制な情慾を知らなんだ。彼等はその肉體の健全と四肢の敏捷とを何よりのほこりとした。彼等は運動場に立つて、輕快に、しなやかに、仔馬のやうな動物的元氣を以て跳ね廻つた。彼等は稱讃すべき忍耐を以て、人生を戰場と見てゐる。彼等は薄暮埋頭裡の研究よりも愉快な努力を、ランプの下の不眠よりも輝いた白日を撰んだ。之が最近に於ける歐洲青年間の新運動であることはローマン、ローランの『ジャンクリストフ』の末卷を見ても解かる。以太利では未來派が之を代表して居り、北歐半島にも同樣な氣運の兆しつゝあることをクヌード、ハムズンの小説が告げてゐる。彼はその『淺い土』の中で、賢明で、意志の强い二人(ふたり)の青年實業家を描き、そして或る人物の口を通ほしてかう言つてゐる。『おまへ達の仲間の中に、麥でひどく損をした若者がある。俺はその男が好きだ。彼が何うするか見てゐ給へ。彼は決して損の爲めに絶望するやうな男ではない。彼は今ま新しい輸出品をこしらへてゐる。彼は諾威のタールで一つ冒險しやうとたくらんでゐる』と。ハムズンはかやうな意志の强い實行的な青年の間に新諾威の勃興を謳歌したのである。

要するに神經主義から筋肉主義へ――これが新文明の一特徴である。

猶ほ、以上の問題と關聯して、理性主義より本能主義――または直觀主義――または體驗主義――へ行く過程を述ぶべきであるが、之は哲學上の問題に亘るので、茲には省くこととする。要はいま迄の極端な理性主義、理想主義の反動として、本能の恢復に努力し、全的經驗を以てア、プリオリや範疇的知識に對抗せしめようとする運動が、矢張新文明の一道程である。生命の眞本能は煩瑣な論理を絶してゐる、我等をして生命を提げて全(インテグラル)的に經驗せしめよ、『勇氣を以て考へしめよ』と言ふのが若き時代の叫びである。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

女の世界

創刊五月號

毎月一日發行
菊版百五十頁
定價一部廿錢
郵稅一錢五厘

■強き者よ汝の名は女也……野依社長
■八百屋お七と白子屋お熊……白柳秀湖
■夫婦和合の秘訣……青柳有美
■一大長篇小說 五色筆 泉鏡花
■優待されて馬鹿になつた女……青柳有美
■生活の不安と戀の甘酒……松崎天民
■女學校よりも雜巾掛……幸田露伴博士

●女の獨立自尊……鎌田塾長
●三面記事評論……堺利彥
●性慾と家庭……羽太ドクトル
●日本の女に望む……和田垣博士
●江木榮子さんと私……日向きむ子
●男の手品的操縱法……松旭齋天勝
●淺智慧の疑問……立花貞世
●二つの魂に(小說)……水野仙子

女王の權威を以て婦人雜誌界に臨む

東京麴町區有樂町 實業之世界社 振替口座三四三三

（中付四の一）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

・愈々出來

荷風傑作鈔

わが文壇に於て小説の著述たるや專ら人物を描寫し事件の推移を述ぶるを以て足れりとなせしが、荷風氏の作品は全くこの傳習の範圍を跳躍して、汎く一時代の文明を背景となせる作家の思想感情並に官覺を披瀝し、勢ひ現社會の生活に對して忌憚なき批評をなすに至れり。小説は此に於て全く社會と密接し一段其の使命を重くし其の品位を高めたり。

■第壹編 習作時代の著作 ■第貳編 外遊時代の著作 ■第參編 歸朝後の著作■

■第四編 最近の著作 ■荷風小傳 ■荷風氏筆蹟 ■荷風氏肖像（時代々々異にせるもの四枚）■

■四六判天金背皮金色燦爛 ■總假名付ポイント二度刷 ■本文總紙數 七百餘頁

定價 金壹圓八拾錢

□□□ 東京市丸の内 三菱廿一號館 籾山書店 振替東京二四一七 □□□

長篇小説 雁

か…ん

醫學博士 森鷗外著

■拾五日發行■

「雁」は深く人情の機微に觸れ、知らずして僞多き男性の心と、知らずして罪深き女性の心とを捕へ來りて、明鏡の裡に其の眞體を照し出だす。蓋し先生が世情を穿ちて其靈筆を揮はれたる一大長篇たり。

■本書は出版界前例なき特異の裝幀材料を用ゐて■
■製本せらるべく、其詳細は暫く之れを發表せず■
■四六判三百五拾餘頁□定價金壹圓□送料不要■

吉井勇著

歌集 初戀

歌集 戀人

歌集 片戀

歌集 昨日まで

■各集短歌三百餘首■定價六拾錢■

若き生命の泉に溢るゝ、人間忘執の力は、闇を求め、戀を求め、惡に魅せられ、罪に索かる。げに毒草の花の麗しさは若き身内を流るる血の色に似たり。血涸れ肉衰へざれば作者の心なかなかに悟り得ず、悟り得ざる情念の强さは激流の如く迸る。其迸るところ、慟哭となり、歎喜となり、惑溺となり、嗟歎となり、怨恨となり、憂悶となる。一度本書を繙く讀者は白き紙の上に印されたる黑き活字のやがて赤き血の色と變ずるを見ん。

丸の内 …一號館 ■籾山書店■ 振替東京二四一七番 電話本局二一三二番

（中付四の三）

天平時代（三幕七場）

吉井勇

人物

吉備眞備（まきび）。（新たに唐から歸つた人）
同　淨子（きよこ）。（眞備の妹）
大伴道足。（眞備の友達）
沈（しん）鐘英。（眞備の連れて來た唐人）
一人の陰陽師。（その實は乞丐なのである）
一人の從者。
一人の老僕。
聾の乞丐（かたゐ）。
第一の乞丐。
第二の乞丐。

疱瘡を病んでゐる人々。

群集。

時代

天平七年。

場所

平城の都。

第一幕

第一場

吉備眞備の家の客間である。

上手には眞備の居間寢室などがあるが、柱から柱へ蘇枋色の帳が張つてゐるので、まるでその中を見ることが出來ない。

正面には窓があつて、庭に咲いてゐる李の花が見えてゐる。部屋の中央には卓子や椅子が置いてある。

下手には出入口があつて、ここから玄關へ通ずるのである。そこには扉がなければならぬ。

すべて唐を模倣した建築で、過渡期と云ふことが、一本の柱にも現はれてゐる。

三月の末の或る晴れた日の午後である。

（一人の從者が調度を片付けながら獨り言を云つてゐる。三十二三歳の脊の低い、色の黑い男である。）

從者。何だつてこんなに忙がしいんだらう。日本へ歸つて來てからと云ふものは、毎日毎日目が廻るやうな騷ぎだ。家におゐでになる時は、朝から晩までお客があるし、お留守になると片付け物が、まだ山のやうに溜まつてゐる。

（上手の奥の方で、從者に何か云ふ聲が聽こえる。）

從者。（上手に向つて。）はい、はい。よろしうございます。唯今持つてまゐります。それはちやんと心得てゐるのでございます。何の疎略がございませう。つい昨日お吩附になつたばかりでございますもの、なかなか忘れは致しません。

從者。（やつと上手に向つて。）はい、はい。何でございます。拜謁は明日の朝になつたとおつしやいますか。さあ、それならば早く献上の品を、揃へなければなりますまい。よろしうございます。唯今持つてまゐります。

（從者は直ぐに下手に入る。舞臺は暫く空虚になつてゐる。吉備眞備が上手から出て來る。四十三歳になる立派な男である。美くしい容貌と逞ましい體格とを持つてゐる。目に聰明の光があり、額に叡智の影がある。さうしてまだ心には流離の悲みが殘つてゐると見えて、時々面に現はれることもないではない。）

眞備。（部屋の中を歩きながら。）己は何をしに唐へ往つたのだらう。さうして己は何をしに日本へ歸つて來たのだらう。己は唐で何を學んだのだ。己はこれから何をすれば好いのだ。（立ち留まつて。）己には何にも分らない。

（眞備はいらいらした心持で部屋の中を歩いてゐる。二三度同じことを繰り返した後で、從者が一同に下手から出て來る。老僕は直ぐに下手に入る。）

從者。お吩附になつた品々を、唯今持つてまゐりました。

眞備。（椅子に腰を懸けて。）よし、よし。昨日渡した書き附はあるか。

從者。（書き附を出して。）はい。これにございます。

眞備。うん。見せろ。（從者の手から書附を取つて。）今己が讀み上げるから、品物と引き合せてくれ。

從者。かしこまりました。

眞備。（讀む。）唐禮百三十卷。大衍暦經一卷。大衍暦立成十二卷。揃つてゐるか。

從者。はい。ちやんと揃つてをります。

眞備。（續けて。）測影鐵尺一枚。銅律管一部。樂書要錄十卷。これも揃つてゐるだらうな。

從者。（前と同じやうに。）はい。ちやんと揃つてをります。

眞備。(又續けて。) 紘緬漆角弓一張。馬上飮水漆角弓一張。露面漆四節角弓一張。如何だ。みんなあるか。

從者。はい。みんなこれにございます。

眞備。よし、よし。(續けて讀む。) 射甲箭二十隻。平射箭十隻。これもあるな。

從者。(前と同じやうに。) はい。みんなこれにございます。

眞備。(頷いて。) うん。それで好い。それだけが陛下に獻上の品だ。(また獨り言のやうに。) 己はこんな書物や武器を持つて歸るために、唐へ留學したのではなかつたのだ。己はもつと大事なことをするために、唐へ留學をしたのだつた。(又立ち上つて歩きながら。) ああ、己はこれから何をすれば好いのだ。(立ち留つて。) 己には何にも分らない。

從者。私はもうあちらにまゐつてもよろしうございますか。

眞備。(默つて頷く。)

從者。(禮をして下手に往き掛ける。)

眞備。(呼び留めて。) 待て。待て。

從者。(立ち留まつて。) 何か御用でございますか。

眞備。(怒つたやうな調子で。) 用があるから呼んだのだ。あの唐人は如何してゐる。

從者。ああ、あの沈(しん)鐘英でございますか。

眞備。さうだ。あの年寄りの唐人だ。

從者。昨日から氣分が勝れぬと申しまして、今日は朝から臥せつてゐるやうでございます。食物(たべもの)や飮水が變りましたので、身體(からだ)に障つたのでございませう。

眞備。ひどく惡い様子かな。

從者。いや、さほどには思はれません。今朝なども含嗽(うがひ)を致しに、外へ出てまゐつた位でございます。

眞備。さうか。しかし年寄りのことだから、よく氣を付けてやるが好い。それにはるばる他國に來て姻戚(みより)のないのも心細からうから、時々は見舞つてやるが好い。あれも可哀さうな年寄りだ。天晴(あつぱれ)人

[illegible]に勝れた腕を持つてゐながら、世に出ることが出來なかつた、不幸な樂人なのだから。（改めて從者に）お前はあの年寄りが、箜篌を彈くのを聽いたことがあるか。

從者。はい。お孃樣にお敎へ申してゐるのを、二三度聽いたことがございます。

眞備。如何だ。あんな美しい音樂を、お前は今まで聽いたことがあるまい。己は圖らずも或る街端頭で、貧苦に窶れてゐるあの男を見出したのだ。さうして今度連れて來ることになつたのだが、己が唐にゐる長い月日の間にも、あんな樂人には出會つたことがなかつた。（何か一寸考へた後で。）氣分が勝れぬと云ふのは心許ない。早速醫者を呼んでやれ。さうして大事にかけてやるが好いぞ。よし、よし。往け。

從者。はい。

（從者は急いで下手に入る。）

窓から李の花が散り込んで來る。靜かな春の夜である。暫くの間は部屋の中を歩く眞備の跫音が聽こえるばかりで、虻の唸る聲さへも聽こえない。慵うい やうな寂寞が續いてゐる。

從者がまた下手から出て來る。）

眞備。（咎めるやうに。）何だ。

從者。大伴道足樣がお見えになりました。

眞備。さうか。お通し申せ。

從者。はい。

（從者は下手に入る。眞備は椅子に腰を懸けたけれども、何だか落着かない樣子である。

從者に案内されて、道足が下手から出て來る。眞備の舊い友達で、今は南海[illegible]の鎭撫使をしてゐる武人である。四十歳位の逞ましい男で、頬から頸へ懸けて眞つ黑な鬚が生へてゐる。

從者は直ぐに下手へ入る。）

眞備。やあ、ずゐぶん暫く會はなかつたね。まあ、懸け給へ。（前の椅子を指差す。）

道足。うん。(腰を懸けて。) 餘つ程變つたらうと思つてゐたのだが、やつぱり君は相變らずだなあ。如何だ。唐ではいろいろ面白いことがあつたらう。

眞備。なあに別段面白いこともなかつたよ。何のために唐へ往つただか、自分でもまるで分らない位だ。

道足。まさかそんなこともあるまい。君は幾年向ふへ往つてゐたのかなあ。

眞備。さうさ。靈龜二年に往つたのだから。足懸二十年往つてゐた譯だ。二十年と云へばずゐぶん長い。

道足。そんなになるかなあ。さう云へば君が唐へ立つた時には、己はまだ二十位の青年だつたからねえ。大に君を羨んだものだ。

眞備。羨まれることがあるものか。己がこの二十年の間何をしてゐたか君は知つてゐるか。君にはよく分らないだらう。

道足。(一寸困つたやうな顔付で。) うん。

眞備。(やゝ興奮して。) 己は何にもしなかつたのだ。己は唯だ机の前に座つて、書物に目を曝しながら、一年二年時の過ぎて往くのを、一人でぼんやり見送つてゐたのだ。

道足。しかし君の評判はすばらしいものだつたぜ。君が唐から歸つて來ると云ふことが知れると、この都に住んでゐる人で君の噂をしないものは、ないと云つても好い位だつた。

眞備。(悲しさうに笑つて。) それはみんな己のことを、よく知らないからのことだ。二十年も唐へ往つてゐたから、さぞ立派な者になつて歸つて來るだらうと思つて、みんな待つてゐたのに違ひない。さうして己が何かすばらしい仕事でもするやうに思つてゐるのだ。まるで奇蹟のやうなことでもして見せると思つてゐるのだ。如何だ、君。さうだらう。

道足。(默つて領く。)

眞備。それが如何だ。己は二十年唐へ往つてゐたけれ

人では死なかつたのだ。みんなより多くの文學は知つてゐるかも知れない。みんなより多くの書物は讀んでゐるかも知れない。みんなより多くの智識は持つてゐるかも知れない。しかしそれが何になる。唯それだけのことぢやないか。

道足。何故君はそんなことを云ふのだ。己は君からそんなことを聽かうと思つてやつて來たのぢやない。

眞備。さうか。つい心に思つてゐるものだから、隔てのない君を見ると、それが云ひたくなつたのだ。しかしまあもう少し己の云ふことを聽いてくれ。

道足。そりやあ何んでも聽くけれども、何だか君は今日非常にいらいらしてゐるやうだなあ。

眞備。（感傷的になつて。）日本に歸つてからずつとかうなのだ。難波津に着くまでは、別段こんな心持も起らなかつたのだが、船を下りてみんなの顔を見る目が、昔とまるで變つてゐるのだ。昔のやうな親しみが消えて、他人がましい目ばかりなのだ。己から何か求めやうとするやうな、卑しい色の目ばかりなのだ。己を嘲つて笑はうとするやうな、冷たい光の目ばかりなのだ。二十年前に日本を立つ時には、こんな目ばかりに見送られはしなかつた。

道足。（思ひ出したやうに。）ああ、あの女も可哀さうなことをしたよ。君が歸つて來るまで生きてゐたかつたらうに。

眞備。（驚いたやうに。）そのことは云はないでくれ。あの女はもう己が立つ時から惡かつたのだ。（暫く目を閉ぢて何か考へた後で。）己はそれから人に會ふ度毎に、何だか責められてゐるやうな氣がして仕方がないのだ。己を尋ねて來る人は、みんな己がすばらしい仕事でもするやうに思つてゐる。奇蹟のやうな

ことでもして見せるやうに思つてゐる。ところが己はこれから何をすれば好いのか分らないのだ。如何だ、君。いらいらしずにはゐられないだらう。

道足。(頷づいて。) そりやあいらいらするのも無理はないが、そんなことは如何でも好いぢやないか。して君は何かしたいと思ふ仕事のないことはなからう。

眞備。(強く力をこめて。) それはある。しかしそれは怖ろしいことだ。

道足。何だ。怖ろしいことと云ふのは。

眞備。それは人の目を覺すことだ。

道足。それが何故怖ろしいことなのだ。

眞備。君にはそれがどんなに怖ろしいことだか分らないか。多くの人が目を覺まして見ろ。そこにはどんなことが起ると思ふ。先づ始まるのは掠奪だ。次に來るのは饑饉だ。次に來るのは疫病だ。さうして最後に來るのは戰爭だ。

道足。馬鹿な。そんなことがある筈はない。それはみんな君の空想だよ。

眞備。(大變興奮して。) いいや、さうぢやない。まあ、聽きたまへ。さうして一時は世の中が滅茶々々になつてしまふのだ。毎日毎日幾千人と云ふ人が殺されるのだ。毎日毎日幾萬人と云ふ人が渇え死ぬのだ。あつちにも人が殺されてゐる。こつちにも人が死んでゐる。(突然思ひ出したやうに。) 己は昨夜での時の夢を見たが、それは怖ろしい夢だつた。

道足。ふうん。どんな夢だ。

眞備。(夢の話をする。) 何でも夜のやうだつた。月が眞つ赤な暈を着て、何時までもひとつ所を動かずにゐるのだ。絶えず地震が揺つてゐるので、地面はもう皺だらけになつてゐて、うつかりするとその裂け目に、吸ひ込まれさうで歩くことも出來ない。己は外へも出られないから窓に凭つて、じつと往來の方を眺めてゐると、その裂け目から湧いて來

るやうに、人の死骸が現はれて來るのだ。何處から運ばれて來るのか分らない。後から後から押し上げるやうに、人の死骸が地面の上に、一面に廣がつて往つたかと思ふと、何處からともなく大きな黒い手が現はれて、その死骸を攫つて往つてしまつたのだ。

道足。うん。それから如何した。

眞備。それだけなのだ。（調子を變へて。）君。「多くの人が殺されるのも、多くの人が死ぬのも、唯殺されたり死んだりするのではない。人間の血を肥料にした土には、きつと何か生へなければならない。

道足。（深く頷いて。）君の云ふことはやつと分つて來たやうな氣がする。

眞備。（微笑しながら。）如何だ。怖ろしいことだけれども愉快なことだ。殘酷なやうに見えて慈悲なことだ。不幸が來るやうだが幸福が來るのだ。しかしみんなは己からこんなことを聽かうとはしてゐない。天文のことや法律のことを、己から聽かうとしてゐるのだ。天文が何だ。法律が何だ。それはみんな文明の道具に過ぎない。本當の文明はそんなものぢやない。（熱して顏が赤くなる。）

道足。（制するやうに。）君は今日ひどく興奮してゐるよ。もうその話は止さうぢやないか。今度ゆつくり聽くとしやう。（言葉を改めて。）如何だ。今夜己の所へやつて來ないか。一所に晩餐でもやらうぢやないか。

眞備。うん。往つても好い。（それでも何か物足らなさうに。）しかし今日は好い氣持だ。何だかさつぱりしたやうな氣がする。今日まで誰にも話すことが出來ないでゐたのに、君に會つて丁度好かつた。これで少しはいらいらした心持も直るだらう。しかし君は迷惑だつたらうな。

道足。なあにそんなことはないよ。しかし今君が話したことはあんまりみんなに云はない方が好いよ。

みんなは一寸したことにも驚くからなあ。

眞備。そりやあ誰にも云やあしない。今日始めて君に話したのだ。さうだ。何にもお構ひしなかつたね。

（人を呼ばうとする。）

道足。（止めて。）何にもそんな心配には及ばないよ。己はもうお暇するから。（一寸躊躇した後で。）お妹さんは如何したい。

眞備。家にゐる筈だよ。

道足。大きくなられたんで驚いたらうな。

眞備。うん。僕が立つ時にはまだ嬰兒(あかんぼ)だつたんだからねえ。

道足。さうさ。かなり長い間だつたからなあ。

眞備。（歎息するやうに。）うん。二十年と云へばかなり長い。

（この時下手から從者が慌ただしく出て來る。）

眞備。（叱るやうに。）何だ。騷々しい。

從者。唯今怪しい風體の者がまゐりまして、是非お目に懸りたいと申してをります。

眞備。（機嫌を損じて。）知らない者には誰にも會はぬと、今朝吩咐けて置いたばかりぢやないか。

從者。はい。

道足。（眞備に。）誰だ。

眞備。誰だか分らない。

從者。それは幾度も申しまして、斷はりましたのでございますが、中々歸らうとも致しません。

眞備。もう好い。一々そんなことを取り次いで如何するのだ。

從者。はい。

道足。（また眞備に。）何者だらう。

眞備。さあ、何者だか。

從者。自分では陰陽師だと申してをります。骸骨のやうに痩せ削(こ)けた、眇目(すがめ)の男でございます。

眞備。（聽き咎めて。）何だ。陰陽師だと。（何か考へてゐる。）

從者。（構はずに。）しかしそれは自分でさう申してゐる

（下手の方から騒々しい物音が近付いて來る。）

道足。やあ、こつちへやつて來る樣子だ。何か大きな聲でわめいてゐるな。

從者。（驚いて。）如何したのでございませう。

（從者は急いで下手に走つて入る。騒々しい物音がだんだん近付いて來るけれども、眞備は唯默つて椅子に腰を懸けてゐる。顔に現はれる苦痛の表情を隱すことが出來ない。道足は堪へられずに劍を鳴らして立ち上る。）

第二場

眞備の家の庭園の一部である。正面に家の壁があつて、そこには客間の窓が開かれてゐる。窓から中の蘇枋色の帳が見える。上手も下手も可なり木立が繁つてゐる。その間の空地には、氈のやうに美しく、青い草叢が萌え出してゐる。その空地の上手

その日の午後遲く、もう黄昏と云つても好い時刻である。

（眞備の妹の淨子が一人で樹に凭れながら箜篌を彈いてゐる。目のぱつちりした、髪の毛の濃い、コケツテシユな女である。二十三歳になるのだけれども、まだ十七八の少女にしか見えない。）

淨子。（箜篌を彈きながら歌ふのである。）

君を思ひて樹の蔭に。
李花咲く樹の蔭に。
昨日も今日も夢うつつ。
明日も明後日も夢うつつ。

（眞備が上手から出て來る。）

眞備。（妹に。）おい。

淨子。（驚いて。）まあ、びつくりした。お兄樣は人が惡いわね。默つて聽いていらつしやるなんて。

眞備。さう云ふ譯ぢやあないが、偶然聽いてしまつたのだ。……一體今の唄は誰が作つたのだ。

浄子。誰が作つたのだか知りませんが、近頃都で流行(はや)つてゐる唄なんですの。

眞備。さうか。お前は中々上手だな。そんなに箜篌が弾けるとは、己は少しも知らなかつた。如何だ。もう少し歌つて聴かせてくれないか。

浄子。(困つた顔付で。)何だかさうおつしやられると歌へませんわ。

眞備。(笑ひながら。)さうか。それなら好い。たつてとは云はない。([illegible]に息んだ後で。)お前も己の留守の間はさぞ寂しかつたらうな。お父様のお亡くなりになつた時も、お母様のお亡くなりになつた時も、己は如何かして歸りたいと思つたのだけれど、到頭歸ることが出來なかつた。

浄子。(何となく悲しさうに。)私も歸つていらつしやるかと思つて、お便りの來るのを待つてをりました。

眞備。さうか。後はお前一人ぎりだからなあ。己も向ふに己が立つ時はまだお前は嬰兒(あかんぼ)だつたから、向ふにゐる間は何時までもお前が、嬰兒でゐるやうな氣がして仕方がなかつたのだ。

浄子。まあ。(聲を立てて笑ふ。)

眞備。歸つて難波津に着いた時も始めは如何してもお前だと云ふことを、己は信ずることが出來なかつた。お前だつてさうだらう。

浄子。ええ。私の方は仕方がありませんわ。まるで知らないと云つても好い位なんですもの。だけど私は直ぐ分りましたの。

眞備。ふうん。如何して。

浄子。それは分りますわ。目付や何かがお母様そつくりなんですもの。

眞備。うん。己はお母様似ださうだな。

浄子。ええ。よく似ていらつしやいますわ。

(眞備は急に立ち上つて庭を歩く。長い間二人とも黙つてゐ

眞備。（獨言のやうに。）うちの庭には昔からこんなに李の樹が植はつてゐたのか知らん。

淨子。いいえ。それはお父様がお亡くなりになる前に、わざわざお植えになりましたの。

眞備。さうだらう。如何も記憶がないと思つてゐたのだ。ああ、さう云へば高麗から來た大きな犬がゐた筈だが、あれはもう死んでしまつたらうなあ。

淨子。ええ。今ではあの子がをりますけれど、人を嚙んでいけませんの。この二三年と云ふものは、鎖で繋いだきりになつてをりますの。

眞備。ふうん。人を嚙むのか。

淨子。ええ。それは變な犬なんですの。夜になつて外へ出すと、星を見ては吠えるのでございます。それでございますから夜になると、星の見えない所へ入れてしまひます。

眞備。（何ごとか感動して。）さうか。星を見て吠えるのか。

淨子。さう云へばお兄様に、お話しなければならないことがございますけれど如何しませう。

眞備。何だ。云つてごらん。

淨子。ええ。（考へてゐる。）

眞備。何も考へることはないぢやないか。關はないから話すが好い。

淨子。あのね。お兄様が唐から連れていらしつたあの年寄りの方は、何だか氣味の惡い方ですわね。

眞備。何故。（じつと妹の顔を見る。）

淨子。（思ひ切つたやうに。）實はかう云ふことがございますの。さうですわね。もうかれこれ十日も前のことでせうか。生溫い風が吹いた、厭な晩がございましたわね。ほら、うちの門の前に住んでゐる漆造りの女房が、氣が狂つたと云ふ晩のことでございます。

眞備。ああ、そんな晩があつたけな。

淨子。私が臥せつてから間もなく、窓の下で何だかごとごと音がするのでございます。最初は野良犬か

何かが寢てゐるのだと思ひまして、氣にも懸けなかつたのでございますが、よく聽いて見ると如何もさうではないらしいのでございます。

眞備。（眉をひそめて。）うん。

淨子。私も何だか氣味が惡くなりましたから、そをつと窓から覗いて見ますと、あの年寄りの唐人が外に立つてゐるぢやございませんか。部屋の中が眞つ暗なものですから、こつちから覗いてゐるのも氣が付かずに、じつとこつちを凝視めてゐるのでございます。

眞備。（立ち留まつて。）それから如何した。

淨子。李の枝を透して洩れて來る月の光が、丁度あの年寄りの額の所に當つて、皺までありあり見えたのですが、その時の顏付と云つたらそれは何とも云へない程悲しさうなんでございます。私は長く見てゐることが出來ないで、直ぐまた臥せつてしまひましたが、曉になつて外を覗いた時には、もうそこには誰もゐませんでした。

眞備。ふうん。如何したのだらうな。それつきりもう變なことはなかつたのかい。

淨子。いいえ。それが毎晩なんでございます。毎晩私の部屋の窓の外に立つては、じつとこつちを凝視めてゐるのでございます。それですから私は何だか近頃夜の目もよく眠られません。それでもこんなことをみんなに云つたら、あの年寄りが可哀さうだと思つて、今日まで默つてゐたのでございます。ねえ、お兄樣。あんな年寄りを、如何して唐から連れていらしつたの。

眞備。あんまり可哀さうだつたから連れて來たのだ。あれは不幸な樂人なのだ。お前はあの男の箜篌を聽いたことがあるだらう。

淨子。ええ。私もあの人の箜篌を聽いて、ほんとに好いと思ひましたわ。二三度敎へでも貰ひましたの。（急に憐れむやうな心持になつて。）ああ、ほんとにあの人

ずに置いて下さい。あの人を責めずに置いて下さい。後生ですから。

眞備。年寄りのことだから、まさか馬鹿な眞似もしやしまいけれど、そんなことをするのは如何云ふ譯だらう。お前もよく氣を付けてゐなければいけないよ。

淨子。ええ。

眞備。うん。さう云へば思ひ當ることがある。何時だつたか忘れたが、丁度今日のやうな靜かな夕方のことだ。お前はお前の部屋の中で、さつきの唄を箜篌で彈いてゐたことがあつたらう。ひよつとするとその時のことはお前は覺えてゐないかも知れない。まるで夢のやうな夕方だつたから。

淨子。（靜かに頷く。）

眞備。己が庭を散歩しようと思つて、丁度ここの所へやつて來ると、あの年寄りがぼんやりそこに腰懸

音に聽き惚れてゐるのだ。己が直ぐ傍を通るのにも氣が付かない樣子だつたが、己が向ふの木立の蔭から見てゐると、やがて思ひ切つたやうに立ち上つて、ふらふらと歩いて往つてしまつたのだ。

淨子。まあ、如何したんでせう。

眞備。己にはあの年寄りの心持が、はつきりと分つてゐるけれども、それをお前に知らせるのは、如何も兄として出來難いことだ。しかしこれだけのことは云つても好いだらう。（じつと妹の顏を見ながら。）つまりあの男はあの年になるまで、この世の歡樂と云ふことを知らなかつたのだ。それがやつと近頃になつて目を覺ましたのだ。しかし目を覺ますと云ふことは怖ろしいことだ。己は唯それだけが氣懸りでならない。

（從者が何か搜すやうな樣子で上手から出て來る。眞備を見付けて傍に近寄る。）

眞備。（從者に。）何だ。

從者。お車の支度が出來ました。

眞備。さうか。今直ぐ往く。

從者。はい。

（從者はまた上手に入る。）

淨子。何處かへお出懸けになるのですか。

眞備。うん。一寸大伴の家へ往つて來る。晩餐に呼ばれてゐるのだから。（注意深い目付をして。）今の話のことは自分でもよく氣を付けなければいけないぞ。

（眞備が上手に往からとすると、妹もそれに續く。）

眞備。（留めて。）毎日のことだ。見送るには及ばない。

淨子。いいえ。それでも。

（眞備が上手に入ると、妹も續いて上手に入る。箜篌は樹に寄せ懸けたままになつてゐる。

舞臺は空虚になつたまま長い間經過する。

下手から汁鐘英が出て來る。六十歳位の唐人で、髮ももう眞つ白である。目が鈍く光つて、喘ぐやうな呼吸遣ひも、哀れな程に窶れてゐる。箜篌を見付けて奪ふやうに取り上げたかと思ふと、二三度悲しげに彈いて見る。さうしてそれを抱き緊めるやうにして、はらはらと涙をこぼしたのである。

遠くの方で車の軋る響と鞭の音とが微かに聽こえる。）

第二幕

第一場

眞備の家の外である。

上手から下手に懸けて、かなり高い築土（ついち）がある。その前は直ぐ往來になつてゐる。連日の旱（ひでり）續きで往來の土は白く乾き、築土の壁は崩れて落ちた所がある。柳の樹がまるで亡靈のやうに、たつた一本立ち枯れてゐる。その株の所に薬石が墓のやうに、たつた一個轉がつてゐる。八月の中旬の夜である。第一幕からは凡そ半年程經過してゐる。

（三人の乞丐が往來に佇んでゐる。一人は聾の乞丐で、もうかなりの年寄りであるが、ずつと石に腰を懸けたまま少しも動かない。一人で同じことを繰り返して呟いてゐるのである。

は絶えず動く。
柴土の中からは頻りに犬の吠える聲が聽こえる。)

聾の乞丐。(空を見上げながら。) また今夜もあの星が見える。まるで血のやうに眞つ赤な星だ。

第一の乞丐。何だ。いやに犬が吠えるぢやねえか。

第二の乞丐。さうよ。ありやあここの氣狂ひ犬だらう。

第一の乞丐。(驚いて。) 氣狂ひ犬だと。こゝへやつて來やしねえか。

第二の乞丐。なあに大丈夫だ。己はちやんと知つてゐるんだ。太え鐵の鎖で首つ玉を繋いであるんだからな。

第一の乞丐。さうか。それなら好いけれど、如何も己は心配でならねえ。己は犬は大嫌れえなんだ。

第二の乞丐。何を云つてゐるんでえ。大丈夫だと云ふのに。

聾の乞丐。(空を見上げながら。) また今夜もあの星

が見える。まるで血のやうに眞つ赤な星だ。

第一の乞丐。(聾の乞丐に。) お爺さん。何を云つてゐるんだい。

第二の乞丐。聾にものを聽いて如何するんだ。また爺め星を見て何か云つてゐるのよ。

第一の乞丐。ほんとにをかしな爺さんだなあ。星を見て何が面白えんだらう。

第二の乞丐。さうばかりも云はれめえさ。爺さんは耳が聽こえねえもんだから、星のやうなものばかり目に付くのだ。

第一の乞丐。さう云へばこの二三日、星がひどく殖えたやうだぜ。

第二の乞丐。まさかそんなこともねぇだらうが、から空旱ばかりが續くと、星の色までが變つて來る。

第一の乞丐。何だか己は今一寸星を見たばかりで、咽

喉が渇いてひり付くやうだ。

第二の乞丐。己も水が呑んたくつて堪らねえ。

(長い間の沈默がある。)

聾の乞丐。(やつぱり空を見上げながら。)、また今夜もあの星が見える。まるで血のやうに眞つ赤な星だ。

第一の乞丐。まだ犬が吠えてゐるな。畜生。何であんなに吠えやがるんだらう。

第二の乞丐。やつぱりあいつも饑じいからよ。

第一の乞丐。まあ、よく聽いて見ろ。あの吠え聲の悲しさうなことは如何だ。

第二の乞丐。へつ、犬よりもこつちが吠えたくならあ。今日の暑さは如何だ。それだのに汗も出ねえ。

第一の乞丐。出ねえ筈だ。水も呑みやあしねえぢやねえか。一寸地面に觸つて見ろ。まだこんなに熱がある。

第二の乞丐。(手で地面を撫でながら。)蹠ぢやあ分らねえが、手で觸るとよく分るなあ。

第一の乞丐。星が眞つ赤に見える筈だ。

第二の乞丐。あの星は燒けてゐるのだ。

(長い間の沈默がある。)

聾の乞丐。(やつぱり空を見上げながら。)また今夜もあの星が見える。まるで血のやうに眞つ赤な星だ。

第一の乞丐。爺め。まだやつてらあ。

第二の乞丐。あの爺さんは一體以前は何なんだらう。

第一の乞丐。お前まだ知らねえのか。あいつは元は大工なんだよ。

第二の乞丐。さうか。それが如何して乞丐になつたんだい。

第一の乞丐。興福寺の塔が出來る時に、足場から落ちて怪我をして、それで聾になつたのよ。

第二の乞丐。ふうん。あすこから落ちゝやあ堪らねえな。

第一の乞丐。それから到頭あんなになつちまつたんだが、あの塔さへ出來なけりやああんなにはなら

第二の乞丐。こ……、こん……なもんだ
なあ。
第一の乞丐。(笑って。)佛様も罪なことをするものよ。
第二の乞丐。己は如何しても佛は嫌(きれ)えだ。
(長い間の沈默がある。)
聾の乞丐。(やつぱり空を見上げながら。)また今夜もあの星が見える。まるで血のやうに眞つ赤な星だ。
第一の乞丐。何でえ厭な晩だらう。如何も己はあの犬の吠え聲が氣になつてならねえ。
第二の乞丐。まるで今にも死にさうな聲だな。聽いてゐるとだん〳〵怖(こわ)くなつて來る。
第一の乞丐。地震でもあるのかも知れねえ。それでなくつちやあんなに吠える譯はねえと思ふよ。
第二の乞丐。今日は何時にねえ暑さだつたからなあ。空が黄いろく燃えてゐるやうだつた。こんな時にはよく地震が揺りたがるものよ。

んな犬は殺しちまふ方が好いのだ。
第二の乞丐。全くだ。氣狂ひ犬を生かして置く奴があるものか。
第一の乞丐。屠者(えとり)は喜んで連れて往くだらう。あいつは高麗から來た犬の種ださうだから。
第二の乞丐。そんな犬か。己はちつとも知らなかつた。
(第一の乞丐は上手を見て驚いたやうな顔付をする。)
第一の乞丐。やつ、見ろ、見ろ。あすこからまたあいつがやつて來るぜ。
第二の乞丐。あいつとは誰のことよ。
第一の乞丐。星明りでよくは分らねえけれども確かにあいつだ。
第一の乞丐。(やつぱり同じやうに。)あいつとは誰のことよ。
第一の乞丐。あの陰陽師とか云つてゐる怪しい男だ。
第二の乞丐。見ろ。だんだんこつちへやつて來るぜ。

（二人の乞丐はじつと上手の方を見てゐる。）

聾の乞丐。（突然叫ぶ。）あつ、星が落ちた。あの血のやうに眞つ赤な星が落ちた。

（二人の乞丐は驚いて聾の乞丐の方を見る。聾の乞丐はやつぱり空を見上げてゐる。）

第二場

眞備の客間である。

第一幕の第一場と同じ部屋。しかし正面の窓の外には、樹の間を洩れた星が見え、上手にあつた蘇枋色の帳は、鬱黄の帳と變つてゐる。

卓子の上には燭臺があつて、燈心が靜かに燃えてゐる。

その夜の丁度同じ位の時刻である。

（眞備と道足とが向ひ合つて椅子に腰を懸けてゐる。眞備の顔には深い苦悶の色が見える。日本へ歸朝して來た時分のやうに、いらいらした心持はないが、何となく憂愁を感じてゐるやうである。

道足はあれから任地へ往つて、二三日前に上京した。顔も手足も日に燒けて、ひどく疲勞してゐる樣子である。

犬の吠える聲が絶えず聽こえてゐる）

道足。如何だ。その後は。

眞備。相變らずだ。唯この前君に會つた時よりは、少し心が落着いたかと思ふ。もうあの時分のやうないらいらした心持にもならなくなつた。己が何にもしないのを見て、みんなもう諦めたやうだ。

道足。（じつと眞備の顔を見ながら。）しかし君の顔色は、この前會つた時よりも惡いやうだが。

眞備。（投げるやうな調子で。）惡いのは當り前だ。心の中の苦悶は前よりも一層烈しいかも知れない。

道足。それはまた如何云ふ譯だ。

眞備。君はもう忘れたのか。己にはしたいと思つてゐることが、あると云ふことを。

道足。しかしあの時分には君は、何をして好いか分らないと云つてゐたぢやないか。

眞備。それは己が迷つてゐたからだ。己のしたいと思つてゐることを、怖れてゐたからのことだ。しか

やうな氣がする。みんなひとりでに目を覺まし懸けたやうだからな。

道足。さうか。如何して君にはそれが分る。

眞備。それが分らないで如何しよう。

道足。しかし己は分らない。

眞備。そりやあ君には分らないかも知れない。しかし己にはちやんと分つてゐる。（感激を隱しきれずに。）己の耳には何處からともなく、聽こえて來る聲があるのだ。その聲は誰の聲だか分らない。晝でも聽こえることがある。また夜でも聽こえることがある。晝その聲を聽く時には、風の聲ではないかと思ふ。夜その聲を聽く時には、星の聲ではないかと思ふ。人の聲でないことだけは確かだ。人よりももつと力のあるもの丶聲だ。人よりももつと強いもの丶聲だ。人よりももつと大きいもの丶聲だ。（一寸考へた後で。）その聲は己にかう云ふのだ。に一度位しかやつて來ない、怖ろしい時が來たぞ。幾百里と云ふ海を渡り、幾千里と云ふ潮を越えて、始めて日本へやつて來た、あの怖ろしいものが見えないのか。形のあるやうで形のない、形のないやうで形のある、あの怖ろしいものが見えないのか。見ろ。よく目を開いて海の方を見ろ。蜃氣樓のやうな美しさもなく、龍卷のやうな凄まじさもないが、それは確かに見える筈だ。

道足。ふうんそれは一體何なのだ。それが君には見えたのか。

眞備。（頷いて。）見えたとも。見えないで如何しよう。己は始めてその聲を聽いた時には、ひとりでに身體が顫へるやうだつた。さうしてその聲の云ふがまゝに、己の目は海の方に向つたのだ。己は如何してもその聲に抗ふことが出來なかつたのだ。さうして都からは見えない筈の海が、己の目にはは

つきり映つたのだ。しかしそれは幻だつたかも知れない。直きに消えてしまつたから。

道足。さうして怖ろしいものと云ふのは何だ。一體君は何を見たのだ。

眞備。船だ。

道足。何、船だと。

眞備。君はなあんだと思ふかも知れない。しかし己は船を見たのだ。その船と云つても、何も變つた船ではない。遣唐使の一行を載せて、唐から歸つて來たあの船なのだ。それが己にはその時何だか怖ろしいもののやうに見えたのだ。ほんの一瞬間のことだつたけれども、己はその間にいろいろのことを考へたのだ。いよいよ怖ろしい時が來たなと思つた。眠つてゐる者は殺されるのだ。弱い者は殺されるのだ。卑しい者は殺されるのだ。醜い者は殺されるのだ、さうして後に生き殘つた者から、新しい時代が始まるのだ。しかし己は默つて見てゐることは出來ない。己は多くの人の殺されるのを、默つて見てゐることは出來ない。一人の死を以て萬人の死に代らなければならない。

道足。さうして君は如何しようと云ふのだ。

眞備。（熱心に。）己は己のしたいと思つてゐることをしなければならなくなつたのだ。しかしそれは多くの人々を喜ばすことは出來ないかも知れない。そんなことは如何でも好い。己は己のしたいと思つてゐることをしなければならない。

道足。分つた。分つた。この話はもう止さう。君は直きに興奮するから、如何も苦しさうで聽いてゐられない。

眞備。それは全く苦しいのだ。（氣が付いて。）しかし君は何か己に用事があつて來たのぢやないのかね。

道足。實は君に話があるのだ。今の君の話を聽くと、如何もこのことは君でなければ、話しても仕方がないやうな氣がする。

道足。君は近頃の空を見たか。しきりに星の飛ぶ空を見たか。

眞備。うん。見た。太白と晨星とが重なり合つたことさへある。

道足。それから君は近頃の疫病を知つてゐるか。しきりに人の死ぬ疫病を知つてゐるか。

眞備。うん。知つてゐる。太宰府の方ではもう千人あまりの人が死んださうだ。

道足。それは如何云ふ譯だ。

眞備。（ぎくりとして。）何だと。

道足。その前に己はこれだけのことを話して置かなければならない。己が南海道の任地へ歸ると間もなくのことだ。己は一人の年寄りの漂泊者に出會つたのだ。その男は何處から來たか分らなければ、何處へ往くかも分らない。唐のことも知つてゐれば、高麗のことも知つてゐた。その漂泊者は己をら眞備に會つて話を聽けと云ふのだ。

眞備。何だ。その話と云ふのは。

道足。今云つたことだ。

眞備。（頷いて。）うん。さうか。

道足。しかし己は如何してもその年寄りの漂泊者の云ふことを、信じることが出來なかつたのだ。己は唯不思議な男に會つて、不思議なことを聽いたものだと思つたぎりで、まるで忘れてしまつてゐると、そのまゝではゐられないことが起つた。

眞備。（じつと道足の顔を見てゐる。）

道足。それは人が聽いたならば、つまらないことだと思ふかも知れない。博勞がその友達を毆り殺したのだ。さうしてその博勞は人を殺して置きながら、こんなことを云つたのだ。（博勞の言葉を眞似て。）あいつあ弱えから殺したのよ。（また元の調子に戻つて。）あ博勞の人殺しなぞは、世間によくあることだけれ

ど、己はこいつの云つた言葉を聽いて、こりやこのままではゐられないなと思つたのだ。

眞備。（頷く。）

道足。そのうちにその年寄りの漂泊者の云つたことが、だんだん本當になつて來たのだ。空には怪しい星が現はれ、筑紫には怖ろしい疫病が出來る。さうして怪しい星が夜毎に飛び亂れるとともに、怖ろしい疫病も日毎に廣がつてゆく樣子だ。今に南海道の方までもやつて來るのに極まつてゐる。こりやあ如何したら好いのだらう。

眞備。如何にもすることが出來ないとも云へるし、如何にでもすることが出來るとも云へる。

道足。それは如何云ふ譯だ。

眞備。考へやうひとつでさうなるのだ。唯自分の力を信ずるか信じないかと云ふことでどつちにもなるのだ。君は自分の力を信じてゐるか。

道足。うん。己は信じてゐる。

眞備。それならば大丈夫だ。それならば君の思つてゐる通りに、如何にでもすることが出來るだらう。

道足。さうか。しかし君は如何だ。

眞備。今は自分の力を信じてゐる。しかしこの前君に會つた時は、まだ自分の力を信ずることが出來なかつた。さうしてまたこれから先、自分の力を信ずることが出來ないやうな時が來るかを知れない。

道足。それで己は如何したら好いだらう。己れは一日も早く己の任地へ歸らなければならないのだ。

眞備。さうだな。君の今しなければならないことは、やつぱり己と同じことだ。眠つてゐる者は殺されるのだ。弱い者は殺されるのだ。卑しい者は殺されるのだ。醜い者は殺されるのだ。しかし君はそれを默つて見てゐることは出來まい。一人の死を以て萬人の死に代らなければならない。

（二人は一種の緊張した心持で默つてゐる。）

道足。如何したんだ。大變犬が吠えるやうだね。

眞備。きつとまた外へ出し放しにして置いたんだらう。あの犬は高麗から來たやつの種なんだが、妙な癖があるんだよ。

道足。ふうん。どんな癖だ。

眞備。星を見ると吠えるのだ。それだから夜になると、星の見えない小屋の中へ、入れて置くやうにしてあるのだが、今夜は入れるのを忘れたのかも知れない。

道足。さつきから絶えず吠えてゐるね。

眞備。うん。（何か考へてゐる。）

（犬の吠える聲が、前よりも一層烈しくなつた。頻りに星が飛ぶからであらう。

下手から淨子が出て來る。何だか以前よりも余程痩せたやうである。その爲めに美くしい顔には、新たに凄艷の趣が

淨子。まあ、暫くでございましたわね。

道足。やあ、ほんとに暫くお目に懸りません。別にお變りもありませんか。

淨子。有難うございます。お蔭様で。

眞備。（妹に。）失禮してお前もそこに懸けたが好い。

淨子。ええ。（腰を懸ける。）

眞備。（やつぱり妹に。）おい。ひどく犬が吠えるぢやないか。小屋に入れるのを忘れたのらしいね。

淨子。さうでございますわね。私もさつきから氣になつてゐたんですけれど、ついうつかりそのその儘にして置いたもんですから。

眞備。（笑つて。）何もお前に小言を云つたんぢやないよ。後で向ふに往つた時に、誰かに云つて入れさせるが好い。

淨子。ええ（犬の吠える聲を聽いて。）まあ、ほんとに氣味の惡い。

道足。まあ、好いさ。犬の吠えるのなんぞ氣に懸けてゐてはきりがない。（淨子に。）如何です。箜篌でもひとつ聽かせませんか。

淨子。私の箜篌なんてとてもお聽かせ申すやうなものぢやございませんわ。

道足。いや、中々さうでないつて話だ。私の姪があなたの箜篌を聽いたつて云つてゐましたよ。さうしてひどく褒めてゐました。

淨子。（顏を赧くして。）まあ。

眞備。如何だ。彈いたら好いぢやないか。

淨子。ええ。（じつと遠くを凝視めてゐる。）

眞備。如何したんだ。

淨子。（少し青ざめて嚴かに。）私はもう箜篌を彈くまいと、心の中で極めましたの。

眞備。何故。

淨子。（やつぱり同じやうな表情で。）さあ、それは話して好いことか、また話さずに置く方が好いことか、今一寸判斷が付きません。しかし如何も話さない方が好いやうな氣が致します。

眞備。（不審さうに。）―をかしなことを云ふね。それは一體如何云ふ譯なのだね。

淨子。その譯を申し上げたところで、如何も仕方のないやうな氣が致します。唯私の心がさう思つただけなんですから。

眞備。まあ、好いからその譯を話してごらん。

淨子。ええ。（やつぱりじつと遠くを凝視めてゐる。）

眞備。それでは如何しても話すことが出來ないのかい。

淨子。いいえ。

眞備。それなら話したら好いぢあないか。

淨子。（目を眞備の顏に移して。）ええ。それぢやあ話しますわ。（一寸考へるやうな目付をした後で。）昨夜のことでございますの。昨日は何だか曇つてをりましたが、夜はからりと空が晴れて、星が降るやうな晩

宵闇の中に立つてゐますと、何だか箜篌が彈きたくつて堪らなくなりました。それで私は箜篌を取つて來て、靜かにそれを彈き始めました。さうすると私は何だか急に死にたくなりましたの。

眞備。如何してだ。

淨子。如何してだか分りません。世の中が味氣(あぢき)なく思はれましたの。たつた一人で何處か遠くへ往きたいやうな氣が致しましたの。さうして私は到頭それつきり箜篌を彈くことは出來ませんでした。私はこれまでにこんな心持になつたことは、唯の一度だつてなかつたのでございます。こんな悲しい思をしたのは、昨夜が始めてなのでございます。私はそれからと云ふものは、何だかあの箜篌が怖ろしくなりました。もし今度あの箜篌を彈く時は、ほんとに死ぬ氣になりはしないかと、それが怖(こわ)くつて堪りません。

心に極めたと云ふのだね。

淨子。今度箜篌を彈く時は、きつと私の死ぬ時でございます。

眞備。（悲しさうな顏付でじつと妹の顏を見る。）

道足。いや、さう云ふことなら、强いて聽かして頂きたいと、申す譯ではありません。（調子を變へて。）やあ、私はもうお暇しませう。（立ち上る。）

淨子。それでは何だか私が。

眞備。まあ、まだ好いぢやないか。

道足。いや、今夜はもう餘程晩い。それに己は今日非常に疲れてゐるから、早く歸つて寢たいやうな氣がする。

眞備。さうか。さう云ふことなら强いて留めまい。

道足。如何も今夜は難有う。明日にも向ふへ歸らうと思ふから、また暫く會へないかも知れない。

眞備。うん。それではまた。（立ち上る。）

道足。左様なら。（淨子に。）如何も失禮をしました。

淨子。如何致しまして。私こそ。

（道足は大跨に歩いて下手へ入る。
眞備と淨子とはそれを見送つて下手へ入る。
舞臺は長い間空虚になつてゐる。
その間犬の吠える聲が、絶えず悲しげに聽こえて來る。
下手から眞備と淨子とが話をしながら出て來る。）

眞備。（笑つて。）何を云ふのだ。そんなつまらないことを云ふもんぢやないよ。

淨子。ですが、お兄樣。これは私心からお願する事ことなんですの。

眞備。如何してまたそんなことを、お前は急に云ひ出したんだい。

淨子。急に云ひ出した譯ではございませんわ。あなたがお歸りになりました時から考へてをりましたことなんですもの。（涙ぐんでゐる。）

眞備。さうか。（椅子の傍に來て。）まあ、お前もそこに腰をお懸け。（腰を懸ける。）

淨子。（默つて椅子に腰を懸ける。）

眞備。（じつと妹の顏を見て。）お前はほんとに綺麗になつたね。己はかうやつてお前の顏を見てゐると、お前と兄妹（きやうだい）に生れて來たのが、何だか惜しいやうな氣がするよ。

淨子。（驚いたやうに。）まあ。

眞備。それでもう一度今のことを云つてごらん。もう一度聽いた上で、好いとも惡いとも返事をしよう。

淨子。ええ。幾度でも申しますわ。（祈るやうに。）どうぞ私を何時までもここに置いて下さいまし。一生獨り身でゐられるやうに。

眞備。さうしてお前は如何しようと云ふのだ。

淨子。如何しやうとも思ひませんわ。唯さうしてゐられれば、大變幸福（しあはせ）だと思ひますの。

眞備。さうかなあ。己にはそんなに幸福だとは思はれないが。

浄子。それはお兄様は男だから、さうお思ひになるのですわ。

眞備。それはさうかも知れない。しかしこの返事はもう少し待つてくれ。己はよく考へて見なければならないから。（じつと妹の顔を見ながら。）かうやつてお前の顔を見てゐると、何だかお前の云ふ通り、一生獨り身でゐる方が、お前の幸福だと云ふことは、考へられないことでもない。また己自身の心持から云ふと、お前を人にやつてしまふことが、惜しいやうな氣がしないでもない。しかし己はあの道足なら好いと思つてゐたのだよ。

浄子。まあ、厭ですわ。そんなに私の顔をごらんになつては。

（二人は顔を見合はせて笑つたが、それつきり暫くの間は言葉も交さずに默つてゐる。）

眞備。それはさうとあの唐人はどんな工合だか、お前は知らないかい。

浄子。ええ。よく存じませんわ。

眞備。さうか。己もいろいろ忙がしいものだから、つい様子を聽かなかつたが、その後どんな工合なんだらう。

浄子。（思ひ出したやうに。）ああ、昨日聽きました話では、大層熱がひどいと云ふことでございました。あの年寄りも可哀さうですわね。

眞備。うん。全く可哀さうだ。

浄子。何時ぞやのやうなことがあつた時には、何だか氣味の惡いやうな氣がしましたが、今では唯可哀さうでなりませんわ。

眞備。何しろ年寄りのことだし、それに長い煩ひだから、もうとても助かるまいよ。それでもこの間うちは大分快くつて、起きられるやうになつてゐたのだが、またこの一月ばかり前から惡いやうだね。

浄子。ええ。（じつと遠くの方を凝視めてゐる。）

（急に犬の吠える聲が、消えたやうに聽こえなくなる。）

眞備。おや、如何したのだらう。
淨子。(氣が付かずに。)何でございますの。
眞備。じつと聽いてごらん。
淨子。(默って耳を傾ける。)
眞備。何にも聽こえなくなつたらう。
淨子。(頷いて。)ええ。
眞備。今犬の吠える聲が、ぱつたりしなくなつたのだ。
淨子。まあ、如何したのでせう。
眞備。誰か氣が付いて小屋の中へ入れたのかも知れないが、如何もさうではないらしい。
(從者が慌ただしく下手から出て來る。)
眞備。(從者に。)何だ。
從者。はい。あの沈鐘英が何だか急に容體が惡いやうなのでございます。
眞備。さうか。
從者。身體中に黑い斑點が出來まして、怖ろしいやうな醜い姿になつてをります。

眞備。(やつぱり同じやうに。)さうか。
從者。(淨子の前を憚るやうに小聲で。)さうして時々微かな聲で、お孃樣のお名前を呟いてをります。
淨子。(怖ろしさうに叫ぶ。)まあ。(兩手で顏を蔽ふ。)
眞備。(靜かに。)それではもういよいよ死にさうだと云ふのだな。
從者。はい。それを申し上げにまゐつたのでございます。
眞備。さうか。それでは一寸見舞に行つて來てやらう。
(立ち上る。)
淨子。(驚いて。)まあ、お兄樣。そんな怖ろしい病人の所へなんぞいらしつて、もし傳染つたら如何遊ばします。
眞備。己の身體には病氣なぞは傳染らない。己は眠つてゐる者でもない。己は弱い者でもない。己は卑しい者でもない。己は醜い者でもない。大丈夫だから安心するが好い。(從者に。)さあ、往かう。

従者。それでは僕に申し付けまして、松明を點させませう。あそこは暗うございますから。

(従者は一足先きに下手に走つて入る。眞備は徐かに下手の方に歩く。顔にはますます深い苦悶の色が見える。妹は兄の後姿を、じつと悲しさうに見送つてゐる。)

第三場

眞備の邸閣の一部である。

正面に築土があつて、その向ふは直ぐに往來になつてゐる。丁度第二幕の第一場の反對の側である。上手に家の一部が現はれてゐて、粗末な出入口があるが、戸が閉まつてゐて中を見ることが出來ない。ここは沈鏡英のゐる家なのである。この家の傍にかなり大きな犬小屋がある。

その夜直ぐ第二場に接して起る。最初は舞臺は眞つ暗である。

(一人の老僕が松明を持つて下手から出て來る。直ぐ後から眞備と従者とが出て來る。)

従者。(眞備に。)お氣を付けなさいまし。

眞備。うん。

従者。お危なうございます。

眞備。よし、よし。分つてゐる。

老僕。(犬小屋を見て驚いたやうに。)はてな。犬がをりませぬぞ。

従者。何、犬がゐない。如何したのだ。

老僕。如何したのでございますか。犬もゐなければ、鎖もございませぬ。

眞備。ふうん。鎖ごと何處かへ逃げたと見えるな。

従者。如何もさうらしうございます。あの犬はかなり逞ましうございましたから、あの太い鐵の鎖を切つたのでございませう。

眞備。逃げたと云つても、築土の外へは出ることは出來まい。何處か庭の隅へでも、隠れてゐないとはかぎらない。

従者。しかしあの犬は夜外へ出して置きますと、きつと吠える犬でございます。それだのに聲が致しません。

眞備。さうだな。今夜は出し忘れてあつたと見えて、さつきからひどく吠えてゐたやうだつた。さう云へば庭にゐるとしても、吠える聲が聽こえなくてはならない。

從者。それがまるで聽こえません。

眞備。さうすれば何處かへ遁げて往つたのかも知れない。屠者が徘徊してゐるさうだから殺されなければ好いが。

從者。左樣でございます。

老僕。(家の中を覗いて驚いたやうに。) はてな。燈火が消えてをりますぞ。

從者。何、燈火が消えてゐる。

老僕。はい。中は眞つ暗で、何も見ることが出來ませぬ。唯燻るやうな臭がしてをります。

眞備。如何したのだらう。誰か早く中に入つて見ろ。

從者。はい。(老僕に。) おい。その松明を借せ。

老僕。(默つて從者に松明を渡す。)

(從者は戸を開けて家の中に入る。外はまた眞つ暗になつた。戸の間から洩れて來る松明の光に、渦を巻いた油煙が狂ほしく映つて、怖ろしいやうな寂寞である。從者が悲しさうな顏付をして、靜かに家の戸口に現はれる。)

眞備。(待つてゐたやうに。) 如何した。

從者。はい。あの年寄りの唐人は、首を縊つて死んでをります。

眞備。(驚いて。) 何、死んでゐる。

從者。はい。犬の繋いであつた鐵の鎖で、首を縊つて死んだのでございます。

眞備。(歎息のやうに。) さうか。

從者。あの年寄りの唐人は、あの犬を解いてやつて、さうしてその鎖で死んだものと見えます。

眞備。(もう一度。) さうか。

從者。もうすつかり息が絶えてをります。

眞備。(默つて身動きもしずに立つてゐる。)

と稱する怪しい男が、乞丐等に向つて云ふ言葉なのである。)

陰陽師の聲。(まるで咒文のやうに。) お前達は早く往つて、落ちた星を拾つて來るが好い。あの血のやうに眞つ赤な星は、筑紫(つくし)の果に落ちたのだ。早く誰か往つて拾つて來ないと、それは烽火(のろし)のやうに燃え上るだらう。さうして日本國中を、曠野(あれの)のやうに焼き盡くすだらう。

(三人は默つてその聲を聽いてゐる。風のないのに松明の燃(もえ)差(さし)は、崩れるやうに闇に散り、急に明るくなつた一瞬間、眞備の目には涙が見えた。)

下手の方で曲つてゐる。下手には遠くまで街路が續いて、櫛比してゐる人家が見える。築土はひどく崩れてゐて、外から見える庭園の一部の、荒れ果ててゐる光景から、廢家であると云ふことが直ぐに分る。上手は直くに居者(えとり)なぞの住んでゐる部落になつてゐる。九月の終りに近い、曇つた日の朝である。第二幕からは一月半ばかり經過してゐる。

(道路には大勢の瘡瘡(もがさ)を病んでゐる人々が倒れてゐる。それは市民等がこの醜い病を怖れたあまり、酷たらしくも棄てたのである。中にはもう死骸となつてゐるものさへある。苦しさうな呻き聲が方々から聽こえる。)

○ああ、苦しい。

○早く殺してくれ。

○身體(からだ)中燃えるやうだ。

○手も足も火のやうに熱い。

○ああ、苦しい。

(こんな聲が暫くの間舞臺の上から聽こえて來る。

眞備と從者とが上手から出て來る。二人とも旅裝

かなり疲勞してゐる樣子である。眞備は延びた鬚もそのままに、頬にも大分痩せゝ見えるが、唯目だけには靈魂の輝きがある。）

眞備。（驚いて立ち留まつて。）こゝは何處だ。

從者。こゝは都の街盡頭でございます。

眞備。さうか。（四邊を見廻はして。）この人達は如何云ふ人達だ。如何してこんな所に倒れてゐるのだ。

從者。左樣でございます。私にもよく分りませんが、痘瘡を病んでゐる人達だらうと思はれます。

眞備。（痘瘡を病んでゐる人々を見ながら。）さうだ。何と云ふ怖ろしいことだらう。それにしても如何云ふ譯で、こんな路傍に倒れてゐるのだらう。己には如何も合點がゆかない。

從者。左樣でございます。如何云ふ譯でございますか。（一寸考へた後で。）大方みんな病を怖れて、こゝに棄てたのでございませう。ごらんなさいまし。半分はもう死んでをります。

眞備。おゝ、さうだ。呻きも動きもしないと思つてゐれば、それはみんな死んでゐるのだ。さうしてこゝに倒れてゐる者は、しまひにはみんな死んでしまふのだ。あゝ、何と云ふ怖ろしいことだらう。

（病んでゐる人々の中では眞備を見付けて、「眞備だ」「眞備だ」「あいつの爲めに己は死ぬのだ」など云ふ聲が聽こえる。）

從者。（驚いたやうに眞備に向つて。）耳を塞いでおゐでなさいまし。あの聲をお聽きなさいますな。

眞備。（氣が付かずに。）何だ。

從者。あなたがお聽きになつては、惡いことなのでございます。あなたにはあの聲がお聽こえになりませんか。

眞備。うん。己には何にも聽こえない。唯大勢の人の呻く聲が聽こえるばかりだ。しかしそれは言葉ではない。

從者。いえ、いえ。それが言葉なのでございます。それ

はあなたがお聽きになつてはいけない言葉なので
ございます。さあ、早くまゐりませう。

眞備。まあ、待て。己は如何してもその言葉を聽かなければならない。（頭を押へて。）己は如何もこの二三日餘つ程如何かしてるやうだ。人と話をしてゐる時でも、時々その人の聲が聽こえなくなることがある。また一人でゐる時でも、時々誰だか分らない聲が聽こえることがある。

從者。それはお疲れになつてゐるせいでございませう。

眞備。いや、己はまだ疲れてはゐない。（じつと遠くの方を凝視めながら。）道足は別れる時己の顔を見て、ひどく目の光が鋭くなつてゐると云つた。それは己の靈魂（たましひ）が火のやうに燃えてゐるからだ。あいつも南海道の鎭撫使（ちんぶし）なんぞをしてゐるものだから、それがよく分らなかつたのだ。

（また病んでゐる人々の中から、「眞備だ」「眞備だ」「あいつの爲めに己は死ぬのだ」などと云ふ聲が聽こえる。）

眞備。（驚きのあまり色を失つて。）何だ。

從者。さあ、早くまゐりませう。

眞備。何だ。一體今の言葉は。何で己を恨んでゐるのだ。何で己を呪つてゐるのだ。

從者。（もう一度。）さあ、早くまゐりませう。

眞備。待て。己は一足後から往く。お前は先に往つて己の歸つて來たことを、妹に知らせてくれ。

從者。しかしそれでは。

眞備。何だ。何も心配することはない。往けと云つたら早く往け。

從者。はい。

（從者は一人で下手に入る。眞備は默つてそこに佇んでゐる。また苦しさうな呻き聲が方々から聽こえる。）

〇ああ、苦しい。

〇死んだ方が餘つ程好い。

〇何もかもみんな火だ。

〇熱くつて堪らない。

〇ああ、苦しい。

(こんな聲が暫くの間舞臺の上から聽こえて來る。眞備の顏がだんだん傷ましい表情になつて來るとともに、目の靈魂の輝きはだんだん光を増して來る。さうしてやつぱり默つてそこに佇んでゐる。

この時下手の築土の曲り角に一人の男が現はれる。疱瘡を病んで死に瀕つてゐる體を、やうやう築土につかまつてここまで運んで來たのである。汚ない襤褸を纏て、瘦せ削けた眇目の見すぼらしい男。例の陰陽師と稱してゐる怪しい男である。)

陰陽師。(眞備を見て微かに名を呼ぶ。) 眞備。

眞備。(ぞつとしたやうに。) 誰だ。お前は誰だ。

陰陽師。(やつぱり築土につかまりながら。) 己は己だ。

眞備。己では分らない。お前は誰だ。

陰陽師。己は己だ。何時まで云つても同じことだ。

眞備。はて、何處かで聽いたやうな聲だが、己には如何しても思ひ出せない。

陰陽師。お前は如何しても己に會つてくれなかつたな。

眞備。ああ、分つた。お前はあの陰陽師だな。

陰陽師。さうだ。己は陰陽師だ。(苦しさうに呻いて。) 己の顏を見ろ。己の手を見ろ。己の足を見ろ。己は疱瘡を病んでゐるのだ。ここに倒れてゐる人達と同じやうに、己は疱瘡を病んでゐるのだ。お前は己を見て何とも思はないか。お前はここに倒れてゐる人達を見て何とも思はないか。

眞備。(默つてゐる。)

陰陽師。己はもう死ぬかも知れない。何だか身體中が燃えるやうだ。頭の中も胸の奥も、足の先まで燃えるやうだ。しかし己は死ぬ前に、お前に云ひたいことがある。

眞備。何だ。

陰陽師。(掴み懸りさうな形をして。) お前はよくもこんなこんな怖ろしいことをしたな。

陰陽師。現在目の前のこの有様を見ろ。今都の中は何處へ往つても、人の死骸の倒れてゐない所はないぞ。

眞備。（驚いて。）さうか。都はそんな有様なのか。

陰陽師。それもみんなお前から起つたことだ。お前の連れて來た唐人が、痘瘡を病んで死んだ時、お前の家から逃げ出した犬が、都中に怖ろしい病の種を播いて歩いたのだ。

眞備。しかしそれはひとりでにさう云ふ時が來たのだ。疫病がある。饑饉がある。掠奪がある。戰爭がある。さうして生きる者は生き、死ぬ者は死ぬのだ。

陰陽師。（唸るやうに。）何だと。まだお前はそんなことを云つてゐるのか。（苦しさうに身を悶く。）

眞備。（傷ましい表情をしながら陰陽師を見る。）

（また病んでゐる人々の中から、「眞備だ」「眞備だ」「あいつの[illegible]

陰陽師。今の聲を聽いたか。あれはお前を恨んでゐる聲だぞ。あれはお前を呪つてゐる聲だぞ。

眞備。己は何も恨まれる覺えはない。己は何も呪はれる覺えはない。かう云ふ時がひとりでに來るのを待つてゐただけのことなのだ。

陰陽師。ああ、苦しい。己はもう死ぬだらう。己の星はもう疾うに落ちてしまつたのだ。ああ、もう駄目だ。眞つ暗だ。眞つ暗だ。何もかも眞つ暗だ。

（陰陽師は築土から手を離したかと思ふと、そのまゝ折れるやうにそこに倒れて息が絶える。

また苦しさうな呻き聲が方々から聽こえる。）

○あゝ、苦しい。

○誰か己の咽喉を絞めろ。

○生きてゐるのが切ないのだ。

○息をすることも出來ない。

○あゝ、苦しい。

（こんな聲が暫くの間舞臺の上から聽こえて來る。

眞備はその聲を聽きながら、じつと陰陽師の死骸を凝視めてゐる。

從者が急いで下手から立つて來る。)

從者。大變でございます。

眞備。何だ。

從者。大勢の人が御門前に集まつて、穩かならぬ有樣でございます。

眞備。さうか。それでは一足も早く。(二三歩下手へ歩いてから。)しかしそいつ等は何をしようとしてゐるのだらう。

(眞備は考へながら急いで下手に入る。從者も眞備に續いて下手に入る。

今雲を洩れたばかりの悑く悲しい日光は、地獄のやうに痘瘡を病んでゐる人々を照らしてゐる。)

第二場

眞備の家の門前である。

正面に門があるけれども、扉は堅く鎖されてゐる。上手も下手も築土である外には、これと云つて書く程の物もない。門の前は往來になつてゐる。道路はすつかり乾いてゐて、淡日が當つても白く光る。

第一場に接して起る、やつぱりその日の午前である。

(大勢の市民等が門の前に群がつて、がやがやと何か喚いてゐる。多くは無智な賤民である。)

群集の一。さあ、早くこの門を開けろ。

群集の二。己の女房を返してくれ。

群集の三。己の子供を返してくれ。

群集の四。あんな唐人を何故連れて來たのだ。

群集の五。あんな犬を何故飼つて置いたのだ。

群集の六。何處へ往つても人が死んでゐる。

群集の七。何處へ往つても人が倒れてゐる。

群集の八。みんなあの痘瘡で死んだのだ。

群集の九。みんなあの痘瘡で倒れてゐるのだ。

群集の十。如何云ふ譯であんな怖ろしい病を唐からわざわざ持つて來たのだ。

(暫くの間市氏等はみんな默つてゐる。)

群集の一。さあ、早くこの門を開けろ。

群集の二。己の女房を返してくれ。

群集の三。己の子供を返してくれ。

群集の四。お前の家のあの犬が、あの怖ろしい病を廣めたのだ。

群集の五。お前の連れて來た唐人が、あの怖ろしい病を持つて來たのだ。

群集の六。怖ろしい病だ。まるで魔もののやうに怖ろしい病だ。

群集の七。都の中は人の死骸でもう直き一杯になるだらう。

群集の八。都の人は一人殘らず疱瘡(もがさ)に罹つて死ぬだらう。

群集の九。己ももう直き死んでしまふのだ。

群集の十。如何云ふ譯であんな怖ろしい病を、唐から

群集の大勢。さあ、その譯を聽かしてくれ。

(眞備が下手から出て來る。暫く群集の方をじつと見てゐたが、急に群集を押し分けてその前に立ち塞がつた。從者も續いて下手から出て來たが、唯はらはらしながら見てゐるばかりである。)

眞備。(群集に。)何だ。お前達は何をしようと云ふのだ。

(群集たじろぐ。)

群集の二。己の女房は疱瘡で死んだのだ。

眞備。それで己に如何しろと云ふのだ。

群集の二。生かして返せと云ふのだ。

眞備。馬鹿なことを云ふな。己が疱瘡を唐からわざわざ持つて來たやうに、云ひ觸らして歩くのはお前達だな。

群集の四。本當だから仕方がない。

群集の五。何か怖ろしいことを企(たく)んでゐるのだ。

眞備。(怒つた調子で。)さう云ふのは誰だ。さあ、己の前

へ出てものを云へ。人の背後に隠れてものなど云ふな。

群集の七。それはあの陰陽師が云つてゐたのだ。

眞備。何、陰陽師が云つてゐたと。うん。それでお前達はここへやつて來たのだな。それならばよく聽け。（暫く間を置いて。）今お前達が目を覺ます時が來たのだ。ひとりでにかう云ふ時がやつて來たのだ。人の力では如何にもならない時なのだ。千年に一度位しか來ない時なのだ。今は怖ろしい時だけれども、これが過ぎるとお前達に、きつと幸福な時が來るのだ。お前達は今生れる時の苦しみと、同じやうな苦しみをしなければならないのだ。

群集の九。これから先のことが分るものか。

眞備。いや、己にはちやんと分つてゐる。今に見ろ。この世の中には目覺めた者ばかりが生き殘るのだ。强い者ばかりが生き殘るのだ。尙い者ばかりが生き殘るのだ。美しい者ばかりが生き殘るのだ。さうして新しい時代が始まるのだ。

群集の三。そんなことは嘘だ。あの陰陽師はみんな滅ぶと云つてゐたぞ。

眞備。（高く笑つて。）さう云つた者は先づ滅びたのだ。お前達にいろいろのことを言つた、あの陰陽師はもう死んでしまつたのだぞ。あいつにはかう云ふ時が、ひとりでに來たと云ふことが分らないのだ。自分が眠つてゐる者だから、かう云ふ時の來たのが怖ろしいのだ。自分が弱い者だから、かう云ふ時の來たのが怖ろしいのだ。自分が卑しい者だから、かう云ふ時の來たのが怖ろしいのだ。自分が醜い者だから、かう云ふ時の來たのが怖ろしいのだ。それでお前達にいろいろのことを云つたのだ。

（この間に群集はだん〳〵ゐなくなつて、最初の半分位の人數になつてゐる。）

眞備。さあ、みんな何を愚圖々々してゐるのだ。早くここを引き上げたが好い。しかし待て。一言云つ

ぬのを、喜んでゐる者ではないのだぞ。己は最初太宰府の方に、この怖ろしい病が起つたと聽いた時、默つて見てゐることは出來ないと思つたのだ。さうして己は一人の死を以て萬人の死に代らうとさへ思つたのだ。しかし今己は人の力では如何することも出來ないと云ふことを知つたのだ。さうして己は今この怖ろい病が猖獗を極めてゐる南海道から今日都へ歸つて來たのだ。己はこの怖ろしい時の過ぎて往くのを、唯默つて見てゐるより外仕方がない。お前達もやつぱりさうだ。この怖ろしい時の過ぎて往くのを、唯默つて見てゐるより外仕方がない。

群集の一。さう云へばさうだな。

群集の二。さあ、もう往かうぢやないか。

群集の大勢。さあ、往かう、往かう。

（群集は上手と下手とに分れて入る。さうして市民等は遂に

眞備。（じつと群集の後を見送りながら從者に。）あいつ等も可哀さうなものだな。

從者。はい。

眞備。しかし人の力では如何にもならない。人の力は自分の纓を動かす風をすら如何することも出來ないのだ。

（老僕が一人しよんぼりと門の扉を開けて出て來る。）

老僕。（眞備に。）旦那樣。飛んだことになりました。

眞備。（不安を感じながら。）如何したのだ。

老僕。（悲しさうに。）お孃樣が疱瘡にお罹りになつたのでございます。

眞備。（驚いて言葉も出ない。）

老僕。あの美しかつたお顏が、今ではも二目と見られぬ。（後はもう云ふことが出來ない。）

眞備。（默つてじつと遠くの方を凝視めてゐる。）

老僕。早く會つて上げて下さいまし。

眞備。（目には涙が溢れて來る。）

老僕。待ちこがれてゐらつしやいましたから。

眞備。己は今直きに往く。お前達先きに往つて、己の歸つて來たのを知らせてくれ。

從者。はい。

（從者と老僕とは徐かに門の中に入る。
眞備は唯一人殘つてゐる。）

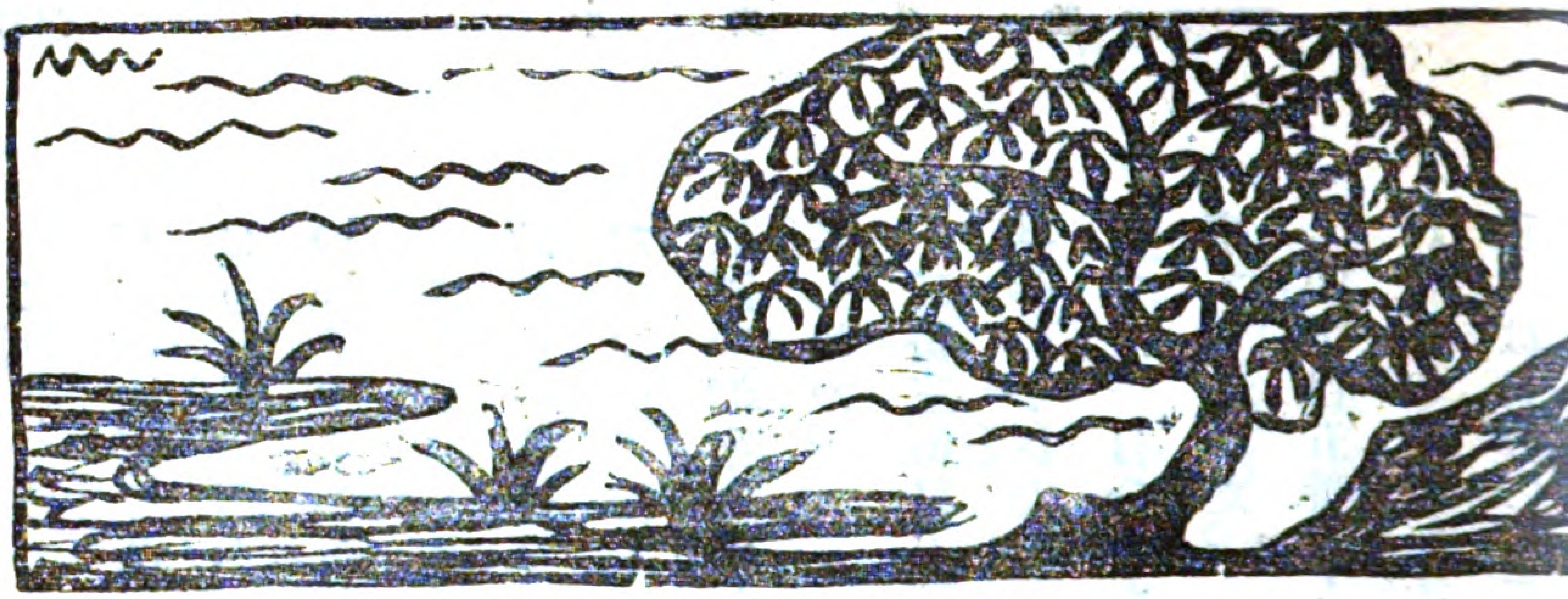
眞備。（涙をこぼして。）美しい者も死なければならないのか。（目からは靈魂の輝きがだんだん消える。）ああ、己はまた何をして好いか分らなくなつた。（狂はしげに叫ぶ。）ああ、己れはこれから如何すれば好いのだ。ああ己はこれから如何すれば好いのだ。

（眞備は自分の頭を兩手でかゝへるやうにして、しどろもどろな足取で、蹌踉めきながら門の中へ入る。
門の扉がひとりでに閉まつて、舞臺は空虚になつたまゝ、かなり長い間經過する。
唯「時」の過ぎて往く跫音が、まるで風のやうに聽こえるばかりである。）

次號の本欄には　四百五十枚の大戯曲

法成寺物語…………谷崎潤一郎

掲載せらるべし。之れ蓋し作者が戯曲に於ける第一の傑作にして必ずや我脚本界に於ける新記錄を作るべきを疑はず



破談

徳田秋聲

重三が近いうちに産れやうとしてゐる彼の第六番目の子供を手放さうと思ひ立つて、子供の將來に幸福であるやうな貰ひ手の世話を、知合の或夫人に賴んでおいたのは、もう一月も前のことであつた。

子供が産れる毎に、彼はこれまでに幾度それを思ひ立つたか知れなかつた。最初の子供を自分で育てることになつたその後の彼に取つては、産れる子も産れる子も、單に無意味な附加へのやうにしか思へなかつた。二番目の子供も、三番四番目の子供も然うであつた。言ふまでもなく、彼自身の生活に取つては、その最初の子供が、既に最も大きな附加へであつたが、それは其として、意ひもかけなかつた其子供の出生前後の事情に伴ふ多くの勞苦と、嘗めさせられた苦い經驗とが、子供に對する不思議な執着を彼に抱かしめるやうになつた。或點では、その子供は、彼に取つては、好い意味にも惡い意味にも殆んど生活の最高潮點を一生

涯に刻みつけてゐるとさへ思へる色々の記憶の聯想であつた。その子供を考へることなくしては、彼の現在の夫婦生活もあり得なかつた。子供が賢こく生れついてゐると思はるれば思はれるで、愛着が加はり、醜い愚かもの丶みじめな將來が想像さるればされるで、慈愛の念が深まつて行つた。まだ乳房につかまつてゐる幼いときから、その言語、泣聲、擧動、病氣、慾求――有ゆる微細な神經の働きに至るまで、彼は一々それを自分に直感し同感することができた。朝晩に始終手がけてゐる母親や老人の外面的な荒い感覺では、迚も入込んで行くことのできないやうな苦しい注意が絶えず子供のうへに拂はれた。ついて行くことのできない母親を憤らせる、いら／＼しい子供の神經的發作の一つ／＼にすら、彼は深い洞察と優しい同情の目を有つてゐた。彼は自分の病的な神經が苛立つて來ると、時々幼いものを苦しめた。

二番三番目と續いて産れてくるにつれて、世間普通な母親の健全な愛が彼とは何の交渉もなささうな其等の子供たちの方へ、傾いて行つた代りに、最初の子供に對する父親の悲哀な愛情が段々深くなつて行つた。自分のためにも、最初の子供のためにも、生涯の重荷となるべき其等の子供を、憎み疎んずる事すらあつた。

四番目五番目と、子供が殖えてくるにつれて、偏執的な彼の不自然な愛情は、年と共にいくらか均されていつた。順次にめき／＼發育して行く幼いものどもの肉體や、靈が目ざましく彼の心に映つて來た重三は自分の生活の全部とみえる、それらの若い嫩芽の一つをも、無駄に失つてはならないとさへ考へた。

けれど體の弱い彼には、それを終極まで脊負つて行くことは、迚も堪へきれない仕事のやうに思はれた。この先きいくらも生きられない自分の目の前には、爲遂げてみたいと思ふ仕事や、生活の慾望が益々展がつて來た。支へてゐる現在の生活が、時々それらの慾望のために裏切られた。取返しのならないこれ迄の無駄な努力が惜まれた。自分の仕事や生活に比べて、價値のない些細な事件や周圍のために、頭腦を浪費したり、物質上の助を與へたりすることが、愚かしく思へて來た。

「いくら働いたつて追着きやしない。人間の精力には大抵限りがある。働きさへすればそれで可いと云ふものぢやないんだよ。」

仕事に疲れた重三は、時には自分の傍へ世帶話を持込んで來ることのある妻の顔をながめながら、當りちらすやうな聲を出して太息をもらした。そのいら〳〵してゐる自分の狀がみじめでならなかつた。机の上には、旅にゐる氣樂な友達からの繪葉書などが年中苦しんでゐる自分を笑つてゐるやうに、散つてゐた。

「それあ然うですとも……。」

彼女は何も彼も十分察してゐると云ふ顔をして、應へた。

「機關に油をさすやうなつもりか何かで、三度々々の食物にでもいくらか氣をつけて、働かしてさへおけば其でいゝといふものでもないんだよ。」

重三は、そんな時には急度、古い昔しに、彼女が二人の身のうへを占者か何かに見てもらつたときにその占者が言つてゐたと云ふ辭を思ひ出して、その時は何の氣もなしに聞いてゐたことが、長いあひだ

の事實で、てつきり證明されてゐるやうに感じた。

(貴方と私の星は、好いにつけ惡いにつけ、お互ひに助けあふていふことのできない星なんですて。)彼女は色々のことを說聽したあとに、不安さうな目色をして、その時さう言つて淋しく笑つたのであつた。

「でも私にも如何しやうもないものですから、出來るだけお金のかゝらないやうにと思つて、それは隨分工夫もしてゐるんですけれど……。それでも要るだけのものは、如何したつて要りますよ。」

彼女は自分のしてゐることに自信ありげな、いつものお世辭氣なしの調子で應へた。

重三は、自分の指頭から產出す製產物の、單なる消費者を以て甘んじてゞも居るやうな彼女に、長いあひだ飽足りない思ひを懷いて居たが、彼女にそれ以上多くを求めやうとも思はなかつた。それを求める前に、先づ無思慮な自分の過去から考へてみなければならなかつた。

「それは其として、今度こそ思斷つて餘所へやることにしやうよ。」

「え、然うして下さい。好いところがあつたらばね。どうせくれるくらゐなら、能うく考へたうへにしたた方が可ござんすよ。」

彼女はさう言つて、此頃新聞の身の上相談欄などで、ちよい〳〵目について居る色々の人の同じ場合の出來事を思出じたりして居た。

「でも、なか〳〵思ふやうにいかないもんですよ。それに自家の子供は、皆な氣むづかしくて育てにくいから、自分の子供をもつたことのない人には、隨分厄介でせうよ。如何したつて、他人は親のやうな譯にはいきませんから、いくら可愛がるといつても、どこかに脫かつたところが出來てくるんです。」

多少教育でもある人なら、反つて己達よりも注意が行届くかも知れないよ。」

「それも然うですね。――遣るなら早い方がよござんすね。」

それで重三は、知合ひのその夫人に逢つたとき、その事を頼んでおいたのであつた。

幼い時分、重三の姉の友達であつた其の夫人は、十六七の頃に東京へ片着いて來て、二十代に産れた三人の子供を育てあげてからは、その良人が、古錢や珍本を好くところから、自分にも、古い人形を聚めたり、昔しの錦繪を買つたりするのを道樂にして、靜かに暮してゐた。重三が七八つから十二三までの時代に知つてゐたお轉婆娘の面影は、今の彼女のどこにも見られなかつた。それでも才はおけたやうなくり〳〵した目や、蓮華なやうな氣さくな口の利き方などは、昔しに變らなかつた。男にめげてゐなかつた其の氣象は、動直で寛宏な學者肌の良人の氣分に次第に抱和されて來た。重三は子供などをつれて、時々そこへ遊びに行つた。

「馬琴だとか種彦とかいふやうな作者は、今の時代にはとても出んものですか。」

五十幾歳かになる主人は、その勤めてゐる或大きな華族の修史局から退けて來ると、重三等の打寄つてゐる火鉢の傍へも來て、そんな話をしはじめた。

「これが王莽時代の通貨なんぢや。」

主人は不思議な形と文字とをもつた鐵片を棚から持出して來て、懷かしげに弄くりながら、重三にも見せたりした。

世話ずきな其の夫人が、子供をほしがつてゐる人があるといつて、報しに來てくれたのは、重三の妻がもう臨月へ入つてからであつた。

「ちやうど子供を欲しいと云ふ人があるのよ。」夫人は上ると直ぐ其話をしはじめた。

「私はその先の人は知らないんですけれど、近所にゐる△△さんと云ふ家の知つた人で、旦那はもと軍人でもちよつと好いとこの將校だつたんだけれど、今は事業をやつてゐて、大抵支那へ行つてるんですつて。家には中學へ出てゐる旦那の甥が一人來てゐて、其の人が相續するんだけれど、奥さんが是非一人自分の子として育てゝみたいといふのでね。財産といつちや別にないけれど、皆な好い人ださうですよ。如何です、そこへ遣つては? 向ふでも此方の話をしたら、大變に悦んでゐたんですつて。」

夫人の話はそれ限りであつた。「え、是非やりませう」と、重三はその時仕事に浸つてゐて、萎え疲れた顏面神經の硬張つたやうに、思ふやうな表情のできないのにいら〳〵しながら、出來るだけ滿足さうな笑顏を作つて、應へたが、それだけの賴りない知識では、確かな判斷が下せなかつた。

「とにかく私も一度その人に逢つてみませう。そして子供も一應見てもらひませう。」

「子供は自分の腹から産んだものと思つて引取るのだから、男でも女でも介意はないと言ふのよ。」

「でも、丸きり見ないで貰ふと云ふ譯にも行かないでせう。」

重三は、その住居や生國などについても訊いてみたが、夫人は詳しいことを知らなかつた。そして用事がすんで了ふと、直に歸つて行つた。

心に十分染まぬことでも、表向だけで承諾を與へて了ふやうな輕卒と、心弱さとが、子供の時分から、

てみたり、意地を持つてみたりするのも、旋毛曲りな重三の病弊であつた。その時はそれで服従してゐて、後でその感情の自然に復るのを待つことに慣されて來てゐる妻は、夫人の歸つたあとでも、何の批判をも其に下さなかつた。

「よく詮議してみる方がよござんすよ。」

彼女は、そゝくさと出て行く夫人を送り出してから言つた。

「何でもいゝから遣らうぢやないか。」重三は、心に進まぬ遊びごとなどに友達に附合ふ時のやうに、强いて自分の心を壓つけるやうにして言つた。

冬から春へと移りかはつて行く心構へでもしてゐるやうな、或靜かな曇日の午後、重三は子供の泣聲などの煩さい時に、いつも逃込むことにしてゐる鬱陶しい三疊敷へ立籠つて、いつもの癖になつてゐる仕事にかゝる前の、取留のない冥想に頭腦を疲らせながら坐つてゐた。

新鮮な西洋草花の、町の花戸の飾窓に見らるゝ春が待どほしいやうな日であつた。重三は、この頃人のために負はさるゝことになつた債務についての、債權者と自分との交渉事件や、去年の冬から氣づかずに過してゐた呼吸器病に、滅切衰弱のみえて來た一番目の子供や、冬を通して氣管支に惱まされがちであつた自分の健康のために、住古した埃ぶかいこの家から、空氣のいゝ郊外へ移らうと考へてゐる自分の企てなどが、また新しく頭腦に湧きかへつてゐた。

子供をほしいと云ふ人が、媒介の夫人につれられて訪ねて來たのは、丁度そんな時であつた。

五十四五の恰幅の好い武骨さうな老婆と、三十前後の色白の痩ぎすな丸髷の婦人とが、夫人によつて、無造作に重三に紹介された。老婆は濃い茶色の被布を着てゐたが、婦人は御召の小袖に紋所の大きい桔梗色の紋二羽重の羽織を着てゐた。顔の型や容子などで、東北の人だといふことが、直に重三に感づかれたが、彼は先づその姓氏や生地を知つておきたいと思つて、それを尋ねたが、老婆はむつつりしたやうな調子で、姓はA——で、故郷は秋田縣であることを語つた。

「しますと…失禮ですが、貴方はこちらの阿母さんで入らつしやるんですか。」重三はこなゝゝした話をしてくれない、親しみの薄い老婆の體度にじれ〳〵しながら訊いた。

「私はこれの主人の母でございまして、主人が少し遠方へまゐつて不在でございますので、今日は、私がついて參つたのでございます。」

「奥さんも秋田でいらつしやるんですか。」

「いゝえ、私は仙臺でございます。」丸髷の婦人が應へた。髮の紊れ毛が、骨張つた顔や、頸元へ亂れかゝつてゐた。

「秋田にはA——と云ふ姓が多いやうですね。」

「は…私共はもと佐竹藩でございまして、佐竹さまがお國替になつたをりに、お伴をして引移つたのでございますが、同姓もちよい〳〵見受けます。」

「御主人は何か事業をなさるさうですが、何の御事業でせうか。」と、重三は訊いたが、それには明断した答へがなかつた。

つたが、主人がこの老婆の長男で、外に二人遠國へ出てゐる弟があると云ふこと以外には、何にも知ることの出來ないのが物足りなかつた。

「それで子供は如何いふ風のお約束にして差上げたらいゝでせうか。」

重三は話を自分の方へ移した。

「さやうでございます、お產れなすつて直ぐと申しても何ですから、一月ほどおいて、連れてまゐりたいと存じまして。事によると、ちよつと知合のお醫者にみてもらひますかも知れませんで、どうか其迄は牛乳におつけなさるやうに致したうございます。着物なども私の方から持つてまゐる筈ですが、何分主人が不在中のことで、この用意も致しかねますので‥‥。」

「そんな御心配は無駄です。しかし牛乳で育てるといふのは、非常に手のかゝるものださうですね。」

「然やうださうでございます。」婦人はづかゝゝしたやうな口の利き方をした。

「それから、お宅には相續者がおありださうですが、子供は養子女としたものですか、又はそつくり貴女の實子として差上げたものでせうか。私の方は孰でもいゝんです、けれど、可成なら思斷のいゝやうに、後の方がいゝんです。」

「さやう。」二人の間に、低聲で話がはじまつた。そして其は考へた上、決定することになつた。

「それから、私の子供は、非常に氣むづかしい方ですから、育て方についてもお願ひしておきたい事もありますが、それはまた追つてのことにしませう。」

そこへ出て來た子供に、菓子などを侑めてお愛相をしてゐた婦人が、「それは如何いふとですか。能く

伺つておきませう。」と、てきぱき問返した。

重三はちよいと其返辭に當惑して、默つてゐた。

婦人は歸りがけに、土産の大きな折を持込んで、隅の方へおいた。

客が歸つたあとで、衆は火鉢の傍へ集つて、子供の遣先を色々に想像した。

「あれでは何だかさつぱり明白しませんね。」

重三の妻は不滿足さうに言つた。物腰や氣象のがさ〳〵したやうに見えるあの婦人に、自分の子供をくれることが不安に思はれた。

「あんなものぢやないですがね。あれぢや、まるで猫でも貰つて行くやうね。あれは××の夫人がそゝつかしいんですよ。眞實に困つて爲方がなくて子供を遣ると云ふのなら、それでも可ござんすけれど‥‥先ぢや急度さう思つてるんですよ。」

「まあ何でもいゝ。」重三は笑つてゐた。

「それに迹取があるといふんですから、先へ寄つて子供が可哀さうですよ。遣るくらゐなら、相續人にしなくちや、滿りませんよ。」妻はさうも言つた。

父親の無情に慊らぬ色が、傍に熱心な耳を傾けてゐた子供たちの顏にも、現はれてゐた。

先の人柄をでも探るやうに、土産物の折が、そこへ取出されたりした。

「へえ、なか〳〵氣の利いたお使ひ物ね。」彼女は首を傾げて、「ちよつと金嵩の物ですよ」と、呟いてゐた。

それから間もなく、子供の産れるまでに、着せてやるやうな着物や、小い袢袍や蒲團のやうなものが、

一つ〳〵作られて行つた。

「さうごた〳〵拵へる必要はないよ。」重三は、時々着物の片などを見せつけられるのが、煩はしかつた。産れる子供の行末などを、考へるのが厭であつた。始終おづ〳〵してゐるやうな落着のない彼女の心にも觸りたくはなかつた。

お産は、幾度かの是迄の何のお産よりも、都てが手順よく行つた。そして初めて頼むことになつた今度の産婆の遣方によつて、第一回目に偶然かゝることになつてから、いつもそれに決めてゐた前の年取つた産婆の遣口が、悉皆舊式であることが判つた。醫師から禁ぜられてゐるやうな事すら平氣でやつてゐた前の産婆のために、産婦はお産ごとに、何のくらゐ苦しまされたか知れなかつた。體をさへ害ひがちであつた。

出産は豫定の時間より一時間とは遲れなかつた。あまりに、口數をきかない産婆の手に取あげられた産兒は色の赤黒い男の子であつた。

重三が、仕事の手を止めて、靜かな産室へ入つていつたとき、産婆は助手に産兒をあづけて、弛緩した産婦の腹に繃帶を捲いてゐた。

この間、軟かい蒲團のなかに裹まつてゐた産兒が、やがて初湯で拂はれて目に藥をさゝれると、ガーゼに結へられて、秤にかけられた。

「七百八十匁でございます。」産婆は器用な手容で、産兒のかゝつた秤を撮みあげながら言つた。

「八百目と申すのが頂上でございますから、この赤さんは多い方でございますよ。發育が好くて入いしやいましたから。」

産兒は着物を着せられると、疲れてうつとりしてゐる産婦の側に寢かされた。

助手が器械の消毒に働いてゐるあいだ、産婆は食物の箸を執りながら、立會ひの醫師と話を交へてゐた。

「格別お熱もございませんね。」

歸りがけに、産婆は今一度脈搏と體溫とを量つて産婦の傍を離れると言つた。

「それで、ゆつくりお寢られますですよ。」

産婦は漸とうと々々と眠に陷ちかけてゐた。

重三は、机の側へかへると、産兒に對するこれまでの神經質な決心が、いつか緊張を缺いて來たことを感じた。そして彼自身からいへば、責任の一部を切離すことが、何程の效果を彼に齎しうるかと疑はれ、子供の立場からいへば、彼は孰にしても生きて行くであらうと考へられた。

お七夜が直に來た。産婆は每日々々、同じ仕事にやつて來た。

「孰にしても、今度は牛乳につけておく方が便利だよ。」

動もすると、赤子に乳房を啣ませてゐる産婦を見つけて、重三は口喧しく警めた。子供をやらないにしても、始終赤子に取着かれてばかりゐなければならない母親の醜さが、年をとつて來た彼女にも自分にも、一層厭はしく思へたからである。

「子供に是からの二人の働きの手を取られてゐては不可い。」

彼はさうも思つた。

自分の手での最後の湯を使はせると、産婆は、また赤子を秤にかけてみたが、何程も殖えてゐなかつた。

「お腹も子宮も、このくらゐの弛緩ならば上等の方でございますよ。」

産婆は産婦の繃帯を捲かへたり、消毒をしたりすると、石鹸で手を洗ひながら、言つてゐた。

「思ひきつて遣らうぢやないか。」

二人のあいだに、その話がまた出た。

「え、遣りませう。顔を覺えないうちにね。」産婦は應へたが、「そんなに力んだ顔をしたつて、貴方は兄さんや姉さんと一所にゐられない人なんですよ。」と、床のうへに起きあがつて、赤子の顔を眺めながら、そんな事を言つてゐた。

忙しい仕事に、暫らく頭腦を紛らせてゐた或日の曉方、誰も出るものゝない玄關口の來客に飛出した重三の前に、ふと前日の老婆が立つてゐた。

「今日は、もうこゝで失禮いたします。」老婆は面もあげずに、式臺にお辭儀をしてゐた。

「實は前日のお約束のことで上りましたが、何とも申譯のないことでございますが、ちつと私の方に都合がございまして、折角お約束申しましたけれど‥‥。」

老婆は言ひにくさうに、式臺に頭をさげて、もぞ〳〵してゐた。

「然うですか。その事なら、どうぞ御心配なく。私の方でもまだ確り決めた譯でもなかつたのですから。」

「これも御縁がないのと思召して、どうぞ惡からず‥‥。」

老婆は馬鹿叮嚀なお辭儀をして、逃げるやうに歸つて行つた。

「へえ、あの婆さんが‥‥。」

産婦は床のなかゝら、重三の顔を見あげながら笑つた。

「だから、双方の様子が、能く解つてゐなかつたんですよ。來てみて、考へたんでせう。」

「多分養子か貰子かの一件が、問題になつたんだらう。」

「然うでせうよ。」産婦は赤子を離れて眺めながら、「お前さんお斷りを喰つてしまひましたよ。矢張り親に縁があるんですよ。可かつた〳〵。」

四五日たつてから、重三は夫人を訪ねてみた。

「お産があつて？」夫人はその時、リウマチに惱んでゐる不自由な足を横坐りながら、訊いた。

「私行かうと思つたけれど、婆さんだけ遣つてやつたのよ。あの婆さんが可けないの。だから一人やつたの。嫁さんは誠に好い人なんだけれど……。」

縁側に愛らしい女の子が二人繪本を見ながら、日當ぼつこをしてゐた。古くから知つてゐる或齒科醫の家に引取られ、美しく着飾らせて、甘やかに育つてゐる、この二人の子供の姉娘のひねこびれた美しい姿を重三は時々齒科醫の茶の間に見たことを想出した。そして、それも此の夫人の世話であつた。

「重さん、人形の箱ができてよ。」夫人は話を紛らせた。

座敷の方を透してみると、義經掛とか云ふ刀かけなどの飾られた床の間一杯に、四方ガラス張の大きな箱がおかれてあつた。手垢一つ着いてゐない、由緒の古い人形が、幾十となくその中に、つや々々した顔を並べてゐた。

「でも、もう人形にも飽いたから、この上お金を出すのは馬鹿々々しいと思つてよ。子供を育てゝゐる方が、優だわ。」

夫人は痛い足をさすりながら、皮肉な目をくり〳〵させて笑つた。

東京市神田區表神保町　東京堂
仝　神田區裏神保町　上田屋
仝　京橋區尾張町　東海堂
仝　京橋區元數寄屋町　北隆館
仝　京橋區西紺屋町　良明堂
仝　日本橋區本石町　至誠堂
大阪市北區梅田町　盛文館
仝　東區京町堀　太華堂
仝　北區東梅田町　宮内立誠堂
仝　東區瓦町　東枝支店
京都市七條停車場前　三共社
仝　藤村梅松堂

○定價　金貳拾五錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

冊數／圖別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御註文の方は內國は金四圓二拾五錢外國は金五圓九拾五錢の割となる

廣告取次店　博報社、弘報社、正路喜社、一星社、金蘭社、万年社、秀逸堂、信賴社

一誌代郵稅は一切前金とす、金切　場合は發送を止むべし
一郵便爲替にて御送金の場合は指定を本郷區片町十番地中央公論社とし拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取さるゝ虞なし
一振替貯金口座は東京三十四番なり
一郵券代用必ず一割增の事
一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
　一金一圓迄　金六錢（集金委託料
　一金五圓迄　金七錢　及發送料共）
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正四年四月廿九日印刷納本
大正四年五月一日發行（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木酉三

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地　中央公論社
電話下谷九一一九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

CHUO KORON (?entral Revi?.)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Publ?d Month?.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single cop?37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as se?d-class mail matter.